

TSU YA ZAKI KO FUN GUN

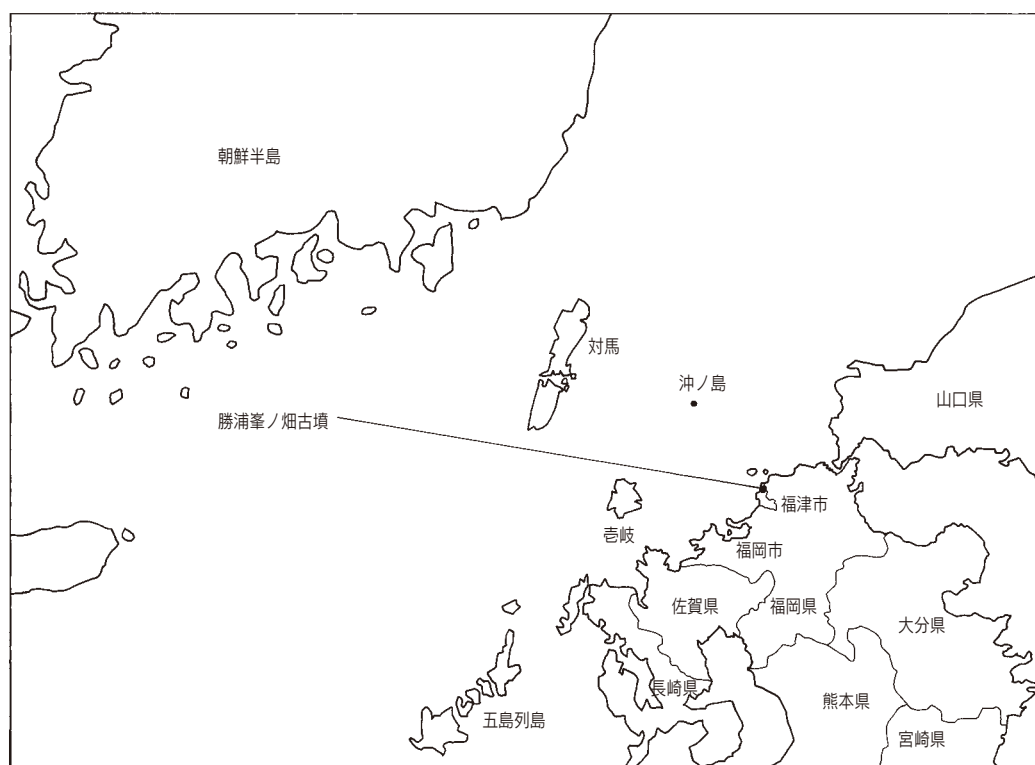
津屋崎古墳群Ⅱ

KATSU URA MINE NO HATA KO FUN

勝浦峯ノ畑古墳

福津市文化財調査報告書

第4集



2011

福津市教育委員会



1. 勝浦峯ノ畑古墳を南上空から望む 遠くに大島・勝島を望む (2007年3月撮影)



2. 勝浦峯ノ畑古墳石柱



1. 勝浦峯ノ畑古墳を南上空から望む（1975 年 11 月撮影）



2. 勝浦峯ノ畑古墳を南東上空から望む（2007 年 3 月撮影）



1. 1号鏡



2. 2号鏡



1. 3号鏡



2. 4号鏡



1. 5号鏡



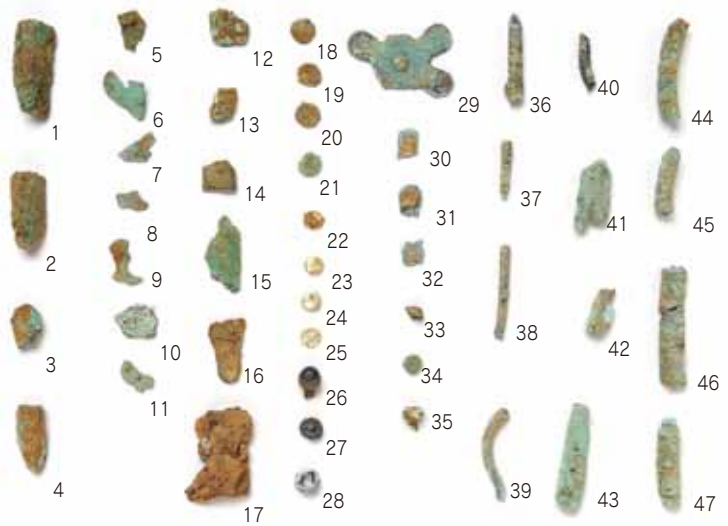
2. 6号鏡



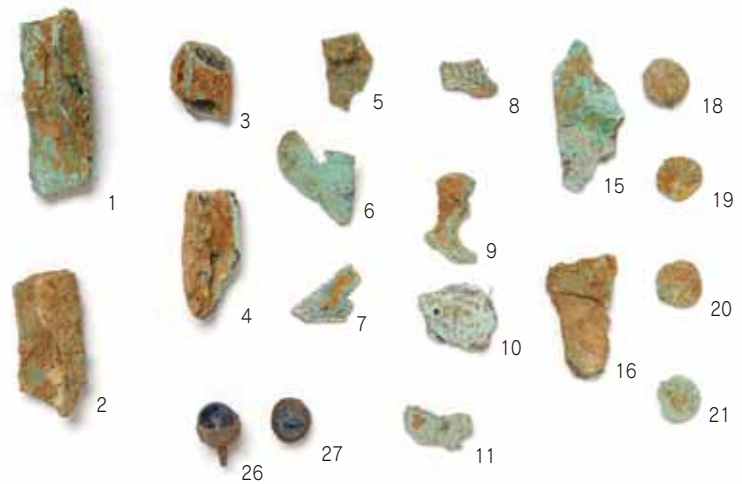
1. 7号鏡



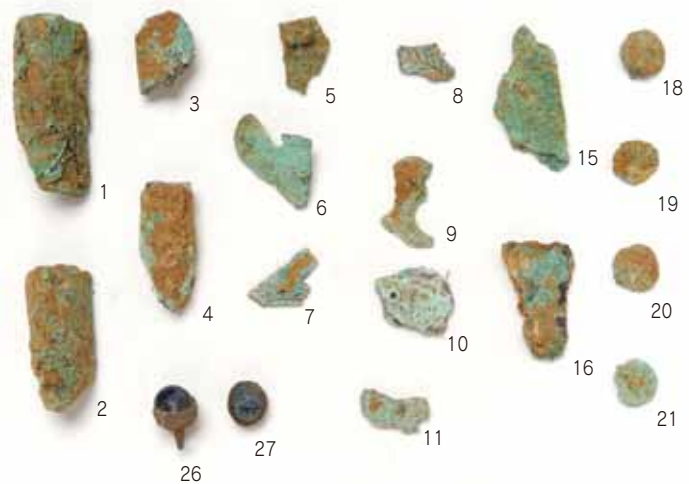
2. 8号鏡



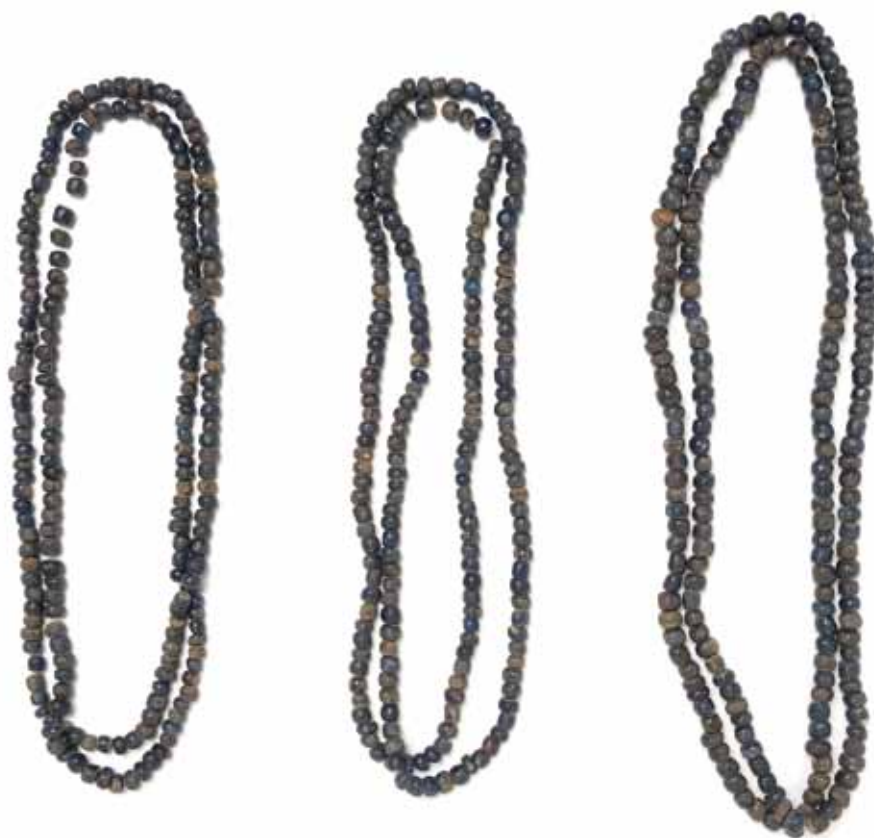
1. 金銅製装身具



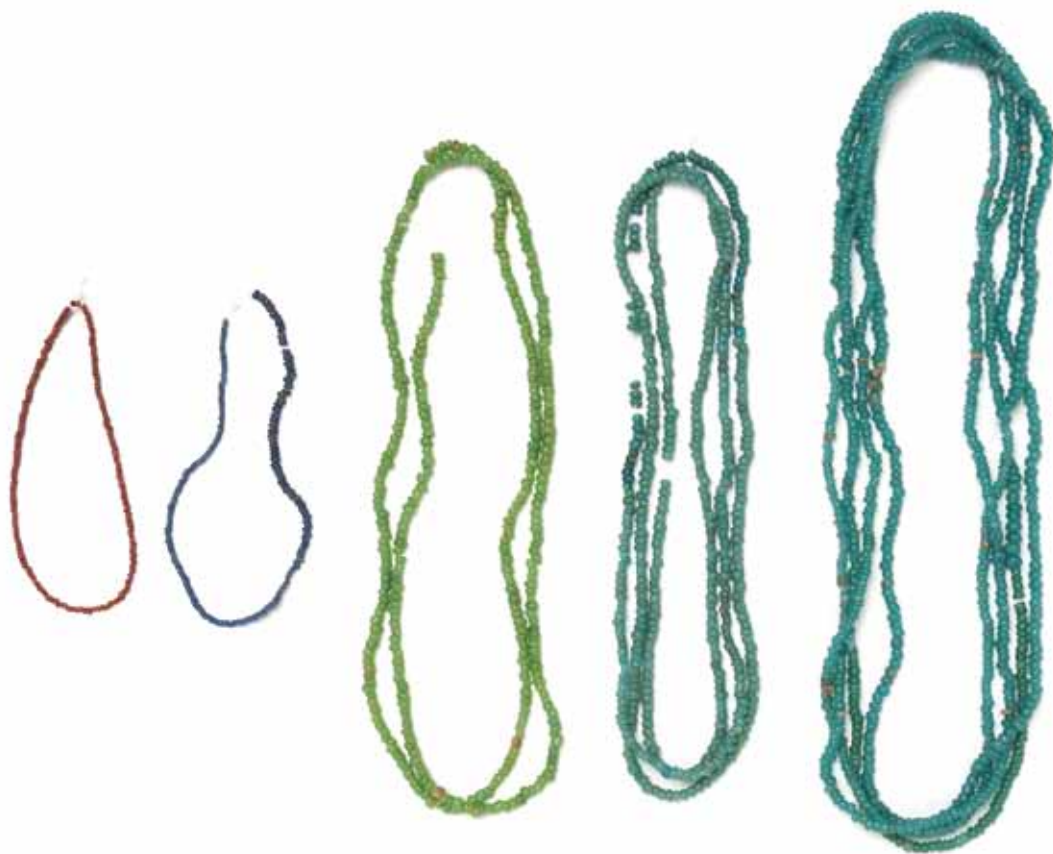
2. 金銅冠帽と推測される破片（表）



3. 金銅冠帽と推測される破片（裏）



1. ガラス玉①



2. ガラス玉②

序

福津市は福岡県北部の玄界灘に面した風光明媚なところで、平成 17 年 1 月に宗像郡福間町と津屋崎町が合併して誕生した新しい市です。しかし、歴史は古く市内には数多くの貴重な遺跡が残されています。その中でも市北部に分布する津屋崎古墳群は、かつてこの地に栄えた古代豪族胸形君の奥津城として国の史跡指定を受けており、今もその雄姿を見ることができます。

福津市ではこの津屋崎古墳群を古墳公園として保存活用するための整備計画を策定し、史跡地の公有地化を進めています。また、津屋崎古墳群は平成 21 年 1 月に沖ノ島や宗像大社と共に「宗像・沖ノ島と関連遺産群」としてユネスコの世界遺産暫定リストに掲載されました。

本書に収録した勝浦峯ノ畑古墳は、隣接する勝浦井ノ浦古墳とともに昭和 50 年から 51 年にかけて県道新設工事に伴い、福岡県教育委員会において発掘調査が行われました。調査の結果、勝浦峯ノ畑古墳の石室内からは、画文帯神獣鏡等 8 面の鏡や 1 万 5 千点を越えるガラス玉等の豪華な副葬品が出土し、また、石室内に 2 本の柱が天井石を支える構造を持つ全国でも類例がない貴重な前方後円墳ということが分かりました。このため、豪華な副葬品を出土した勝浦井ノ浦古墳と併せて現状保存することが求められ、県道の路線変更が検討され、墳丘の一部を削るだけで古墳の大部分を残すことができました。今回、この貴重な古墳の整備を行うための資料を得るために確認調査を行い、本報告書を刊行することとなりました。

本書が、今後の日本古代史研究の学術資料として活用されるとともに、世界遺産登録活動の一助となれば幸いです。

「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の西谷正委員長をはじめとする先生方々からは、発掘調査において現地指導をいただきました。また、福岡県教育委員会の吉田東明氏をはじめとする福岡県教育委員会の方々からは古墳の副葬品の調査報告を併せていただきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

福津市教育委員会
教育長 金子 孝信

例 言

1. 本書は、福津市教育委員会が平成 17 年度から平成 20 年度まで国庫補助を受けて行った福岡県福津市勝浦に所在する勝浦峯ノ畑古墳の範囲確認調査報告書である。また、あわせて昭和 50 年度に国庫補助事業を受けて福岡県教育委員会が行った発掘調査の成果も収めている。
2. 福岡県教育委員会で行った発掘調査での遺構実測は、川述昭人、川述公紀、鹿島英世、澤田康夫、日高正幸、筒井亀が行い、福津市教育委員会で行った発掘調査での遺構実測は、池ノ上宏、小林妙美、小樋恵美子、篠田正子、渋谷美代子、三原芳子及び文化財係の南時夫、田上浩司が行った。

遺物の実測は、昭和 50 年度調査分は大里弥生、大庭孝夫、岡田諭、岡田晴菜、岡寺良、海出淳平、小嶋篤（以上、福岡県教育委員会）、重藤輝行（佐賀大学文化教育学部講師）、辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院准教授）が行い、範囲確認調査で出土した遺物は、池ノ上、南、田上、井浦一、松永通明が行い、岸本圭（福岡県教育委員会）の援助を得た。浄書を篠田、渋谷、岸本が行った。

3. 遺構の写真撮影は川述、池ノ上が行い、遺物の写真撮影は、池ノ上が行った。
4. 文章は分担執筆であり、文責は文末に記した。
5. 編集は、IV 章を吉田東明（福岡県教育委員会）が行い、それ以外を池ノ上が行った。
6. 本書に使用した座標は、世界測地系である。方位については、磁北は M.N.、座標北は G.N. と略記する。
7. 横穴式石室の説明で使用する方向は、石室入口から奥壁側を見て右・左とよぶ。
8. 出土遺物と図面・写真等の記録類は、昭和 50 年度調査分は九州歴史資料館が所蔵し、平成 17 年度以降の調査分は、福津市教育委員会において保管している。
9. 調査から報告書刊行までに以下の方々や機関のご援助、ご教示を得た。記して感謝申し上げる。

西谷正、林重徳、石井忠、井上豊久、岡本均、橋口達也（以上、国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会）、宮本一夫（九州大学）、武末純一、桃崎祐輔（以上、福岡大学）、高久健二（専修大学）、金武重（韓国・中部考古学研究院）、権五栄（韓国・韓神大学校）、瀬宜田佳男（文化庁）、川述昭人、池邊元明、小池史哲、新原正典、入佐友一郎、（以上、福岡県教育委員会）、安部裕久、原俊一（以上、宗像市）、蔵富士寛（福岡市教育委員会）、花田勝広（野洲市教育委員会）、宮元香織（北九州市自然史・歴史博物館）

本文目次

I	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過と組織	4
(1)	調査の経過	4
(2)	調査組織	6
3.	立地と環境	9
II	墳丘の調査	
1.	後円部の調査	12
2.	くびれ部の調査	14
3.	前方部の調査	16
4.	墳丘出土埴輪	26
5.	墳丘出土土器	30
III	主体部の調査	
1.	石室	32
IV	主体部出土遺物	
	概要	39
1.	鏡	40
2.	装身具	
(1)	金属製装身具	44
(2)	玉類	46
3.	武器	
(1)	刀剣類	60
(2)	鉄鏃	66
4.	武具	72
5.	馬具	74
6.	工具	80
7.	その他	85
V	まとめ	
1.	勝浦峯ノ畑古墳について	86
2.	勝浦古墳群について	91
3.	津屋崎古墳群について	92

図版目次

巻頭カラー図版 1	1. 勝浦峯ノ畑古墳を南上空から望む 遠くに大島・勝島を望む (2007 年 3 月撮影)
巻頭カラー図版 2	2. 勝浦峯ノ畑古墳石柱 1. 勝浦峯ノ畑古墳を南上空から望む (1975 年 11 月撮影) 2. 勝浦峯ノ畑古墳を南東上空から望む (2007 年 3 月撮影)
巻頭カラー図版 3	1. 1 号鏡 2. 2 号鏡
巻頭カラー図版 4	1. 3 号鏡 2. 4 号鏡
巻頭カラー図版 5	1. 5 号鏡 2. 6 号鏡
巻頭カラー図版 6	1. 7 号鏡 2. 8 号鏡
巻頭カラー図版 7	1. 金銅製装身具 2. 金銅冠帽と推測される破片 (表) 3. 金銅冠帽と推測される破片 (裏)
巻頭カラー図版 8	1. ガラス玉① 2. ガラス玉②
図版表紙	第 1 トレンチ調査風景 埋め戻し風景
図版 9	1. 勝浦古墳群航空写真 (1982 年 5 月撮影)
図版 10	1. 勝浦峯ノ畑古墳全景空中写真 (2007 年 3 月撮影) 2. 勝浦峯ノ畑古墳を前方部から望む (2009 年 3 月撮影)
図版 11	1. 全景 南東から (1976 年撮影) 2. 後円部確認トレンチ 南から (1976 年撮影)
図版 12	1. 後円部確認トレンチ 東から (1976 年撮影) 2. 第 1 トレンチ (北から)
図版 13	1. 第 1 トレンチ石積 (北から) 2. 第 1 トレンチ (北から)
図版 14	1. 第 1・8 トレンチ (北から) 2. 第 1・8・10 トレンチ 空中写真
図版 15	1. 第 1・8・10 トレンチ (北から) 2. 第 1・8・10 トレンチ (西から)
図版 16	1. 第 1・8・10 トレンチ (東から) 2. 第 1・8・10 トレンチ区画石列 (北から)
図版 17	1. 第 1・8・10 トレンチ葺石根石列 (西から) 2. 第 8 トレンチ西壁
図版 18	1. 第 2 トレンチ (北から) 2. 第 3・9 トレンチ 空中写真
図版 19	1. 第 3 トレンチ 空中写真 2. 第 3 トレンチ (北から)
図版 20	1. 第 9 トレンチ (北から) 2. 第 4 トレンチ (南東から)
図版 21	1. 第 5・12・11 トレンチ空中写真 2. 第 11 トレンチ (西から)
図版 22	1. 第 11 トレンチ葺石根石検出状況 (西から) 2. 第 12 トレンチ (西から)
図版 23	1. 第 5 トレンチ (西から) 2. 第 5 トレンチ北壁
図版 24	1. 第 6 トレンチ (南から) 2. 第 7 トレンチ (南から) 3. 石室奥壁と石柱 (西から)
図版 25	1. 前庭部と玄門 (南西から) 2. 左前庭側壁 (南から)
図版 26	1. 屍床と石柱 (南西から) 2. 敷石玄門から奥壁方向 (南西から)
図版 27	1. 左側壁・奥壁側 (南から) 2. 左側壁・羨道側 (東から)
図版 28	1. 右側壁・奥壁側 (西から) 2. 石柱 (南から)
図版 29	1. 奥壁側の石柱 (南から) 2. 右袖石を奥壁側から

図版 30	1. 左袖石付近から出土した鉄鏃
図版 31	2. 榎石上出土の土器 1. ガラス丸玉 (Ⅰ－a 類) 2. ガラス連玉 (Ⅰ－a 類) 3. ガラス小玉 (Ⅱ－b 類) 4. ガラス小玉 (Ⅱ－b・c 類)
図版 32	1. ガラス小玉 (Ⅲ－b 類) 2. ガラス小玉 (Ⅲ－c 類) 3. ガラス粟玉 (Ⅳ－b 類) 4. ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉
図版 33	1. 琥珀製勾玉 2. 琥珀製棗玉・丸玉① 3. 琥珀製棗玉・丸玉②
図版 34	1. 大刀 2. 素環頭大刀・鉄剣
図版 35	1. 鉄鏃 (柳葉式) 2. 鉄鏃 (腸袂柳葉式) 3. 鉄鏃 (独立腸袂式) ① 4. 鉄鏃 (独立腸袂式) ②
図版 36	1. 鉄鏃 (片刃式) ① 2. 鉄鏃 (片刃式) ② 3. 鉄鏃 (片刃式) ③ 4. 鉄鏃 (片刃式) ④
図版 37	1. 短甲等① (外面) 2. 短甲等① (内面) 3. 短甲等② (外面) 4. 短甲等② (内面)
図版 38	1. 木心鉄板張輪鐙① 2. 木心鉄板張輪鐙① (拡大) 3. 木心鉄板張輪鐙② 4. 壺鐙
図版 39	1. 馬具 2. 刀子① 3. 刀子② 4. 刀子③
図版 40	1. 刀子④ 2. 刀子⑤ 3. 刀子⑥ 4. 不明石製品
図版 41	1. 不明鉄製品 (表) 2. 不明鉄製品 (裏) 3. 不明金銅製品 4. 不明金銅製品残欠
図版 42	埴輪 (1)
図版 43	埴輪 (2)・埴丘出土土器

挿図目次

第 1 図	調査を伝える新聞報道	3
第 2 図	第 1・8・10 トレンチ底に敷いた透水シート	5
第 3 図	第 4 トレンチの埋め戻し風景	7
第 4 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	8
第 5 図	調査前埴丘測量図 (1/600)	11
第 6 図	後円部端土層断面図昭和 50 年度調査 (1/60)	12
第 7 図	第 1 トレンチ実測図 (1/60)	13
第 8 図	第 8 トレンチ西壁土層図 (1/60)	14
第 9 図	第 8・10 トレンチ実測図 (1/60)	15
第 10 図	第 2 トレンチ実測図 (1/60)	16
第 11 図	第 3 トレンチ実測図 (1/60)	17
第 12 図	第 9 トレンチ東壁土層図 (1/60)	18
第 13 図	第 9 トレンチ実測図 (1/60)	19
第 14 図	第 11 トレンチ実測図 (1/60)	20
第 15 図	第 12 トレンチ実測図 (1/60)	21

第 16 図	第 5 トレンチ実測図 (1/60)	23
第 17 図	第 6・7 トレンチ実測図 (1/60)	24
第 18 図	第 4 トレンチ実測図 (1/60)	25
第 19 図	墳丘出土埴輪実測図 1 (1/4)	27
第 20 図	墳丘出土埴輪実測図 2 (1/4)	28
第 21 図	墳丘出土埴輪実測図 3 (1/4)	29
第 22 図	墳丘出土土器実測図 (1/4・054 は 1/6)	31
第 23 図	横穴式石室実測図 1 (1/40)	33-34
第 24 図	横穴式石室実測図 2 (1/60)	35
第 25 図	横穴式石室閉塞状況 (1/40)	36
第 26 図	遺物出土状況 (1/20)	37
第 27 図	第 5 トレンチ掘削風景	38
第 28 図	気球写真撮影風景	38
第 29 図	1～3 号鏡・7 号鏡断面図 (1/1)	41
第 30 図	4 号鏡実測図 (1/1)	42
第 31 図	5 号鏡実測図 (1/1)	43
第 32 図	金属製装身具実測図 (2/3)	45
第 33 図	玉類実測図① (1/1)	49
第 34 図	玉類実測図② (1/1)	50
第 35 図	玉類実測図③ (1/1)	51
第 36 図	玉類実測図④ (1/1)	52
第 37 図	琥珀玉実測図 (2/3)	58
第 38 図	大刀実測図 (1/2)	61
第 39 図	素環頭大刀・鉄剣実測図 (1/2)	62
第 40 図	刀剣類の細部構造	64
第 41 図	鉄鏃実測図① (柳葉式・腸挟柳葉式鉄鏃) (1/2)	67
第 42 図	鉄鏃実測図② (独立腸挟式鉄鏃) (1/2)	68
第 43 図	鉄鏃実測図③ (片刃式鉄鏃①) (1/2)	69
第 44 図	鉄鏃実測図④ (片刃式鉄鏃②) (1/2)	70
第 45 図	短甲等実測図 (1/4)	73
第 46 図	輪鏝実測図 (1/2)	75
第 47 図	木心鉄板張輪鏝復元図 (1/2)	77
第 48 図	壺鏝復元図・実測図① (1/2)	78
第 49 図	壺鏝実測図② (1/2)	79
第 50 図	その他馬具実測図 (1/2)	80
第 51 図	刀子実測図① (1/2)	82
第 52 図	刀子実測図② (1/2)	83
第 53 図	不明石製品実測図 (1/2)	84
第 54 図	不明鉄製品実測図 (1/2)	84
第 55 図	不明金銅製品実測図 (1/2)	85
第 56 図	墳丘復元図 (1/600)	87
第 57 図	勝浦古墳群配置図 (1/2,500)	90
第 58 図	勝浦高堀古墳出土遺物実測図	91
第 59 図	勝浦高堀古墳遺構実測図 (1/200)	91
第 60 図	生家大塚古墳墳丘測量図 (1/800)	92
第 61 図	生家大塚古墳出土遺物実測図 (1/8)	92
第 62 図	大石岡ノ谷 1 号墳出土遺物実測図 (1/8)	93
第 63 図	大石岡ノ谷 1 号墳墳丘測量図 (1/800)	93
第 64 図	大石岡ノ谷 2・3 号墳墳丘測量図 (1/800)	93
第 65 図	在自剣塚古墳墳丘測量図 (1/800)	94
第 66 図	在自剣塚古墳出土遺物実測図 (1/8)	95
第 67 図	津屋崎古墳群の首長墓編年	96
第 68 図	津屋崎古墳群分布図 (1/40,000)	98
第 A 図	基壇概念図	10

表目次

第 1 表	ガラス製玉類分類表	48
第 2 表	ガラス製玉類計測表	53～57
第 3 表	琥珀製玉類計測表	59
第 4 表	鉄鏃計測表	71

付 図	勝浦峯ノ畑古墳調査トレンチ位置図 (1/300)
-----	--------------------------

I はじめに

1. 調査に至る経緯

津屋崎から勝浦へ向かう国道 495 号沿いには水田や畑に囲まれて古墳があちらこちらに点在している。これらの大型円墳や前方後円墳は、海上交通を担い、沖ノ島祭祀に関わりをもつ胸形君一族の墳墓群として貴重な文化財であると認識されていた。地元では「塚」として大事にされ、千数百年の年月を経てもなお当時に近い姿を見ることができる。

このように貴重な文化財を「古墳公園」として保存活用する動きが、当時の津屋崎町から出てきた。時宜にかなった企画であり、福岡県教育委員会は、基礎資料作成のため調査担当職員を派遣して昭和 60 年度から新原・奴山古墳群の墳丘測量を重点として調査を実施した。調査報告書を刊行後、津屋崎町では文化財担当職員を採用したが、平成元年から始まった圃場整備・ゴルフ場建設工事に伴う文化財発掘調査に忙殺され、古墳群の史跡指定の手続きは進まなかった。

平成 13 年 1 月に福岡県文化財保護審議会から「福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画」が県教育委員会に提出された。これは県内に所在する重要かつ大規模な遺跡の中から積極的に保存活用すべき遺跡を選び、その中でも時節の緊急度に応じた対策を講じるために、特別史跡とそれに準じる遺跡を選定して市町村と共同して地域の特色を生かした保護対策をとることを提言したものであった。津屋崎古墳群は他の 4 地域と共に保存活用推進の重点地域・遺跡として選定された。その結果、津屋崎町では平成 13 年 10 月から教育委員会内に「古墳公園建設準備室」が設置され、文化財保護と古墳公園建設の業務を行うことになった。平成 14 年度には在自剣塚古墳の墳丘測量と範囲確認のトレンチ調査を行い、平成 15 年度には生家大塚古墳と大石岡ノ谷古墳群の墳丘測量図を作成し「津屋崎古墳群 I」として調査報告書を刊行した。

平成 14 年 11 月から史跡指定申請を行うため地元説明会を各集落で開催し、同時に史跡指定予定地の地権者にも説明を行い、史跡指定の同意をいただいた。平成 16 年 7 月に津屋崎古墳群として国指定史跡の申請を行い、平成 17 年 3 月 2 日に勝浦峯ノ畑古墳をはじめとする津屋崎古墳群が国の史跡指定を受けた。

平成 17 年 1 月 24 日に旧福岡町と旧津屋崎町の合併により「福津市」が誕生した。福津市では旧津屋崎町が進めていた津屋崎古墳群を「古墳公園」として整備活用する事業を引き続いて進めるために「古墳公園建設準備係」を設置し、史跡津屋崎古墳群の史跡指定地の拡充と史跡地の公有化と整備計画を作成することとなった。

平成 17 年 11 月 2 日に考古学、土木工学、造園学、社会教育学の各分野の専門家からなる「国指定史跡 津屋崎古墳群整備指導委員会」を設置し、津屋崎古墳群の発掘調査、保存整備等の事業について指導助言を受けることになった。

勝浦峯ノ畑古墳（旧 41 号墳）には公共座標の入った測量図面がなかった為、国庫補助事業で基準点を設置し、墳丘測量図を作成した。さらに墳丘規模の確認を行うためにトレンチ調査を平成 17 年度から平成 20 年度まで行った。昭和 50 年度に福岡県によって行われた調査を第 1 次調査とし、平成 17 年度から福津市で行った調査を第 2 次調査～第 5 次調査とした。平成 21

年度はトレンチ調査で出土した遺物の整理と図面整理を行った。

平成 22 年度は報告書を作成するため遺物整理と実測を行った。また勝浦峯ノ畑古墳を報告する上で、石室実測図と遺物実測図は外せないため、昭和 50 年調査時の実測図を福岡県教育委員会から借用して福津市で製図し報告した。石室からの出土品については、福岡県教育委員会の吉田東明を担当として福岡県教育委員会で分担して実測・原稿作成が行われ報告した。

なお、本書は津屋崎町教育委員会で刊行した『津屋崎古墳群Ⅰ』の続編であり、重複をなるべく避け、必要最小限の図を収録するにとどめた。

勝浦峯ノ畑古墳（旧、津屋崎 41 号墳、勝浦 14 号墳）は勝浦井ノ浦古墳（旧、津屋崎 10 号墳、勝浦 12 号墳）と共に、主要地方道若松・芦屋・福岡線（現、国道 495 号）の改良工事に伴う路線決定のための資料を得るため、昭和 50 年度国庫補助事業で発掘調査が行われた。調査の結果、これらの古墳の重要性が再確認された。（第 1 図）

勝浦井ノ浦古墳は、当初前方部過半の削平が予定されていたが、管轄する宗像土木事務所との協議の結果、設計変更が行われ、前方部先端を失ったものの前方部の石室は破壊を免れた。

昭和 50 年度の調査期間および関係者は下記のとおりである。

期間 自 昭和 50 年 11 月 17 日

至 昭和 51 年 1 月 26 日

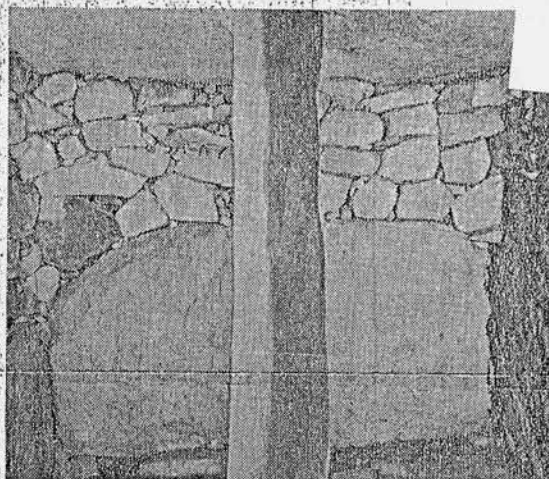
福岡県教育庁管理部文化課

総 括 課 長	藤井 功
課長補佐兼庶務係長	野上 保
参事補佐	松岡 史
技術主査	宮小路 賀宏
庶務担当 主 事	大神 新
調査担当 技 師	川述 昭人
調査補助員	川述 公紀
	鹿島 英世
	澤田 康夫
	日高 正幸
	筒井 亀

建國路

県道工事で壊すな

国に働
きかけ



全園でも例かない石柱のある
室(勝加4号古墳、県教委提供)

津十、岡田十、野の岡田吉原藤
急動してゐたが二日暮に四
十、岡田には函でも初めと
いわれる二本の柱を支へる大
石壁があるから、十、岡田
坂からは、うちけつより、用
金、千五十二圓、買入を新置
なすきしが納出で。岡田では
大起はじめの男後左衛門で、國
指定跡、の佃がある古村が
十、岡田は奥道、江戸のちの波
木郎、奥道のちの路線、警務
しれたが、編が出、近交

れる。
化序

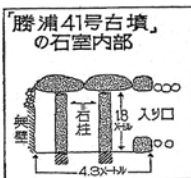
[illegible]

なにもあつて陳教義、陳蘭、
 町、豊土郎の啖食にも養育中
 の豊土郎、現在工部少佐に
 しているものゝこのまゝでは
 月來者には嫌惡さるゝ連向な
 。

最終的には佐竹運政、豊
 の父とて暗を中が、九州
 榮学・養育院前校長、考案
 は、臣國語、前部長、考案
 士、並あり、ほかに多くの
 がある。むかへは、南國
 としてゐる。豊土郎、事にあ
 破れ、逃げ、ほしと、

豊土郎

勝浦 宗像氏一近畿解明のカギ



都府廳司浦地は、勝浦四十
番古田の松葉鉾鉾をうけて
いたが、十二日暮に、横式
石室の真中に、木の石柱があ
る。此世紀初めの薩摩、佐世
を襲った古賊、あるふが、あ
つた古賊、あるふが、あつた。
石室、石柱のある邊の境、見
例は餘邊で初め。副將品に
て、金剛、鉄刀、スス、銀小
と、おぼたへし、故田土強が
れ、同時に、畫が、池、た
近の、「陣浦」古田、とも
大和朝と親類、簡略、つ
た、古田、近、古田、花の、つ
り、解明、と、古田、花、方、
と、古田、は、つ、



全国で初めてという石室内部に立っている2本の石柱

勝四十一号古墳と、その西側約十ヶ所ある同十号墳は、約三世紀に築かれたものなる際路古墳群の中でも著しく前方金銅器。墓中の出土品は九倉塚(若松・声屋一掃墓)ルーツを有するため、奥祭文化圏の川述部人技術が、十月中旬から葛原路通開港かかった。

四十一号古墳の横穴室石棺付高さ二・八尺、幅一・四五尺、奥行一・三〇尺、長さ四・五七尺と、二五尺四方の「墓の天蓋岩」約四寸角の柱二本それぞれ支え、うち東石棺を掩む自然石で重畳仕切つて施し(1)床形状で覆ふ。

天井横 石柱も玄武足だが、天井と石棺之間の小石敷数はさういふ。石柱間の土中に埋められている。盜掘を受けた後(2)「甕鏡」(日本製)の内花文鏡、柏枝鏡

(中国、朝鮮からの輸入品)六分板のほか、素銅鏡、力十數貫、ガブツ、銅小玉約三百五十個、琥珀(3)片、曜石、玉、問切玉など各々十個、銅網(うちくすり)一個、一個ながら出た。

川述技術は、奥祭部を支える石棺(せきがん)付きの石等とは相当異なるが、石室との真ん中を支える石付古墳は悉く初めよりこの形である。世記初めの宗祇氏の古墳とされる。しかし、天井を支える鉄もなりのになぜ石柱をたなか。付近で材料となる磁器が豊富に産出しては説明を要しないといへる。

四十一号と十号古墳とは、宗祇氏の西北北西の地点で、国指定史跡の装飾古墳「坂京古墳」のもの近く。四十号古墳の石室は町有地で、保の民がもっているが、金剛の小路(こころみち)という部分の墓が出土した古墳は、前方部の室が果道遺跡の敷地にあるとされ、有り。このため、奥祭文化には奥士本部と縁接関係を示し入して

森島次郎九州産業大教授「考古学」の語、桜京古墳の石壁形もこれと二本の石が立っているが、勝四十一号古墳のものは論議でも初めてだ。北朝鮮や高麗職(じり)遼陽から石柱を運ぶ石室が誇られていたが、古墳の結びひや模様が上ら両面交互に刻びつけられている。

石室は普通、床間(どま)を敷いてバラスをこしているが、四十号古墳ではそれがなく、石柱と井筒を支える工夫をしたのが特徴である。近畿古墳文化化現象との関連追究するべきであろう。

「日本製」の内花文鏡、柏枝鏡

第1図 調査を伝える新聞報道

2. 調査の経過と組織

(1) 調査の経過

平成 17 (2005) 年度 第2次調査 平成 18 年 1 月 25 日～平成 18 年 3 月 31 日

墳丘測量図を作成するため墳丘の笹と樹木を伐採し、4 級基準点を設置した。平板を使い、縮尺 1 / 100 の墳丘測量を行なった。

墳丘裾部の確認をするために、後円部に第 1 号トレンチを設定し、前方部に第 2 号トレンチを設けた。どちらも土手状の石積みを確認して調査を終了した。

調査面積は古墳の面積と同じ 6,774㎡で、遺物は測量時の表採品とトレンチ調査によってパンケース 1 箱分の須恵器と埴輪がある。

平成 18 (2006) 年度 第3次調査 平成 19 年 1 月 22 日～平成 19 年 3 月 30 日

前年度設定した第 1 トレンチを墳丘側に延ばした。2 月に現地で「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の調査指導を受けたところ、調査区内の多くの石が上部の葦石が削平等により落ちている所謂転石であるので来年度調査で撤去するように指導を受けた。前方部の墳裾を確認するため、第 2 トレンチの西側に第 3 トレンチを設定し、墳丘反対側の南側に第 6・第 7 トレンチを設定して調査した。第 3 トレンチでは葦石作業分担の境と思われる縦一列の石列を確認した。第 6・7 では後世の削平によって墳丘裾部は確認できなかった。墳丘前方部端を確認するため第 5 トレンチを設定し調査した。古墳周囲の盾状の地形が古墳に伴うものであるか確認するために第 4 トレンチを設定し調査した。気球とセスナを使って空中写真を撮影した。

調査面積 85㎡で、遺物はパンケース 2 箱分の埴輪・須恵器が出土した。

平成 19 (2007) 年度 第4次調査 平成 19 年 10 月 18 日～平成 20 年 3 月 28 日

くびれ部を検出するために第 1 トレンチに接して第 8 トレンチを設定して調査した。前年度に「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」から受けた調査指導に基づき調査区内の石の下に石があるか慎重に判断しながら撤去していったところ、石の下から 056 や 058 といった中世の土師器や陶磁器が出土し、墳裾部には多くの転石が堆積しており、その下に葦石があることを確認した。前方部左側隅角を確認するために第 9 トレンチを設定して調査した。里道と畑によって前方部左側隅角は削平を受けて残っていなかった。2 月に「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の調査指導を受けたところ、第 8 トレンチと第 1 トレンチの間にくびれ部の存在が考えられ調査区を設定して調査すること、前方部端を確認するために前方部にトレンチを設定することを求められ、調査を次年度まで延長することを指導された。

調査面積 94㎡で、遺物はパンケースで 10 箱分の埴輪が出土した。大部分が第 8 トレンチからの出土である。

平成 20 (2008) 年度 第5次調査 平成 20 年 9 月 24 日～平成 21 年 3 月 31 日

前年度「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」によって墳丘復元を行うには調査不足であるという調査指導に基づいて、くびれ部と前方部端に調査トレンチを設定した。くびれ部を

探すために第1トレンチと第8トレンチの間を調査して第10トレンチとした。古墳の前方部右側隅角を確認するため第5トレンチを拡張して調査した。前方部端を確認するために第11・12トレンチを設定して調査した。調査後、ラジコンヘリコプターによって空中写真を撮影した。

調査面積36㎡で、遺物はパンケース11箱分の埴輪と須恵器が出土した。

トレンチの埋め戻しにはトレンチ底の葦石を動かさないように気をつけながら土嚢袋を敷き、その上に木の根を除去した土を細かく砕いて埋め戻した。斜面については外側になる部分には植生土嚢を積み上げた。(図版表紙参照) 第8・10トレンチについては面積が広いため根石や縦方向に並ぶ石列を土嚢で覆った後、福岡県教育委員会の指導を受け調査区全体を透水シートで覆い、その上から調査した土で埋め戻した。調査で撤去した原位置を留めていない葦石(転石)については「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の調査指導に基づき、将来に予定される墳丘整備に活用するためにトレンチ脇に集めて仮置きしている。(池ノ上)



第2図 第1・8・10トレンチ底に敷いた透水シート

(2) 調査組織

調査は福津市が事業主体で国・県の補助をうけて実施した。

平成 17 (2005) 年度 第 2 次調査

事務組織	福津市教育委員会	教育長	白石 哲雄
	〃	教育部長	松本 孝介
	〃	古墳公園建設室 室長	花田 喜成
調査担当	〃	建設準備係	池ノ上 宏

平成 18 (2006) 年度 第 3 次調査

事務組織	福津市教育委員会	教育長	白石 哲雄
	〃	教育部長	松本 孝介 (7月まで)
	〃	社会教育課 課長	楠田 元明 (7月から)
	〃	古墳公園建設準備係長	花田 喜成
			西地 豊敏
調査組織・調査指導	国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会 文化庁・福岡県教育庁文化財保護課		

調査担当	福津市教育委員会	社会教育課	古墳公園建設準備係	池ノ上 宏
------	----------	-------	-----------	-------

平成 19 (2007) 年度 第 4 次調査

事務組織	福津市教育委員会	教育長	白石 哲雄	
	〃	教育部長	楠田 元明	
	〃	教育総務課 課長	花田 喜成	
	〃	古墳公園建設係長	西地 豊敏	
調査組織・調査指導	国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会 文化庁・福岡県教育庁文化財保護課			
調査担当	福津市教育委員会	教育総務課	古墳公園建設係	池ノ上 宏

平成 20 (2008) 年度 第 5 次調査

事務組織	福津市教育委員会	教育長	白石 哲雄	
	〃	教育部長	楠田 元明	
	〃	教育総務課 課長	薄 俊哉	
	〃	主幹兼古墳公園建設係長	青木 正吾	
調査組織・調査指導	国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会 文化庁・福岡県教育庁文化財保護課			
調査担当	福津市教育委員会	教育総務課	古墳公園建設係	池ノ上 宏

平成 21（2009）年度 遺物整理

事務組織	福津市教育委員会	教育長		金子	孝信
	〃	教育部長		下り松	英次
	〃	教育総務課	課長	薄	俊哉
	〃		主幹兼古墳公園建設係長	青木	正吾
遺物整理担当	〃		古墳公園建設係	池ノ上	宏

平成 22（2010）年度 遺物整理・報告書作成

事務組織	福津市教育委員会	教育長		金子	孝信
	〃	教育部長		下り松	英次
	〃	教育総務課	課長	薄	俊哉
	〃		主幹兼古墳公園建設係長	青木	正吾
	〃		古墳公園建設係	井浦	一
報告書作成担当	福津市総合政策部	企画政策課	世界遺産登録推進係長	池ノ上	宏



第3図 第4トレンチの埋め戻し風景



3. 立地と環境

勝浦峯ノ畑古墳は対馬見山より勝浦浜へ向けて北西に延びる丘陵から、西向きに派生する尾根状微高地にある。標高は 15m 前後で、西側には渡半島につながる海ノ中道状の砂州地形をはさんで外海の玄界灘が広がる。南側は現在の津屋崎干潟につづく標高 4m 以下の低平な地形である。江戸初頭の寛文六年（1666）からおこなわれた干拓事業によって干潟を埋め立てた耕地が広がる。この耕地にあたる範囲は慶長年間筑前国図⁽¹⁾で入り海として描かれている。また、ボーリング調査により、ほぼ同じ範囲で海成層が確認され、縄文海進期の海岸線が勝浦峯ノ畑古墳の南側 600m 程の位置まで入り込んでいたとされる。⁽²⁾

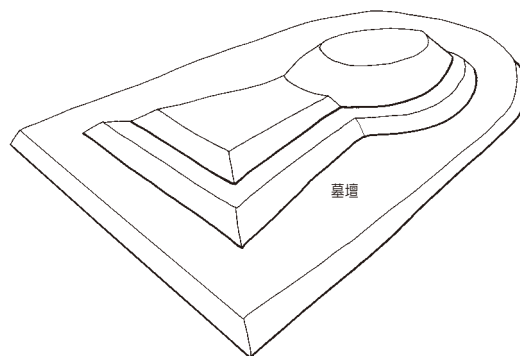
旧石器時代 福津市北端に位置し、勝浦峯ノ畑古墳の北東側約 600m にある牟田池⁽³⁾は県内屈指の旧石器出土地点として有名であるが、意外にもその他の地点では確認されることが少ない。牟田池南岸の勝浦井ノ口遺跡⁽⁴⁾では、黒耀石製の縦長剥片尖頭器や角錐状石器が出土している。牟田池から南へ約 600m の勝浦高堀遺跡⁽⁵⁾では古墳の下から径 5cm 程度の黒耀石塊が出土している。該品は原面を残さないが、剥離痕が不均一であり加工品に関するものかどうかは不明である。また、新原・奴山古墳群⁽⁶⁾（第 7 次）調査中、スクレイパー⁽⁷⁾と大量の黒耀石片が出土している。古墳及び圃場造営時削平を受けているため攪乱が著しいが、新原・奴山 49 号墳閉塞に黒耀石の原石が使用されていたことから、この地点に旧石器関連の遺跡があったことを物語っている。

弥生時代 福津市西側海岸沿いの大字宮司字大ヒタイに所在する今川遺跡⁽⁸⁾は弥生時代初期の遺跡として有名であり、大陸の影響を受けた遺構や持ち込まれた遺物は注目を浴びている。宮司大ヒタイ遺跡^(5,9)からは中期の貯蔵穴が確認された。今川遺跡と同一丘陵であり、関連遺跡として扱われている。大石山麓の須多田立石遺跡⁽¹⁰⁾からは削平されながらも円形住居跡が確認された。また奴山伏原遺跡⁽¹¹⁾では円形住居跡と中期の土坑が調査されている。勝浦坂口遺跡⁽⁴⁾からは円形住居と夥しい数の包含層土器及び石器が出土している。いずれも丘陵から派生する微高地上に立地している。

古墳時代 釣川流域から福津市北西岸域に当たる海岸沿いには首長墓系列である大型円墳・前方後円墳を含む多数の古墳が営まれている。釣川左岸を神湊へ続く標高 50m 前後の丘陵上には、約 200 基からなる牟田尻古墳群⁽¹²⁾がある。この古墳群は 6 世紀後半以降の円墳を主体とし、丘陵尾根上に支群を形成する。中でも全長 39m の前方後円墳である桜京古墳⁽¹³⁾は、装飾古墳の北限として知られている。勝浦には前方部から竪穴系横口式石室が確認された勝浦井ノ浦古墳⁽¹⁴⁾、本報告の勝浦峯ノ畑古墳がある。工具を出土したことでよく知られる新原・奴山古墳群⁽¹⁵⁾は平成 7 年度圃場整備関連調査により、それまで確認された 48 基に加え 11 基の古墳が検出された。（現在 59 基）また、44 号墳も圃場整備にともなう調査により、玄室に石柵をもつ複室の横穴式石室であることが判明した。全長 50cm を上回る鋸、国内に出土例がない鉋状鉄製品等の工具が出土している。須多田地区では 5 世紀代、二重の周溝をもつ大型円墳である須多田ニタ塚古墳⁽¹⁰⁾が営まれ、6 世紀代、やや東部丘陵寄りに前方後円墳 4 基（須多田上ノ口古墳・須多田天降天神社古墳・須多田ミソ塚古墳・須多田下ノ口古墳）⁽¹⁰⁾が形成されている。古墳時代の生活遺跡も多数明らかになっている。神湊周辺の海岸部には、銚、ヤス、釣針などが出土

し6世紀代とされている浜宮貝塚⁽¹²⁾がある。また、アワビオコシのほか沖ノ島1号祭祀遺跡出土例と共通する有孔壺型土器が出土した新波止貝塚⁽¹²⁾も知られている。勝浦から宮司にかけては、圃場整備事業にともなう発掘調査などにより集落が多数見つかっている。勝浦井ノ口遺跡⁽⁴⁾では4世紀後半から5世紀前半の住居から鍛冶滓が出土した。全長101.7mの前方後円墳である在自剣塚古墳⁽¹⁶⁾の南西には、古墳時代から中世にわたる集落である在自三本松遺跡⁽¹⁷⁾ L字状竈が検出された在自下ノ原遺跡⁽¹⁸⁾、朝鮮半島南西部の影響を受けたと考えられる陶質土器や舟形を含む滑石製品が出土した在自小田遺跡⁽¹⁷⁾など60ヘクタールに及ぶ範囲に集落が広がる。なお在自小田遺跡では棟持柱をもつ桁行10.1m、梁行8.8mの掘立柱建物が検出されている。これらの遺跡は、対外交渉や沖ノ島祭祀、漁業、鉄製品生産など、胸肩君一族の具体的な動向を示すものと考えられる。(南時夫)

1. 『福岡県史資料』第2輯
2. 津屋崎町史編纂委員会 『津屋崎町史』 通史編 1996
3. 平ノ内幸治「第1章 旧石器時代」 宗像市『宗像市史』 1997
4. 津屋崎町教育委員会 『勝浦北部丘陵遺跡群』 津屋崎町文化財調査報告書第13集 1998
5. 津屋崎町教育委員会 『津屋崎町内遺跡』 津屋崎町文化財調査報告書第19集 2002
6. 津屋崎町教育委員会 『新原・奴山古墳群Ⅱ』 津屋崎町文化財調査報告書第17集 2001
7. 福岡県旧石器研究会のご教示による。
8. 津屋崎町教育委員会 『今川遺跡』 津屋崎町文化財調査報告書 第4集 1981
9. 津屋崎町教育委員会 『宮司大ヒタイ遺跡』 津屋崎町文化財調査報告書 第8集 1993
福津市教育委員会 『宮司大ヒタイ遺跡』 福津市文化財調査報告書第1集 2006
10. 津屋崎町教育委員会 『須多田古墳群』 津屋崎町文化財調査報告書 第12集 1996
11. 津屋崎町教育委員会 『奴山伏原遺跡』 津屋崎町文化財調査報告書第18集 2002
12. 宗像市史編纂委員会 『宗像市史』 通史編 第一巻 1998
13. 宗像市教育委員会 『桜京古墳』 宗像市文化財調査報告書第58集 2007
14. 福岡県教育委員会 『新原・奴山古墳群』 福岡県文化財調査報告書 第54集 1977
15. 津屋崎町教育委員会 『新原・奴山古墳群』 津屋崎町文化財調査報告書 第6集 1989
16. 津屋崎町教育委員会 『津屋崎古墳群Ⅰ』 津屋崎町文化財調査報告書第20集 2004
17. 津屋崎町教育委員会 『在自遺跡群Ⅰ』 津屋崎町文化財調査報告書 第9集 1994
18. 津屋崎町教育委員会 『在自遺跡群Ⅲ』 津屋崎町文化財調査報告書 第11集 1996



第A図 墓壇概念図



第5図 調査前墳丘測量図 (1/600) 後円部端確認トレンチ▼は墳裾の位置を示す

II 墳丘の調査 (付図、第5図)

今回、墳丘の測量にあたり公共座標の入った図面をつくるため測量業者に委託して4級基準点を前方部上に設置した。また勝浦地区で行われた圃場整備に伴い設置された水準点から標高を移動して墳丘測量図を作成した。これは福津市が作成している2,500分の1の地形図とも整合するものであった。この結果、昭和50年度に行われた発掘調査の図面と標高が食い違うために石室床面・框石・楣石の下部のレベルを今回改めて計測したところ、今回の標高より7.76m高く表現されていたと判断した。今回、第1次調査で作成した石室図面・後円部端を確認したトレンチの図面を変更して掲載していることをお断りする。

1. 後円部の調査

後円部確認トレンチ (第6図、付図、図版12-1)

第1次調査で調査されたトレンチである。

古墳から道を隔てた場所に設定されている。

土層の凡例は1-赤褐色土、2-灰褐色土、3-暗灰黄褐色砂質土、4-暗灰茶褐色土、5-淡茶色土、6-暗茶色土(土器片混入)、7-暗茶色土、8-灰茶色土、9-明黄褐色土、10-灰黄色土(地山の削り土の堆積)

土層から後円部墳裾が確認されている。

第6図の土層断面図では矢印で、第5図の調査前墳丘

測量図と付図の勝浦峯ノ畑古墳調査トレンチ位置図において▼で表現している。

第1トレンチ (第7図、図版12-2・図版13)

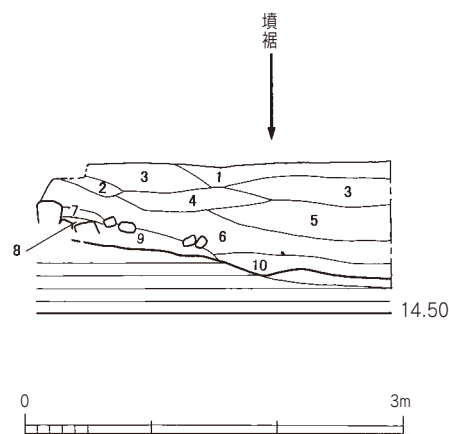
第2次調査において後円部の周溝を確認する目的で幅0.9m、長さ11mで設定した。トレンチ南側で検出した高さ約80cmの土手状をした石積を古墳に伴うものと考えていた。トレンチ北側では表土から30cm下で地山を検出し、その上に堆積する10もマンガンを含む水田の床土だと判断し、削平をうけていると考えている。

第3次調査時には後円部との関係を調べるためにトレンチを南側に9m延長して後円部盛土を確認している。土層図右側の細かい土層は後円部盛土と思われる。土層の凡例は

1-褐色砂(砂丘の吹き上げ)、2-黒褐色土と赤褐色土の混合土、3-明赤褐色粘質土、4-淡灰褐色粘質土、5-橙褐色砂質土、6-褐色砂質土、7-赤褐色砂質土、8-黒褐色粘質土、9-明橙褐色粘質土(地山の再堆積)、10-暗褐色砂質土(マンガンを含む)

7・8・9層は墳丘盛土の流れ込みと思われる、2・3・4・5・6層は墳丘を削り盛ったものと思われる。第2次調査で古墳に伴うと考えた6層の左側にある石積と古墳との間を埋めるように6層が人為的に埋められていると考える。6層の下には多くの転石が何重にも堆積しており調査が難航した。

トレンチ南端から4.6mから6.4mにかけての斜面は墳丘1段斜面のラインを示すと判断している。土層にかかる墳裾部の葺石根石上部のレベルは14.5m、1段斜面傾斜角度は約30°を測る。



第6図 後円部端土層断面図
昭和50年度調査(1/60)



第7図 第1トレンチ実測図 (1/60)

2. くびれ部の調査

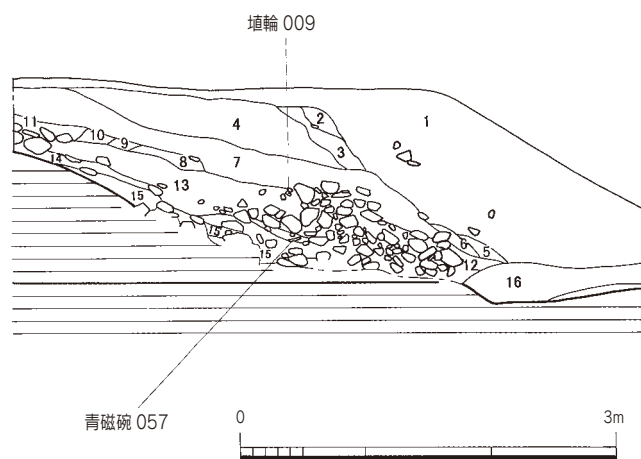
第8トレンチ・第10トレンチ（第8・9図、図版14・15・16・17）

「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の指導を受け第4次調査時に第1トレンチの西側に接する形で第8トレンチを設定して調査した。トレンチ西壁に残る高さ約80cmの土手状の石積は第1トレンチの東壁でも確認されるものの続きである。この石積中から009の埴輪をはじめとする多くの埴輪の破片と057の青磁碗が出土している。この青磁碗からこの石積が古墳時代に伴うものではないことがわかる。

第8トレンチ西壁土層図の凡例は

- 1－褐色砂、2－1より強く締まった砂、
- 3－橙褐色砂質土に炭化物を多く含む、
- 4－橙褐色砂質土（締まっている）、
- 5－暗褐色砂質土、
- 6－橙褐色砂質土（締まっている）、
- 7－明褐色砂質土、8－橙褐色粘質土、
- 9－褐色粘質土、
- 10－茶褐色粘質土、11－灰褐色粘質土、
- 12－明褐色粘質土、13－暗褐色粘質土、
- 14－褐色粘質土、15－黒褐色粘質土、
- 16－暗褐色砂質土（マンガンを多く含む）

第1トレンチの東壁と同様に石積の墳丘側を埋めるように13層の土を入れている様相がわかる。この第8トレンチではくびれ部の検出ができなかったために墳丘復元には不十分であるとい



第8図 第8トレンチ西壁土層図（1/60）

う「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の指導を受けて第1トレンチとの間を第5次調査時に調査したのが第10トレンチである。このトレンチ調査によって、墳丘裾部にあたる位置の葦石が他より比較的大ぶりで並んでいることが確認された。葦石根石とか葦石基石とか呼ばれる石であると判断している。第9図上ではトーンを貼り表現をしている。また後円部へ延びる縦方向の石列も確認している。第9図上ではAとBで表現している石列である。これは作業分担を示す区画石列と呼ばれる石列でちょうどくびれ部にあたる位置にあると考えている。

この石列の墳裾部にあたる葦石根石上部のレベルは14.6m、1段斜面傾斜角度は約30°を測る。また、墳丘裾部根石より外側にあたる部分にも多くの石がみられる。墳丘上部からの転石の可能性もあるが、墳丘裾部より外側に幅1～1.5mの範囲に石敷がされているのではないかと考えて図化し、保存している。今後、墳丘の南側でのトレンチ調査の結果をふまえて判断すればいいと考える。



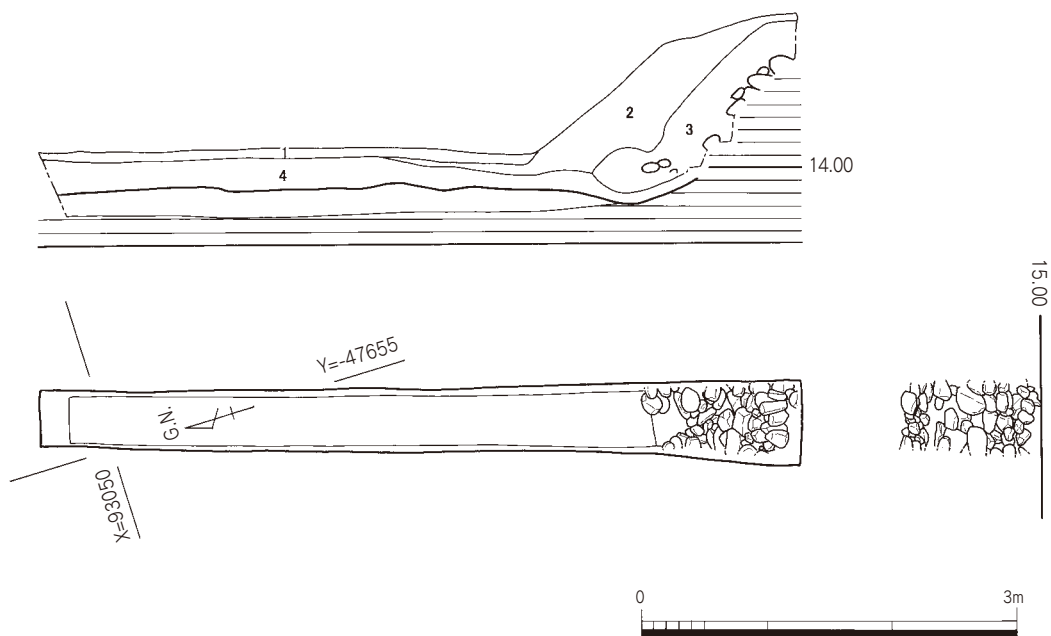
第9図 第8・10トレンチ実測図 (1/60)

3. 前方部の調査

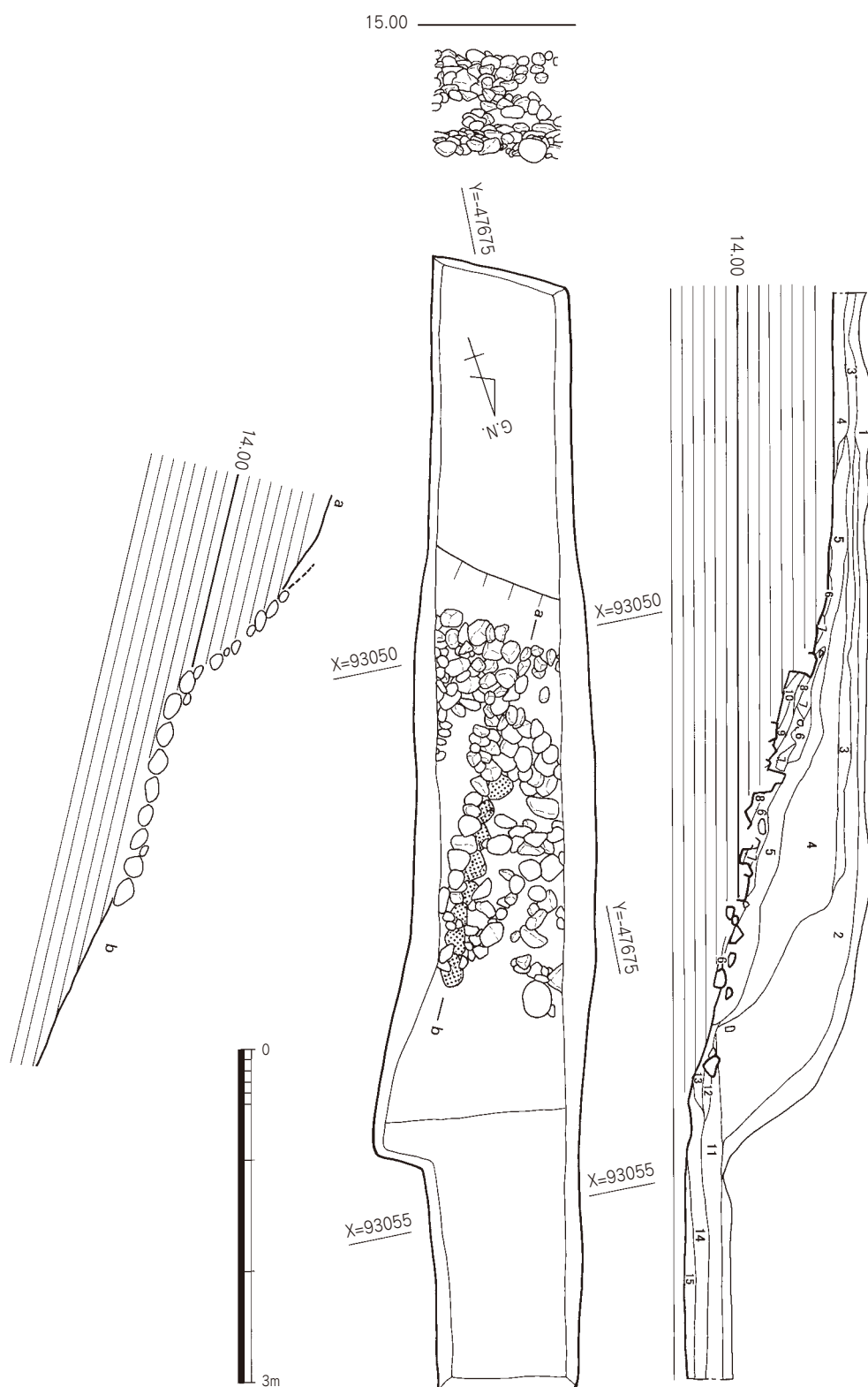
第2トレンチ (第10図、図版18-1)

第2次調査時に前方部端を確認する目的で長さ6mに設定したトレンチである。史跡地での調査でもあり慎重になりすぎて幅50cmのサブトレンチのようなトレンチを設定した。石積を検出した時点で掘削を止め、写真・図面を作成して埋め戻した。後の調査から判断してこの石積は後世の石積であり目的は達成できていなかった。調査としては失敗である。ただトレンチ北側で削平がひどく遺構が残っていないという事はこのトレンチでわかった。

土層の凡例は1-バラス層 (かつて駐車場として使用されていた頃に入れられたもの)、2-明褐色砂質土 (締まりがない)、3-明褐色砂質土、4-暗褐色砂質土



第10図 第2トレンチ実測図 (1/60)



第 11 図 第 3 トレンチ実測図 (1/60)

第3トレンチ (第11図、図版18-2・19)

第3次調査時に前方部端を確認する目的で幅1m、長さ10mで設定したトレンチである。多くの転石を慎重に除去しながら調査を行った。トレンチ南側では削平により全く墳丘盛土が残っていなかった。南端より2.8mの位置からゆるやかに下降している。

土層の凡例は

1－黒褐色砂質土、2－明褐色細粒砂土、3－茶橙褐色砂質土と灰褐色砂質土の混合土、4－暗褐色砂質土、5－明紫褐色粘質土、6－茶褐色粘質土、7－灰褐色粘質土、8－暗褐色粘質土、9－褐色粘質土、10－黒褐色粘質土、11－明褐色細粒砂土（マンガンを含む）、12－明褐色細粒砂土（マンガンを多く含む）、13－明灰褐色中粒砂土（マンガンを含む）、14－13にマンガンが多く含まれる、15－明茶褐色中粒砂土

1～4層は短期間に埋められた土層と思われる。5～10層は墳丘からの流れ込みである。くびれ部と比べて葦石は小ぶりである印象を受ける。ここでも作業範囲を示す区画石列が確認されている。図面ではトーンにより表現している。墳裾部にあたる葦石根石上部のレベルは13.9m、1段斜面傾斜角度は約30°を測る。

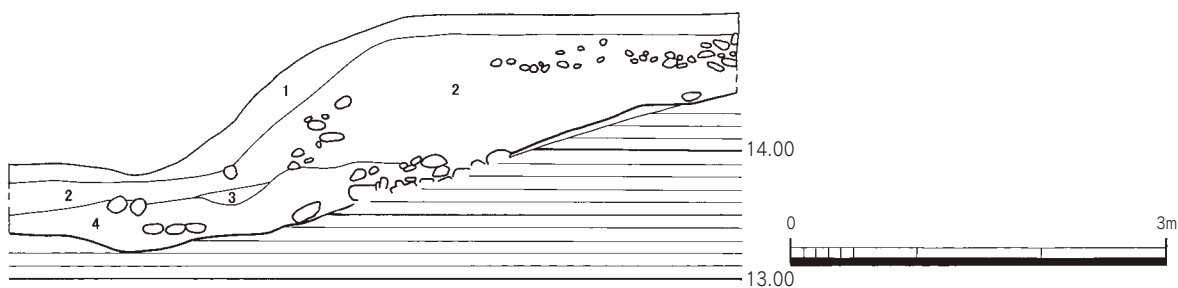
第9トレンチ (第12・13図、図版18-2・20-1)

第4次調査時に前方部左側隅角を確認するために設定して調査したトレンチである。トレンチ東側に葦石の一部を確認したが、トレンチの北側は里道により、西側では畑によって削平をうけており全く墳丘盛土が残っていなかった。

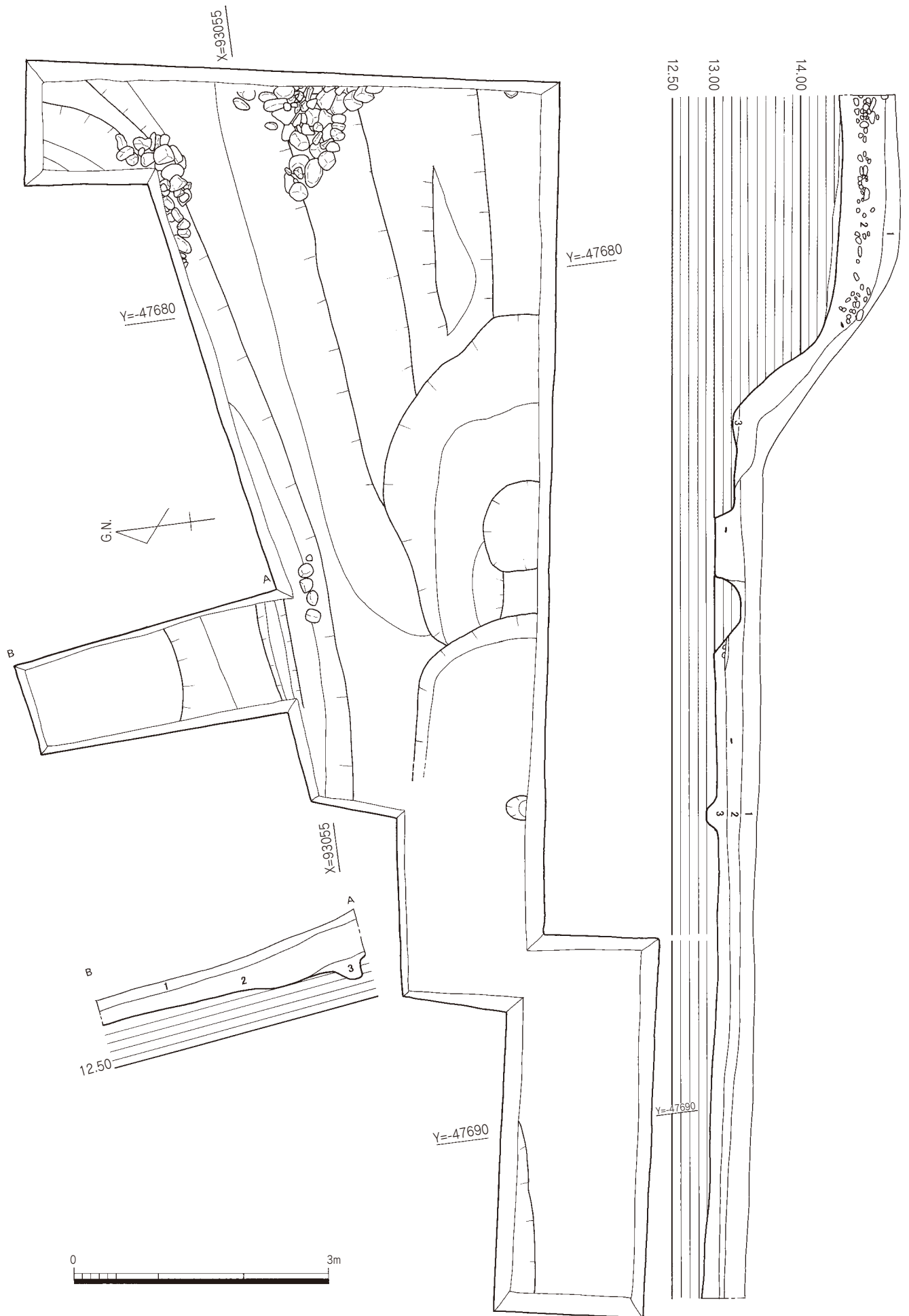
土層の凡例は

1－黒褐色砂質土、2－淡褐色細粒砂土、3－2にマンガンを多く含む、

ここでの土は短期間に埋められた土層と思われる。2層中には葦石の残骸が上部に多く入っていることから墳丘を削って一気に埋めた様子がうかがえる。またトレンチ南壁の東端から5.1mに位置するのは後世の穴である。その西側、東端から6.2mの位置にある段落ちは第5・11・12トレンチで確認されている前方部端に合う。



第12図 第9トレンチ東壁土層図 (1/60)



第 13 図 第 9 トレンチ実測図 (1/60)

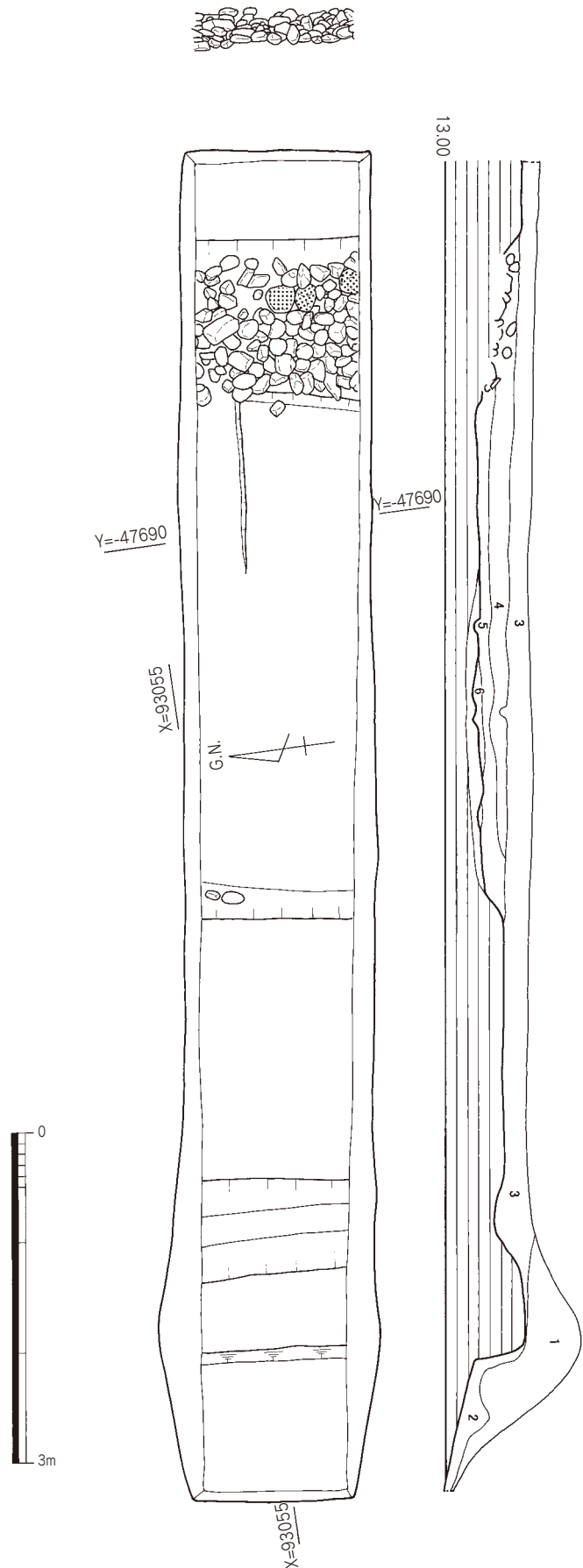
第 11 トレンチ (第 14 図、図版 21・22 - 1)

第 5 次調査時に前方部前面の端部を確認する目的で幅 1.5m、長さ 12m で設定したトレンチである。トレンチ西端には多くの転石を積み上げた土手状のものがあつた。土手の東側に幅約 0.9m の溝を検出したが、畑の排水溝ではないかと考える。前方部前面は後世の畑によるためか削平をひどく受けており、現地表面から 20cm 足らずで地山となっていた。それでもトレンチ東端から 1.2m の位置で墳裾部にあたる葦石根石列を確認した。現況での前方部端から西側に 1.5m の位置となる。図面上ではトーンにより表現している。葦石根石上部のレベルは 13.6m を測る。

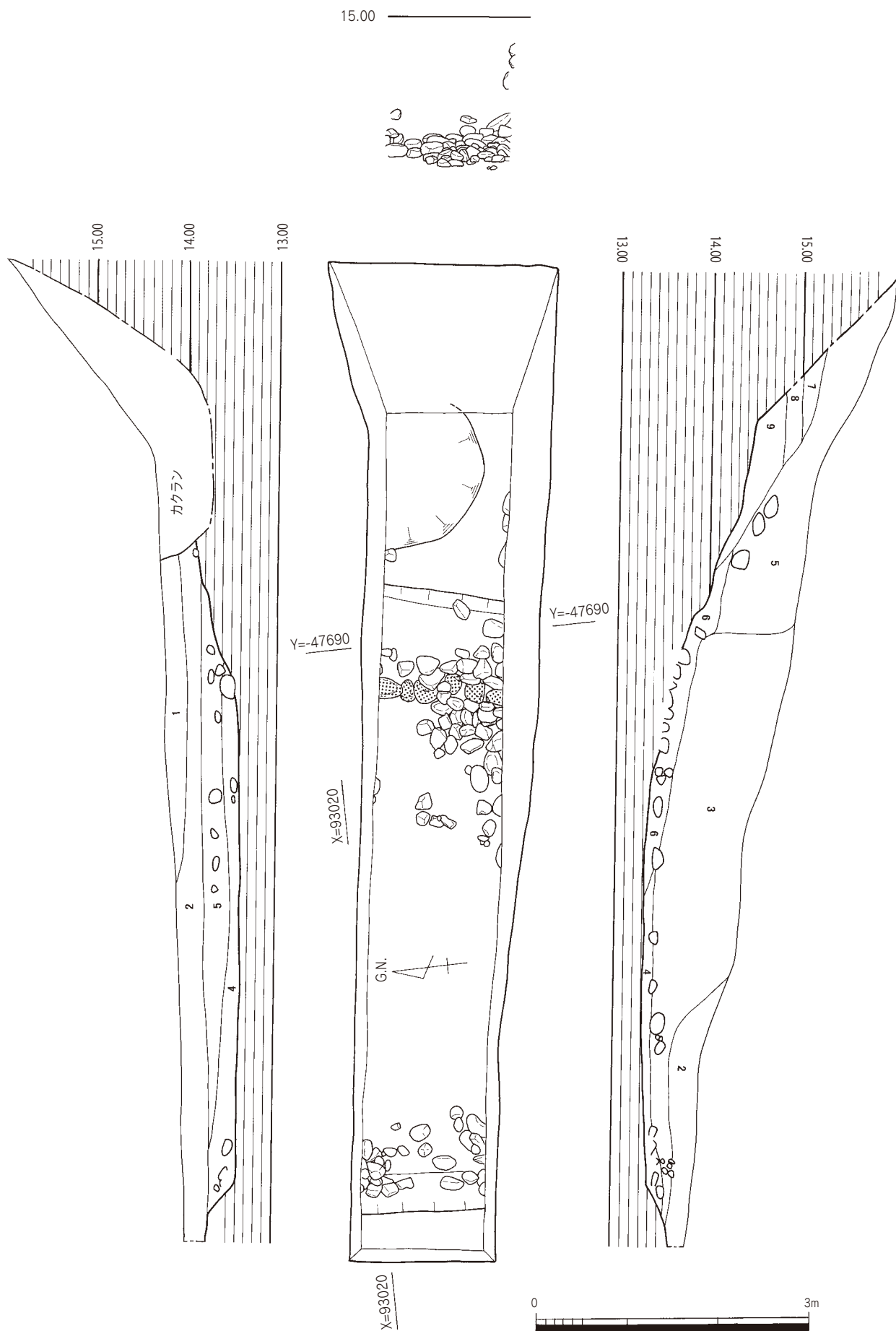
この葦石根石より 0.7m 西側で段落ちを検出している。トレンチ東端より 6.6m で立ち上がりを検出している。前述のようにここでは削平がひどいため本来の規模は不明だが現状で幅約 4.7m、深さ約 0.25m の溝かと思われる。溝の底のレベルは 13.3m である。

土層の凡例は

1 - 転石の堆積、2 - 淡褐色粘質土、3 - 褐色砂質土、4 - 茶褐色砂質土、5 - 黒褐色砂質土、6 - 黒褐色砂質土に赤褐色粘質土が入る



第 14 図 第 11 トレンチ実測図 (1/60)



第 15 図 第 12 トレンチ実測図 (1/60)

第 12 トレンチ (第 15 図、図版 21 - 1・22 - 2)

第 5 次調査時に前方部前面の端部を確認する目的で第 3 次調査時に調査した第 5 トレンチの北側に平行する形で幅 1.5m、長さ 9.3m で設定したトレンチである。トレンチ南側、第 5 トレンチとの間には転石を積み上げた山がありトレンチ掘削にあたっても多くの転石を慎重に除去しながら調査を行った。トレンチ東側にはビニールハウスのビニールと思われるものが捨てられたゴミ穴があった。

土層の凡例は

1 - 濃褐色砂、2 - 1 の吹き上げ砂に転石が多く堆積、3 - 黒橙褐色砂質土 (礫が多く含まれる)、4 - 茶褐色砂質土 (締まっている)、5 - 黒褐色砂質土、6 - 茶褐色粘質土、7 - 淡褐色粘質土、8 - 赤褐色粘質土

2 層は墳丘を削って出た葦石を積み上げたあとであろう。4 層は短期間に埋められた土層と思われる。6 ~ 8 層は墳丘盛土の流れ込みである。北側に位置する第 11 トレンチと比べて葦石は大ぶりである印象を受ける。トレンチ西端から 6.2m の位置で墳裾部にあたる葦石根石列を確認した。図面ではトーンにより表現している。葦石根石上部のレベルは 13.6m を測る。この葦石根石より 0.9m 東側で立ち上がりを検出している。これは墳裾より墳丘側に入り込んでいるため、地山整形してその外側 0.8m の場所に葦石を敷くことがあるのか判断に苦しむ。トレンチ西端より 0.9m で立ち上がりを検出している。現状で幅約 6.8m、深さ幅約 0.25m の溝かと思われる。溝の底のレベルは 13.3m である。

第 5 トレンチ (第 16 図、図版 21 - 1・23)

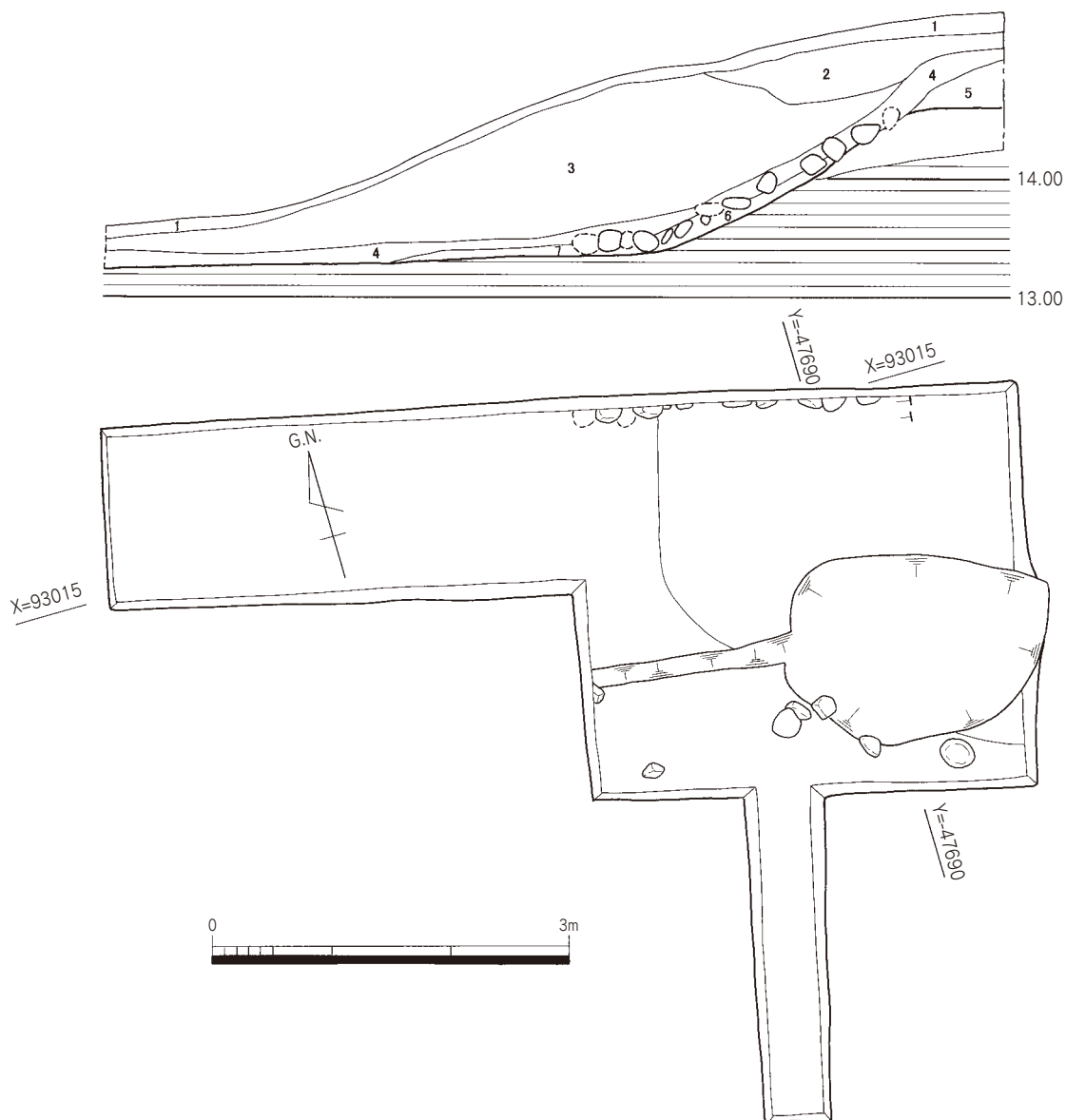
第 3 次調査時に前方部前面の端部を確認する目的で幅 1.5m、長さ 7.5m で設定したトレンチである。トレンチ北側、第 12 トレンチとの間には転石を積み上げた山がありトレンチ掘削にあたっても多くの転石を慎重に除去しながら調査を行った。

土層の凡例は

1 - 腐食土、2 - 淡褐色砂質土 (締まりがない)、3 - 吹き上げ砂に転石が多く堆積、4 - 褐色砂質土、5 - 淡黄褐色砂質土、6 - 淡赤褐色砂質土 (地山の削り土)、7 - 黒褐色砂質土 (締まりがない)

3 層は墳丘を削って出た葦石を積み上げたあとであろう。2 層は短期間に墳丘を削って埋めた土層と思われる。4 ~ 7 層は墳丘盛土の流れ込みである。転石が多く除去しすぎた結果、墳裾部にあたる葦石根石列を除去してしまった。ただ土層中で墳裾部葦石根石を確認することができる。トレンチ西端から 4.5m の位置で墳裾部にあたる葦石根石を確認した。この根石からゆるやかに上がる斜面は墳丘 1 段斜面のラインを示すと判断している。土層にかかる墳裾部の葦石根石上部のレベルは 13.5m、1 段斜面傾斜角度は約 25° を測る。

第 4 次調査時に「国指定史跡津屋崎古墳群整備指導委員会」の指導を受け、第 4 次調査の第 9 トレンチで確認できなかった前方部隅角を確認するために、第 5 次調査時に第 5 トレンチを南側に広げて調査した。拡張した場所に攪乱の穴があり、その南側では削平を受けていたために前方部右側隅角も確認できなかった。



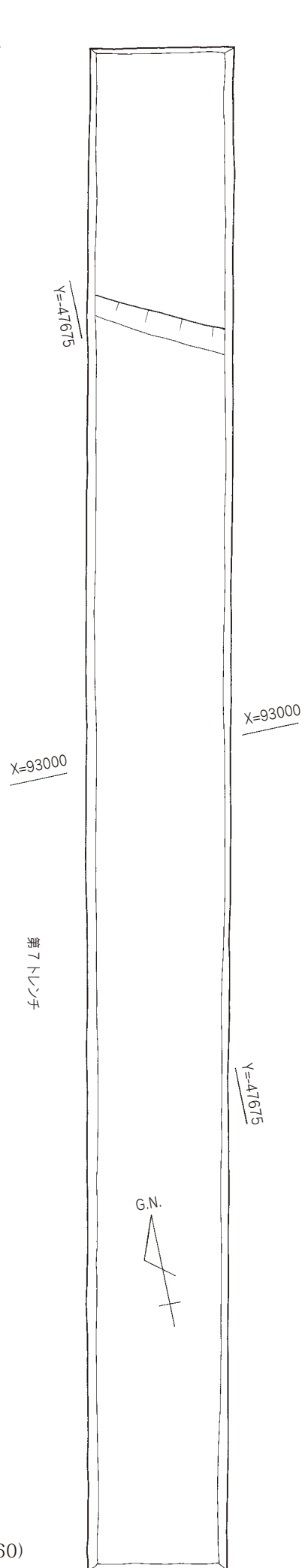
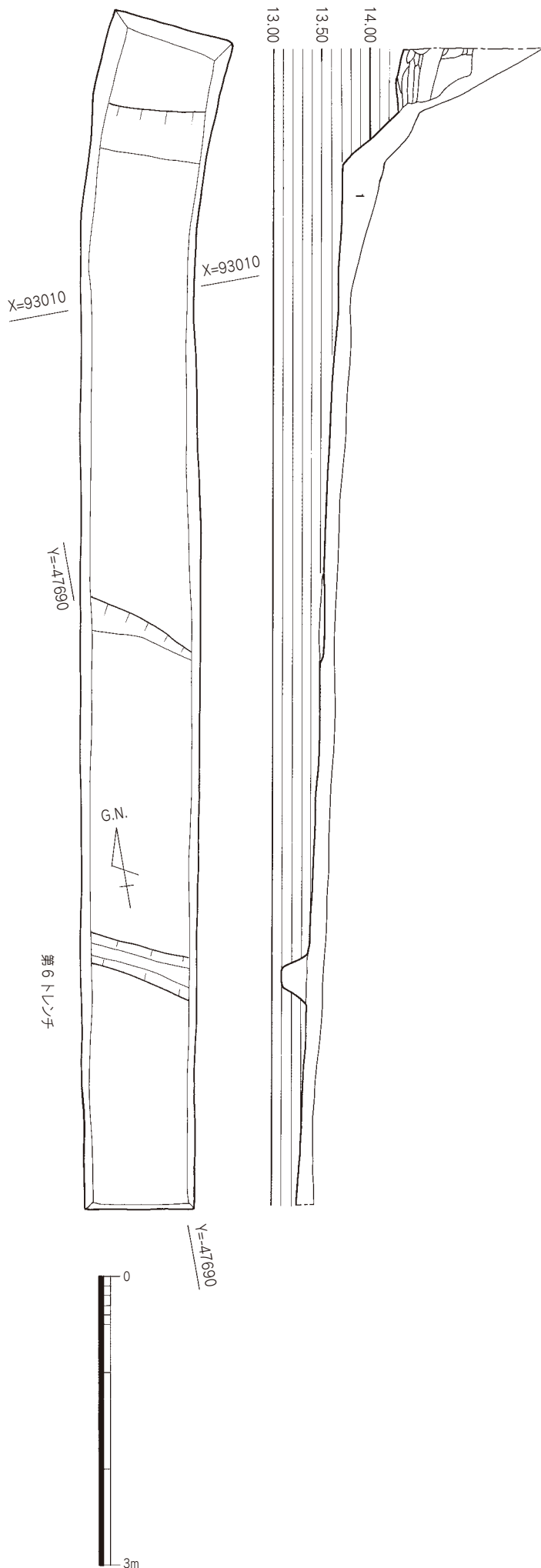
第 16 図 第5トレンチ実測図 (1/60)

第6トレンチ (第 17 図、図版 24 - 1)

第3次調査時に前方部南側端を確認する目的で幅 1.2m、長さ 12m で設定したトレンチである。トレンチ北端では墳丘盛土を確認したが、北端から 0.7m の位置で大きく 0.6m の高さまで削平を受けていて墳裾部は確認できなかった。トレンチ中程にかろうじて残る段も地山整形の痕跡かどうか疑わしい。南側にある溝は後世排水溝と思われる。

第7トレンチ (第 17 図、図版 24 - 2)

第3次調査時に前方部南側端を確認する目的で幅 1.5m、長さ 16m で設定したトレンチである。大きく削平を受けていて表土から 0.3m の深さで地山になり墳裾部は確認できなかった。トレンチ北端から 3m 程の場所にかろうじて残る段も第6トレンチと同じように地山整形の痕跡かどうか疑わしい。



第 17 図 第 6 ・ 7 トレンチ実測図 (1/60)

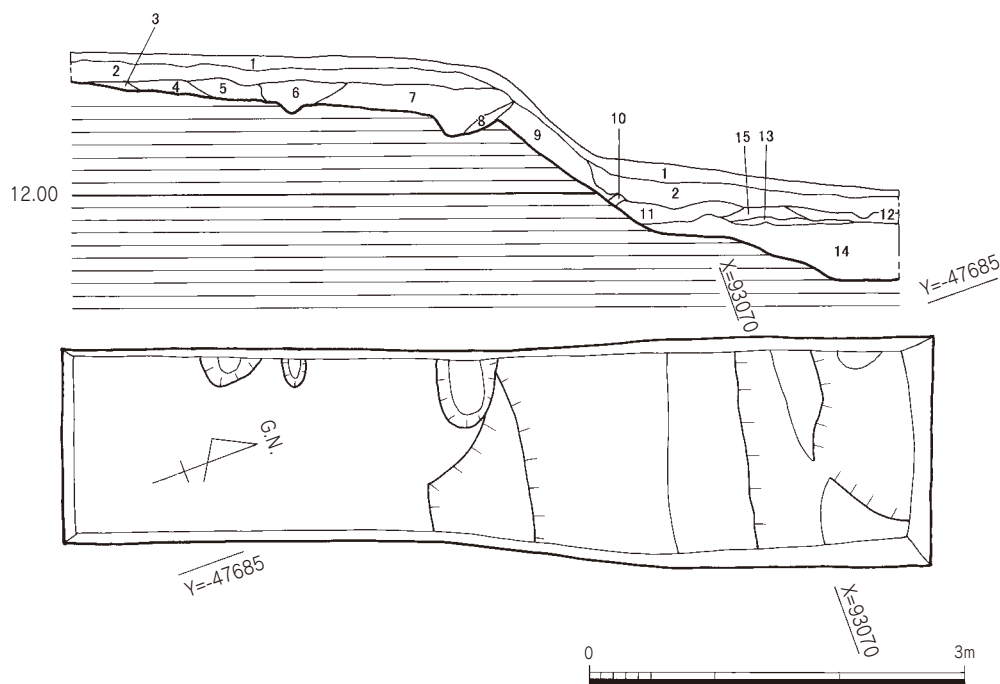
第4トレンチ (第18図、図版20-2)

第3次調査時に古墳周囲の盾状の地形が古墳に伴うものであるか確認する目的で幅1.4m、長さ6.5mで設定したトレンチである。墳丘側は表土から0.3～0.4mの深さで地山となり盛土等古墳に伴うと考えられるものは確認できなかった。トレンチ南端から3.5m程の場所から落ちる段が墳丘の周囲を巡る周溝に代わる盾状の土壇の上端を示す可能性があるということを提示するに今回はとどめておく。地山のレベルは段の上が12.7m、段の下が11.7mを測る。

土層の凡例は

1－黒褐色微細粒砂、2－淡褐色微細粒砂、3－橙色微細粒砂、4－明褐色微細粒砂、5－橙赤色粘質土と淡褐色微細粒砂の混合土、6－淡褐色微細粒砂に橙赤色粘質土が少量混じる、7－明赤褐色粘質土に少量淡褐色微細粒砂が混じる、8－暗橙褐色粘質土、9－明赤褐色粘質土（地山の崩落したもの）、10－淡褐色微細粒砂、11－褐色細粒砂土（炭化物を少量含む）、12－淡褐色微細粒砂（炭化物を少量含む）、13－薄赤褐色微細粒砂、14－暗褐色微細粒砂（マンガンを含む）、15－薄茶褐色微細粒砂

(池ノ上 宏)



第18図 第4トレンチ実測図 (1/60)

4. 墳丘出土埴輪（第 19・20・21 図、図版 42・43）

出土した埴輪はパンケースにて 20 箱を数える。出土地点は調査区面積の影響もあるが、くびれ部が最も多い。元位置を保った状態で検出されたものはなく、埴輪の残存度も良好とはいえない。大半が円筒埴輪であり、形象埴輪と判断できる資料はごくわずかに留まる。

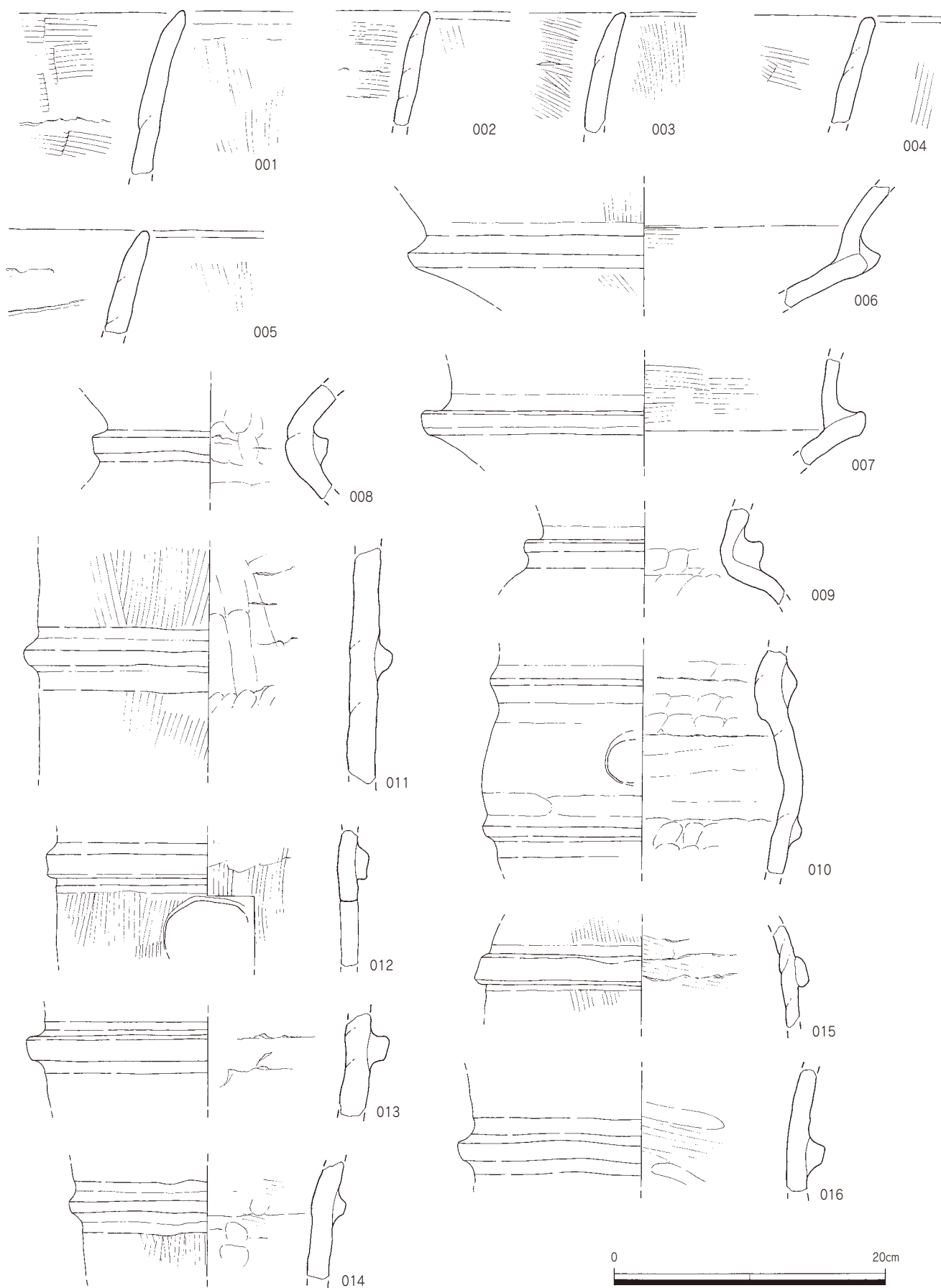
完形に復元できるものではなく、段数といった全体的なプロポーションは復元できない。口縁部（001～005）は数が少なく、かつ小片しか出土していない。ゆえに図化に際し傾きが不明瞭なものが多いが、ゆるやかに広がる口縁部形態となろう。端部は丸みを有する尖り気味の形態である。胴部・底部の形態から全体的にほぼ直線的な形態とみられる。径は復元の誤差はあるもの 20～22cm が大半を占める。突帯間の距離がわかる資料は 017 のみであり、約 10cm を測る。基底部は高く 18～20cm を測る。器壁は 1.2cm 程度のものが多いが、厚いもの（21 は 2.6cm）もみられる。突帯の形状は、断面台形が基本であり、上面幅は約 1cm を測る。突帯の高さが 1cm を越えるような突出度が高い資料が多いが、低いものも散見される。

黒斑は確認できず、窖窯による焼成である。全て土師質で、淡黄褐色を呈するものが多い。全般的に焼成が甘く、内外面の器面調整が磨滅により観察しがたい。胎土は 1～3mm 大程度の石英・長石粒を含むものであり、軟質の赤褐色粒土が多く含まれる個体が存在する。

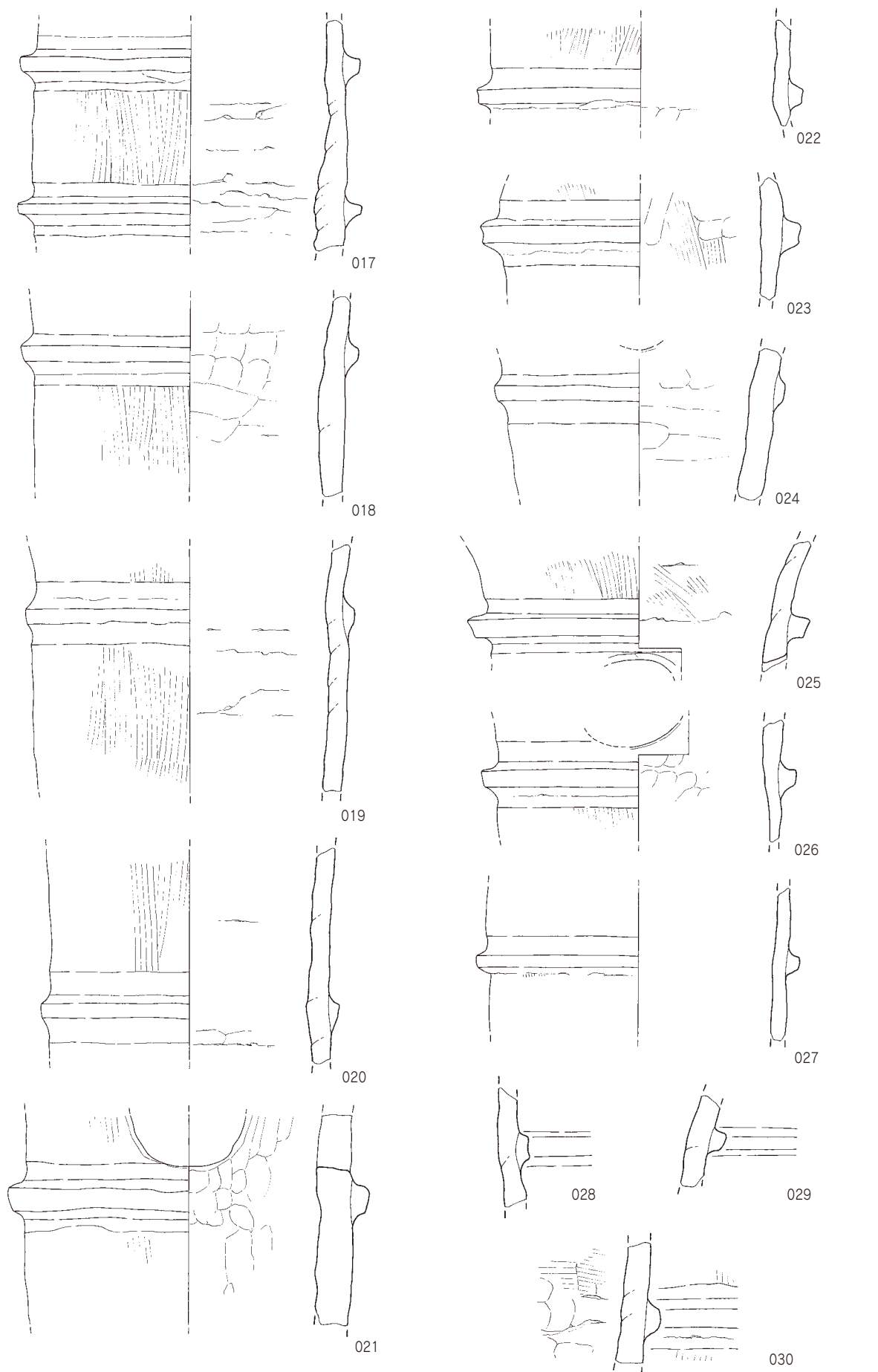
外面調整は縦ハケによるもので、横ハケは認められない。内面調整はナデを基本とし、ハケメを伴うものがみられる。特に口縁部の内面は斜め方向のハケメ調整である。内面の調整が十分ではなく、粘土紐の接合痕を顕著に残すものがある。底部調整はみられない。ハケメは 1cm あたり 3 本程度の目の粗いものである。

006～010 は朝顔形埴輪。006・007 は擬口縁部で、大きく外反した上部に、直立に近い立ち上がりが続く。008～010 は頸部を含む資料。008・009 は締まる頸部に突出度のある突帯を巡らせるものであり、010 はわずかに丸みを有する肩部から頸部に続くもので頸部には低い断面三角形の突帯を巡らせる。010 の肩部には円形の透孔が認められるが、胴部の透孔よりも小径である。015 も上部がすぼまる形態から朝顔形埴輪の肩部の可能性はある。

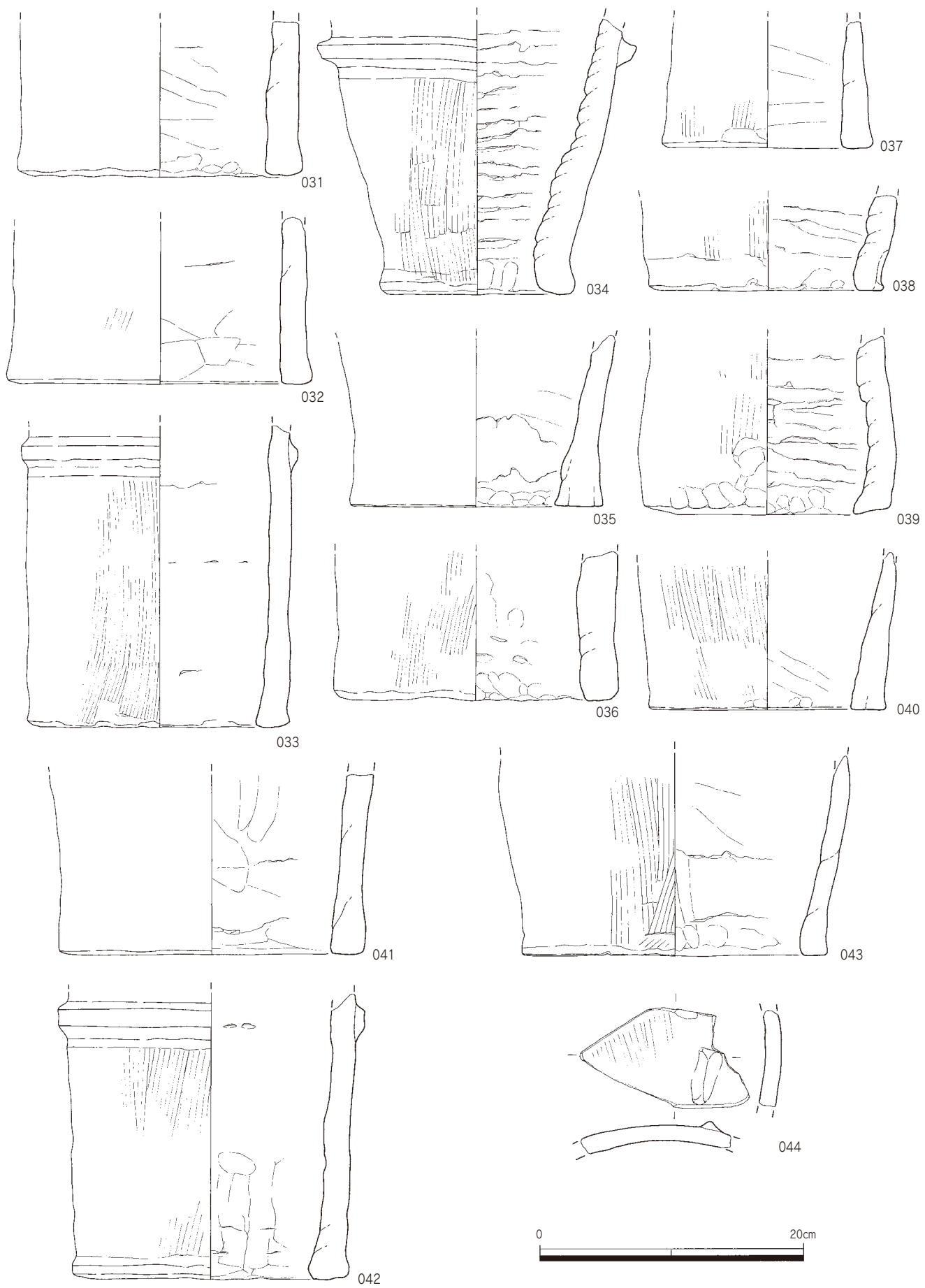
044 は形象埴輪片であるが、具体的な器種・部位は判断できない。図の左上下辺および下辺は割れ口が直線的に整っており、傾き等を算出する基礎とできるかもしれない。外面調整はハケメにより、内面調整はナデ。外面に断面三角形の小突帯を貼付する。胎土や色調等の特徴は円筒埴輪と共通する。039 は円筒埴輪底部として図化したが、底部付近外面に粘土を貼り付けたような痕跡があり、やや特異な形状であることから形象埴輪の可能性もある。



第 19 図 墳丘出土埴輪実測図 1 (1 / 4)



第20図 墳丘出土埴輪実測図2 (1/4)



第 21 図 墳丘出土埴輪実測図 3 (1/4)

5. 墳丘出土土器（第22図、図版43）

墳丘の調査では、前述の埴輪を除きパンケース約4箱の土器が出土している。この中には、古墳築造とは直接関係しない資料、すなわち墳丘築造より前に存在した集落跡に伴うものと、中世に位置づけられるものとが含まれる。それ以外は土師器および須恵器であり、量的には須恵器が多い。ただし須恵器は大甕の胴部片が大部分を占め、個体数が多いとはいえない状況である。

なお、昭和50年度の発掘調査でも土器類が出土しているが、石室内にあったといわれる須恵器は調査前に盗掘により持ち去られたとのことであり、具体的な様相は不明である。今回報告する中で、昭和50年度調査時の資料は046・047・051・055であり、046・047は玄室内攪乱出土で、051は前方部での採集資料である。055は石室内遺物出土状況の実測図（第26図）に框石上に記録されているものと思われるが、今回の報告に際し遺憾ながら所在が判明せず、実測図が残されていたため報告できたものである。

045～050は土師器。045は小形の甕で、器壁は荒れるがハケメ等は観察されず、全面ナデ調整であろう。強く外反する口縁部に張ることのない胴部が続く。046も045と同様の甕であろうか。強く外反する口縁部小片で、内面には指オサエの圧痕が連続する。047は小形の鉢で、短く屈曲する口縁部をもつ。径復元できない小片であるが、内面には強く指オサエが残り手捏ね的な印象を受ける。048～050は高杯。048は坏部片で、脚部との接合面には小窪みが連続する状況が観察できる。049は中央部がエンタシス状にわずかに膨らむ脚部。円柱状の脚部上端に粘土塊を充填することにより坏部底面をつくりだす。050も円柱状の脚部で、裾部はゆるやかにひろがるようである。外面には指オサエないしナデにより不明瞭な稜が生じる。

051～054は須恵器。051は小片で径復元できず傾きも不安であるが、小形の器種で高杯の脚かと思われる。直線的にひろがるもので、端部は一旦外反させた後に短く下方へ屈曲させる。052は器台で、残存は良くないため径復元には不安を残す。外反する口縁部は、端部を下方へ摘み出す。残存する範囲に二段にわたって波状文を巡らせる。波状文間は二条の沈線を巡らせるもので、突帯をつくるものではない。053・054は大甕。053はほぼ全周する口縁部。口縁端部は上下に摘み出し側面を強調する。口縁直下の外面には断面三角形の突帯を巡らせるが、突出度は低く稜は丸みをもち、シャープさはない。口頸部外面には波状文等の文様をもたない。胴部は外面に平行タタキ痕を残し、内面はあて具痕をナデ消すが部分的に青海波文を残す。054の口縁端部のつくりは053と同様であるが、口縁直下の突帯のつくりにはシャープさがある。口頸部上位に二段に波状文を巡らせる。その下位に沈線を二条巡らせるが、ごく浅く不明瞭である。胴部は外面に平行タタキ痕を残し、内面は半磨り消し状に青海波あて具痕を残す。今回図化していない大甕胴部についても調整はほぼ同様であり、外面は平行タタキ痕、内面は青海波あて具痕を残すものである。外面を磨り消すものはなく、内面は半磨り消しのものが多く、完全に磨り消すものや磨り消さないものは少ない。また内面にハケメ状の工具痕を残すものが見られるが、磨り消しの際にハケメ工具を用いたものとみられる。

055は現物を確認していないため詳細は不明であるが、実測図には明黄褐色・焼成やや不良・胎土良好とあり、土師器坏と判断できる。底部には巻き上げ痕があるとされるが、ヘラケズリ

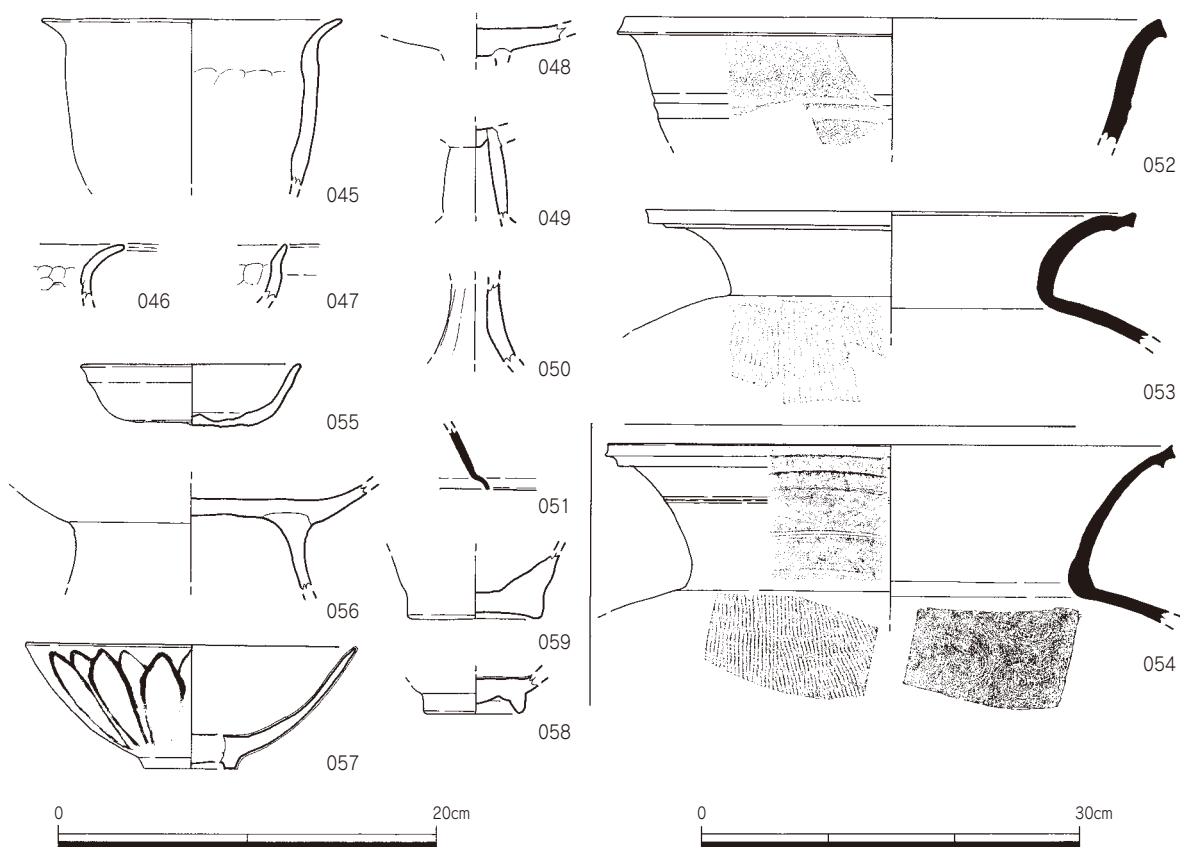
もしくはヘラ切りの痕跡であろうか。056 は平たい坏部に高い脚が付く土師器。脚部内面は黒色を呈する。

057・058 は青磁で、くびれ部トレンチで検出された石積み内からの出土。057 は龍泉窯系の碗で、外面には不明瞭な鎬をもつ蓮弁文様を刻む。058 は高台部で、残存部の外面は露胎。高台の削り出しは粗く複雑に稜がはしる。

(岸本圭)

059 は弥生土器甕の底部片で、第 11 トレンチからの出土。古墳築造に際して弥生時代の住居を削って土を運んだ事を示すものである。

(池ノ上)



第 22 図 墳丘出土土器実測図 (1/4・054 は 1/6)

Ⅲ 主体部の調査

1. 石室（第23・24・25・26図、図版24－3・25・26・27・28・29・30）

南南西に開口する単室の横穴式石室である。後円部の旧表土に近い盛土を掘り割られた墓壇底に石室は造られている。石室規模は長さが4.3m、幅は奥壁部で2.5m、横口部で2.15mのいわゆる羽子板状の平面形を呈する。高さは中央部で1.8mと高くはない。壁はほぼ垂直に1.8m積上げ、天井石を2枚架構している。

石室前面には丈の低い石積の墓道が開き気味に3.15mのびている。幅は横口部側で1.1m、墓道入口では1.8mである。両側壁には30～40cm大の石材が積まれている。墓道床面はほぼ平坦であり、玄室床面より10cmほど高い。

横口部の框石として柱状の石材2個が階段状に据えられている。袖部は右側のみの片袖であり、柱状の石材が用いられている。さらに横口部両側壁から突出した門柱状に石材が立てられている。これらの柱状石材上部に、同様な柱状石材を横に架構する楣石が置かれ、その上に直接天井石が乗る。右袖石は直接楣石を支える。左袖石は石室床面から1.2mまでであり、その上部に30cm大の石材を積上げて楣石を支える。

なお、横口部の閉塞は、両側壁の門柱状石材に一枚の板石を扉状にたてかける形である。閉塞石は縦1.45m、横0.9m、厚さ0.2mである。

石室の側壁は腰石上に30cmから50cm大の塊石が面をそろえて小口積みされる。側壁に用いられた腰石は横口側で長さ2m前後、床面からの高さ0.2から0.4m前後、奥壁側では長さ1.6から2m、高さ0.8から1.5m前後のものである。奥壁に接する辺が高い。また奥壁の腰石は長さ2.4m、高さ1.3mである。

この石室で特筆すべき事は、石室内に天井を支える形に石柱2本が立てられている事である。石柱は太さ25から30cmの断面多角形で、石室主軸上に石室を3等分するように、それぞれ横口から約1.3m、3mの位置にある。石材は柱状節理の玄武岩である。根元は石室床面に埋め込まれている。上端には天井石との隙間が生じており、扁平な石が差し込まれている。

奥の石柱の根元を中心として柱状の石材を主軸に直交する方向に据え付けて仕切りとし、屍床をつくっている。仕切りの上面は床面より20から30cmの高さである。

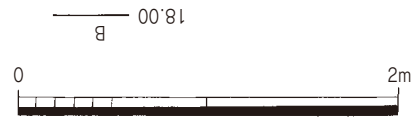
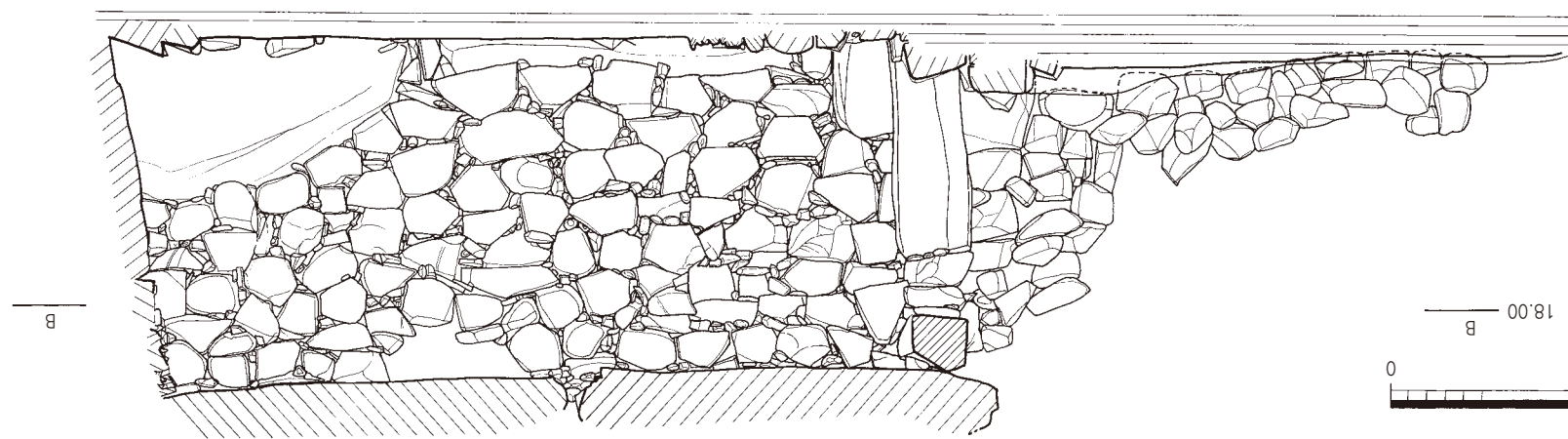
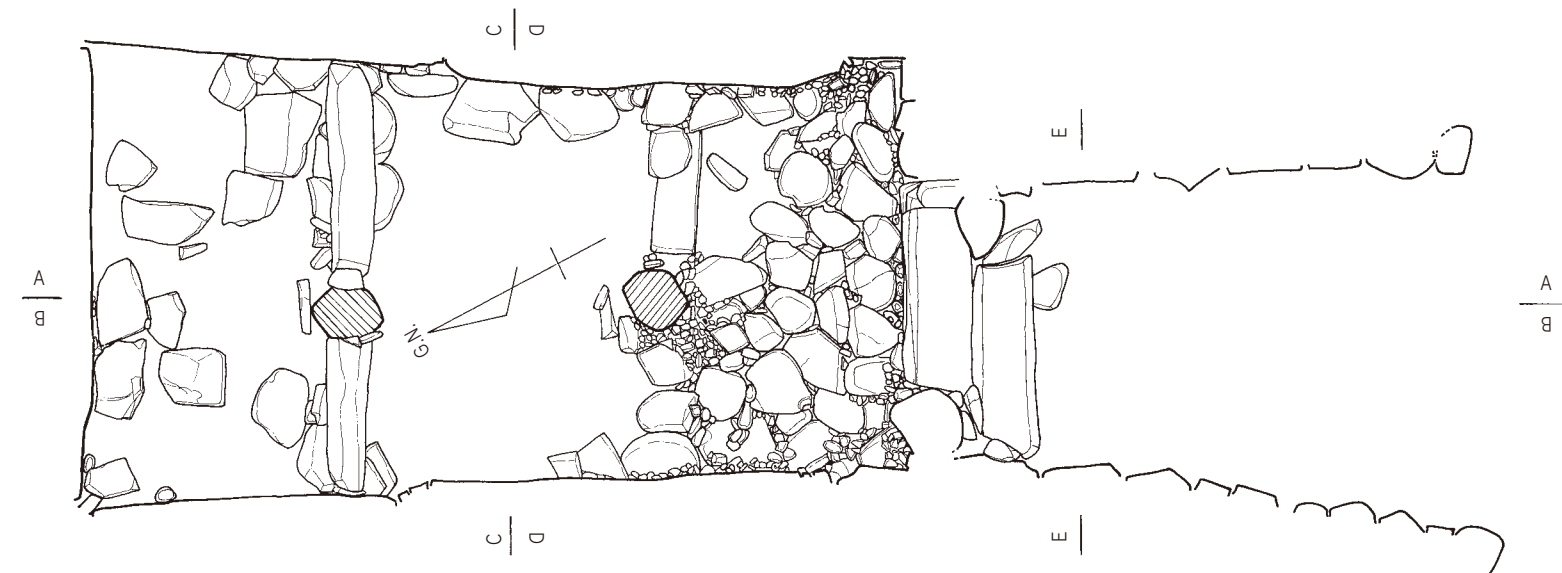
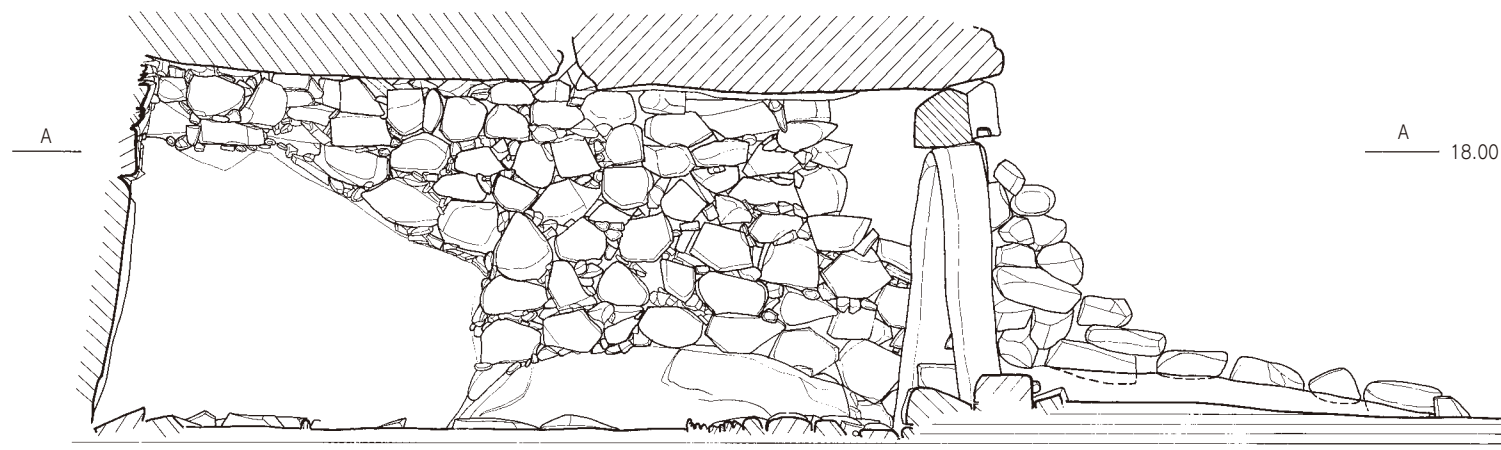
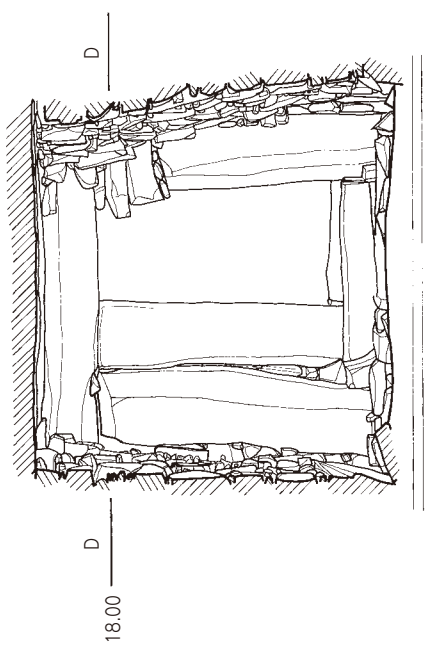
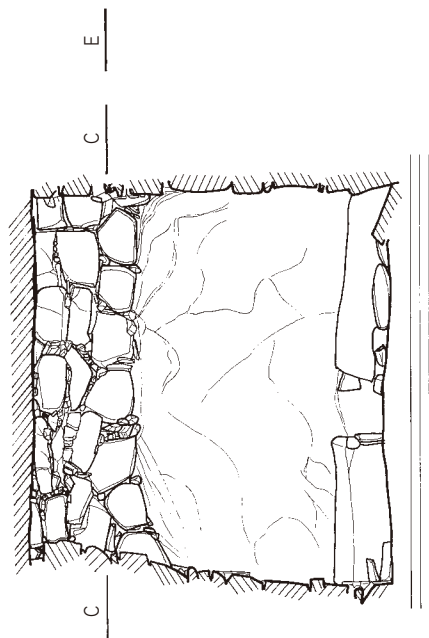
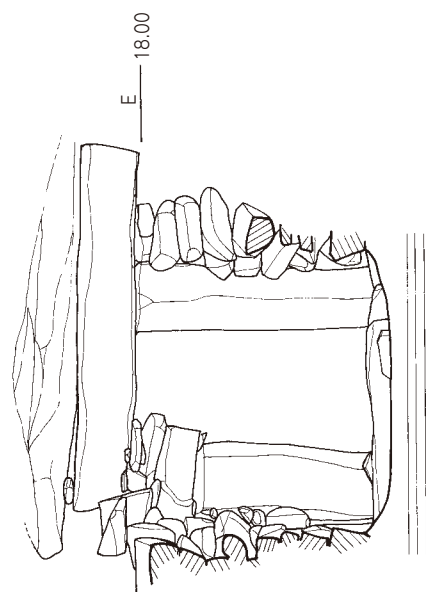
横口側の石柱の床面東半には、石柱と同様な幅の長方形石材が据えられている。上面は床面と同じ高さである。床面には20から30cm大の塊石が残り、隙間には5cm大の礫がある。

石室内は壁面から天井まで赤色顔料が塗られ、墓道の石積にまでおよんでいる。

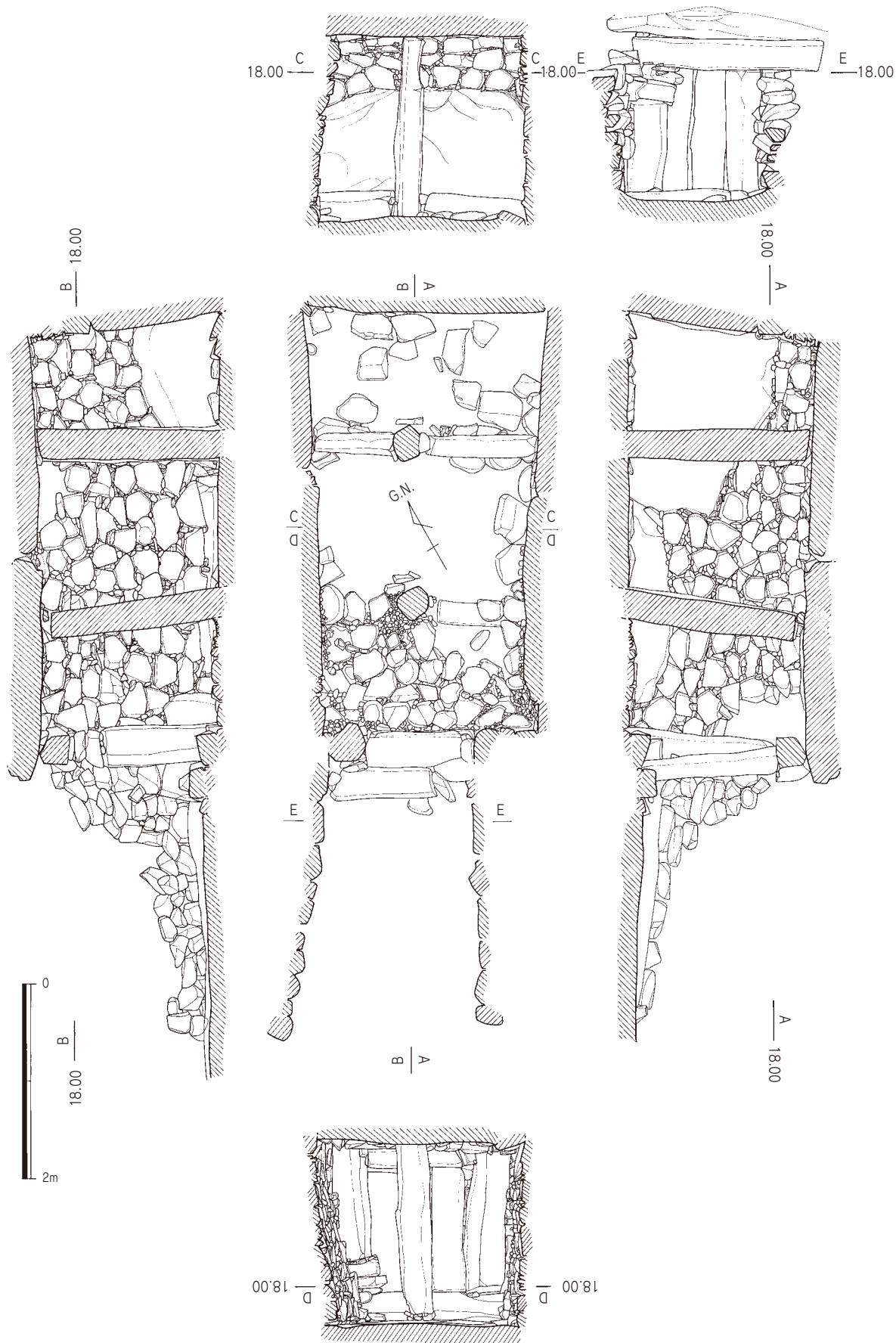
第23図は石柱を入れずに奥壁・玄門・両側壁の石積状況がわかるよう図示している。第24図に石柱を入れた図面を掲載している。

石室内は盗掘にあっていたが、後章で述べられるように多数の遺物が残っていた。左袖石付近で鉄鏝が多数出土している。玉類は屍床内と2本の石柱間で散らばった状態で出土している。横口部に近い石柱の西側でガラス玉がまとまって出土している。框石上に055の土師器が出土している。別に須恵器が石室内にあったらしいが、発掘調査に入る前に盗掘にあい失われていることは大変残念である。

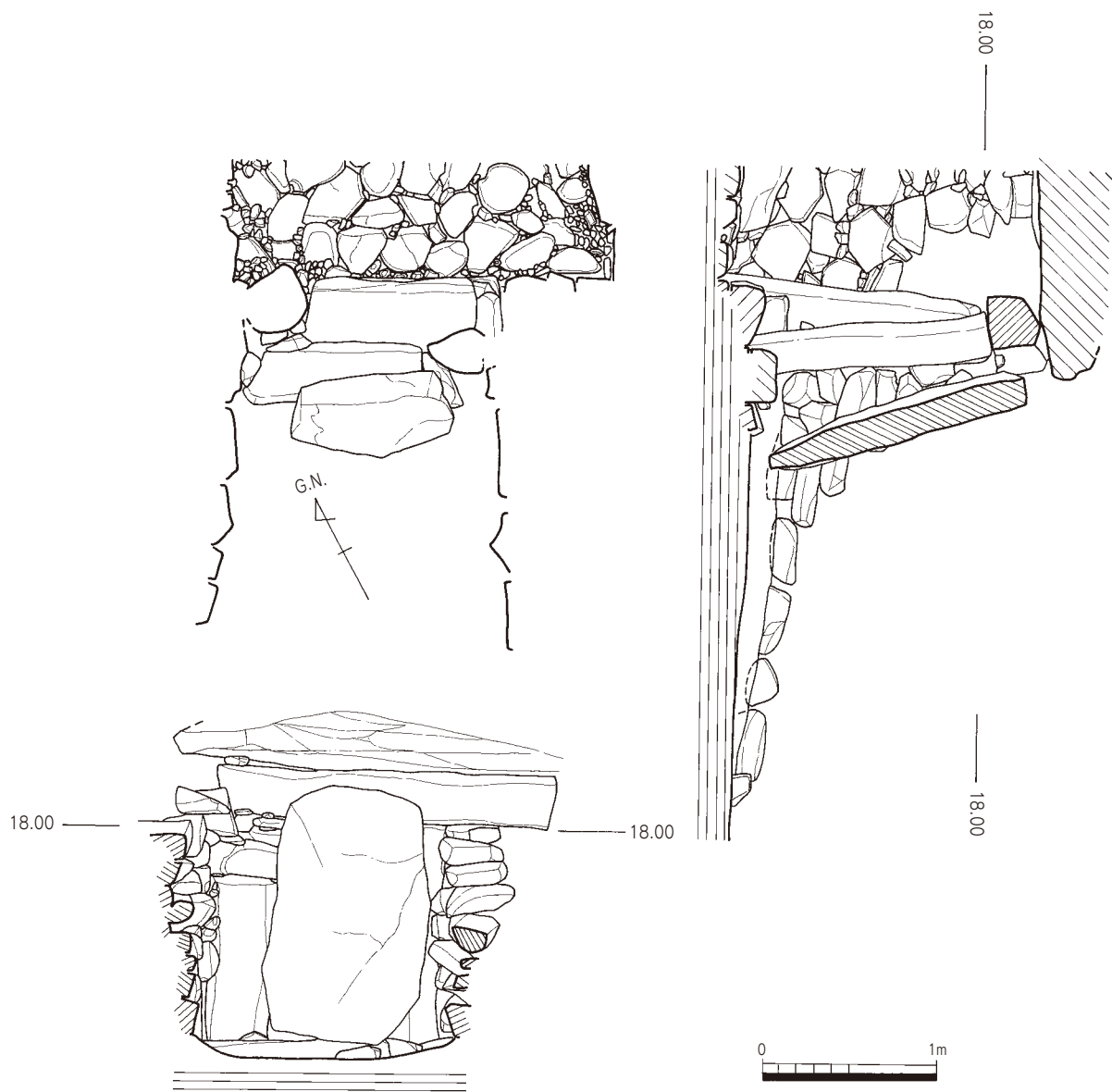
（南時夫）



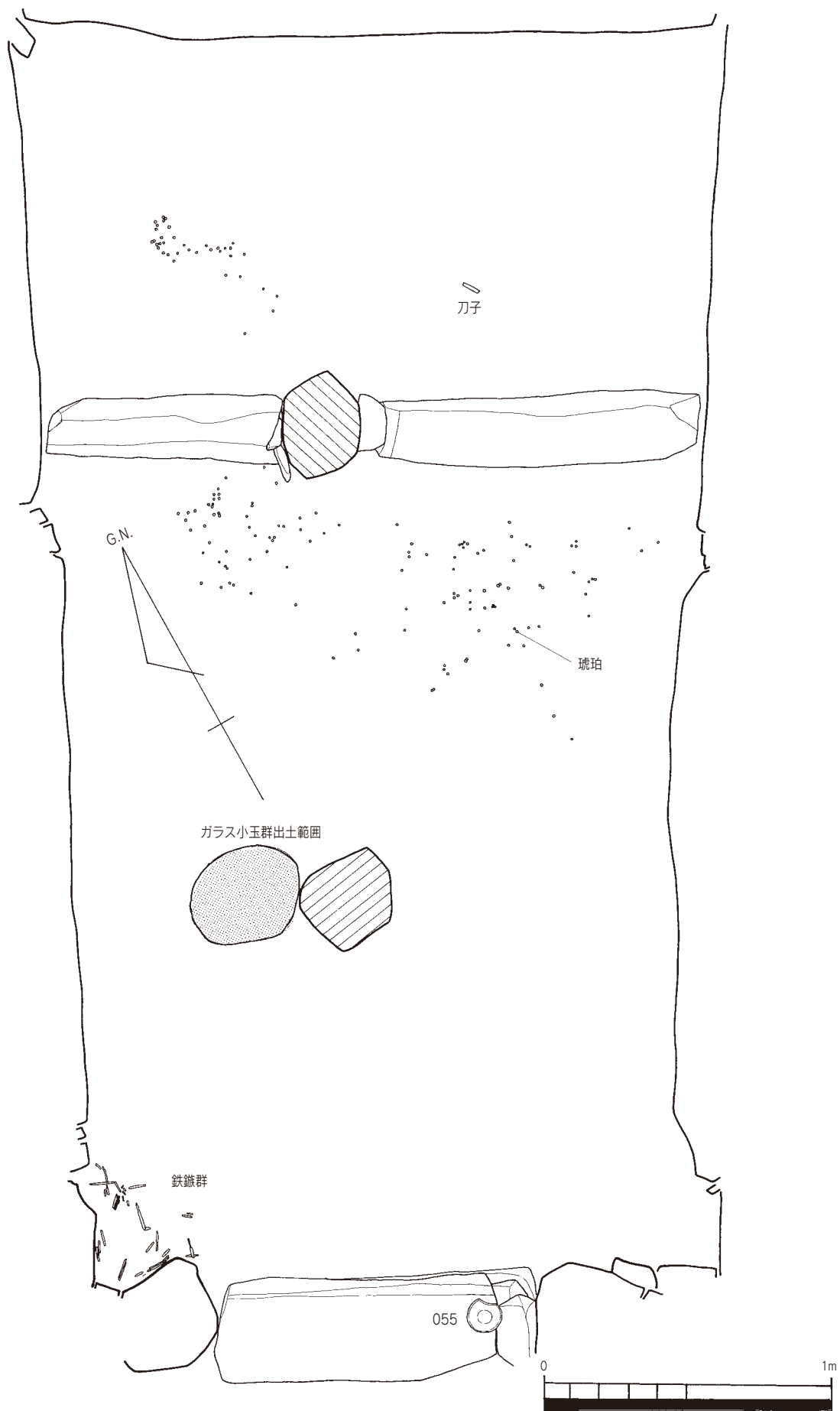
第 23 図 横穴式石室実測図 1 (1/40)



第 24 図 横穴式石室実測図 2 (1/60)



第 25 図 横穴式石室閉塞状況 (1/40)



第 26 図 遺物出土状況 (1/20)



第 27 図 第5トレンチ掘削風景



第 28 図 気球写真撮影風景

Ⅳ. 主体部出土遺物

勝浦峯ノ畑古墳は、主要地方道若松・芦屋・福岡線道路改良事業の路線決定のための資料を得る目的で、昭和 50 年 11 月 17 日から昭和 51 年 1 月 26 日の期間で国庫補助事業として福岡県教育委員会が確認調査を行った。その際、既に開口して盗掘を受けていた主体部から多数の遺物が採集された。盗掘によって原位置を留めない状態であり、また多くが細片化していることが惜しまれるが、副葬品の内容を把握し古墳の重要性や被葬者像をうかがい知るためには十分に価値のある資料群である。昭和 52 年の報告書刊行の折には諸般の理由から実測図等の掲載が行われなかったが、今回の報告に際して福岡県教育委員会が保管する主体部出土遺物を報告し、本古墳の価値の明確化を図るものである。なお、昭和 52 年報告時と今回の報告に際して行った再整理後では出土遺物の点数等に若干の変更が生じたため、以下に列記して修正する。

勝浦峯ノ畑古墳主体部出土遺物（福岡県教育委員会保管分）

1 鏡	細線式獣帯鏡	1 面	
	画文帯同向式神獣鏡	2 面	
	内行花文鏡	2 面	
	獣像鏡	2 面	
	乳文鏡	1 面	鏡 計 8 面
2 装身具			
(1) 金属製装身具	金銅製冠帽	細片 21 点	
	金製歩揺	4 点	
	金銅製花形飾金具	4 点	
	円環系有刻銅釧	細片 4 点	
その他金属製装身具		細片	
(2) 玉類	ガラス丸玉	82 点	
	ガラス連玉	6 点	
	ガラス小玉	13,332 点	
	ガラス粟玉	1,998 点	ガラス玉 計 15,427 点
	ガラス玉小片		
	翡翠製勾玉	1 点	
	碧玉製管玉	5 点	
	琥珀製勾玉	10 点	
	琥珀製棗玉・丸玉	25 点	
	琥珀玉小片		
3 武器			
(1) 刀剣類	鹿角製装具付大刀	40 振以上	
	鹿角製装具付剣	3 振	
	鉄剣	1 振	鉄剣 計 4 振
	銀製装具付素環頭大刀	1 振	

(2) 鉄鏃	柳葉式鉄鏃	52 点	鉄鏃 計 285 点
	腸挾柳葉式鉄鏃	14 点	
	独立片腸挾式鉄鏃	62 点	
	片刃式鉄鏃	147 点	
4 武具	短甲	細片 14 点 (2 種類)	
	小札	2 点	
5 馬具	木心鉄板張輪鐙	細片 29 点 (1 双)	
	杓子形木心鉄板張壺鐙	細片 22 点 (1 双?)	
	その他馬具		
6 工具			
(1) 刀子		細片 53 点	
6 その他	不明石製品	1 点	
	不明鉄製品	4 点以上	
	不明金銅製品	6 点以上	
	土器 (須恵器・土師器)	細片 10 袋	

以下、個々の遺物の説明を行うが、遺物によっては全てを詳細に報告することを控え概要や主要遺物の報告に留めたものがあることを予めご了承ください。また土器は少量であるため、墳丘調査分と併せて報告を行う。

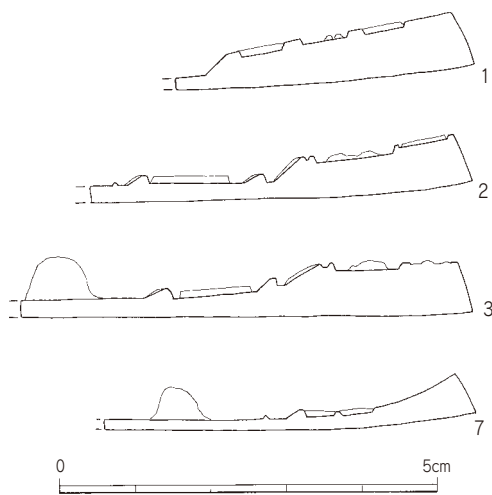
1 鏡

勝浦峯ノ畑古墳から出土した銅鏡は全て破片である。1977 年の報告書では 7 面と報告され、うち 5 面分の写真 (以下の報告でいう 1～4・7 号鏡) が掲載されている。今回の再調査の結果、少なくとも 8 面の鏡が含まれることを確認した。その内訳は、いわゆる 5 世紀代の「同型鏡」が 3 面、中・小型の倭製鏡が 5 面となる。以下それぞれの鏡について報告する。

1 号鏡：細線式獣帯鏡 (巻頭カラー図版 3-1、第 29 図)

外区片 1 点である。鋸歯文帯の間に残る小隆起 (範傷) により、細線式獣帯鏡の同型鏡の 1 面であることが確認できた。川西宏幸氏 (2004) の「細線獣文鏡」にあたり、他に 6 面の同型鏡が出土している。他の 6 面の同型鏡の面径は、22.2～23.3cm まで幅がある。破片のため明確ではないが、本外区片の外縁は径 22cm の同心円上にほぼ重なることから、概ね他の 6 面と近似した面径が想定できる。本稿では面径約 22cm としておく。

外区片は、最大で約 7.4cm が残存する。銅質は良く、漆黒色を呈する。外区の厚さは約 7mm、内区外周の櫛歯文部の厚さは約 1.5mm。内区側から櫛歯文、外区内側から鋸歯文、複線波紋、鋸歯文、素文部となり外縁に至る。このうち、内側の鋸歯文の一部に上述の範傷による小隆起がみられる。上述の川西氏 (2004) の分類の「傷 c」に該当する。外縁部は横方向の研磨痕がみられるが、上端・下端ともに面取り痕はみられない。鏡面側には一部布が付着する。



第29図 1～3号鏡・7号鏡断面図(1/1)

2号鏡：画文帯同向式神獸鏡（巻頭カラー図版3－2、第29図）

本鏡群の中には、画文帯同向式神獸鏡の同型鏡（川西氏（2004）の「画文帯重列式神獸鏡C」に該当）の破片が2面分含まれる。断面の厚さ・銅質・錆・色調の違いなどから、それぞれの破片がどちらに帰属するかを判断することができる。本2号鏡・3号鏡を含めると計27面が確認されており、中期の同型鏡の中では最多のものである。同型鏡の面径は20.57～21.15と幅があることから、2号鏡・3号鏡の面径に関してはいずれも約21cmとしておく。

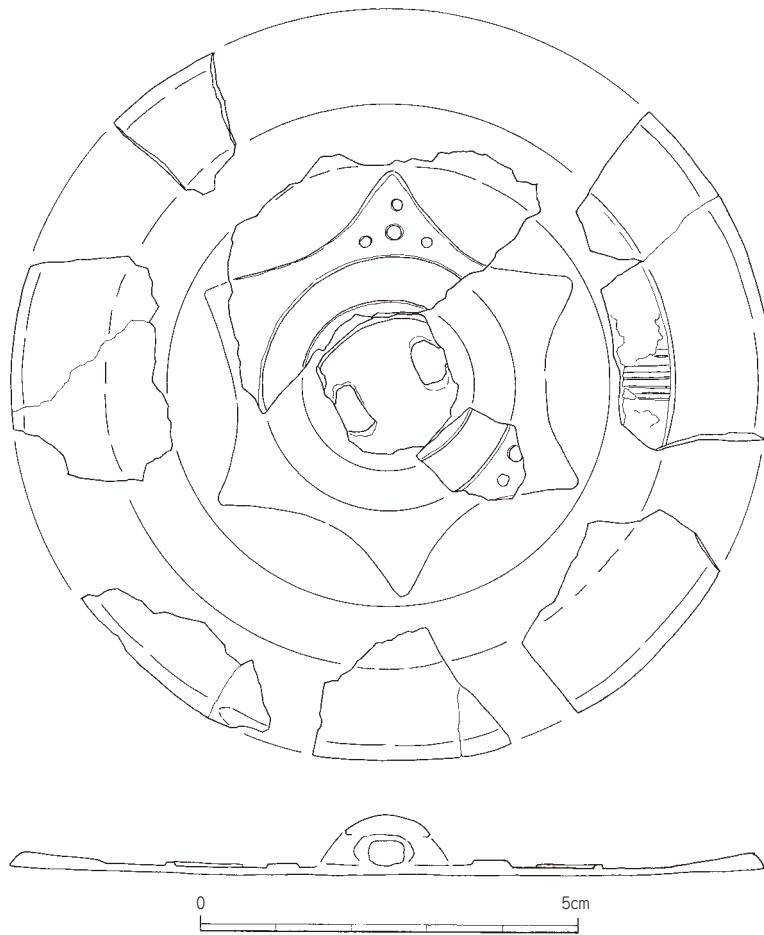
2号鏡の破片と確認できるのは、少なくとも6点である。半円方形帯から外区にかけてのものばかりで内区片は含まれない。銅質は良いが、全体的に錆膨れがひどく、亀裂も多くみられ

る。それぞれの破片については、同型鏡との比較からどの部位にあたるかが特定できた。写真図版は同型鏡をもとに元来の位置を復元したものである。上から反時計回りに破片a～fとする。本鏡には元来、黄帝の下に位置する玄武の右下の方形帯から、時計回りで14個の方形帯に吾作明鏡で始まる銘文が刻まれており、この方形帯を目印に位置を記述する（銘文の釈読は川西（2004）に依拠）。

破片aは外区片で、菱雲文の一部である（方形帯：8番目と9番目の外側）。破片bは外区片で、画文帯部の浮彫表現（羽人）から7番目の方形帯の外側の位置にあたる。破片cは半円帯部から界圏の突起帯（鋸歯文）にかけての破片である（5番目と6番目の外側）。内区主像（東王公の龍虎座）の一部が含まれる。鋸歯文の鑄出が全体的に不明瞭であるが、この部分に川西氏の「傷d」が含まれると考えられる。破片dは半円方形帯片で、方形部の銘は錆により判読不能であるが、内区獣像の一部から位置を特定した。他の同型鏡から、4番目の「統徳序道」の位置に該当するとみられる。半円部は川西氏の傷fが含まれる位置であるが、錆のため判然としない。破片eは外区片（3番目の外側）で、画文帯の獣像より位置を特定した。菱雲文が接する部分の鑄出が不良であり、川西氏の「傷e」に該当する。破片fは外区片（1番目の外側）であり、画文帯の雲車から位置を特定した。外縁に僅かに赤色顔料が付着する。この2号鏡の破片fと、次に述べる3号鏡の破片fの位置が一部僅かに重なっている（菱雲文が交差する箇所）ことから、2面分と判断した。

3号鏡：画文帯同向式神獸鏡（巻頭カラー図版4－1、第29図）

2号鏡と同型で、少なくとも6個の破片が該当する。全体を淡緑色の錆が覆っている。2号鏡と同様、文様等から位置を特定した（写真図版）。上の方形部片を破片a、右の方形部片を破片b、右側の内区片を破片c、左側を破片d、下の外区片の左側を破片e、右側の最大の外区片



第30図 4号鏡実測図(1/1)

を破片fとして記述する。なお破片a～fのうち、破片eに川西氏の傷gの箇所が含まれているが、銹着のため確認できていない。

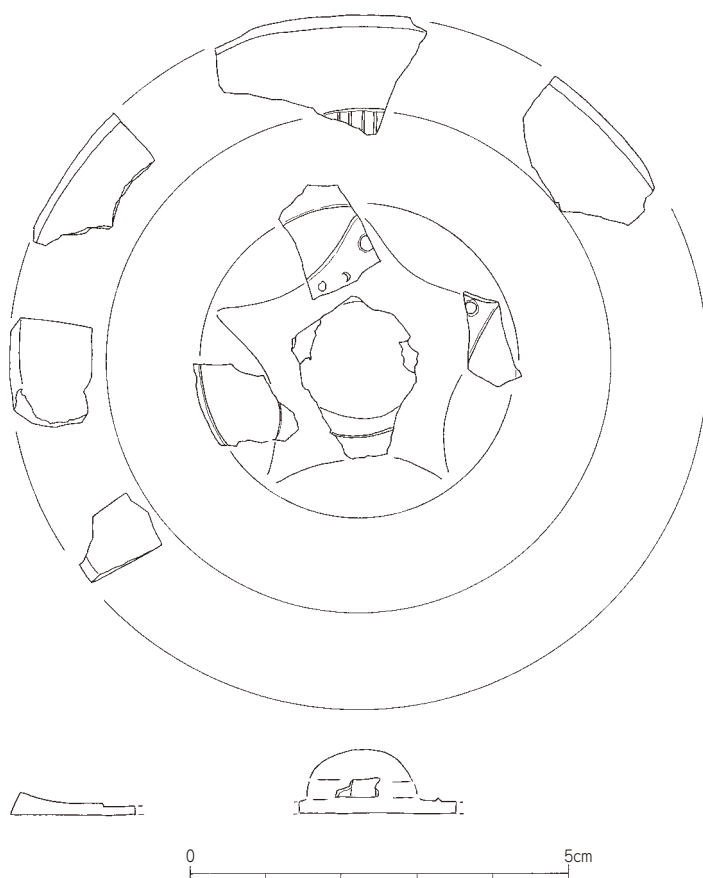
破片aは右上の字体から9番目の「聖徳光明」の位置と判断した。破片bは右上以外の3文字が判読可能で、11番目の「子孫番昌」の位置と特定できる。僅かに赤色顔料が付着する。破片cは内区片で、厚さ2mm、乳の高さは地文部から5.5mm。右上乳の周囲の獣像胴部（方形11の内側）で、一部界線の鋸歯文を含む。乳座の円座は鑄出不良で不明瞭。破片dは破片cの左側に隣接し、上段右側の鐘子

期を表す位置にあたる内区片である。本破片の下端は鈕孔の一部であり、このことから他の同型鏡と鈕孔方向が同じであることが確認できる。破片eは内区から方形帯にかけての破片である。銘帯は錆などにより判読困難だが、内区獣像の一部から1番目の吾作明鏡の位置にあると判断した。次の破片fとほぼ接する位置にある。破片fは銘は判読困難だが、画文帯の亀の表現から14番目の「其師命長」の位置にあると判断できる。鏡面側に僅かに布目痕がみられる。

全体的に、2号鏡の方が3号鏡と比べて銅質・鑄上がりともに良好である。特に3号鏡は内区主像・鋸歯文等で不鮮明な箇所が多く、また外区外縁も2号鏡のようなシャープな彫り込みが認められない。また外区付近が平坦で反りが殆どみられない点も2号鏡と異なっている。

4号鏡：内行花文鏡（巻頭カラー図版4-2、第30図）

6弧の内行花文鏡として復元可能である。鈕の高さは8mmで、内区の厚さは約1mm、外区の厚さは最大2mmである。全体の面径は約10.0cmとして復元した。銅質はあまり良くなく、薄い緑白色を呈す。縁部は丸みを帯びる。鏡面側に布が付着する。内区側から、鈕・円圈素文帯・連弧文帯・櫛歯文帯、素文縁部となる。連弧文部の間には、4点の珠文からなる単位文様を施す。内区外周の櫛歯文は錆もあり非常に不鮮明である。



第 31 図 5 号鏡実測図 (1/1)

5 号鏡：内行花文鏡（巻頭カラー図版 5－1、第 31 図）

5 弧の内行花文鏡として復元可能である。鈕の高さは 8.5mm で、内区の厚さは約 1mm、外区の厚さは最大 3mm である。全体の面径は約 9.2cm として復元した。銅質・鋳上がりともに良好である。内区側から、鈕・連弧文帯、凹帯（無文帯）、櫛歯文帯、素文縁部となる。連弧文間には珠文が施されている。図示した 9 点以外に少なくとも 6 点以上の小片が本鏡に該当するとみられる。

6 号鏡：獣像鏡（巻頭カラー図版 5－2）

6 片が該当する。面径 14.4cm 前後と復元した。内区から外縁部にかけての破片である。内区の厚さは 2mm、浮彫獣像・乳の高さは約 3mm、外区端部は一部欠損するが、厚さは最も端の部分で 4mm である。内区側から、（鈕、）獣像、櫛歯文帯、細い鋸歯文、「凹」字文帯、鋸歯文、素文縁部となる。鋸歯文帯の地の面を中心に赤色顔料が多く遺存している。内区は推定宮崎県持田 34 号墳出土鏡（17.3cm、車崎編（2002）：298-7）と類似しており、森下章司氏（2002）の分類でいう巡回式獣像鏡系に近い。外区は栃木県牛塚古墳出土鏡（17.0cm、車崎編（2002）：295-3）と一部類似しており、森下氏の分類でいう同向式神獣鏡 B 系に近い。内区の構成が不明であることから、暫定的に本鏡を獣像鏡と呼称しておく。

7 号鏡：獣像鏡（巻頭カラー図版 6－1、第 29 図）

5 片が該当する。面径 14.6cm 前後と復元した。内区から外縁部にかけての破片である。内区の厚さは 1.5mm、外縁部の厚さは約 5.5mm である。文様の構成は不明瞭であるが、少なくとも内区外周に突線が 1 条巡り、外区は鋸歯文 2 条と素文縁部で構成される。内区の獣像は左向きで、頭部には 2 つの目が明瞭に表現されている。森下氏（2002）の分類でいう巡回式獣像鏡系に該当すると考えられる（車崎編（2002）：pp.296-297）が、内区全体の構成が不明であることから、6 号鏡と同様に獣像鏡と呼称する。

8号鏡：乳文鏡（巻頭カラー図版6－2）

乳文を内区主文様とすると考えられるもので、面径10.0cmとして復元した。内区の厚さ1.5mm、外区縁部の厚さは3mmである。銅質があまり良くなく、白色を呈している。写真の配置は全体の文様構成を復元的に示したものであるが、位置関係は確定的なものではない。また本鏡に属すると考えられる小破片が他にも多数存在するが、接合関係は全ては確認できておらず、さらに接合するものが含まれている可能性もある。現状で内区の乳は少なくとも6個あり、内区側から、乳文部、突線による波文帯、無文の凹帯、櫛歯文帯、素文縁部となる。

以上、勝浦峯ノ畑古墳から出土した8面の鏡の内容について検討してきた。その内訳は、5世紀代の同型鏡3面と、5面の倭製鏡というものであった。大型の同型鏡3面が特筆されるが、現状で細線式獣帯鏡が1面増えて計7面となり、画文帯同向式神獣鏡（川西氏（2004）の画文帯重列式神獣鏡C）の同型鏡が1面増えて計27面となった。5面の倭製鏡の個別の編年的位置づけについては今後の課題としておくが、小型の内行花文鏡（4号鏡・5号鏡）が連弧文間の珠文からみて、いずれも古墳時代前期から広くみられるものであるのに対し、6号鏡・7号鏡は、外区の構成や内区主像などから中期の倭製鏡の特徴を示している。こうした大型の同型鏡を3面持ち、かつ少なくとも計8面もの鏡を副葬した古墳は、同時期の九州では稀少であり（cf. 川西2004）、大型の同型鏡3面という点では、熊本県江田船山古墳などに近い様相とみることができる。本古墳出土鏡群の内容は、質・量ともに、大刀などをはじめとする他の豊富な副葬品の内容と相関したものとみることができる。鏡の副葬内容という点では、5世紀後半の北部九州において最も上位に位置づけられる古墳の1つとみられる。

参考・引用文献

川西宏幸 2004 『同型鏡とワカタケル』同成社

車崎正彦編 2002 『考古資料大観5 弥生・古墳時代 鏡』小学館

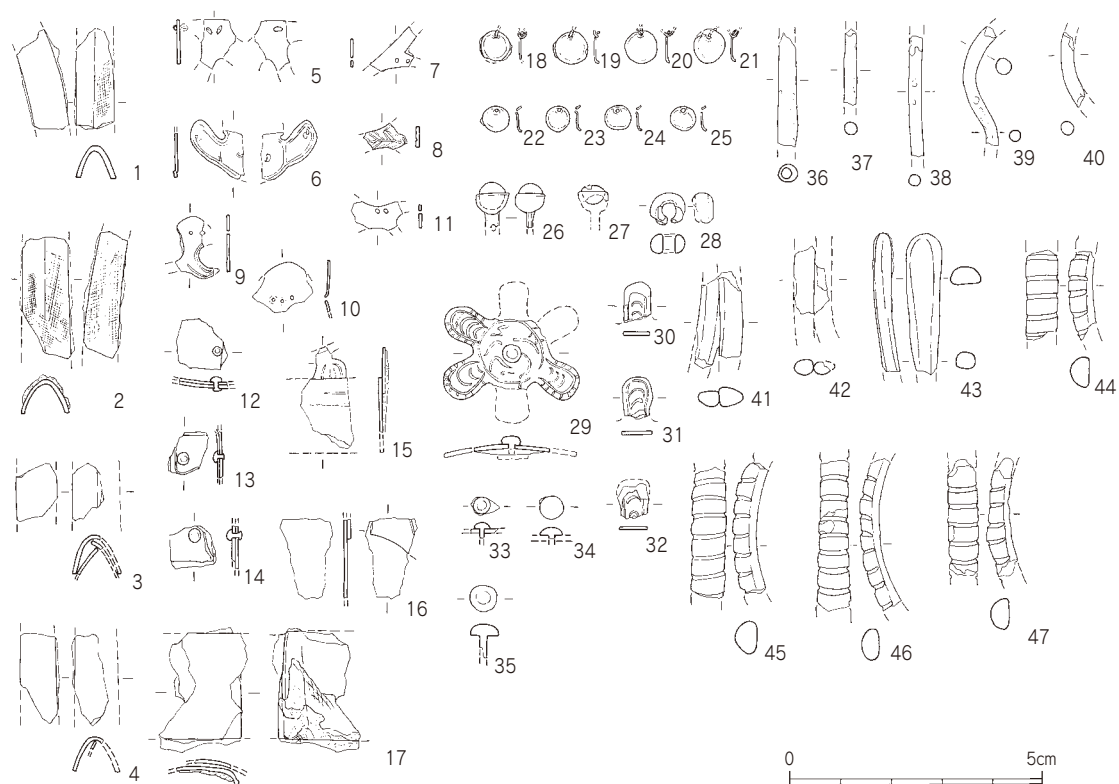
森下章司 2002 「古墳時代倭鏡」車崎正彦編『考古資料大観5 弥生・古墳時代 鏡』小学館

（辻田淳一郎）

2 装身具

（1）金属製装身具（巻頭カラー図版7、第32図）

1～4は幅および高さ0.8cm程の横断面U字形の金銅金具片で、同一個体の破片と考えられる。2は側面が緩やかにカーブするようである。また、小片ではあるが、3・4では内面に薄い金銅板片が残り、3では2枚が山形に接している。大きさやこのような特徴から冠帽の縁金具と考えられる。5～11は金銅製透彫金具破片で、8を除けば歩揺を綴じ付けた孔が見られ、5には銅線も残る。8・9は表面に蹴彫文様が観察できる。12～14は2枚の金銅板を鋲留した破片であり、17は帯状の2枚の金銅板が重なる。15・16は金銅製透彫金具と帯状の金銅製品が重なった破片。18～21は直径0.6cm程の金銅製の歩揺である。図示していないが、同様の細片が他にも多数ある（図版41－1）。



第32図 金属製装身具実測図 (2/3)

5～21はその全てとは言えないとしても、1～4の金銅製冠帽と一連のものの可能性が考えられる。その場合、熊本県江田船山古墳、福井県十善の森古墳、大阪府峯ヶ塚古墳出土の龍文等を透かし彫りした金銅製冠帽と同様のものではあったと推測される。また、一連の破片とすれば、12～17は冠帽下端の帯状の金具の破片と考えられる。本古墳は江田船山古墳に先行する可能性もあるので、日本出土の冠帽では最古級の資料と考えられる。江田船山等上記の冠帽は百濟製と考えられており（桃崎 2008、李漢祥 2008）、本例も同様に位置づけられよう。忠清南道公州市水村里4号墳（李勲 2007、李漢祥 2008）からは龍文金銅製透彫冠帽が、忠清南道瑞山市富長里遺跡5号墳1号土墳墓（忠清南道歴史文化研究院 2008）からは亀甲龍鳳文金銅製透彫冠帽が出土していて、これらは百濟漢城期の製作と考えられており、江田船山古墳もその可能性が指摘されている（桃崎 2008）。本例はこれらのものと同様に百濟からの舶載品で漢城期にまで遡ると考えられ、全形、文様詳細を復元できないことが残念である。

22～25は直径5mm前後の金製の歩揺である。18～21と材質が異なるので別製品のもの、例えば垂飾付耳飾等に伴うものと考えておきたい。ただし、それに合致するような他の破片はない。

26は高杯状の鉄製品の杯形部に紺色のガラス玉を嵌めたもの。基部は板状をなし、下端に穿孔された可能性がある。27は同様の製品の破片であり、同形同大で、同様に紺色のガラスを嵌める。福井県十善の森古墳、大阪府峯ヶ塚古墳では金銅製冠帽の表面をガラス玉で装飾しているが、ガラス玉の接合方法が本例と異なる。むしろ、全羅南道羅州市新村里9号墳乙号棺出土の金銅製冠帽とセットになる金銅製冠の立飾頂部のガラス玉の接合法に類似している（国立光

州博物館の展示図録を参考とした)。したがって、新村里9号墳乙号棺出土例と同様の冠が、上述の1～4の破片から推測される冠帽に伴った可能性、12～14・17・18～21には金銅製冠の破片が含まれる可能性も想定しておきたい。

28は金銅製の小型環である。

29～32は金銅製花形飾金具とその破片である。最も遺存状況の良好な29は3弁が残るが、全体としては6弁に復元できる。表面には毛彫の文様が施され、中央には鉾が見られる。全体的には凸面を形成し、なにか丸みを帯びたものに鉾留されていたと推測される。30～32は花弁部の破片である。

33～35は金銅製の鉾および鉾頭である。33は花形飾金具の中央の鉾と同形同大である。これに対して34・35は大型である。

36～43は金銅製の棒状製品。36は中空であり、候補として江田船山古墳出土例等に見られる金銅製冠帽の総状立飾の破片が考えられる。他は中実である。39・40は鉸具の馬蹄形金具の一部かと推測され、そうであるとすれば龍文等を透彫りした金銅製帯金具の鉸具に近い。41・42は半円形に近い断面の棒状製品が2点付着し、43は端部が幅広になる。

44～47は円環系有刻銅釧の破片である。断面は半円形に近い。

本古墳出土の金銅製装身具は細片と化しており、全形を知ることができない。しかし、上述したように、龍文透彫金銅製冠帽、銅釧の存在がほぼ確定でき、金銅冠、垂飾付耳飾、金銅製帯金具が存在した可能性も指摘できた。江田船山古墳等に相当する構成がイメージでき、古墳の規模にふさわしい。また、金銅製冠帽、金銅冠は漢城期百済とそれに並行する時期の馬韓地域の古墳出土品と対比でき、被葬者の交流関係、沖ノ島祭祀との関わりをかいま見せてくれる資料と言えよう。

参考・引用文献

李漢祥 2008 「5～6世紀 韓半島와 日本列島の 交流様相－금속장신구의 제작기법을 중심으로－」

『考古學探求』第3号

桃崎祐輔 「江田船山古墳遺物群の年代をめぐる予察」 菅谷文則編 2008 『王権と武器と信仰』 同成社

忠清南道歴史文化研究院 2008 『瑞山富長里遺跡』

李勲（訳；山本孝文） 2007 「公州水村里古墳群に見る百済墓制の変遷と展開」『古文化談叢』第56集

（重藤輝行）

（2）玉類（巻頭カラー図版8、図版31～33、第33～37図）

ガラス（巻頭カラー図版8、図版31・32、第33～36図、第1・2表）

ガラス製玉類には丸玉・連玉・小玉・粟玉があり、形状を保つもので15,427点以上出土している。破片も相当数確認できるので、実際にはこの点数よりも多く副葬されていたのであろう。

報告に際しては、①大類「径－同様な形状・径」、②小類「技法による形状・質」、③色調「透明度・色調」を基準に分類を行い、任意の一部については計測表を作成、そのうちの一部を図化した。

①大類はⅠ類～Ⅳ類の4種に分類し、Ⅰ類を丸玉及び連玉、Ⅱ類を大きめの小玉、Ⅲ類を小

さめの小玉、Ⅳ類を粟玉とした。Ⅰ類は 88 点、Ⅱ類は 3,247 点、Ⅲ類は 10,085 点、Ⅳ類は 1,998 点を数える。②小類（技法）は a～c の 3 類にそれぞれ区分し、a 類は回転工具による成形後に折切断、b 類は引き伸ばし成形後に切断・二次加熱、c 類は引き伸ばし成形後に切断したものとした。a 類はⅠ類に限り、88 点、b 類が最も多く 14,513 点、c 類は 817 点に過ぎない。③色調はⅠ類はコバルトブルーに限られ、Ⅱ類はコバルトブルーが 3,245 点、スカイブルーが 2 点、Ⅲ類はコバルトブルーやスカイブルー、グレーやグリーンなど寒色系の色調をしたものが 9,315 点と多数を占めるが、その他の色調のものが 770 点ある。Ⅳ類はコバルトブルーが 296 点であるのに対し、その他の色調が 11,702 点と多数を占める。なお、ガラス小玉の分類に関しては、ガラス素材の狭広・二次加熱具合・その他の自然要因の影響を受けているため、「数値」を優先せずに「実見・観察」を基本として分類を行なっている。分類、色調と特徴、各種点数などの詳細は第 1 表を参照していただきたい。

1～10 はⅠ－a 類（コバルトブルー）である。同類は 82 点出土している。26～31 は連玉であるが、先述のものと形状が類似するためこの類型に含めている。6 点出土している。

32～76 はⅡ－b 類（コバルトブルー）である。3,228 点出土している。42 や 65 などいびつな面をなすものも見られる。132～135 はⅡ－c 類（コバルトブルー）である。17 点出土している。142・143 はⅡ－b 類（スカイブルー）である。2 点しか出土していない。

144～188 はⅢ－b 類（コバルトブルー）である。3,576 点出土している。244～268 はⅢ－c 類（コバルトブルー）である。320 点出土している。324～373 はⅢ－b 類（スカイブルー）である。4,245 点出土しており、全分類の中で最も数が多い。これらは色調により表のとおり更に細分が可能である。444～463 はⅢ－c 類（スカイブルー）である。212 点出土している。これも色調によって表のとおり更に細分できる。495～524 はⅢ－b 類（クリアグリーン）である。391 点出土しており、表のとおり更に細分される。595～604 はⅢ－b 類（ライトグリーン）で 104 点出土、619～630 はⅢ－b 類（ダークブルー）で 199 点出土、644～655 はⅢ－c 類（グレー（ブルー））で 175 点出土、669～680 はⅢ－c 類（グレー（グリーン））で 93 点出土、698・699 はⅢ－b 類（レッド）で 2 点出土、700～704 はⅢ－b 類（パープル）で 5 点出土、705～722 はⅢ－b 類（ライム）で 635 点出土、775～786 はⅢ－b 類（イエロー）で 128 点出土である。

815～832 はⅣ－b 類（コバルトブルー）で 296 点出土、865～882 はⅣ－b 類（ブラウン）で 1,018 点出土、915～932 はⅣ－b 類（ライム）で 388 点出土、965～979 はⅣ－b 類（イエロー）で 296 点出土している。

特徴的なガラス小玉のブラウン（赤褐色）・ライム（緑）・イエロー（黄）について若干述べておく。これらは引き伸ばし後、切断・二次加熱（小分類 b 類）で製造され、小玉・粟玉サイズに限られる。他の紺色・青を基調とするガラス小玉とは異質である。類例として古手に属するものでは福岡県糸島市平原遺跡 3 号・7 号・13 号墓から出土した赤褐色の粟玉がある。5 世紀前半以降は県内外で類例が散見され、県内では朝倉市池の上墳墓群、うきは市塚堂古墳後円部石室でライム・イエロー・ブラウンが確認され、当古墳と似た様相を窺える。他に京都郡菟田町番塚古墳でも少数ながら確認できる。

第1表 ガラス製玉類分類表

名称	大類 (cm)	小類 (技法)	色調種類	各径 (cm)	点数	備考
丸玉	Ⅰ類 (1.4 ~ 1.6)	a	コバルトブルー	1.4 ~ 1.6 前後	82	連玉 形状の類似性からⅠ－a類に含める
連玉		a (2連)			6	
小玉	Ⅱ類 (0.85 ~ 1.3)	b	コバルトブルー	0.9 ~ 1.3 前後	3,228	
		c			17	
		b	スカイブルー	0.85 ~ 1.0 前後	2	
小玉	Ⅲ類 (0.3 ~ 0.8)	b	コバルトブルー	0.3 ~ 0.8 前後	3,576	
		c			320	
		b	スカイブルー	0.3 ~ 0.6 前後	4,245	①～⑭種類に細分 下記参照
		c			212	
		b	クリアグリーン	0.3 ~ 0.7 前後	391	①～③種類に細分 下記参照
		b	ライトグリーン	0.45 前後	104	
		b	ダークブルー	0.3 ~ 0.4 前後	199	
		c	グレー (ブルー)	0.3 ~ 0.4 前後	175	
		c	グレー (グリーン)	0.3 ~ 0.4 前後	93	
		b	レッド	0.7 前後	2	
		b	パープル	0.4 前後	5	
		b	ライム	0.35 ~ 0.6 前後	635	
		b	イエロー	0.3 ~ 0.5 前後	128	
粟玉	Ⅳ類 (0.1 ~ 0.3)	b	コバルトブルー	0.2 前後	296	
		b	ブラウン	0.15 ~ 0.3 前後	1,018	
		b	ライム	0.15 ~ 0.3 前後	388	
		b	イエロー	0.15 ~ 0.3 前後	296	

ガラス小玉合計 15,427 点

小類 (技法)

- a 類 — 回転工具成形 (後、折切断)
b 類 — 引き伸ばし (後、切断・二次加熱)
c 類 — 引き伸ばし (後、切断のみ)

Ⅲ -b 類 スカイブルー 細分類色調・特徴

①淡水色 (半透明) ②トルコ石色 (半透明・白微気泡) ③シーブルー (透明) ④青緑色 (透明度高く、クリア) ⑤緑青色 (半透明、ベージュ状)
⑥暗水色 (やや曇る) ⑦緑青色 (透明、小型で黒い気泡筋) ⑧濃水色 (極透明。円柱状) ⑨シーブルー (透明、ベージュ状) ⑩クリアブルー (極透明)
⑪濃クリアブルー (極透明) ⑫濃シーブルー (半透明、歪な形状) ⑬暗緑水色 (半透明、孔大きめ) ⑭濃ブルー (半透明、数量少ない)

Ⅲ -c 類 スカイブルー 細分類色調・特徴

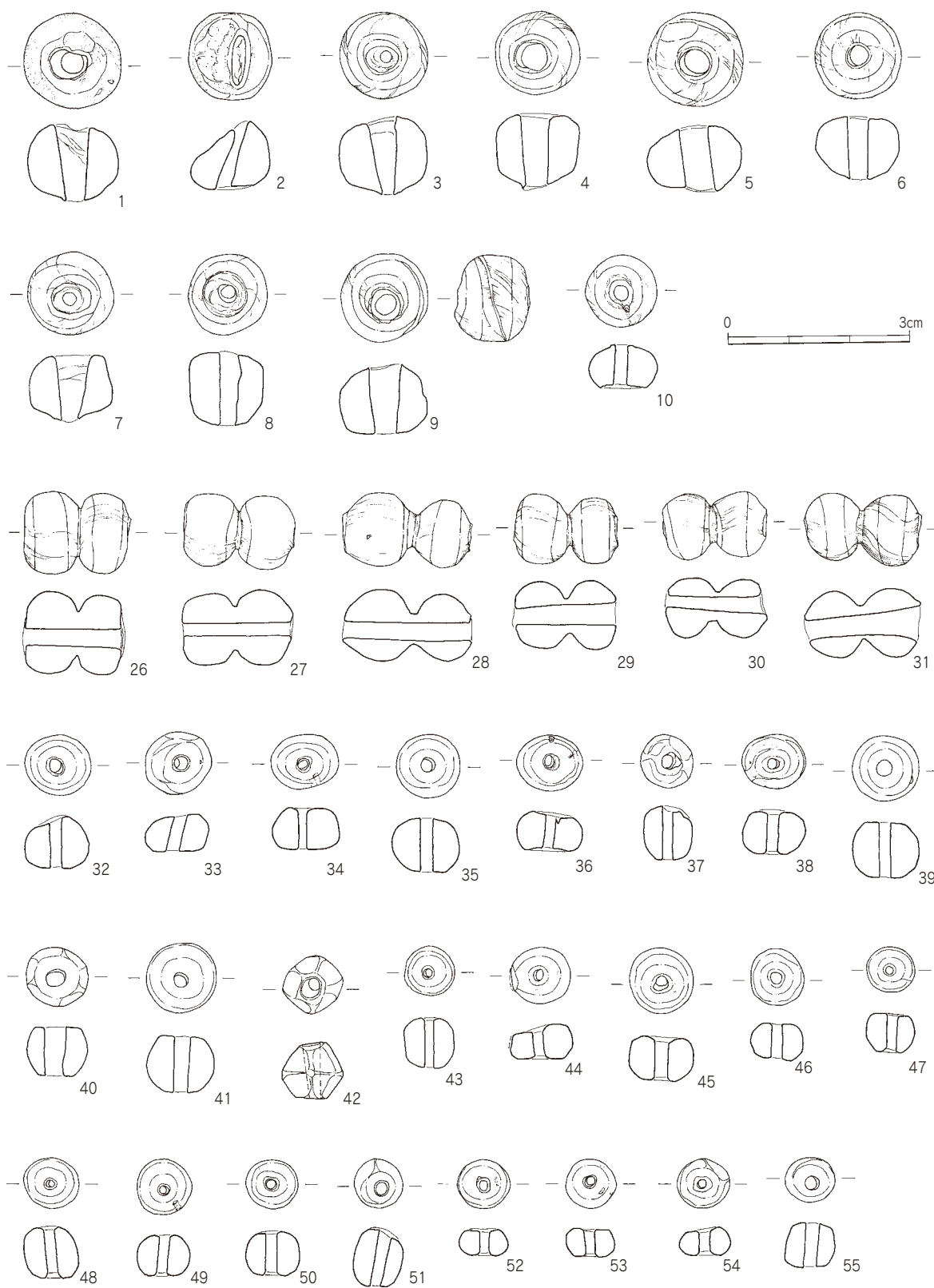
①水色 (半透明) ②明緑青色 (半透明) ③暗水色 (半透明) ④緑青色 (半透明、白気泡) ⑤青緑色 (半透明、白気泡) ⑥濃水色 (半透明)

Ⅲ -b 類 クリアグリーン 細分類色調・特徴

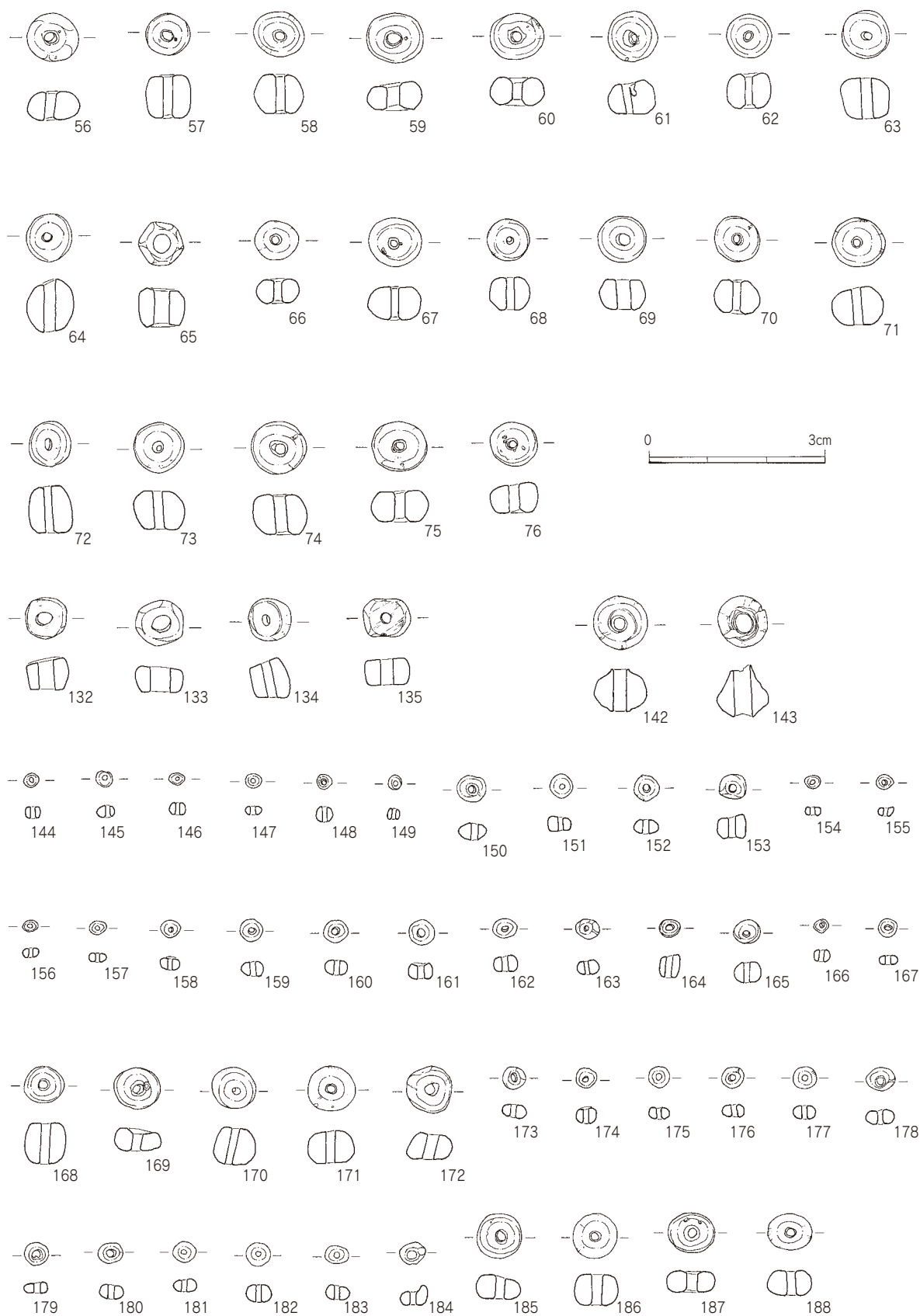
①小型で切断して煎直すが、甘い ②中型で楕円やベージュ状 ③大型でやや縦長・つぶれ気味・丸み帯びるなど。孔が小さめ。

ガラス小玉 色調観察表

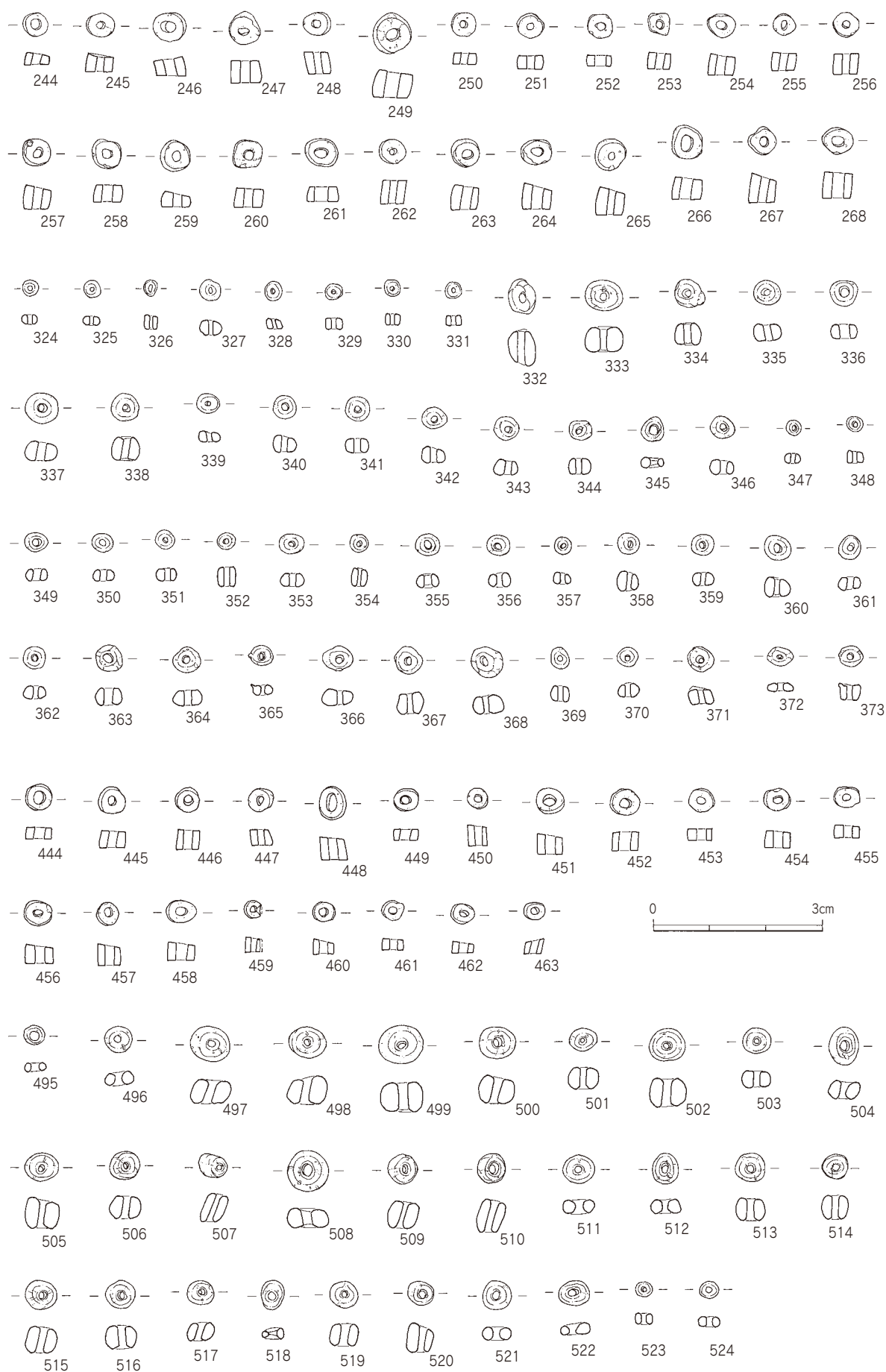
色調	特徴
コバルトブルー	濃い紺。透明度の高いものから、表面が曇るものまで。薄いブルーも含めている。
スカイブルー	水色の色調が主体。透明度の高いものから、不透明でマットなものまである。細かな気泡をもつものも存在する。
クリアグリーン	やや暗い緑。透明度は群を抜いて高く、表面は艶があり綺麗な扁球状である。殆どに気泡を確認できる。
ライトグリーン	明るめな緑。量は少ない。透明度は有り、ダークブルーの緑。
ダークブルー	暗い青。艶が有り透明度は極めて高く、細かな気泡もハッキリする。コバルトブルーの一種としても捉えられる。量は少なく、一定の大きさである。
グレー (ブルー)	灰色が強い青で、不透明でマットである。艶はある。一見はスカイブルーの一群に感じるが、技法面で区別している。
グレー (グリーン)	灰色が強い緑で、不透明でマットである。艶はある。一見はスカイブルーの一群に感じるが、技法面で区別している。
レッド	やや暗い赤。艶が有り、並な透明度である。
パープル	やや薄めの紫。透明度は高めで、細かな気泡が観察できる。コバルトブルーの一種ともとれる。
ライム	緑が強めの黄緑。透明度は低い艶はある。表面には引き伸ばしによる、黒く細い縞を観察できる。
イエロー	明るい黄色から濃い黄色。ライムと特徴は同じである。
ブラウン	茶色。赤褐色とも。粟玉でしか存在しない。ライムと特徴は同じ。



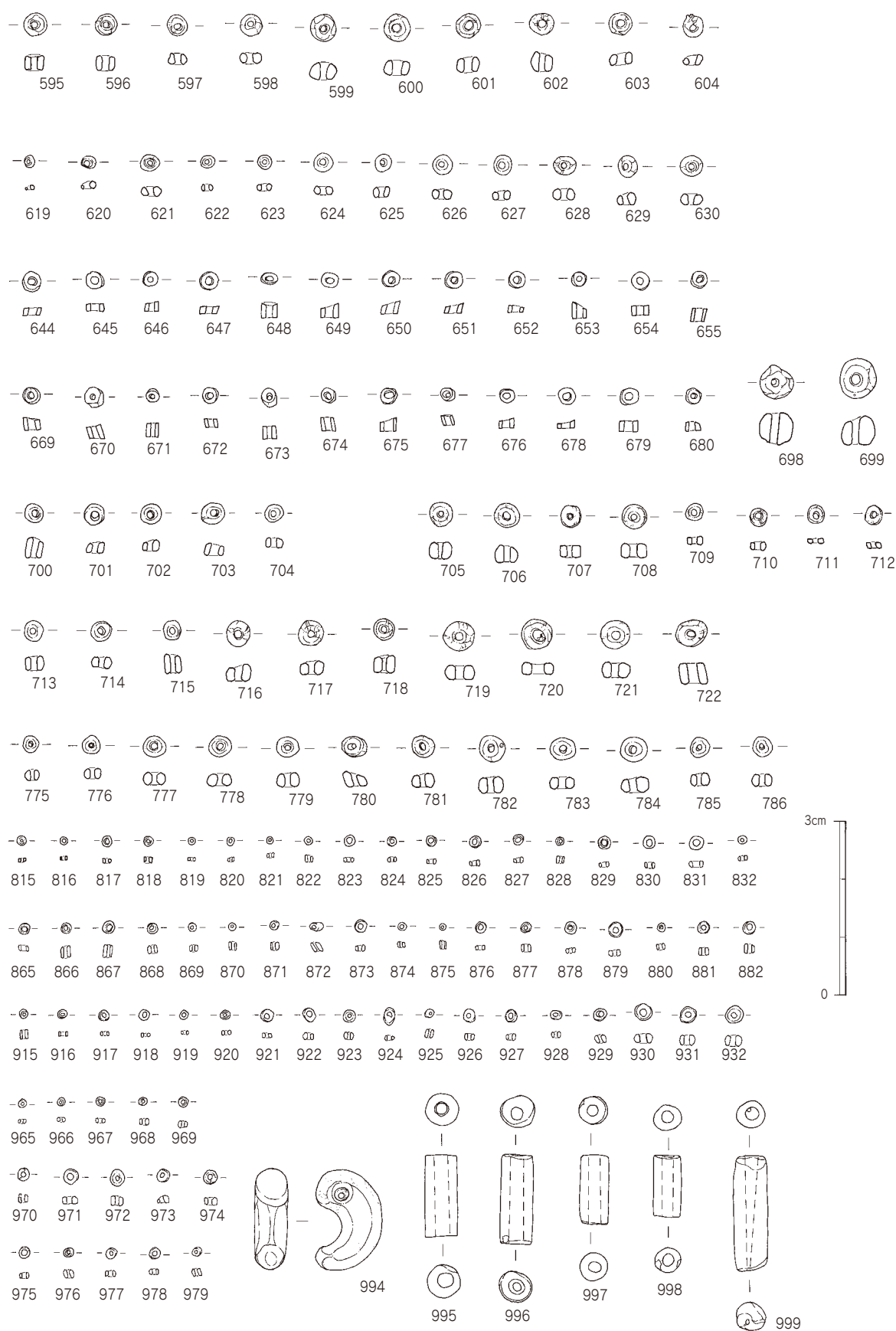
第33図 玉類実測図① (1/1)



第34図 玉類実測図② (1/1)



第 35 图 玉類実測図③ (1/1)



第36图 玉类実測図④ (1/1)

第2表 ガラス製玉類計測表

番号	出土地点	通称	分類	厚さ (mm)	最大径 (mm)	最小径 (mm)	色調	特徴・備考	番号	出土地点	通称	分類	厚さ (mm)	最大径 (mm)	最小径 (mm)	色調	特徴・備考
1	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.25	1.6	1.5	コバルト	孔は広げ抜く	101	A-4-4-G	小玉	II-b	0.6	0.78	0.7	コバルト	横面の2面やや粗い
2	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.1	1.5	1.4	コバルト	孔はつぶれ気味	102	A-4-4-G	小玉	II-b	0.75	0.75	0.75	コバルト	やや縦長。気泡スジあり
3	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.3	1.5	1.43	コバルト	巻付け痕がよく残る	103	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.8	0.75	コバルト	内部に細いヒビ・気泡スジあり
4	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.25	1.4	1.35	コバルト	巻付け痕が残る	104	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.85	0.75	コバルト	内部にスジ観察できる
5	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.1	1.6	1.55	コバルト	算盤玉状の扁球	105	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.8	0.75	コバルト	やや扁平。外にスジ多い
6	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.05	1.45	1.45	コバルト	独楽状。巻付け痕よく残る	106	A-4-4-G	小玉	II-b	0.7	0.85	0.85	コバルト	内部に気泡スジあり
7	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.1	1.4	1.35	コバルト	独楽状。巻付け痕よく残る	107	A-4-4-G	小玉	II-b	0.75	0.85	0.85	コバルト	外面に細い気泡スジ多い
8	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.3	1.4	1.3	コバルト	巻付け痕が明瞭	108	A-4-4-G	小玉	II-b	0.75	0.7	0.7	コバルト	内部に気泡スジあり
9	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.15	1.5	1.4	コバルト	コデ痕が斜めに残る	109	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.78	0.7	コバルト	内部に白い気泡スジあり
10	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.7	1.2	1.15	コバルト	気泡スジが歪む	110	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.8	0.75	コバルト	孔はやや大きい
11	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.95	1.3	1.4	コバルト	片面側の孔は折れ切断	111	A-4-4-G	小玉	II-b	0.35	0.75	0.7	コバルト	扁平なドーナツ型
12	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.9	1.47	1.45	コバルト	きれいな扁球状	112	A-4-4-G	小玉	II-b	0.45	0.75	0.7	コバルト	内外部に白い気泡スジあり
13	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.3	1.37	1.35	コバルト	片面側の孔は折れ切断	113	A-4-4-G	小玉	II-b	0.35	0.85	0.75	コバルト	透明度が高く、気泡多い
14	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.2	1.35	1.35	コバルト	内部に螺旋状の気泡	114	A-4-4-G	小玉	II-b	0.55	0.8	0.7	コバルト	やや楕円。透明度が高い
15	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.18	1.48	1.4	コバルト	内部に螺旋状の気泡	115	A-4-4-G	小玉	II-b	0.45	0.78	0.7	コバルト	曇るが、透明度高い
16	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.25	1.32	1.3	コバルト	内は螺旋状の気泡	116	A-4-4-G	小玉	II-b	0.6	0.75	0.7	コバルト	内部の白い気泡スジ明瞭
17	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.18	1.4	1.38	コバルト	気泡内部は螺旋状	117	A-4-4-G	小玉	II-b	0.68	0.85	0.75	コバルト	内部の白い気泡スジあり
18	A-4-4-H	丸玉	I-a	1	1.35	1.33	コバルト	外は螺旋状のスジが多い	118	A-4-4-G	小玉	II-b	0.6	0.75	0.75	コバルト	内部の白い気泡スジあり
19	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.95	1.34	1.3	コバルト	孔に折り切った痕跡有り	119	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.8	0.7	コバルト	やや歪。白い気泡スジあり
20	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.91	1.3	1.28	コバルト	螺旋状の気泡有り	120	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.85	0.8	コバルト	白い気泡スジあり
21	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.77	1.2	1.16	コバルト	外面に螺旋状のスジ	121	A-4-4-G	小玉	II-b	0.75	0.75	0.75	コバルト	横面の一部分が若干凹む
22	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.98	1.13	1.1	コバルト	螺旋状の気泡が多い	122	A-4-4-G	小玉	II-b	0.65	0.85	0.8	コバルト	表裏共にきれいな平坦面
23	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.85	1.15	1.12	コバルト	螺旋状の気泡が多い	123	A-4-4-H	小玉	II-b	0.48	0.8	0.8	コバルト	やや扁平。色調は濃い
24	A-4-4-H	丸玉	I-a	0.86	1.15	1.1	コバルト	一方の孔の後に丸みあり	124	A-4-4-H	小玉	II-b	0.5	0.88	0.85	コバルト	やや扁平。細い気泡多い
25	A-4-4-H	丸玉	I-a	1.05	1.1	1.05	コバルト	旋状のスジが多い	125	A-4-4-H	小玉	II-b	0.48	0.85	0.75	コバルト	やや扁平。細い気泡多い
26	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	1.78	1.4	1.3	コバルト	二連。両端切断後に削る	126	A-4-4-H	小玉	II-b	0.42	0.85	0.8	コバルト	扁平。白い気泡スジあり
27	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	1.8	1.23	1.18	コバルト	二連。両端切断後に削る	127	A-4-4-H	小玉	II-b	0.65	0.9	0.8	コバルト	透明度高く、気泡多い
28	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	2.15	1.2	1.05	コバルト	二連。孔に螺旋が集まる	128	A-4-4-H	小玉	II-b	0.58	0.8	0.75	コバルト	白い気泡スジあり
29	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	1.7	1.15	1.1	コバルト	二連。孔に螺旋が集まる	129	A-4-4-H	小玉	II-b	0.7	0.8	0.7	コバルト	白い気泡スジあり
30	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	1.7	1.1	1	コバルト	二連。孔は一方に偏る	130	A-4-4-H	小玉	II-b	0.55	0.85	0.75	コバルト	白い気泡スジあり
31	A-4-4-E-9	丸玉	I-a	2	1.2	1.1	コバルト	二連。図右の孔は広がる	131	A-4-4-H	小玉	II-b	0.6	0.9	0.8	コバルト	やや色薄い。細い気泡多い
32	A-4-4-G	小玉	II-b	0.9	1.1	1	コバルト	外面は露出した気泡多い	132	A-4-4-H	小玉	II-c	0.58	0.7	0.5	コバルト	外面に気泡スジ・気泡多い
33	A-4-4-G	小玉	II-b	0.62	1.1	1.05	コバルト	全体が斜めに傾く	133	A-4-4-G	小玉	II-c	0.45	0.8	0.73	コバルト	孔は大きく、気泡が多い
34	A-4-4-G	小玉	II-b	0.7	1.1	0.9	コバルト	全体が楕円形	134	A-4-4-G	小玉	II-c	0.7	0.72	0.7	コバルト	孔は楕円形。切断面傾く
35	A-4-4-G	小玉	II-b	0.85	1.1	1.05	コバルト	ほぼ球状	135	A-4-4-F	小玉	II-c	0.45	0.8	0.65	コバルト	平坦面は削痕あり。気泡多い
36	A-4-4-G	小玉	II-b	0.68	1.1	0.95	コバルト	表裏ゆるく凹む。楕円形	136	A-4-4-G	小玉	II-c	0.7	0.75	0.63	コバルト	縦長。色調はやや濃い
37	A-4-4-H	小玉	II-b	0.9	0.9	0.85	コバルト	縦長。色が濃くない	137	A-4-4-E-4	小玉	II-c	0.55	0.85	0.73	コバルト	気泡多い。色は紫に似る
38	A-4-4-H	小玉	II-b	0.7	1.05	0.9	コバルト	色は紫に近い。気泡細い	138	A-4-4-F	小玉	II-c	0.55	0.85	0.75	コバルト	やや扁平な固体
39	A-4-4-H	小玉	II-b	0.92	1.1	1.1	コバルト	ほぼ楕円形。気泡少ない	139	A-4-4-F	小玉	II-c	0.6	0.75	0.63	コバルト	外面に気泡破裂痕あり
40	A-4-4-H	小玉	II-b	0.8	1	0.98	コバルト	切子玉に似るが不明瞭	140	A-4-4-F	小玉	II-c	0.6	0.8	0.75	コバルト	表裏の平坦面大きい
41	A-4-4-H	小玉	II-b	0.92	1.15	1.15	コバルト	質感はやや異なる	141	A-4-4-F	小玉	II-c	0.6	0.8	0.75	コバルト	表裏で切断面の傾き異なる
42	A-4-4-H	小玉	II-b	0.9	1	0.9	コバルト	6面ずつ持つが不明瞭	142	A-4-4-E-4	小玉	II-b	0.7	0.9	0.9	スカイブルー	孔口はタマネギ状
43	A-4-4-H	小玉	II-b	0.8	0.85	0.8	コバルト	表面に細いヒビ入る	143	A-4-4-E-4	小玉	II-b	0.9	0.9	0.85	スカイブルー	多く、細い気泡あり
44	A-4-4-H	小玉	II-b	0.6	1	0.95	コバルト	孔に一段バンクあり	144	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.2	0.3	0.2	コバルト	皿類の中でも小型
45	A-4-4-H	小玉	II-b	0.75	1.1	1.05	コバルト	孔の全体にヒビが入る	145	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.2	0.3	0.25	コバルト	外面に引き伸ばし痕有り
46	A-4-4-H	小玉	II-b	0.6	0.95	0.9	コバルト	孔の全体にヒビが入る	146	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.2	0.3	0.25	コバルト	透明度高い。細い気泡あり
47	A-4-4-H	小玉	II-b	0.65	0.8	0.75	コバルト	孔の全体にヒビが入る	147	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.18	0.28	0.25	コバルト	透明度が高い。気泡細い
48	A-4-4-H	小玉	II-b	0.85	0.92	0.82	コバルト	光沢あり、横面は粗い	148	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.25	0.25	0.25	コバルト	外面に引伸ばし痕あり
49	A-4-4-H	小玉	II-b	0.68	0.9	0.9	コバルト	白い気泡スジあり	149	A-4-4-E-②	小玉	III-b	0.18	0.22	0.2	コバルト	切断時の伸びあり
50	A-4-4-H	小玉	II-b	0.72	0.85	0.81	コバルト	表面はやや粗い	150	A-4-4-F	小玉	III-b	0.3	0.52	0.45	コバルト	断面は算盤玉状になる
51	A-4-4-H	小玉	II-b	0.98	0.85	0.8	コバルト	縦長に切断される	151	A-4-4-F	小玉	III-b	0.28	0.4	0.38	コバルト	片面が斜めにカットされる
52	A-4-4-H	小玉	II-b	0.45	0.9	0.8	コバルト	中央に向かって凹む	152	A-4-4-F	小玉	III-b	0.25	0.42	0.4	コバルト	外面に気泡スジ多い
53	A-4-4-H	小玉	II-b	0.48	0.85	0.8	コバルト	平ら。細い気泡多い	153	A-4-4-F	小玉	III-b	0.4	0.48	0.45	コバルト	透明度高く、気泡列あり
54	A-4-4-H	小玉	II-b	0.48	0.85	0.8	コバルト	艶・細い気泡スジあり	154	A-4-4-E-7	小玉	III-b	0.18	0.3	0.25	コバルト	艶があり、透明度高い
55	A-4-4-G	小玉	II-b	0.7	0.82	0.75	コバルト	気泡スジが多い	155	A-4-4-E-7	小玉	III-b	0.18	0.32	0.25	コバルト	透明度高く、細かい気泡あり
56	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.9	0.83	コバルト	表面に凹凸がある	156	A-4-4-E-7	小玉	III-b	0.15	0.3	0.22	コバルト	透明度高く、細かい気泡あり
57	A-4-4-G	小玉	II-b	0.75	0.75	0.75	コバルト	やや縦長。艶がある	157	A-4-4-E-7	小玉	III-b	0.17	0.3	0.25	コバルト	透明度高く、細かい気泡あり
58	A-4-4-G	小玉	II-b	0.68	0.9	0.75	コバルト	表面に気泡のスジが残る	158	A-4-4-E-7	小玉	III-b	0.28	0.35	0.32	コバルト	透明度高い。ベール状
59	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.95	0.85	コバルト	中央に向かい凹む	159	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.28	0.4	0.4	コバルト	透明度高い。側面やや粗い
60	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.9	0.8	コバルト	中央に向かい凹む	160	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.28	0.42	0.4	コバルト	透明度高い。側面やや粗い
61	A-4-4-G	小玉	II-b	0.58	0.83	0.8	コバルト	孔の内側に気泡が露出	161	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.3	0.45	0.4	コバルト	透明度高い。側面やや粗い
62	A-4-4-G	小玉	II-b	0.6	0.75	0.75	コバルト	内部に気泡スジあり	162	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.3	0.4	0.35	コバルト	透明度高い。側面やや粗い
63	A-4-4-G	小玉	II-b	0.7	0.8	0.8	コバルト	両面や斜めにカット	163	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.25	0.4	0.35	コバルト	透明度が高く、綺麗
64	A-4-4-G	小玉	II-b	0.9	0.8	0.75	コバルト	外面に白い気泡スジあり	164	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.4	0.4	0.32	コバルト	透明度が高く、やや縦長
65	A-4-4-G	小玉	II-b	0.7	0.8	0.75	コバルト	外は6面あり、切子玉風	165	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.35	0.45	0.4	コバルト	透明度が高く、やや縦長
66	A-4-4-G	小玉	II-b	0.42	0.75	0.7	コバルト	透明度高く、気泡スジ多い	166	A-4-4-E-8	小玉	III-b	0.22	0.25	0.23	コバルト	透明度高く、気泡あり
67	A-4-4-G	小玉	II-b	0.6	0.9	0.8	コバルト	細い気泡スジ多い	167	A-4-4-E-8	小玉	III-b	0.18	0.31	0.3	コバルト	透明度高く、ベール状
68	A-4-4-G	小玉	II-b	0.55	0.7	0.7	コバルト	細い気泡スジにより縞状	168	A-4-4-H	小玉	III-b	0.7	0.7	0.65	コバルト	縦長。皿類に入るか
69	A-4-4-G	小玉	II-b	0.5	0.8	0.8	コバルト	外面に細い気泡スジ多い	169	A-4-4-H	小玉	III-b	0.4	0.8	0.7	コバルト	上面に大きな気泡
70	A-4-4-G	小玉	II-b	0.55	0.8	0.75	コバルト	外面に細い気泡スジ多い	170	A-4-4-H	小玉	III-b	0.65	0.75	0.7	コバルト	外面粗い。気泡スジあり
71	A-4-4-H	小玉	II-b	0.65	0.9	0.82	コバルト	内外に白い気泡スジあり	171	A-4-4-H	小玉	III-b	0.55	0.8	0.75	コバルト	外面に細い気泡スジ多い
72	A-4-4-H	小玉	II-b	0.8	0.8	0.7	コバルト	白い気泡スジ観察できる	172	A-4-4-H	小玉	III-b	0.45	0.8	0.78	コバルト	やや扁平。気泡スジあり
73	A-4-4-H	小玉	II-b	0.68	0.85	0.8	コバルト	白い気泡スジ観察できる	173	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.25	0.4	0.4	コバルト	扁平で、ベール状
74	A-4-4-H	小玉	II-b	0.7	0.9	0.9	コバルト	白い気泡スジ観察できる	174	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.3	0.35	0.32	コバルト	透明度高く、細い気泡あり
75	A-4-4-H	小玉	II-b	0.55	0.9	0.85	コバルト	孔の横に気泡あり	175	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.25	0.35	0.35	コバルト	透明度高く、ベール状
76	A-4-4-H	小玉	II-b	0.5	0.8	0.75	コバルト	気泡が多い	176	A-4-4-E-1	小玉	III-b	0.23	0.4	0.35	コバルト	ベール状
77	A-4-4																

第2表 ガラス製玉類計測表

番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考	番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考
201	A-4-4-E-7	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.27	コバルト	透明度高く、気泡有り	301	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.5	0.45	コバルト	透明度高く、気泡多い
202	A-4-4-E-7	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.34	0.3	コバルト	透明度高く、リング状	302	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.32	0.52	0.45	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
203	A-4-4-E-7	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.32	0.3	コバルト	透明度高く、細い気泡有り	303	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.31	0.55	0.52	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
204	A-4-4-E-7	小玉	Ⅲ-b	0.13	0.32	0.28	コバルト	透明度高く、気泡有り	304	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.5	0.45	コバルト	細い気泡多い。片面が傾く
205	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.4	0.4	コバルト	透明度高く、気泡有り	305	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.41	0.52	0.45	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
206	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.31	0.45	0.38	コバルト	透明度高く、気泡有り	306	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.27	0.55	0.52	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
207	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.42	0.4	コバルト	透明度高く、気泡有り	307	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.55	0.45	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
208	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.28	0.25	コバルト	透明度高く、気泡有り	308	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.52	0.45	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
209	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.27	コバルト	透明度高く、気泡有り	309	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.5	0.45	コバルト	片面斜めにカット
210	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.3	0.25	コバルト	透明度高く、気泡有り	310	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.5	0.6	0.55	コバルト	透明度高く、気泡多い
211	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.28	0.25	コバルト	透明度高く、気泡有り	311	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.65	0.58	コバルト	気泡多い。片面を斜めカット
212	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.28	0.26	コバルト	透明度高く、気泡有り	312	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.55	0.5	コバルト	透明度高く、気泡スジあり
213	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.26	コバルト	透明度高く、気泡有り	313	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.5	0.52	0.48	コバルト	片面傾斜が急にカットされる
214	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.17	0.27	0.25	コバルト	透明度高く、気泡有り	314	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.65	0.55	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
215	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.27	0.25	コバルト	気泡スジ、気泡痕あり	315	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.65	0.55	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
216	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.55	0.75	0.65	コバルト	縦長。色調がやや薄い	316	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.6	0.55	コバルト	透明度高く、細い気泡多い
217	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.63	0.63	0.6	コバルト	外面に細い気泡スジ	317	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.55	0.5	コバルト	透明度高く、片面を斜めカット
218	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.48	0.68	0.65	コバルト	外面に白い気泡スジあり	318	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.38	0.55	0.5	コバルト	片面を斜めにカット
219	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.75	0.7	コバルト	全体に表面が粗い	319	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.45	0.5	0.45	コバルト	片面を斜めにカット
220	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.74	0.7	コバルト	透明度高く、細い気泡有り	320	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.6	0.52	コバルト	透明度高く、外面気泡スジあり
221	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.37	0.35	コバルト	透明度高い。細い気泡有り	321	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.5	0.62	0.55	コバルト	片面は斜めにカット
222	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.27	0.37	0.31	コバルト	透明度高い。細い気泡有り	322	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.45	0.6	0.5	コバルト	縦長にカット。気泡が多い
223	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.26	0.4	0.35	コバルト	透明度高い。細い気泡有り	323	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.45	0.58	0.55	コバルト	気泡多く、外面に気泡スジ多い
224	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.37	コバルト	透明度高い。細い気泡有り	324	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	スライル⑦	透明度高く、細い気泡多い
225	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.35	コバルト	透明度高い。細い気泡有り	325	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.32	0.3	スライル⑦	透明度高く、細い気泡多い
226	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.32	0.3	コバルト	透明度高く、リング状	326	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.3	0.25	スライル⑧	透明度高く、細い気泡多い
227	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.3	コバルト	透明度高く、リング状	327	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.38	スライル⑧	透明度高く、細い気泡多い
228	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.32	0.32	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	328	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.35	0.3	スライル⑧	細い気泡多い。円柱状
229	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.32	0.3	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	329	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.32	0.3	スライル⑧	透明度高く、細い気泡多い
230	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.34	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	330	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.32	0.3	スライル⑧	透明度高く、細い気泡多い
231	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.32	0.28	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	331	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.3	スライル⑧	透明度高く、細い気泡多い
232	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.35	0.3	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	332	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.68	0.6	0.5	スライル⑩	歪な形状。気泡は少ない
233	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.47	0.42	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	333	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.7	0.55	スライル⑩	気泡がよく観察できる
234	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.27	0.38	0.32	コバルト	透明度高く、丸み帯びる	334	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.48	0.5	0.5	スライル⑩	気泡多い。半球状のくぐりあり
235	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.42	0.42	コバルト	透明度高く、リング状	335	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.45	スライル⑩	細い気泡が非常に多い
236	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.38	0.35	コバルト	透明度高く、リング状	336	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.45	スライル⑩	気泡は小さい。孔は大きめ
237	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.35	0.32	コバルト	透明度高く、気泡スジあり	337	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.58	0.55	スライル⑩	気泡細い。きれいな円形
238	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.32	0.4	0.35	コバルト	気泡スジ有り。丸み帯びる	338	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.5	0.49	スライル⑩	細い気泡が非常に多い
239	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.58	0.55	コバルト	気泡スジ有り。丸み帯びる	339	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	スライル⑩	やや半透明。気泡有り
240	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.6	0.55	コバルト	気泡スジ有り。丸み帯びる	340	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.4	スライル⑩	やや半透明。気泡有り
241	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.58	0.55	コバルト	切断時の伸び痕あり	341	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.42	0.4	スライル⑩	やや半透明。気泡有り
242	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.62	0.58	コバルト	ややリング状	342	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.45	0.38	スライル⑩	やや半透明。気泡有り
243	A-4-4-H	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.6	0.6	コバルト	気泡スジ有り。丸み帯びる	343	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.4	スライル⑩	やや半透明。気泡有り
244	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.22	0.4	0.4	コバルト	一方を斜めにカットする	344	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.4	0.35	スライル⑩	やや半透明で歪。気泡多い
245	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.32	0.48	0.4	コバルト	一方を斜めにカットする	345	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.42	0.4	スライル⑩	やや半透明で、ベージュ状
246	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.37	0.55	0.5	コバルト	両面を斜めにカット	346	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.45	0.4	スライル⑩	やや半透明で、歪
247	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.42	0.51	0.48	コバルト	両面は平坦。気泡が多い	347	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.3	スライル⑩	透明度高く、細い気泡多い
248	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.42	0.4	コバルト	両面は平坦だが、孔は斜め	348	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.3	0.28	スライル⑩	細い気泡多い。やや柱状
249	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.5	0.7	0.6	コバルト	気泡とキズ有り	349	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.4	0.32	スライル⑩	細い気泡多い。やや歪
250	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.4	0.4	コバルト	透明度高く、やや方形	350	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	スライル⑩	半透明で細い気泡多い
251	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.45	0.4	コバルト	気泡多く、やや紫色がかかる	351	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.32	スライル⑩	半透明で細い気泡多い
252	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.45	0.42	コバルト	透明度高く、両面平坦	352	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.32	0.3	スライル⑩	半透明で、やや縦長
253	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.45	0.38	コバルト	細い気泡多い。方形	353	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.27	0.43	0.35	スライル⑩	表裏に小さな面を持つ
254	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.5	0.4	コバルト	細い気泡多い。片面を斜めカット	354	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.32	0.3	スライル⑩	やや縦長。黒いスジあり
255	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.45	0.4	コバルト	やや方形。両面とも平坦	355	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.42	スライル⑩	細い気泡多い。やや歪
256	A-4-4-E-2	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.45	0.42	コバルト	やや方形。両面とも平坦	356	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.35	スライル⑩	透明度高く、細い気泡多い
257	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.45	0.5	0.45	コバルト	半透明。細い気泡多い	357	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.3	スライル⑩	透明度高く、細い気泡多い
258	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.55	0.45	コバルト	縦の気泡あり	358	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.35	0.35	スライル⑩	半透明。黒い微気泡多い
259	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.5	0.45	コバルト	非常に細い気泡多い	359	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.35	スライル⑩	半透明。黒い微気泡多い
260	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.55	0.5	コバルト	内外に大きめの気泡多い	360	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.37	0.5	0.4	スライル⑩	透明度高く、気泡多い
261	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.28	0.6	0.5	コバルト	透明度高く、細い気泡多い	361	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.42	0.4	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
262	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.42	0.4	コバルト	外面に気泡スジあり	362	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.4	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
263	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.45	0.45	0.42	コバルト	非常に細い気泡列あり	363	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.32	0.5	0.45	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
264	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.48	0.5	0.42	コバルト	艶があり、細い気泡列あり	364	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.45	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
265	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.52	0.5	0.45	コバルト	非常に細い気泡列あり	365	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.42	0.35	スライル⑩	切断時のガラス伸びあり
266	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.55	0.48	コバルト	半透明で、大きめの気泡あり	366	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.55	0.42	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
267	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.55	0.5	0.45	コバルト	細い気泡列あり	367	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.5	0.48	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
268	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-c	0.48	0.5	0.42	コバルト	細い気泡列あり	368	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.6	0.5	スライル⑩	大きめだが、形状は歪
269	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.31	0.5	0.42	コバルト	表裏面は平坦。細い気泡多い	369	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.4	0.3	スライル⑩	ドーナツ状で、気泡有り
270	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.28	0.5	0.48	コバルト	表裏面は平坦。側面に面あり	370	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.32	スライル⑩	ドーナツ状で、気泡有り
271	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.48	0.45	コバルト	表裏面は平坦。側面に面あり	371	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.45	スライル⑩	やや半透明。大きめで歪
272	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.5	0.45	コバルト	一方の表面は斜めにカット	372	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.5	0.35	スライル⑩	気泡有り。平らで歪
273	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.38	0.35	コバルト	表裏面は平坦。細い気泡多い	373	A-4-4-F</							

第2表 ガラス製玉類計測表

番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考	番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考
401	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.45	0.45	スカイブルー⑤	大きめ、形状歪む	501	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.65	0.55	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
402	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.5	0.48	スカイブルー⑤	大きめ、形状歪む	502	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.5	0.4	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
403	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.3	スカイブルー①	片面を斜めにカット	503	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.42	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
404	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.42	0.4	スカイブルー⑤	気泡スジあり	504	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.62	0.45	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
405	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.35	スカイブルー⑤	気泡スジあり	505	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.52	0.6	0.52	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
406	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.45	0.4	スカイブルー⑤	気泡スジあり。形状歪む	506	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.55	0.5	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
407	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.35	スカイブルー⑤	気泡スジあり	507	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.39	0.35	クリアグリーン③	気泡列。斜めに傾く
408	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.42	0.4	スカイブルー⑥	気泡多い	508	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.72	0.72	クリアグリーン③	気泡列。ドーナツ状
409	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.24	0.4	0.35	スカイブルー⑥	ドーナツ状	509	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.55	0.5	クリアグリーン③	気泡列。やや傾く
410	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.4	0.38	スカイブルー⑥	大きめで形状歪む	510	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.6	0.5	0.45	クリアグリーン③	気泡列。縦長で傾く
411	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.42	0.4	スカイブルー⑥	形状歪む	511	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.55	0.5	クリアグリーン③	ベージュ状
412	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.3	スカイブルー⑥	気泡あり。ドーナツ状	512	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.51	0.48	クリアグリーン③	ベージュ状
413	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	スカイブルー⑦	細い気泡多い	513	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.5	0.5	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
414	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.12	0.32	0.3	スカイブルー⑦	細い気泡多い	514	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.45	0.4	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
415	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.28	スカイブルー⑦	細い気泡多い	515	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.52	0.5	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
416	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	スカイブルー⑦	細い気泡多い	516	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.51	0.49	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
417	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.28	スカイブルー③	黒い気泡スジあり	517	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.4	クリアグリーン③	気泡列。やや傾く
418	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.25	0.25	スカイブルー⑦	気泡多い	518	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.51	0.4	クリアグリーン③	ベージュ状
419	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.17	0.25	0.25	スカイブルー⑧	やや角ばる円柱状	519	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.5	0.45	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
420	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.27	0.25	スカイブルー⑧	細い気泡多い	520	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.51	0.5	0.4	クリアグリーン③	気泡列。やや縦長
421	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.17	0.28	0.25	スカイブルー⑧	細い気泡多い	521	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.5	0.48	クリアグリーン③	ベージュ状
422	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.3	0.26	スカイブルー⑥	ドーナツ状	522	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.52	0.42	クリアグリーン③	ベージュ状
423	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.26	0.25	スカイブルー⑥	気泡あり	523	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	クリアグリーン③	両面平坦。細い気泡あり
424	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	スカイブルー⑧	やや角ばる円柱状	524	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.35	0.28	クリアグリーン③	両面平坦。細い気泡あり
425	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.33	0.3	スカイブルー⑧	やや角ばる円柱状	525	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.32	0.3	クリアグリーン③	両面平坦。細い気泡あり
426	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.32	0.28	スカイブルー⑧	ドーナツ状	526	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.34	0.3	クリアグリーン③	両端平坦。斜めにカット
427	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.28	0.26	スカイブルー⑥	やや角ばる円柱状	527	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.27	0.25	クリアグリーン③	両端平坦
428	A-4-4-E-6	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.28	0.26	スカイブルー⑥	ドーナツ状	528	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.27	クリアグリーン③	両端平坦
429	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.4	0.38	スカイブルー⑥	気泡あり	529	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.13	0.27	0.25	クリアグリーン③	両端平坦。扁平
430	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.24	0.45	0.4	スカイブルー⑥	気泡あり	530	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.48	0.42	クリアグリーン③	ベージュ状
431	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.38	0.35	スカイブルー⑥	気泡あり	531	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.5	0.45	クリアグリーン③	ベージュ状
432	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.42	0.36	スカイブルー⑥	気泡あり	532	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.55	0.5	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
433	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.34	0.4	0.35	スカイブルー⑥	気泡あり	533	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.62	0.58	クリアグリーン③	気泡列あり
434	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.45	0.4	スカイブルー⑤	形状歪む	534	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.7	0.55	クリアグリーン③	気泡列。ベージュ状
435	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.48	0.35	スカイブルー⑤	形状歪む	535	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.48	0.6	0.55	クリアグリーン③	気泡列。ベージュ状
436	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.35	0.35	スカイブルー⑤	形状歪む	536	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.53	0.5	クリアグリーン③	気泡列よく確認できる
437	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.38	0.38	スカイブルー⑤	形状歪む	537	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.5	0.45	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
438	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.38	0.35	スカイブルー⑤	形状歪む	538	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.57	0.5	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
439	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.23	0.35	0.32	スカイブルー⑤	形状歪む	539	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.57	0.55	クリアグリーン③	気泡列あり
440	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.42	0.38	スカイブルー⑤	形状歪む	540	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.52	0.52	0.49	クリアグリーン③	気泡列。やや縦長
441	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.35	スカイブルー④	気泡多い	541	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.47	0.5	0.47	クリアグリーン③	気泡列あり
442	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	スカイブルー④	気泡多い	542	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.5	0.55	クリアグリーン③	気泡列あり
443	A-4-4-E-4	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.3	0.3	スカイブルー④	気泡多い	543	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.5	0.5	クリアグリーン③	気泡列あり
444	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.42	0.42	スカイブルー⑤	きれいな円形	544	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.5	0.48	クリアグリーン③	気泡列あり
445	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.45	0.42	スカイブルー③	表裏面に平坦あり	545	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.58	0.48	クリアグリーン③	気泡列。やや楕円形
446	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.38	0.4	0.38	スカイブルー③	細い気泡あり	546	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.5	0.45	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
447	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.42	0.4	スカイブルー③	細い気泡あり、やや傾く	547	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.55	0.52	クリアグリーン③	気泡列あり
448	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.42	0.58	0.45	スカイブルー⑤	両面平坦。孔はやや楕円	548	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.52	0.52	0.45	クリアグリーン③	気泡列。やや縦長
449	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.42	0.35	スカイブルー①	両面平坦	549	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.47	0.58	0.47	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
450	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.39	0.35	0.35	スカイブルー③	両面平坦。細い気泡あり	550	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.55	0.5	クリアグリーン③	気泡列あり
451	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.5	0.42	スカイブルー③	両面平坦	551	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.55	0.52	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
452	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.32	0.5	0.45	スカイブルー③	両面平坦	552	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.51	0.51	クリアグリーン③	気泡列あり
453	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.42	0.4	スカイブルー⑤	両面平坦。気泡あり	553	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.55	0.52	クリアグリーン③	ベージュ状
454	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.32	0.5	0.4	スカイブルー①	両面平坦。気泡あり	554	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.41	0.61	0.6	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
455	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.45	0.35	スカイブルー①	両面平坦。気泡あり	555	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.58	0.58	クリアグリーン③	ベージュ状
456	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.5	0.45	スカイブルー③	両面平坦。気泡あり	556	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.52	0.58	0.58	クリアグリーン③	気泡列。丸み帯びる
457	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.4	0.42	0.38	スカイブルー③	両面平坦。縦長にカット	557	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.5	0.5	0.47	クリアグリーン③	気泡列あり
458	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.33	0.5	0.4	スカイブルー③	やや楕円形	558	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.37	0.58	0.58	クリアグリーン③	ベージュ状
459	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.31	0.31	スカイブルー③	外面一部欠損	559	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.6	0.55	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
460	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.35	0.35	スカイブルー③	気泡が非常に細い	560	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.55	0.55	0.48	クリアグリーン③	気泡あり
461	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.4	0.32	スカイブルー③	両面平坦。細い気泡あり	561	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.48	0.58	0.5	クリアグリーン③	気泡あり
462	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.4	0.35	スカイブルー④	やや歪む	562	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.31	0.65	0.6	クリアグリーン③	気泡あり。ベージュ状
463	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.3	0.32	0.32	スカイブルー⑤	平面だが、斜めにカット	563	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.6	0.58	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
464	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.28	0.45	0.42	スカイブルー①	細い気泡多い	564	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.6	0.55	クリアグリーン③	気泡あり
465	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.27	0.48	0.45	スカイブルー③	暗い水色	565	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.6	0.58	クリアグリーン③	気泡あり
466	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.45	0.4	スカイブルー②	外面は緩やかに6面あり	566	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.6	0.55	クリアグリーン③	気泡あり
467	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.28	0.37	0.35	スカイブルー①	片面を斜めにカット	567	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.57	0.55	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
468	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.38	0.35	スカイブルー①	片面を斜めにカット	568	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.57	0.55	クリアグリーン③	気泡あり。やや扁平
469	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.37	0.5	0.45	スカイブルー⑥	やや方形	569	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.38	0.55	0.52	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
470	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.48	0.45	スカイブルー③	両面平坦	570	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.45	0.6	0.45	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
471	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.5	0.48	スカイブルー③	やや丸みを帯びる	571	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.48	0.5	0.48	クリアグリーン③	気泡あり。丸みを帯びる
472	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.4	0.38	スカイブルー③	片面を斜めにカット	572	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.42	0.52	0.47	クリアグリーン③	気泡あり。
473	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-c	0.22	0.4	0.35	スカイブルー③	両面平坦。卵型	573	A-4-4-E-1	小玉	Ⅲ-b	0.41	0.52	0.47	クリアグリーン③	気泡あり
474	A-4-4-E-3	小玉	Ⅲ-c	0.													

第2表 ガラス製玉類計測表

番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考	番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考
601	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.43	0.38	ライトグリーン	半透明で曇る	703	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	パープル	斜めにカット
602	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.36	0.45	0.35	ライトグリーン	半透明で曇る	704	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	パープル	気泡スジあり
603	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.4	ライトグリーン	やや濁る	705	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.43	0.4	ライム	黒いスジあり
604	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.37	0.35	ライトグリーン	切断痕あり	706	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.45	0.4	ライム	気泡スジあり
605	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.45	0.4	ライトグリーン	やや濁る。断面ひし形	707	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.45	0.45	ライム	気泡スジあり
606	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.4	0.35	ライトグリーン	気泡スジあり	708	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.38	ライム	透明感なし
607	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.35	0.3	ライトグリーン	やや濁る。気泡スジあり	709	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.35	0.3	ライム	斜めにカット
608	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.45	0.4	ライトグリーン	やや濁る。やや歪	710	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.3	ライム	気泡スジあり
609	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.4	ライトグリーン	気泡多い	711	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.3	0.32	ライム	気泡スジあり
610	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.4	0.35	ライトグリーン	気泡多い	712	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.3	0.3	ライム	端部がやや粗い
611	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.34	0.3	ライトグリーン	やや濁る	713	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.23	0.35	0.35	ライム	気泡スジあり
612	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.3	0.3	ライトグリーン	やや濁る。気泡スジあり	714	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	ライム	やや斜めにカット
613	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.42	0.37	ライトグリーン	やや濁る。切断痕あり	715	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.35	ライム	気泡スジあり
614	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.43	0.4	ライトグリーン	気泡スジあり	716	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.45	ライム	気泡スジあり
615	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.43	0.4	ライトグリーン	色調が濃い	717	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.4	ライム	気泡スジあり
616	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.42	ライトグリーン	両面粗い	718	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.35	ライム	円柱状
617	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.43	0.43	ライトグリーン	半透明で濁る	719	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.5	0.45	ライム	色調は薄い
618	A-4-4-F	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.35	0.35	ライトグリーン	半透明で濁る	720	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.55	0.55	ライム	切断痕あり
619	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.2	0.18	ダークブルー	片面斜めにカット	721	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.5	0.5	ライム	気泡スジあり
620	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.12	0.3	0.2	ダークブルー	片面斜めにカット	722	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.4	0.38	ライム	円柱状。黒いスジあり
621	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.38	0.35	ダークブルー	半透明	723	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.3	0.28	ライム	黒いスジあり
622	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.12	0.25	0.2	ダークブルー	透明感あり	724	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.28	0.25	ライム	気泡スジあり
623	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.25	0.22	ダークブルー	透明感・気泡スジあり	725	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.37	0.35	ライム	気泡・気泡すじあり
624	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.35	ダークブルー	半透明。気泡列あり	726	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.33	0.32	ライム	やや斜めにカット
625	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.27	0.3	ダークブルー	気泡列あり	727	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.4	ライム	一部欠損
626	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.35	0.35	ダークブルー	気泡少ない	728	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.38	0.35	ライム	気泡スジあり。やや歪む
627	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.35	0.35	ダークブルー	気泡列あり	729	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.23	0.4	0.4	ライム	黒いスジあり
628	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.42	0.35	ダークブルー	気泡少ない	730	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.35	ライム	表面に気泡あり
629	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.12	0.4	0.32	ダークブルー	片面斜めにカット	731	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.45	0.45	ライム	一部欠損。気泡の痕か
630	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.4	0.35	ダークブルー	気泡列あり。楕円形	732	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.38	0.38	ライム	気泡・気泡スジあり
631	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.13	0.3	0.25	ダークブルー	艶あり。楕円形	733	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.38	ライム	気泡・気泡スジあり
632	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.32	0.25	ダークブルー	気泡スジあり	734	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.3	ライム	気泡・気泡スジあり
633	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.12	0.27	0.25	ダークブルー	気泡スジあり	735	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	ライム	楕円形
634	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.3	ダークブルー	艶・気泡あり	736	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.35	ライム	形状がやや歪む
635	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.33	0.3	ダークブルー	艶あり。卵形	737	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.4	ライム	気泡スジあり
636	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.25	0.22	ダークブルー	艶・気泡あり	738	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.4	0.35	ライム	気泡スジあり
637	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.25	0.25	ダークブルー	艶あり。内部に黒点あり	739	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.45	0.4	ライム	気泡スジあり
638	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.25	0.25	ダークブルー	内部に黒点あり	740	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.35	ライム	形状がやや歪む
639	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.23	0.2	ダークブルー	艶・気泡あり	741	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.35	0.3	ライム	気泡スジ・黒いスジあり
640	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.25	ダークブルー	内部に黒点あり	742	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.3	0.4	ライム	気泡スジあり。やや歪む
641	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.27	0.25	ダークブルー	内部に黒点あり	743	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.43	0.4	ライム	円形ではない
642	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.25	0.23	ダークブルー	内部に黒点あり	744	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.38	ライム	楕円形。黒いスジあり
643	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-b	0.13	0.25	0.2	ダークブルー	内部に黒点あり	745	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.15	0.3	0.3	ライム	両面平坦
644	A-4-4-E-②	小玉	Ⅲ-c	0.12	0.38	0.32	ブルー(ブルー)	透明感なし。気泡スジ	746	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.3	0.28	ライム	気泡スジあり
645	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.35	0.3	ブルー(ブルー)	気泡スジあり。楕円形	747	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.35	0.35	ライム	一部突起状の気泡あり
646	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	断面台形	748	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.3	ライム	気泡スジあり
647	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.33	0.3	ブルー(ブルー)	短部を斜めにカット	749	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.28	0.28	ライム	黒いスジあり
648	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.37	0.25	0.2	ブルー(ブルー)	楕円形。切り口レンズ状	750	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.35	ライム	気泡・気泡スジあり
649	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.28	0.24	ブルー(ブルー)	気泡スジあり	751	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.35	0.35	ライム	気泡スジあり
650	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.23	0.28	0.3	ブルー(ブルー)	色が濃い	752	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.35	0.35	ライム	斜めにカット
651	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.3	0.25	ブルー(ブルー)	片面斜めにカット	753	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.23	0.3	0.3	ライム	気泡スジあり
652	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.1	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	片面斜めにカット	754	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.1	0.4	0.35	ライム	扁平。気泡スジあり
653	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.35	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	片面斜めにカット	755	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.28	0.28	ライム	筒状
654	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.3	0.3	ブルー(ブルー)	表面気泡スジあり	756	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.3	0.3	ライム	筒状
655	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.23	0.28	0.23	ブルー(ブルー)	気泡列あり	757	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.35	ライム	楕円形
656	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.25	0.22	ブルー(ブルー)	気泡スジあり。両面平坦	758	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.23	0.38	0.38	ライム	気泡スジあり
657	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.17	0.27	0.25	ブルー(ブルー)	両面平坦	759	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.35	0.35	ライム	内部に黒い粒あり
658	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.22	0.22	0.22	ブルー(ブルー)	両面平坦。ヒビあり	760	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.18	0.35	0.35	ライム	細かいスジあり
659	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.25	0.22	ブルー(ブルー)	両面平坦	761	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.4	0.4	ライム	内部に黒い粒あり
660	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.18	0.3	0.25	ブルー(ブルー)	両面平坦。やや方柱状	762	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.4	ライム	丸みのある三角形
661	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.23	0.2	ブルー(ブルー)	片面斜めにカット	763	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.4	0.33	0.3	ライム	楕円形で筒状
662	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.2	0.3	0.25	ブルー(ブルー)	両面斜めにカット	764	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.43	0.4	ライム	気泡・気泡スジあり
663	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.12	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	径に対して扁平	765	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.38	ライム	内部に黒い粒あり
664	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.25	0.23	ブルー(ブルー)	気泡スジあり	766	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.45	0.4	ライム	内部に黒い粒あり
665	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	白い気泡スジあり	767	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.32	0.3	ライム	気泡・気泡スジあり
666	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.1	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	両面平坦	768	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.4	ライム	気泡・気泡スジあり
667	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.17	0.25	0.22	ブルー(ブルー)	両面平坦で斜めにカット	769	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.35	0.3	ライム	外面に白い気泡粒あり
668	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.3	0.27	ブルー(ブルー)	片面斜めにカット	770	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.53	0.45	ライム	楕円形
669	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.25	0.25	ブルー(ブルー)	斜めにカット	771	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.5	0.45	ライム	切断引き伸び痕あり
670	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.3	0.3	ブルー(ブルー)	外面に気泡スジあり	772	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.55	0.55	ライム	気泡粒あり
671	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.25	0.2	ブルー(ブルー)	外面に気泡スジあり	773	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.35	0.3	ライム	筒状。斜めにカット
672	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.15	0.25	0.23	ブルー(ブルー)	外面に気泡スジあり	774	A-4-4-E-5	小玉	Ⅲ-b	0.35	0.4	0.4	ライム	やや歪みあり
673	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.27	0.25	0.23	ブルー(ブルー)	斜めにカット	775	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	イエロー	丸みを帯びる
674	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.25	0.23	ブルー(ブルー)	やや六角形	776	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.3	0.28	イエロー	やや歪。丸みを帯びる
675	A-4-4-E-8	小玉	Ⅲ-c	0.25	0.28	0.25	ブルー(ブルー)	気泡スジあり	777	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.35	0.35	イエロー	やや歪。丸みを帯びる
676	A-4-4-E-8	小玉															

第2表 ガラス製玉類計測表

番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考	番号	出土地点	通称	分類	厚さ[mm]	最大径[mm]	最小径[mm]	色調	特徴・備考
801	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.37	0.35	イエロー	きれいな正円形	901	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.16	0.15	ブラウン	孔は大きい
802	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.26	0.3	0.27	イエロー	やや縦長。気泡あり	902	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.16	0.13	0.12	ブラウン	やや円柱状
803	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.37	0.37	イエロー	きれいな正円形	903	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.16	0.15	ブラウン	表面に気泡粒あり
804	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.2	0.33	0.3	イエロー	比較の色調濃い	904	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	ブラウン	気泡スジあり
805	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.38	イエロー	丸みを帯びる	905	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	ブラウン	孔小さい
806	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.31	0.38	0.37	イエロー	切断痕あり	906	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.2	0.18	ブラウン	表面に気泡粒あり
807	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.35	0.32	イエロー	やや歪。気泡スジあり	907	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.23	0.2	ブラウン	切断面粗い
808	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.38	イエロー	気泡スジあり	908	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.2	0.18	ブラウン	やや歪む
809	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.22	0.4	0.38	イエロー	楕円形で歪	909	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.2	0.18	ブラウン	気泡スジあり
810	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.4	0.4	イエロー	楕円形。気泡膨らむ	910	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.12	0.12	ブラウン	やや円柱状
811	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.28	0.45	0.43	イエロー	大粒でやや歪	911	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.22	0.2	ブラウン	気泡スジあり
812	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.4	0.4	イエロー	気泡・気泡スジあり	912	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.8	0.15	0.13	ブラウン	気泡スジあり
813	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.3	0.45	0.4	イエロー	気泡・気泡スジあり	913	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.16	0.18	0.18	ブラウン	片面斜めにカット
814	A-4-4-E-10	小玉	Ⅲ-b	0.25	0.3	0.27	イエロー	切断面が歪む	914	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.18	0.18	ブラウン	切り口が少し粗い
815	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.15	0.17	コバルト	透明度低い	915	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.15	0.13	ライム	円柱状
816	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.15	0.15	コバルト	径に対し、孔が大きい	916	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.18	0.15	ライム	やや楕円形
817	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.17	コバルト	径に対し、孔が大きい	917	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.07	0.18	0.15	ライム	内部に黒い粒あり
818	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.2	コバルト	透明度高い	918	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.05	0.18	0.16	ライム	扁平で、形は歪
819	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.07	0.15	0.15	コバルト	透明度高い	919	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	ライム	気泡スジあり
820	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.07	0.15	0.18	コバルト	透明度高い	920	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.15	0.13	ライム	気泡スジあり
821	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.15	0.15	コバルト	径に対し、孔が大きい	921	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.22	0.2	ライム	表面に気泡粒あり
822	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.15	0.17	コバルト	柱状。切り口斜め	922	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.25	0.2	ライム	楕円形
823	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.23	0.23	コバルト	孔が歪む	923	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.24	0.2	ライム	ドーナツ状
824	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.19	コバルト	断面並行四辺形	924	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.28	0.2	ライム	楕円形で、孔偏る
825	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.2	0.2	コバルト	孔が歪む	925	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.15	0.15	ライム	円柱状
826	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.23	0.2	コバルト	孔が大きい	926	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.2	0.2	0.2	ライム	ドーナツ状
827	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.23	0.2	コバルト	やや楕円形	927	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.23	0.22	ライム	気泡あり
828	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.15	0.15	コバルト	柱状	928	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.2	0.18	ライム	黒いスジあり
829	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.25	0.23	コバルト	切り口が歪む	929	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.23	0.2	ライム	透明感ない。丸みあり
830	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.25	0.23	コバルト	孔が大きい	930	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.3	0.28	ライム	気泡スジあり
831	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.23	0.25	コバルト	孔が大きい	931	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.2	0.3	0.28	ライム	透明感ない
832	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	コバルト	やや柱状	932	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.2	0.3	0.27	ライム	黒いスジあり
833	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.14	0.14	コバルト	片面傾く	933	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.37	0.25	ライム	楕円形
834	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.15	0.14	コバルト	片面傾く	934	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.3	0.28	ライム	黒い粒あり。ドーナツ状
835	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.19	0.18	コバルト	両面傾く	935	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.2	0.18	ライム	切断痕あり。やや歪
836	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.07	0.18	0.18	コバルト	リング状だが、扁平	936	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.19	0.17	ライム	気泡スジあり
837	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.14	0.16	0.16	コバルト	透明度高い	937	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	ライム	透明度低い
838	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.16	0.15	コバルト	透明度高い	938	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.18	0.18	ライム	表面に気泡スジあり
839	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.16	0.16	コバルト	透明度高い	939	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.18	0.18	ライム	気泡等少ない
840	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.19	0.18	コバルト	片面やや傾く	940	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.23	0.2	ライム	気泡等少ない
841	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.11	0.14	0.13	コバルト	透明度高い	941	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.9	0.2	0.2	ライム	表面に気泡スジあり
842	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.16	0.16	0.15	コバルト	片面がやや傾く	942	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.9	0.2	0.18	ライム	楕円形
843	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	コバルト	透明度高い	943	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.2	0.18	ライム	気泡が突起状になる
844	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	コバルト	透明度高い	944	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.13	0.12	ライム	切断時の伸びあり
845	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.15	0.15	コバルト	片面がやや傾く	945	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.14	0.23	0.2	ライム	透明度低く、曇る
846	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	コバルト	片面がやや傾く	946	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.25	0.2	ライム	切断時の伸びあり
847	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.15	0.15	コバルト	リング状。透明度高い	947	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.06	0.23	0.2	ライム	端部が歪
848	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	コバルト	リング状	948	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.09	0.25	0.22	ライム	ベージュ状
849	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.2	0.18	コバルト	リング状	949	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.35	0.28	ライム	表面に気泡スジあり
850	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.18	0.18	コバルト	やや円柱状	950	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.16	ライム	楕円形
851	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.12	0.1	コバルト	筒状で、斜めにカット	951	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.07	0.14	0.13	ライム	やや歪。孔は偏る
852	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.2	0.18	コバルト	透明感あり	952	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.18	0.18	ライム	気泡スジあり
853	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	コバルト	切り口がやや粗い	953	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.15	0.15	ライム	表面に気泡痕あり
854	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.18	0.18	コバルト	透明感あり	954	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.06	0.16	0.15	ライム	気泡あり。やや歪
855	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.2	0.18	コバルト	透明感あり	955	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.18	ライム	ベージュ状
856	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.15	0.15	コバルト	円柱状	956	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.15	ライム	孔が偏る。斜めにカット
857	A-4-4-E-8	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.23	0.23	コバルト	ドーナツ状	957	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.15	0.15	ライム	両面斜めにカット
858	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.18	0.15	コバルト	円柱状。丸み帯びる	958	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.15	ライム	黒い粒あり
859	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.15	0.15	コバルト	透明感あり	959	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.05	0.2	0.18	ライム	片面斜めにカット
860	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.15	コバルト	色調が濃い	960	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.2	0.18	ライム	柱状
861	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.16	0.15	0.13	コバルト	透明感あり	961	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.06	0.19	0.18	ライム	ベージュ状
862	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.18	0.18	コバルト	円柱状	962	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.18	0.15	ライム	左右で厚さが異なる
863	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.2	0.18	コバルト	ドーナツ状	963	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.2	0.17	ライム	楕円形
864	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.25	0.23	コバルト	ドーナツ状	964	A-4-4-E-5	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.15	ライム	黒いスジあり
865	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.2	0.2	ブラウン	片面切り口が伸びる	965	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.11	0.15	0.15	イエロー	柱状
866	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.25	0.18	0.15	ブラウン	円柱状で、孔が小さい	966	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.12	0.12	イエロー	気泡粒あり
867	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.25	0.2	0.18	ブラウン	円柱状	967	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.17	0.15	イエロー	ベージュ状
868	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.2	0.2	ブラウン	気泡スジあり	968	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.15	0.14	イエロー	柱状
869	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.18	0.16	ブラウン	外面に気泡・スジあり	969	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.12	0.18	0.18	イエロー	ドーナツ状
870	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.13	0.13	ブラウン	切り口がやや粗い	970	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.19	0.18	イエロー	一部欠損
871	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.18	0.15	ブラウン	孔小さい	971	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.28	0.25	イエロー	一部欠損
872	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.18	0.13	0.13	ブラウン	円柱状。両面斜めカット	972	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.16	0.3	0.25	イエロー	楕円形
873	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.1	0.22	0.12	ブラウン	ドーナツ状	973	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.15	0.25	0.22	イエロー	両面斜めにカット
874	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.18	0.15	ブラウン	気泡スジあり	974	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.13	0.25	0.24	イエロー	一部欠損。ドーナツ状
875	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.14	0.18	0.15	ブラウン	円柱状	975	A-4-4-E-10	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.22	0.2	イエロー	ドーナツ状
876	A-4-4-E-7	栗玉	Ⅳ-b	0.08	0.2	0.28	ブラウン	ドーナツ状									

参考・引用文献

- 前原市教育委員会 2000 『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
 甘木市教育委員会 1979 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集
 吉井町教育委員会 1990 『若宮古墳群Ⅱ』吉井町文化財調査報告書第6集
 荻田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究 1993 『番塚古墳』荻田町文化財調査報告書第20集
 由水常雄編 「中国の古代ガラス」『世界ガラス美術全集4』
 文化管理局 1976 『慶州皇南洞第98号古墳(南墳)発掘略報告』
 福岡県教育委員会 2009 『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第221集
 酒巻忠史 「東国における古墳時代の鑄造技術について」『君津市文化財センター研究紀要Ⅷ』
 富樫雅彦 「弥生・古墳時代ガラス」『考古資料大観6』
 藤田等 「第1節 装飾品ー玉類ー」『弥生時代ガラスの研究』

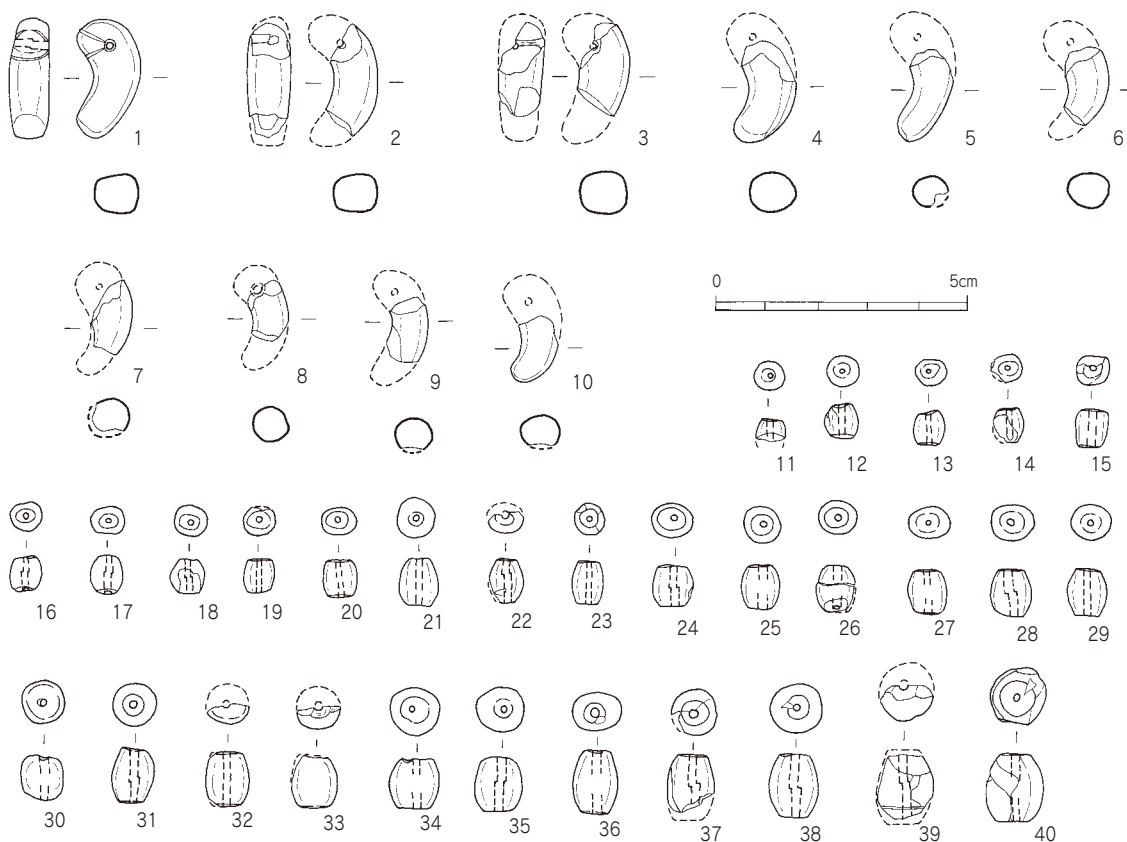
(大里弥生・海出淳平)

翡翠 (図版 32 - 4、第 36 図)

翡翠製品は1点しか出土していない。

994 は翡翠製勾玉である。長さ 1.73cm、厚さ 0.52cm で明緑色を呈す。

碧玉 (図版 32 - 4、第 36 図)



第 37 図 琥珀玉実測図 (2/3)

碧玉製品は計5点出土した。

995～999は碧玉製管玉である。長さ1.2～1.98cm、直径0.45～0.55cmを測る。999は表面の風化が進む。

(大里弥生・海出淳平)

琥珀 (図版33、第37図)

琥珀製の玉類は、勾玉、棗玉、丸玉が確認される。いずれも透明の深紅色だが、表面は付着土が覆っており、その色調は明瞭ではない。以下、種類ごとに概要を説明する。

勾玉は形状が明瞭な10点を掲載・計測を行った。1のみがほぼ完形資料で、長さ2.35cm、幅1.25cm、最大厚0.80cm、1.3gで、両面穿孔により穿孔されているようである。また、この資料にのみ、孔から放射状に二条の沈線が見られ、丁字頭となっているのが分かる。他の資料については、孔周辺が良好に残存しているものがないため、1のような沈線が施されているのか否かは不明。2・3も両面穿孔している様子が見受けられる。図示不可能な細片もあり、それらの合計重量は7.6gに上る。単純に1の重量である1.3gで割った場合、完形で6点ほどの重量となるが、2～10と同一個体になる破片も混じっていることが想定されるため、合計点数は不確かである。

両側面を明瞭に面を作り出しているのが棗玉、丸く湾曲するものが丸玉であるが、両者を明確に分けることは難しいため、両者を併せて報告する。

形状が明瞭な30点を掲載した。径0.59～1.15cm、長さ0.63～1.36cmとばらつきがある。14・18・22・29・31などは明瞭に棗玉と言える形状を呈している一方で、16・30・35などは丸玉と言える形状を呈する。重さも0.1g未満～0.9gと寸法と同じくばらつきがある。穿孔は両面穿孔でなされ、37の部分写真を見ると、孔の内部に残された線条痕を見ることが出来

第3表 琥珀製玉類計測表

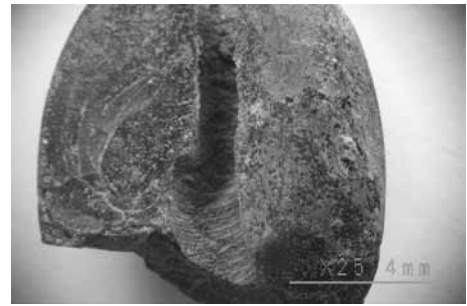
No.	種類	長さ	幅 (径)	厚	重量	No.	種類	長さ	幅 (径)	厚	重量
1	勾玉	2.35	1.25	0.80	1.3	21	棗玉・丸玉	0.76	0.92		(0.2)
2	勾玉	(2.27)	(0.98)	0.83	(1)	22	棗玉・丸玉	0.87	0.65		0.1
3	勾玉	(1.86)	(0.97)	0.88	(0.8)	23	棗玉・丸玉	0.81	0.58		0.1
4	勾玉	(1.97)	(1.11)	0.84	(0.9)	24	棗玉・丸玉	0.79	0.68		0.2
5	勾玉	(1.86)	(0.89)	(0.52)	(0.5)	25	棗玉・丸玉	0.83	0.74		0.2
6	勾玉	(1.54)	(0.84)	(0.75)	(0.6)	26	棗玉・丸玉	0.82	0.75		0.3
7	勾玉	(1.36)	(0.74)	(0.68)	(0.4)	27	棗玉・丸玉	0.87	0.74		0.2
8	勾玉	(1.10)	(0.69)	(0.75)	(0.4)	28	棗玉・丸玉	0.92	0.76		0.3
9	勾玉	(1.24)	(0.62)	(0.75)	(0.4)	29	棗玉・丸玉	0.89	0.74		0.2
10	勾玉	(1.33)	(0.77)	(0.55)	(0.3)	30	棗玉・丸玉	0.85	0.86		0.4
11	棗玉・丸玉	0.55	(0.48)		(0.1未満)	31	棗玉・丸玉	1.04	0.83		0.4
12	棗玉・丸玉	0.61	0.66		0.1	32	棗玉・丸玉	1.06	0.86		(0.2)
13	棗玉・丸玉	0.64	0.69		0.1	33	棗玉・丸玉	(0.99)	0.91		(0.4)
14	棗玉・丸玉	0.66	0.63		(0.1未満)	34	棗玉・丸玉	1.04	1.00		0.6
15	棗玉・丸玉	0.66	0.76		(0.1)	35	棗玉・丸玉	1.07	0.92		0.5
16	棗玉・丸玉	0.63	0.60		0.1	36	棗玉・丸玉	1.24	0.92		0.5
17	棗玉・丸玉	0.67	0.61		0.1	37	棗玉・丸玉	(1.05)	0.93		(0.6)
18	棗玉・丸玉	0.68	0.59		0.1	38	棗玉・丸玉	1.37	1.02		0.7
19	棗玉・丸玉	0.69	0.60		(0.1未満)	39	棗玉・丸玉	1.26	(1.18)		(0.6)
20	棗玉・丸玉	0.68	0.65		0.1	40	棗玉・丸玉	1.36	1.15		0.9

単位はcm・g

る。勾玉同様、図示不能な残欠が多数あり、その合計重量は23.1gに上る。これらには勾玉の細片も混じっていると見られるし、1点あたりの重量もばらつきがあるため、点数の復元は困難である。50点～250点の間の点数ということだけは言えそうである。

なお、琥珀については、津屋崎古墳群内では、現在のところ、新原・奴山7号墳で原石が採集されているのみであり、事例としては稀少である。

(岡寺良)



琥珀玉 37 の部分写真
(九州歴史資料館撮影)

3 武器

(1) 刀剣類 (図版 34, 第 38 ～ 40 図)

今回報告する刀剣類については、既に横田義章氏が本古墳と福津市奴山正園古墳（旧奴山5号墳）出土刀装具について紹介する中で、詳細な観察のよる刀装具の特徴について論じている（横田 1982）。ここでは、この横田氏報告を基礎に概要報告を行いたい。

出土した刀剣類は横田氏の報告を基礎に改めて数えると、残存状況が良い把部分で数えた鹿角製装具付大刀は40振以上、鹿角製装具付剣3振と身部分のみ残る剣1振の剣4振、銀製装具付素環頭大刀1振である。このうち大きく分けると、鹿角製装具付大刀は3種類、剣も3種類が確認された。

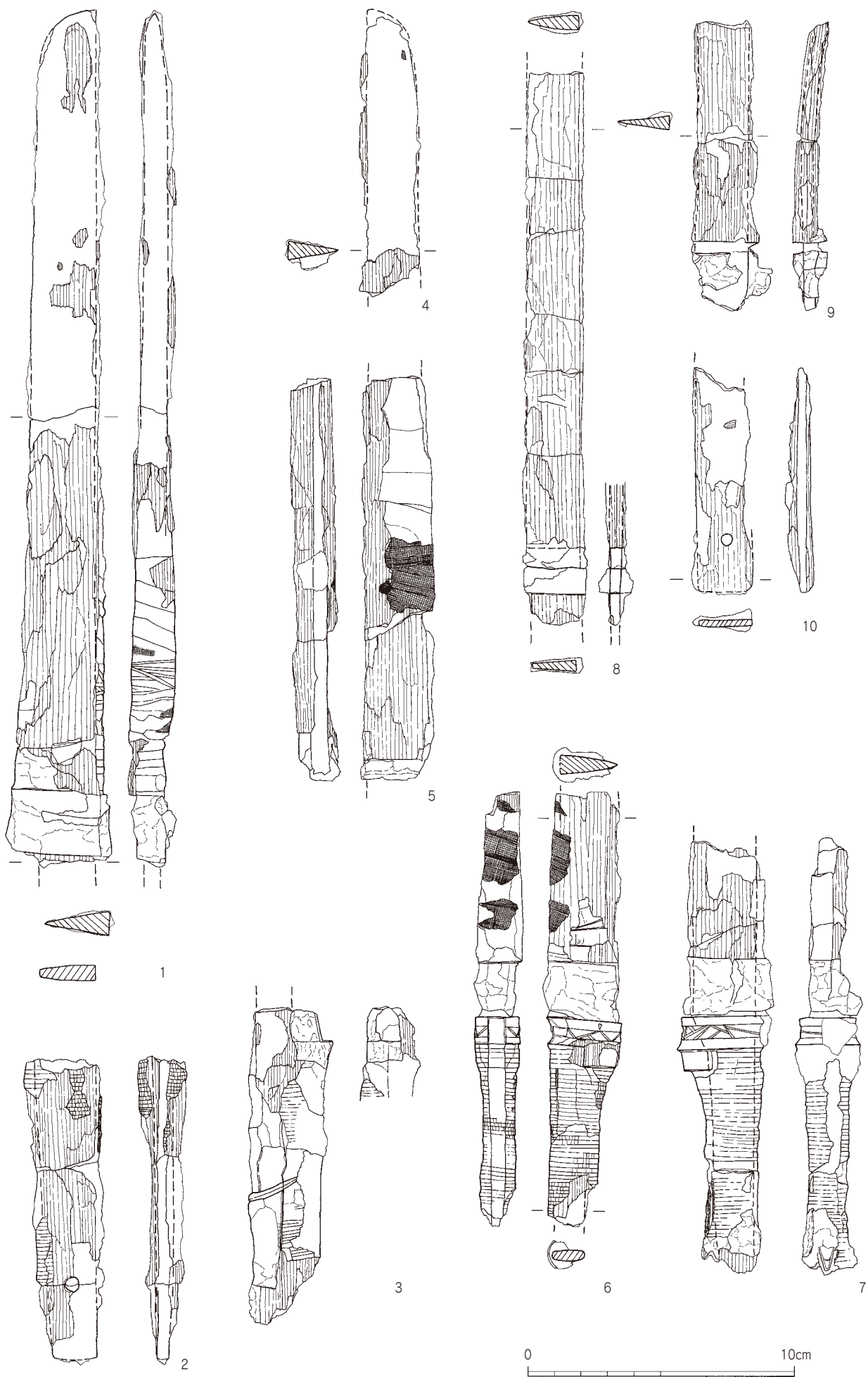
今回掲載した実測図はその各類のうち代表的なものを掲載したが、これらはさらに増減する可能性があることを予めご了承ください。

鹿角製装具付大刀・大 (第 38 図 1 ～ 3)

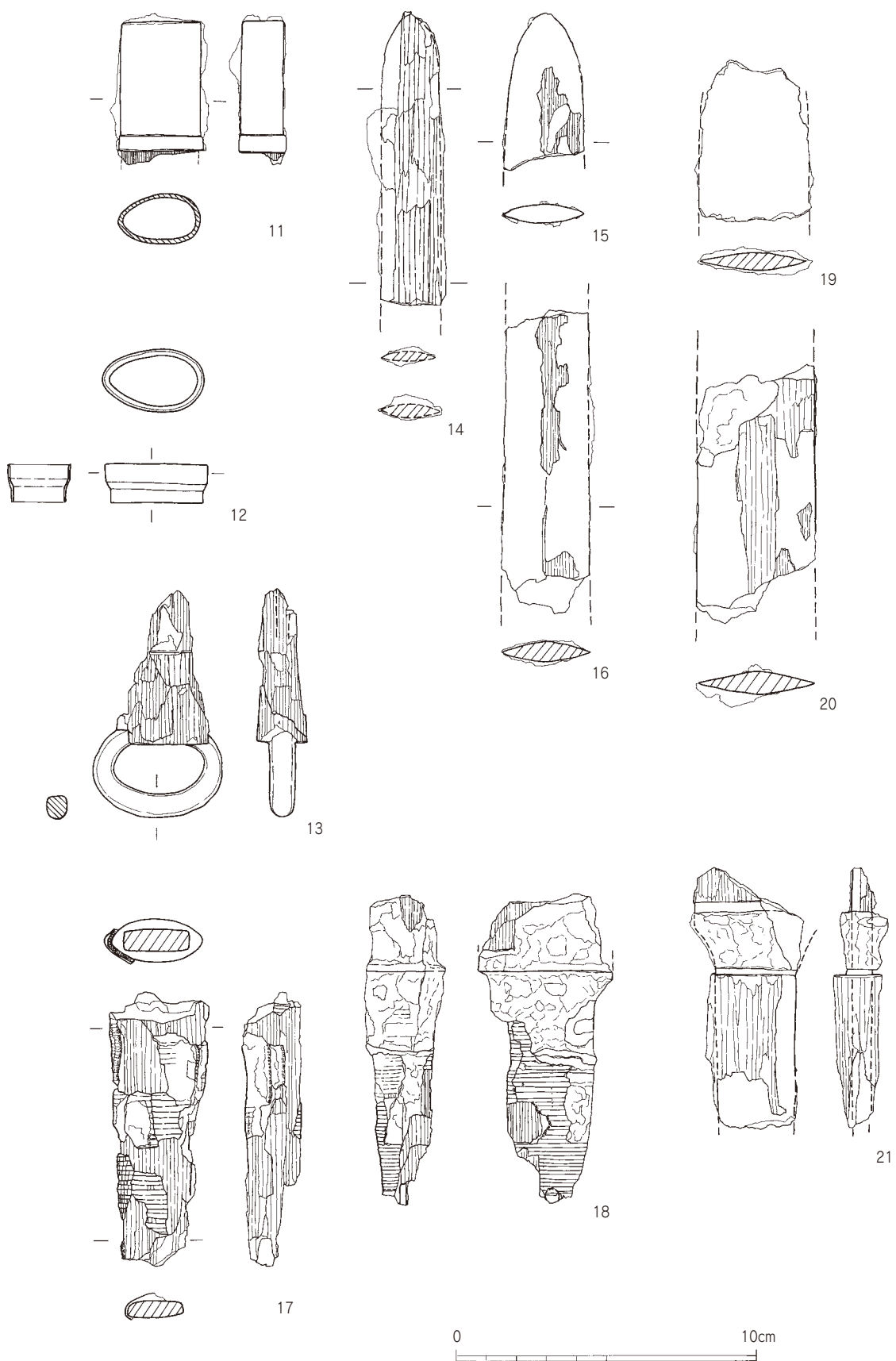
出土大刀の中では大形であるが、身～関部分が出土刀剣類で唯一残る1でも現存長32.2cm、最大身幅は2.6cm、身背部厚1cmと横田氏が指摘するように短刀的な要素が強いものである。

1の身は切先に向かって次第に幅が減っていくもので、鞘口には鞘木を8mm程挿入するキャップ式の鹿角製装具を用いている。関の形状は観察できなかったが、わずかに残る茎部から腹部のみ直角に折れる形状であると考えられる。鞘木は2枚を合わせたもので、合わせた後に7mm程の布を巻いているが、関に近い背部には布の上に1mm程の紐をあまり規則性がなく巻いている痕跡が認められた。ちなみに布は鞘口近くでは横方向に丁寧に巻いているが、それ以外は斜め方向に巻いている。

この類の把と想定した2・3は、茎を背から落とし込み、2本で1単位となる幅1.5mmの繁巻で茎を固定している。この2本1単位の繁巻の構造については、刀剣類の全容報告の際にX線分析装置や実体顕微鏡などを用いて詳しく検討したいと考えている。そのため、この報告では繁巻の表現を現状で観察できる部分のみ図化した。2は茎尻から2.6cmの箇所には径5mmの目釘穴があり、目釘には鉄を用いている。3は把縁の腹側に切れ込みのある鹿角製装具を使用しており、後述する6・7のような木製装具と組み合わさっていたと考えられる。把間は繁巻の上に何かの素材を巻いていることが把間中央の段や断面から確認できるが、この材質や役割につ



第 38 図 大刀実測図 (1/2)



第 39 図 素環頭大刀・鉄剣実測図 (1/2)

いては今後の課題である。なお試験的に行ったX線分析の結果、3は目釘穴が上下2箇所確認され、関は腹側のみ山形状に斜めに広がる特殊な構造であることが判明した。

鹿角製装具付大刀・中（第38図4～7、第40図1～6）

出土大刀の主体となる本類については、既に横田義章氏の詳細な観察による刀装具の復元及び類例との検討（横田1982）があり、その先行研究を基礎に今回観察を行った。

4は身の切先部片、5は鞘口～身中央部片であるが、両者から身の幅は関からほとんど変わらず、切先部で急激に減じることが分かる。5は鞘木を凸状に加工することで鹿角製鞘口装具を装着するが、鞘木は切先側1cmまでで、鞘口端までの7mm程は鹿角製装具のみとなる。鞘木は2枚を合わせたものの上に、ガーゼ状の薄い繊維状のものを全体的に被せ（第40図1）、その上に7mmほどの布を密に巻く（第40図2）という作りである。このような作りは現状ではこの1点のみである。

6・7は本類の身～把部である。いずれも鞘口には鹿角製装具と縦に2稜を有する間の凹み部に直弧文が施された木製の把縁を装着しているため（第40図3・4・6）、現状では関の構造は不明であるが、X線分析装置で試験的に観察した結果では、7のようにいずれも破線で示す斜めの関となるようである。7の茎には目釘穴が2箇所あるが、図化はできていない。

6の茎は背から落とし込み（第40図5）、大刀の大小同様、把間には2本で1単位となる幅1.5mm程の繁巻で固定している（第40図4・6）。横田氏も指摘しているが、切先側の木製装具と接する部分は幅2mm近くある太目の繁巻で、段状に突出した木製装具との間は幅1cm×2mmほどの横長の穴で繁巻は止められている（第40図4・6）。横田氏はこの穴は玉纏大刀の紐通し穴と想定している（横田1982）。把頭部が幅広くなる7には、把頭にも鹿角製装具を繁巻の上に装着しているが（第40図3）、鹿角製装具の残りが悪いため、その形状は不明である。鞘木は7から2枚合わせたもので、6から鞘木は切先側1cmまでで、鞘口端までの1.2cm程は鹿角製装具のみとなる。6の鞘木には幅7mm程の布で密に巻くが、5のような布の下のガーゼ状の繊維痕跡は確認できない。

鹿角製装具付大刀・小（第38図8～10）

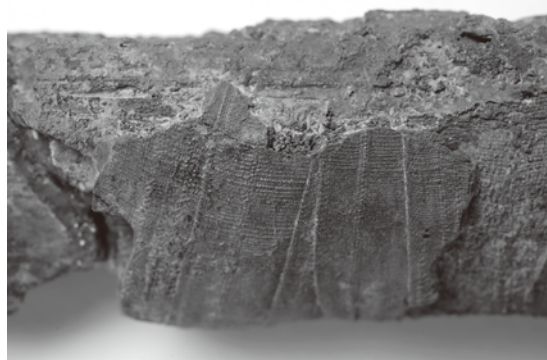
この類は身背部の厚さが6mm程と薄く、また身は関まで幅・厚さともほとんど変わることがなく、真っ直ぐな平面形状である。8は鞘口に鹿角製装具、把縁にはおそらく把と一体となった木製装具を装着している。9は鞘口・把縁とも鹿角製装具を用いていることや、茎部が曲がる形態であることから、今後この類は細分できる可能性がある。

8の関は背・腹両側がわずかに直角に曲がる形状で、把縁下部の直角の切れ込みは把縁に突起が付いた痕跡と考えられるが、その残りが悪いため原形は不明である。8・10の把間は木のままであったと想定される。

身が土圧で曲がった9は、鞘口と把縁に鹿角製装具を用いるが、把縁背部の切れ込みは突起の痕跡であると考えられる。鞘口の鹿角製装具は鞘木の上から装着しているが、把縁は茎の上にそのまま装着している。また鞘口と把縁には4mm程の隙間があるが、製作当初から隙間があった可能性が考えられる。なお、試験的にX線分析装置で分析したが、茎は腹側に湾曲しており、



1. 大刀（中）鞘ガーゼ状繊維



2. 大刀（中）鞘布巻き



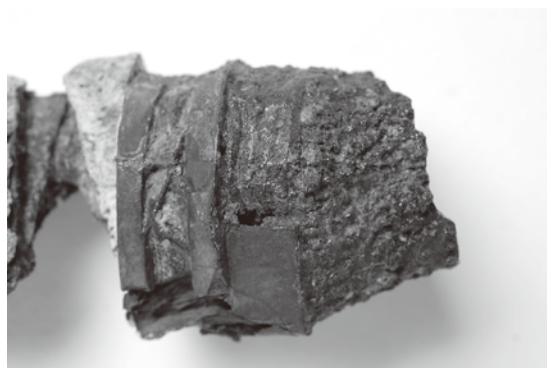
3. 大刀（中）鞘口～把頭構造



4. 大刀（中）の鞘口、把縁構造



5. 大刀（中）の把背落とし込み



6. 大刀（中）繁巻と把縁構造



7. 剣（中）繁巻と鹿角製装具



8. 剣（中）繁巻構造

第40図 刀剣類の細部構造

蕨手状のものであったと考えられるが、詳細は全容報告の際に細分も含めて検討したい。10はこの類の把で、茎厚は4mm程と薄い。茎尻から1.75cmの箇所に径4mmの目釘穴があり、目釘は木製と思われる。

銀製装具付鉄素環頭大刀（第39図11～13）

現状で確認できたのは、11の銀製鞘尻金具、12の銀製鞘口金具、13の鉄素環頭部である。この3点からこの鉄素環頭大刀は小振りなものとなる。11の鞘尻金具は長4.4cm、幅2.7×1.4cmの楕円柱形で、端部には幅5mmの突線により区画する。外側には木片など後の付着物が顕著であり、内側には鞘木が付着しているため、構造は不明である。12の鞘口金具は凸状に2段になり、長さ1.3cm、幅3.4cm×2.1cmと3.1cm×1.85cm、厚さは1mmを測り、留穴もないことから、鞘木を段に加工することで装着したと想定している。

別造りとなる13の鉄素環頭部は、4.4×3cmの楕円形を呈する環頭部に木製装具が付くが、木製装具の把頭から切先側に3cmほどの箇所に切り込みが認められるため、把間には別の装具があったと考えられる。環頭部の取り付け部は欠損部で幅1.1cm、厚さ4mmを測る。なお、茎と把とを固定する目釘穴は現状では確認できず、切先側の欠損部にあった可能性がある。

剣・小（第39図14）

4振確認した剣は、先述の横田氏の報告でも図化されておらず、また点数も少ないため、すべて報告する。小形の剣で確認できたのは身切先部のみである。鞘木は2枚合わせたものと考えられる。現存長9.7cm、身幅2cm、身厚5cmを測る。

鹿角製装具付剣・中（第39図15～18、第40図7・8）

確認できたのは15の身切先部と16の身中央、17・18の把である。15～17から身は切先～関までほとんど幅が変わらない形状となる。17・18は把木に茎を挿入、18のように目釘で固定、大刀と同じく2本1単位の幅1.5mm程の繁巻を行った後、鹿角装具に把全体を挿入したものである。17は鹿角と繁巻の断面からこの構造を良く観察できる（第40図7・8）。

18の把縁は突線状となることから、鹿角装の把縁は鞘口まで逆凸状に一段幅広がっていたと思われる。また切先側の断面には繁巻が認められないため、鹿角装下の繁巻はこの突線付近までで、この突線以上は把木の上に鹿角製装具を装着していたと考えられる。

鹿角製装具付剣・大（第39図19～21）

確認できたのは19の身切先部と20の身中央、21の把である。現状では刀剣類では最も大きなものとなる。19・20から身は切先～関までほとんど幅が変わらない形状となる。20の鐔部にある木片は錆の上に付着していることから、鞘ではない。21は関右側が欠損するが、逆八の字状に広がる撫関となる可能性が高い。鞘木と鹿角装の把縁、木製の把間はそれぞれ隙間があるが、製作当初からのものであるのか、また現在は欠損するものの、その隙間に何かを充填していたのかは不明である。把は茎を挿入するものであるが、17・18と比べ厚みがなく、平べったいものとなる。把縁の鹿角製装具は残りが悪く、原形は分からない。

参考・引用文献

- 横田義章 1982 「5世紀代古墳出土刀装具の例」『九州歴史資料館研究論集8』九州歴史資料館
岡村秀典・重藤輝行編 1993 『番塚古墳』 菊田町文化財調査報告書第20集 菊田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究室
豊島直博 2007 「古墳時代前期の刀装具」『考古学研究』第54巻第1号 考古学研究会
豊島直博 2008 「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』 同成社

(大庭孝夫)

(2) 鉄鏃 (図版 35・36、第 41～44 図)

今回の作業にあたり、まず前回報告で 300 本以上と報告されていた鉄鏃の個体数を把握することから始めた。攪乱を受けていたため完形をとどめているものが少なかった。そのため、個体数が確認できる鏃身部・茎部が残存しているものを数えている。鏃身部から推測できる最小個体数は 285 点である。

柳葉式鉄鏃 (第 41 図 1～15)

柳葉式鉄鏃は 52 点確認できる。そのうち実測図を 15 点掲載している。柳葉式鉄鏃は直線的な刃部を持ち、茎関がナデ関のものと鏃身部長が 6.5cm 以上の大型のもので 6.5cm 以下の小型で茎関はナデ関のもの 2 種類に分かれる。矢柄との接続部が残る 7・11・13 は台形関である。

腸袂柳葉式鉄鏃 (第 41 図 16～27)

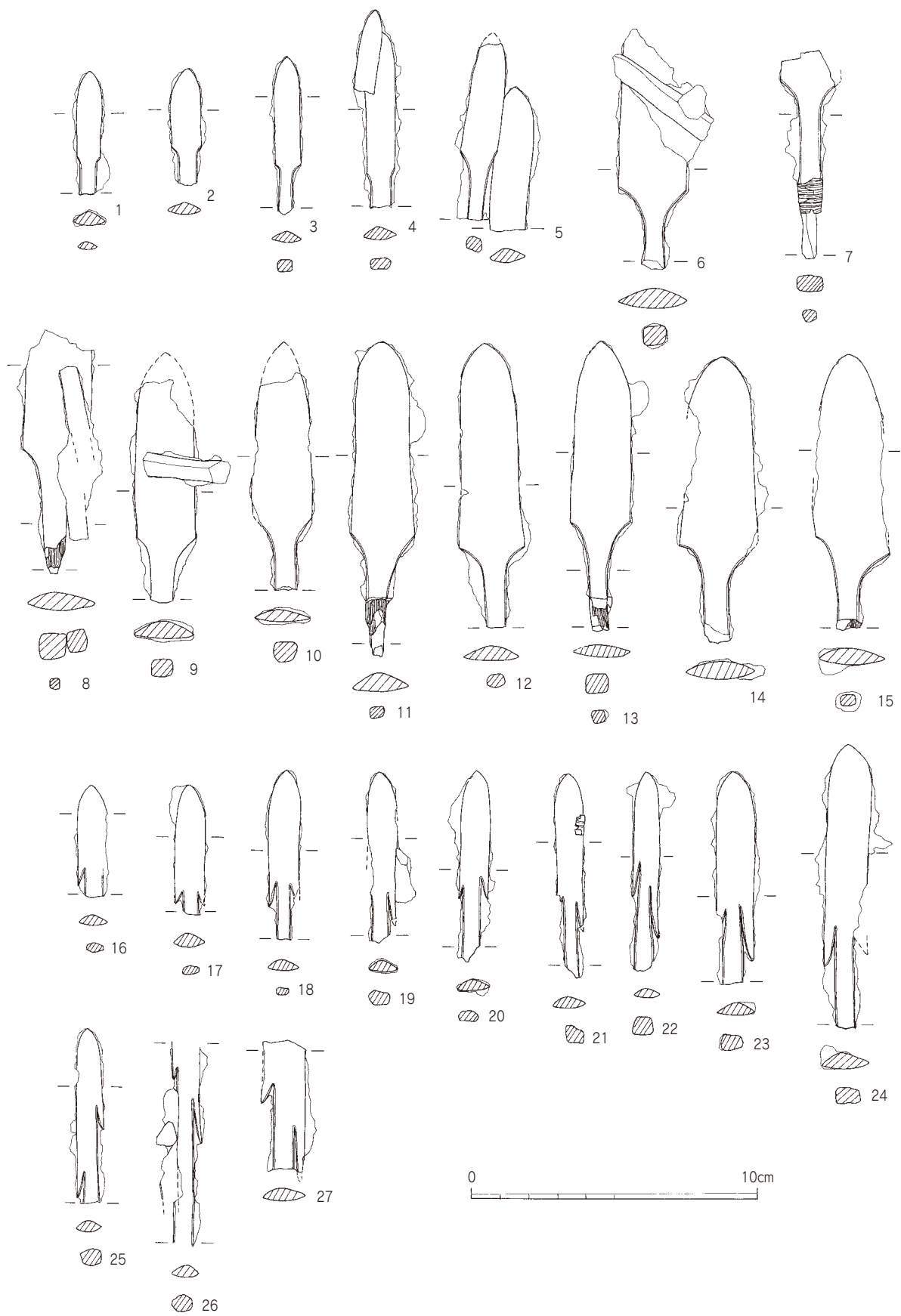
鏃身部に腸袂をもつ鉄鏃である。腸袂柳葉式鉄鏃は 14 点確認できる。そのうち実測図は 12 点掲載している。鏃身は 4～8cm で腸袂は鏃身部長が長いものは腸袂を比較的深く切り込んでいる。22～27 は段違いの腸袂をもつ。

独立片腸袂式鉄鏃 (第 42 図 28～60)

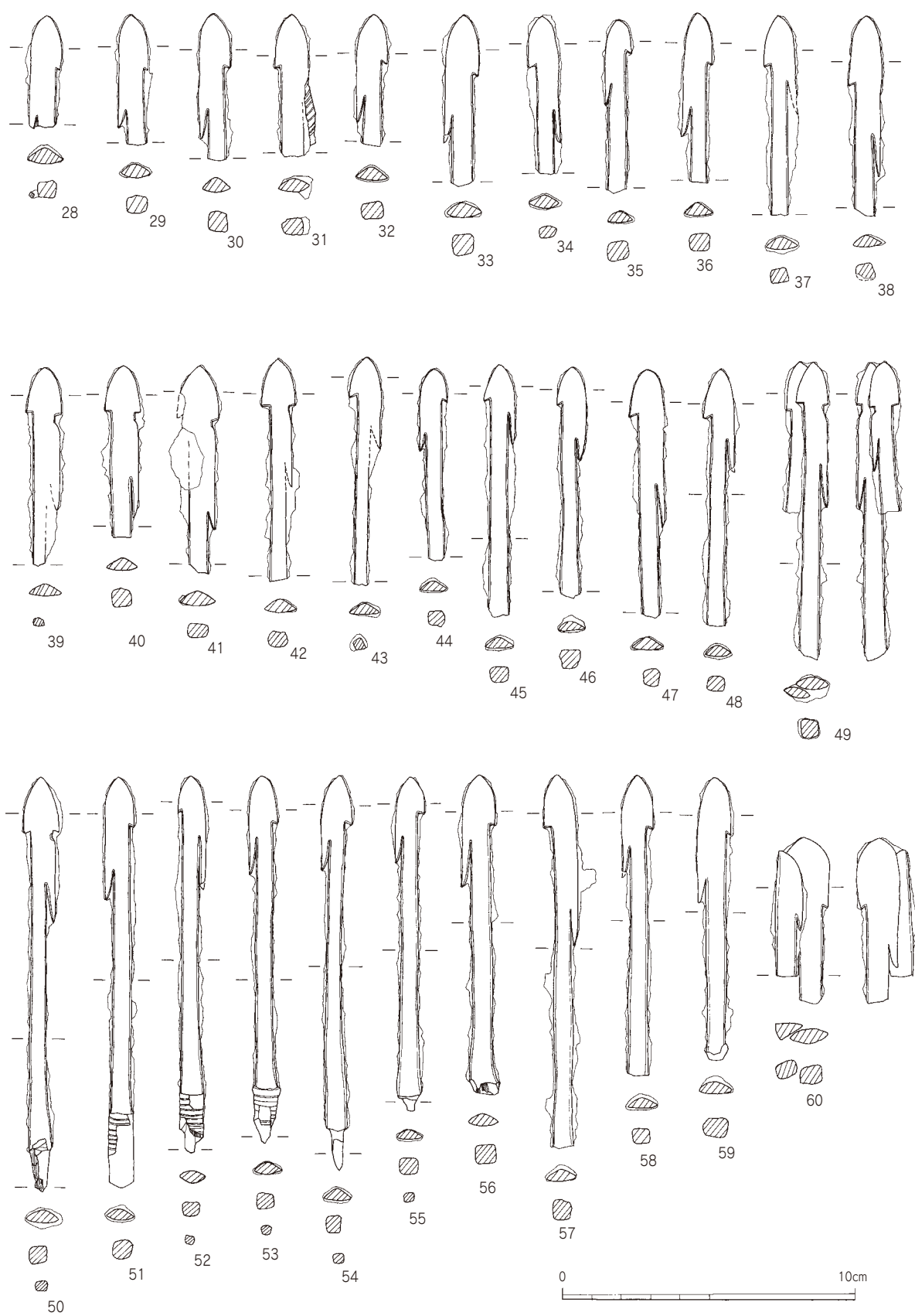
腸袂をもつもので、頸部片側に独立した腸袂をもつ鉄鏃である。勝浦峯ノ畑古墳で確認された独立片腸袂をもつ鉄鏃は全体で 62 点である。本古墳出土の独立片腸袂式鉄鏃は腸袂のある側の鏃身部の関が存在しないものや鏃身部の関は確認できるが不明瞭なもの 2 種類存在する。鏃身部の関が確認できないものは 56 点、鏃身部の関が確認できるものは 6 点である。そのうち実測図を掲載しているものは 34 点である。39～42、49・50 は片側の鏃身部関が存在しない一群である。51～53 は口巻残存している。52・53 では茎部と矢柄の接続のため、樹皮で巻いたあと糸巻きを施しているのが観察できる。鏃身断面はほとんどが片鏑・片丸である。平坦面を下にして据えた場合、長辺側は左右まちまちに存在しており、片腸袂を付ける方向に規則性はない。

片刃式鉄鏃 (第 43 図 61～95・第 44 図 102～122)

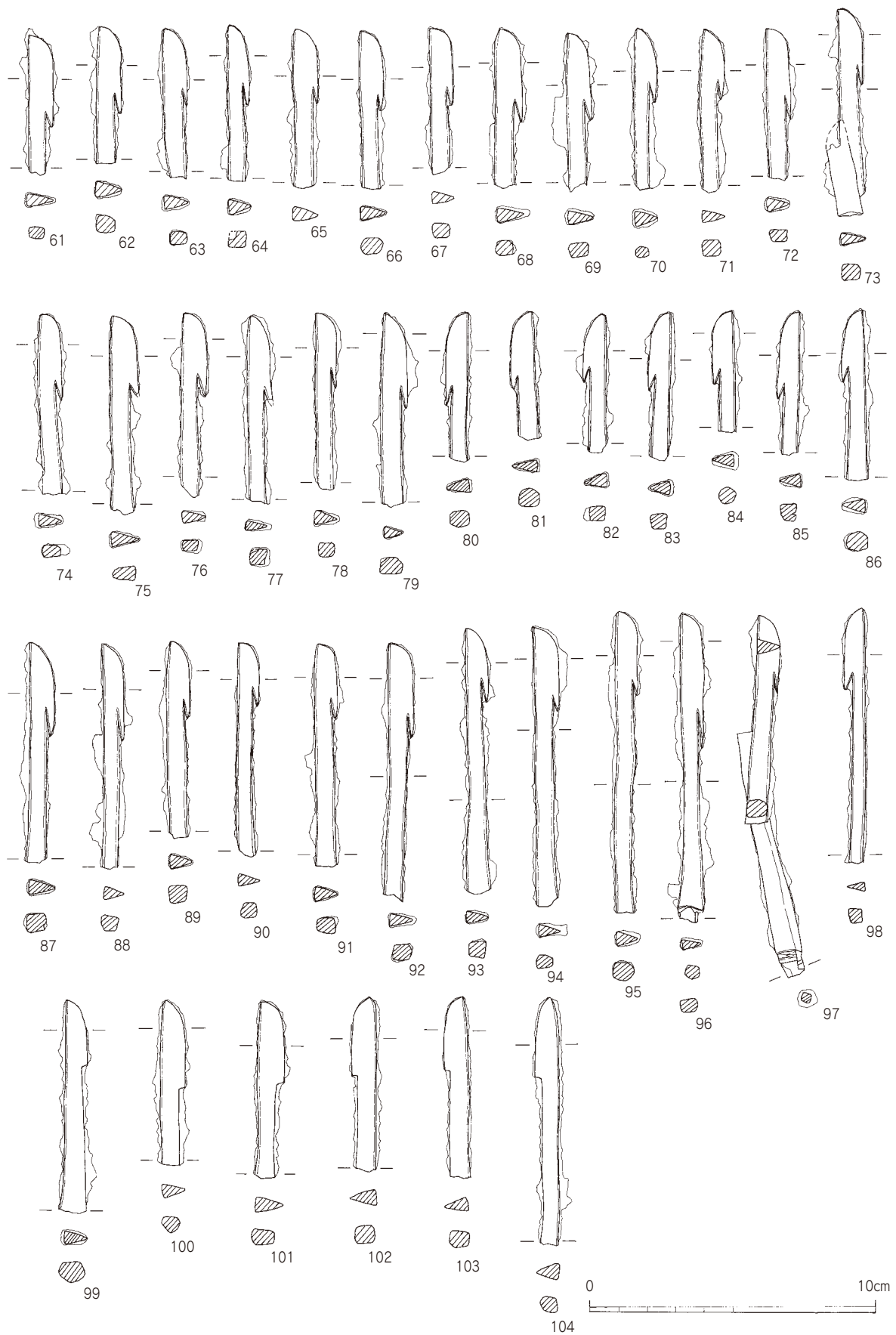
61～95・102～122 は腸袂をもつ片刃式鉄鏃である。確認できたのは 147 点と、本古墳ではもっとも多く出土している形態である。そのうち腸袂をもつものは 101 点、腸袂りをもた



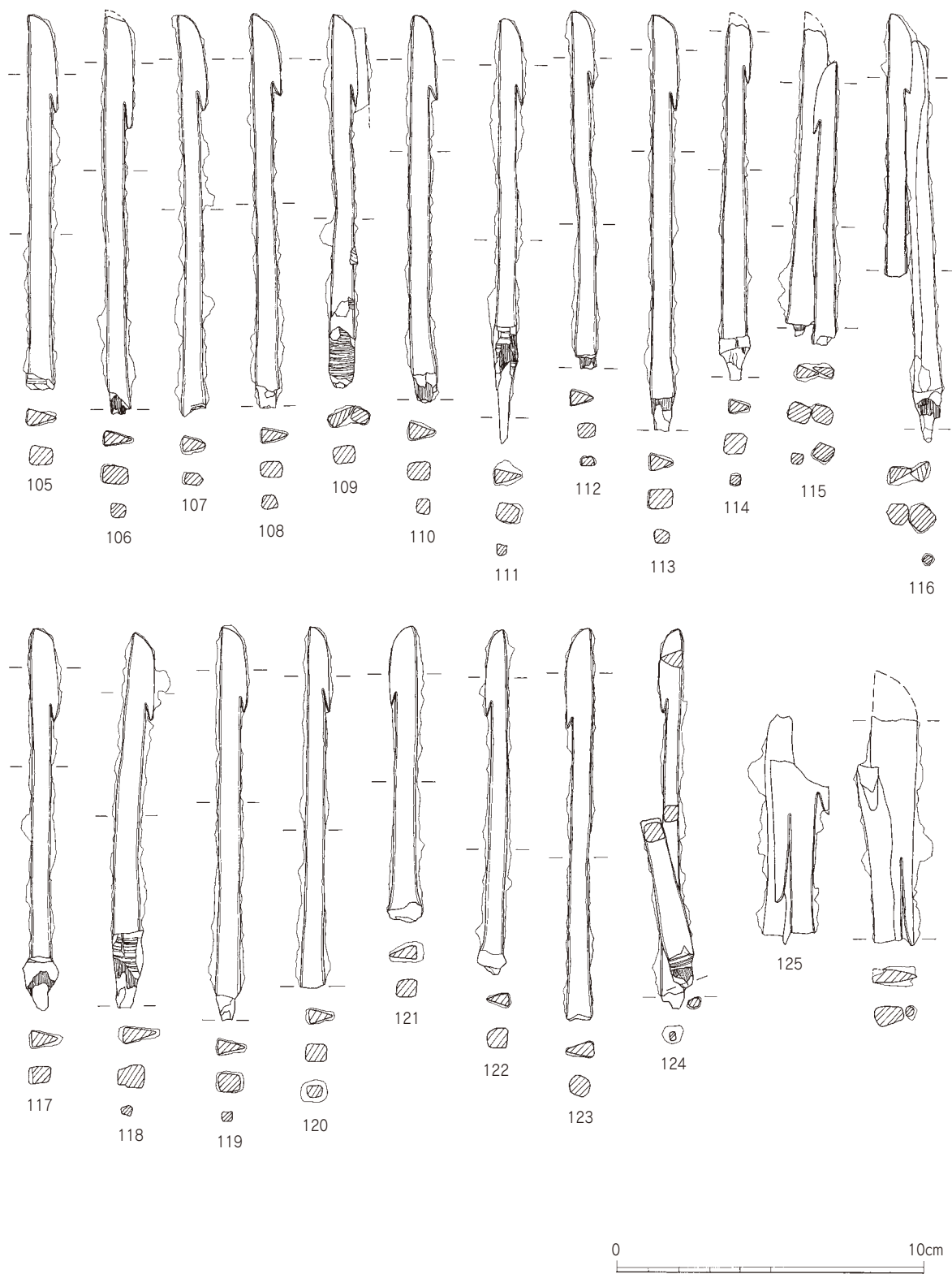
第41図 鉄鍬実測図①（柳葉式・腸挟柳葉式鉄鍬）（1/2）



第42図 鉄鍬実測図②（独立腸扶式鉄鍬）（1/2）



第43図 鉄鏃実測図③ (片刃式鉄鏃①) (1/2)



第44図 鉄鏃実測図④ (片刃式鉄鏃②) (1/2)

第4表 鉄鍬計測表

No	鍬身部		頸部	鍬長	鍬身長	頸部長/茎部	鍬幅	備考	No	鍬身部		頸部	鍬長	鍬身長	頸部長/茎部	鍬幅	備考
	鍬形態	関	関							鍬形態	関	関					
1	柳葉	ナデ	—	4.3	3.1	—	0.9		64	片刃	腸挟	—	5.4	2.7	—	0.8	
2	柳葉	ナデ	—	4	2.9	—	1.05		65	片刃	腸挟	—	5.6	2.6	—	0.9	
3	柳葉	ナデ	—	5.5	4	—	0.9		66	片刃	腸挟	—	5.6	2.8	—	0.8	
4	柳葉	ナデ	—	6.2	5.2	—	1.05	2本錆着	67	片刃	腸挟	—	5.2	2.7	—	0.75	
5	柳葉	ナデ	—	6.4	4.6	—	1.2	2本錆着	68	片刃	腸挟	—	5.6	3.3	—	0.9	
5	柳葉	—	—	—	4.9	—	1.3		69	片刃	腸挟	—	5.6	3.1	—	0.85	
6	柳葉	ナデ	無関	6	7.7	1.3	2		70	片刃	腸挟	—	5.7	2.6	—	0.8	
7	柳葉	ナデ	無関	6.7	1.7	6	(2.1)		71	片刃	腸挟	—	5.7	2.5	—	0.8	
8	柳葉	ナデ	無関	8.6	4.2	3.1	2.3	3本錆着(二本頸部)	72	片刃	腸挟	—	5.3	3.2	—	0.8	
9	柳葉	ナデ	無関	10.1	6.4	2.6	2		73	片刃	腸挟	—	6.6	2.6	—	0.85	2本錆着(一本頸部)
10	柳葉	ナデ	—	7.6	5.2	—	2.1		74	片刃	腸挟	—	6.3	3	—	0.8	
11	柳葉	ナデ	無関	11	7.7	1.3	1		75	片刃	腸挟	—	6.9	2.7	—	0.9	
12	柳葉	ナデ	—	10	7.2	—	2		76	片刃	腸挟	—	6.4	2.9	—	0.9	
13	柳葉	ナデ	無関	7	2.8	4	2.1		77	片刃	腸挟	—	6.6	3	—	0.85	鍬身不明瞭
14	柳葉	ナデ	—	10	4.6	—	2.7		78	片刃	腸挟	—	6.2	2.6	—	0.75	
15	柳葉	ナデ	—	9.7	7	2.4	2.4		79	片刃	腸挟	—	6.8	3.3	—	0.75	
16	柳葉	腸挟	—	3.9	3.5	—	1		80	片刃	腸挟	—	5.2	3.2	—	0.8	
17	柳葉	腸挟	—	4.5	4	—	1.1		81	片刃	腸挟	—	4.6	2.7	—	0.9	
18	柳葉	腸挟	—	5.9	4.8	—	1.1		82	片刃	腸挟	—	4.8	2.4	—	0.8	
19	柳葉	腸挟	—	6	5.4	—	1		83	片刃	腸挟	—	5.2	2.7	—	0.8	
20	柳葉	腸挟	—	6.7	4.5	—	1		84	片刃	腸挟	—	4.2	2.5	—	0.8	
21	柳葉	腸挟	—	7.3	5.5	—	1		85	片刃	腸挟	—	5	3	—	0.8	
22	柳葉	腸挟	—	7	5.8	—	0.9		86	片刃	腸挟	—	5.9	2.5	—	0.8	
23	柳葉	腸挟	—	7.5	6.7	—	1.85		87	片刃	腸挟	—	7.6	2.3	—	0.85	
24	柳葉	腸挟	—	10	7.8	—	1.5		88	片刃	腸挟	—	7.9	3.4	—	0.7	
25	柳葉	腸挟	—	6.1	5.7	—	0.9	段違い腸挟	89	片刃	腸挟	—	6.9	2.7	—	0.8	
26	柳葉	腸挟	—	7.2	—	—	0.95	2本錆着(一本頸部)	90	片刃	腸挟	—	7.5	2.2	—	0.7	
27	柳葉	腸挟	—	4.6	—	—	1.4	段違い腸挟	91	片刃	腸挟	—	7.8	2.65	—	0.8	
28	柳葉	独立片逆刺	—	3.9	2	—	1.1		92	片刃	腸挟	—	9.2	3.3	5.7	0.87	
29	柳葉	独立片逆刺	—	4.5	1.9	—	1		93	片刃	腸挟	—	9.3	2.6	—	0.8	
30	柳葉	独立片逆刺	—	5	1.9	—	1.05		94	片刃	腸挟	—	9.9	3	6.6	0.9	
31	柳葉	独立片逆刺	—	4.9	1.9	—	1.1	鍬身両関あり?	95	片刃	腸挟	—	10.5	2.9	7.6	0.8	
32	柳葉	独立片逆刺	—	4.5	2.7	—	1		96	片刃	腸挟	台形	10.7	4.8	10		
33	柳葉	独立片逆刺	—	5.8	2.1	—	1.1		97	片刃	腸挟	(台形)	7.3	2.6	—	0.9	2本錆着(一本頸部~茎部)
34	柳葉	独立片逆刺	—	5.4	1.8	—	1		98	片刃	腸挟	—	9	2.8	6	0.7	
35	柳葉	独立片逆刺	—	5.9	1.1	—	0.85		99	片刃	腸挟	—	7.6	2.3	—	0.8	
36	柳葉	独立片逆刺	—	5.8	1.7	—	0.9		100	片刃	角	—	5.8	3.1	—	0.85	
37	柳葉	独立片逆刺	—	6.8	1.8	—	1.05		101	片刃	角	—	6.2	2.9	—	0.9	
38	柳葉	独立片逆刺	—	6.9	2.4	—	1.1		102	片刃	角	—	6.1	2.7	—	0.9	
39	柳葉	独立片逆刺	—	4.8	1.6	—	1.1	鍬身両関あり?	103	片刃	角	—	6.3	2.5	—	0.8	
40	柳葉	独立片逆刺	—	5.9	1.5	—	1.1	鍬身両関あり?	104	片刃	角	—	8.7	2.7	—	0.82	
41	柳葉	独立片逆刺	—	7.1	1.8	—	1.4	鍬身両関あり?	105	片刃	腸挟	台形	12.1	3.2	9.5	0.9	
42	柳葉	独立片逆刺	—	10.9	1.6	—	1.1	鍬身両関あり?	106	片刃	腸挟	台形?	13	3.6	9.2	0.85	
43	柳葉	独立片逆刺	—	7.8	1.4	—	1.1		107	片刃	腸挟	—	13.1	3	9.9	0.8	樹皮少量残存
44	柳葉	独立片逆刺	—	6.6	1.2	—	0.9		108	片刃	腸挟	台形	12.9	2.7	9.6	0.9	
45	柳葉	独立片逆刺	—	8.5	1.2	—	1		109	片刃	腸挟	台形	12.1	3	6.5	0.7	糸巻き痕、樹皮付着
46	柳葉	独立片逆刺	—	7.9	1.3	—	0.9		110	片刃	腸挟	台形	12.7	2.8	9	0.8	樹皮残存
47	柳葉	独立片逆刺	—	8.6	1.6	—	1.15		111	片刃	腸挟	台形	13.8	2.8	7.2	0.8	樹皮残存
48	柳葉	独立片逆刺	—	8.8	1.7	—	1		112	片刃	腸挟	台形	11.6	2.4	8.7	0.7	
49	柳葉	独立片逆刺	—	5.2	1.8	—	1	2本錆着、鍬身両関あり	113	片刃	腸挟	台形	13.6	3.15	9.4	0.8	
49	柳葉	独立片逆刺	—	10.1	1.4	—	1.1		114	片刃	腸挟	台形	11.6	1.9	8.3	0.8	
50	柳葉	独立片逆刺	台形	14.2	2	10.5	1.2	口部上端に糸、鍬身両関あり?	115	片刃	腸挟	台形	10	2	7.5	0.85	2本錆着
51	柳葉	独立片逆刺	台形	14.1	1.7	—	1		115	片刃	腸挟	台形	9.1	2.3	6.5	0.75	
52	柳葉	独立片逆刺	台形	12.9	1.3	11.8	0.9	糸巻き痕	116	片刃	腸挟	—	9.9	2.6	—	0.8	2本錆着
53	柳葉	独立片逆刺	台形	12.6	1.6	9.3	0.95	糸巻き痕、樹皮残存	116	片刃	腸挟	—	13	2.7	8.5	0.9	
54	柳葉	独立片逆刺	台形	13.4	1.7	10.3	1		117	片刃	腸挟	台形	12.5	3	7.7	0.9	
55	柳葉	独立片逆刺	台形	11.5	1.3	9.7	0.95		118	片刃	腸挟	台形	12.3	2.8	7.1	0.85	糸巻き痕
56	柳葉	独立片逆刺	台形	10.9	1.7	8.7	1.1		119	片刃	腸挟	台形	12.8	2.8	9.2	0.85	
57	柳葉	独立片逆刺	—	12.8	1.8	—	10.5		120	片刃	腸挟	台形	11.8	2.8	9	0.7	
58	柳葉	独立片逆刺	—	10.3	1.9	—	1.1		121	片刃	腸挟	—	9.6	2.5	—	0.9	
59	柳葉	独立片逆刺	—	9.8	2.1	—	1.1		122	片刃	腸挟	台形	11.2	2.7	8.3	0.7	
60	柳葉	腸挟	—	4.3	2.7	—	1.1	2本錆着	123	片刃	腸挟	—	12.6	3.2	9.4	0.9	
60	柳葉	腸挟	—	5.7	2.3	—	1.5		124	片刃	腸挟	—	12.2	2.7	9.4	0.75	2本錆着(一本頸部~茎部)
61	片刃	腸挟	—	4.8	3.2	—	0.9		125	片刃	腸挟	—	7.3	—	—	1.5	2本錆着
62	片刃	腸挟	—	4.8	3.1	—	0.9		125	柳葉	腸挟	—	5.7	—	—	1.8	
63	片刃	腸挟	—	5.2	2.7	—	0.85										

ないものは6点であった。実測図は64点掲載している。全体的に腸袂は深く切り込んではいない。矢柄との接続部が残存しているものはX線撮影をおこない、観察すると関はすべて台形関であった。また、接続部付近まで残存しているものは、茎部に向かって頸部の幅が広がっているため台形関の可能性が高い。柳葉式鉄鏃と2点が銹着している。鏃身部は大型で深く切り込んだ腸袂をもつ。96～101は腸袂をもたない一群である。

出土鉄鏃の位置付け

勝浦峯ノ畑古墳出土の鉄鏃は柳葉式鉄鏃、腸袂柳葉式鉄鏃、独立片腸袂式鉄鏃に分かれた。出土鉄鏃の多くは3種類の長頸鏃で占められており、なかでも独立片腸袂式片刃鏃の出土量が多い。この片刃式鉄鏃は長頸鏃導入期から少し遅れてみられる。独立片腸袂式柳葉鏃の鏃身関は浅い袂をもつものが多く、さら独立片腸袂をもつことは長頸鏃が盛行する中期後半の様相を示している。一方で、本古墳には鏃身長が7.5cm以上の大型の柳葉式鉄鏃が存在している。これらの一群は片刃を主体とする時期以前にみられ、長頸鏃盛行期には組成に含まれない。よって、大型の柳葉式鉄鏃と長頸鏃は時期差をもって副葬された可能性が高い。

参考・引用文献

川畑純 2009 「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』92巻2号

鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究報告』第11集

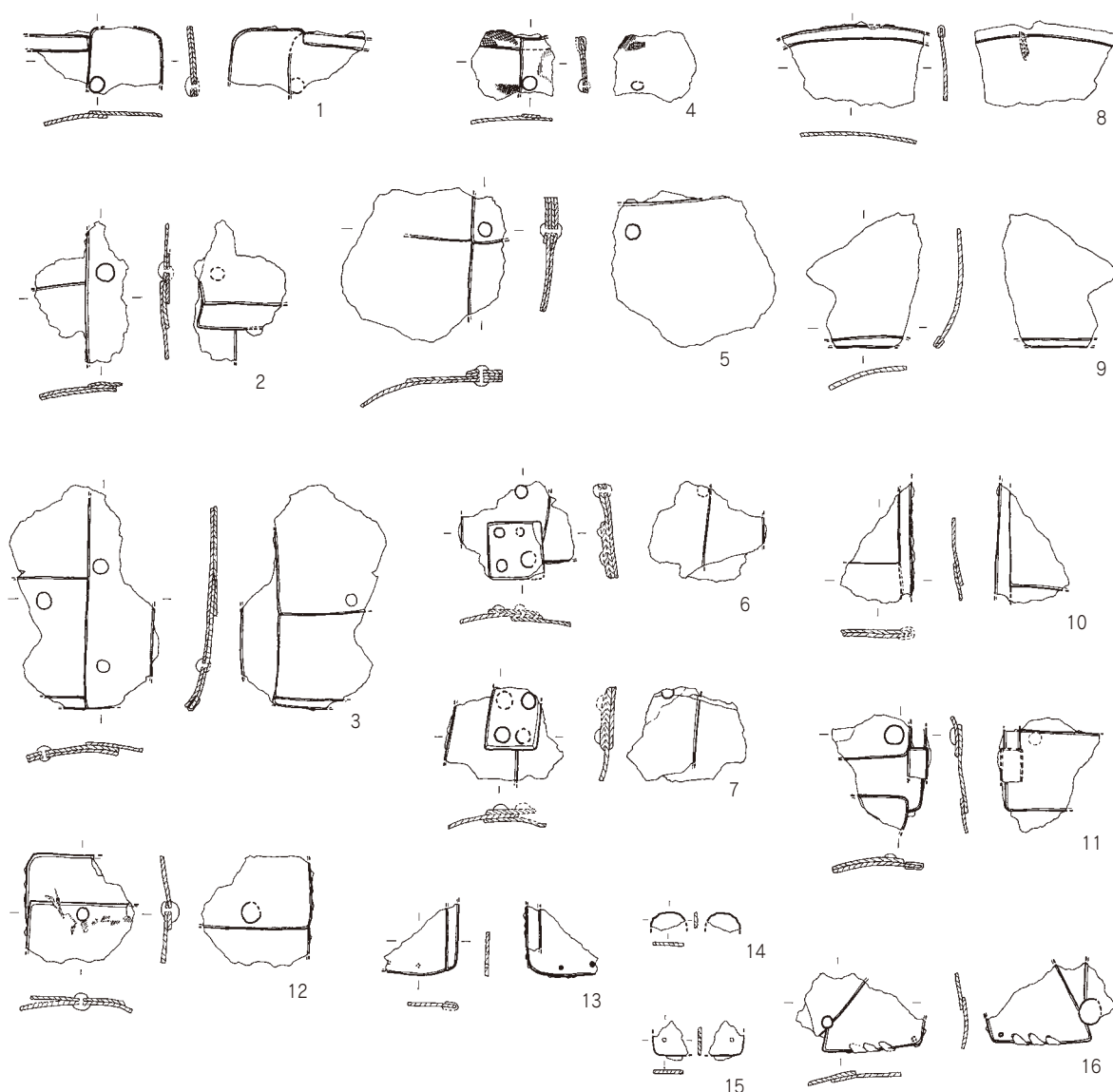
水野敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第14

(岡田晴菜)

4 武具 (図版37、第45図)

武具については、大きな破片がほとんどなく、また点数も少なかったため、接合可能なものや部位の特定できるものが少ない。また鉄板の重なりや鉤の位置等不明瞭なものが多い。その中で特徴的なものを図示し、観察所見を以下に述べる。

1は引合板であると考えられる。連接される豎上第1段は端部に幅約7mmの鉄包覆輪が施されている。縦方向の湾曲が少ないため、引合板上端部と推定される。従って、引合板と豎上第1段の位置関係から、右前胴の引合板であろう。鉤頭径は約9mmである。2は引合板であると考えられる。天地が判別しないが、1と銹化の状況が極似しており、同じく右前胴の引合板として図化した。右前胴の引合板であるならば、図の左上の鉄板は地板、その下が帯金ということになる。鉤留めされているのは引合板と地板である。3は右前胴引合板である。端部に向かって急激に外湾することから、裾部と考えられる。引合板に連接される鉄板は、左上が長側第3段(地板)、その下が長側第4段(裾板)である。鉤留めは引合板と長側第3段、引合板と長側第4段、長側第3段と第4段の3箇所である。各々2枚の鉄板を鉤留めしている。鉤頭径は約9mmである。長側第4段の端部には幅約7mmの鉄包覆輪が施されている。1～3が同一短甲の右前胴引合板であるとするなら、2の豎上第2段と第3段、あるいは長側第1段と第2段のいずれかであろう。4は鉄包覆輪が認められることから、短甲の縁辺である。また、若干弧状を呈することから左脇部の長側第1段と考えられる。内外面に布の痕跡があり、覆輪には目の粗い



第45図 短甲等実測図 (1/4)

布が、他の部分にはこれより目の細かい布が付着していたようである。鉄包覆輪を施した左前胴の長側第1段の上に左後胴の長側第1段を重ねて鉚留めしている。5は左脇部と推定される。横方向に内湾し、縦方向では、下方に向かって外反する。鉚が1個所認められ、鉄板4枚を鉚留する。鉚頭径は8mmである。6は右前胴蝶番（上）である。蝶番は方形4鉚で、蝶番板に留められている。7は右前胴蝶番（下）である。蝶番は方形4鉚である。蝶番は蝶番板と長側第3段と思われる鉄板に留められている。8は押付板と推定される。上端に幅8mmの鉄包覆輪が認められる。上方に向かって外反しつつも、先端で若干内湾する。内面の上端付近で布の痕跡が残る。9は裾板と推定される。端部は鉄包覆輪が認められる。縦方向では端部に向かって外反し、横方向では内湾する。内面に布の痕跡が残る。10は後胴右脇部下と推定される。2枚の鉄板を接続した上で鉄包覆輪を施している。11は後胴右脇部と推定される。上重ねされる鉄板の間隔が狭いことから、鉚留めされている鉄板は押付板と考えられる。側面に鉄包覆輪が確認

できるが、覆輪同士が重なっており、覆輪の継ぎ目と考えられる。12 は部位不明である。鉄板 2 枚が鉋留されており、鉋頭径 7mm に対し鉋尻径は 13mm である。内外面に布の痕跡が多く残り、外面の布目は向きが一定せず、襞状になっている。13 は部位不明である。縦方向に鉄包覆輪が施され、下端部には径 2mm の穿孔が 2 箇所認められる。14・15 は小札と考えられる。14 は小札の上端部、15 は下端部と考えられる。15 は左隅に径 2mm の穿孔が認められる。16 は左脇裾板と推定される。裾板下端には革組覆輪の革紐が認められる。この裾板は幅 5.5cm しかなく、連接される鉄板は鉋留めされるが、ほとんど重なっていない。そして、隙間に別の鉄板を充填し、かつ、鉋尻を打延することでこれら 3 枚の鉄板を挟んでいる。

以上の観察所見から考察できることを以下に述べる。

①2 種類（鉄包覆輪と革組覆輪）の短甲の存在

16 は革組覆輪の短甲である。左脇部のため鉄板の形状が歪だが、おそらく横矧板鉋留短甲であろう。これ以外のものも地板の形状や連接方法から横矧板鉋留短甲であると考えられる。

②小札の存在

14・15 は小札と考えられる。極小片であり、かつ少量であることから、挂甲の小札か付属具の小札かは判別できない。

③鉄包覆輪の短甲について

鉄包覆輪の短甲について、3 が最も大きい破片であり、引合板の連接位置がわかる部位である。鉋留短甲に関しては滝沢誠氏が詳細な分類と編年を提示している。この論考の中で、引合板と地板、帯金の連接位置に着目して分類している。この分類を参考にすると、3 は引合板と長側第 3 段の地板の下隅で鉋留しており、氏の分類では C 類に該当する。この他、鉋頭径は大型（7mm）、右前胴開閉式、蝶番は方形 4 鉋、覆輪は鉄包である、という点から氏の設定する II c 式に該当すると考えられる。

参考・引用文献

滝沢 誠 1991 「鉋留短甲の編年」『考古学雑誌』第 76 巻 第 3 号

(岡田諭)

5 馬具

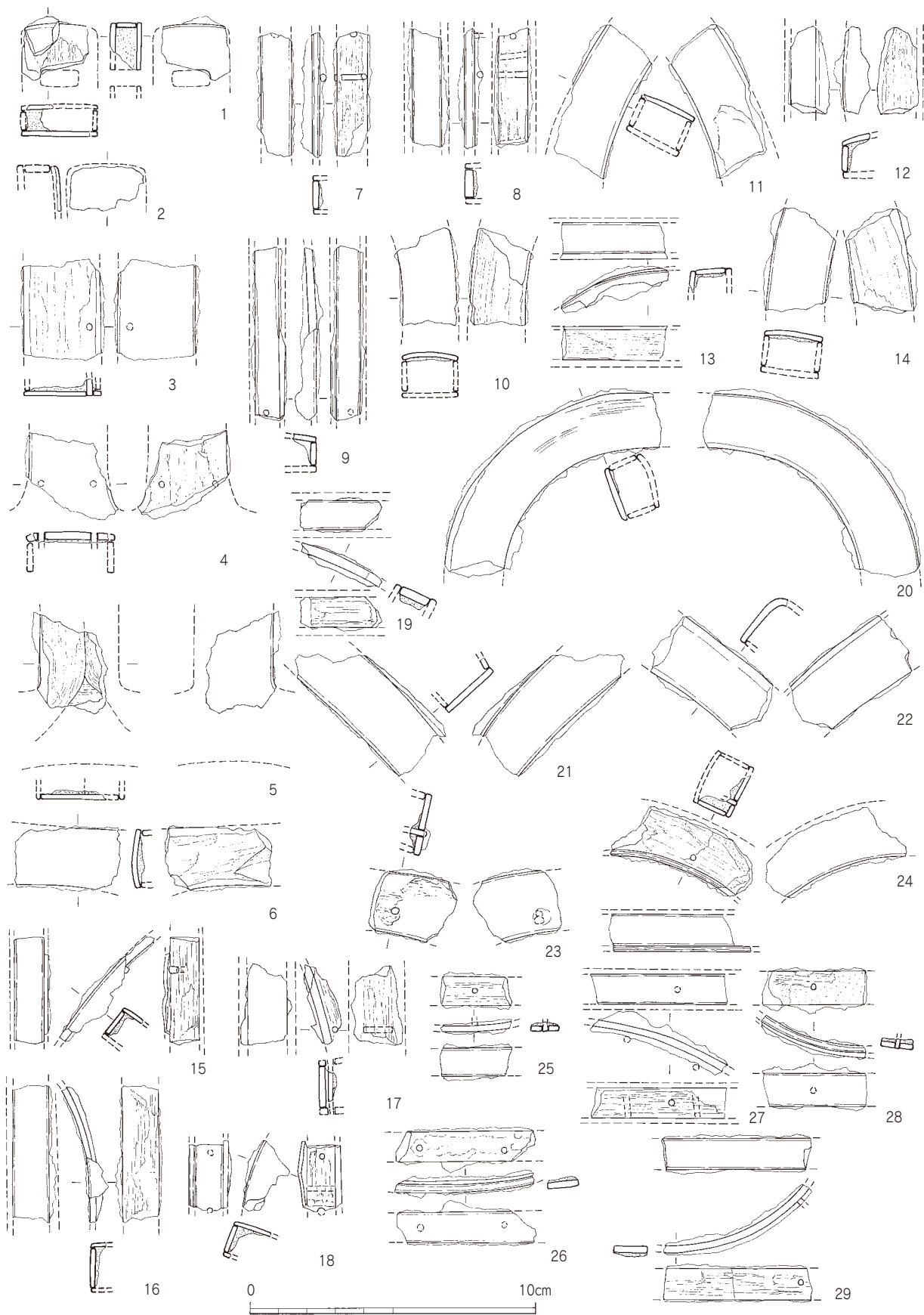
木心鉄板張輪鐙（図版 38、第 46・47 図）

第 47 図は復元図、第 46 図は破片の実測図である。

実測する前は、木心鉄板張輪鐙と木心鉄板張杓子形壺鐙の破片が混在していたが、木目方向と細部の法量、特徴によって両者をほぼ区分することができた。両者を弁別した後、各破片がどの部分にあたるかを破片を配置しながら推定した上で、実測作業を行った。

柄上端部片（第 46 図 1・2）が 2 点出土していること等から、輪鐙は 1 双分、副葬されていたと考えられる。しかし、小片となっており、全体を復元することは難しい状態であった。

輪の縁板の破片の一部には表、裏の鉄板が当たらないと考えられるものがあり（第 46 図 25～29）、輪下部は前後両面に鉄板がなく木心が露出していた可能性が高い。第 47 図の復元図は



第46図 輪鐙実測図 (1/2)

そのような特徴から類似すると考えられる韓国・慶尚南道陝川郡玉田古墳群 70・82 号墳の例から外形を想定し、破片を配置して示したものである。ほぼ外形が合致することも、玉田 70・82 号墳等との類似性の想定を補強してくれる。全体としては高さ 28cm、柄部高さ 12cm、輪部の高さ 16cm、輪部の幅 18cm 程となる。

1～9 は柄部の破片。1 はかすかに鐙鞆受け孔が残る可能性がある。2 は柄上端と推測されるが、鐙鞆受け孔は残存範囲には観察されない。4 は輪部へと続く柄の下端部の破片と推測される。5・6 は柄部と輪部の接合部破片である。いずれも残存する木質の状況から、タモ上に木を曲げ全形をつくり、柄の下部には三角形の別材を嵌めたことが分かる。6 では三角形別材の剥離した様子がネガ面として観察できる。7～9 は側面の鉄板片。

10～24 は輪上部の前面・後面の破片である。横断面が平坦なものと、表面側にやや突出するものとに分かれる。前述した玉田 70・82 号墳出土品など玉田古墳群出土の木心鉄板張輪鐙では前面の鉄板中央が稜をなし、輪部の横断面が五角形になることが特徴とされている（諫早 2006）。本例では明確な稜をなすものはないが、やや突出する横断面形のものが前面、平坦なものが後面と確定できる。ただし、天地、角度は確定できないため、不正確である。

25～29 は輪下部の内外縁板と想定されるものであるが、踏込みの鋌をとどめた破片はない。図示しなかった小片にも踏込み鋌に相当する破片は見出すことができなかった。

上述のように、本例は玉田 70・82 号墳出土例に近いが、福岡県内の古墳から出土した類例としては陶邑須恵器編年 TK73～TK216 型式に相当する時期の福岡県うきは市月岡古墳出土品、福岡県筑後市瑞王寺古墳出土品が挙げられる。

参考・引用文献

諫早直人 2006 「筑後市瑞王寺古墳出土馬具の再検討」『筑後市内遺跡群』IX 筑後市文化財調査報告書第 73 集

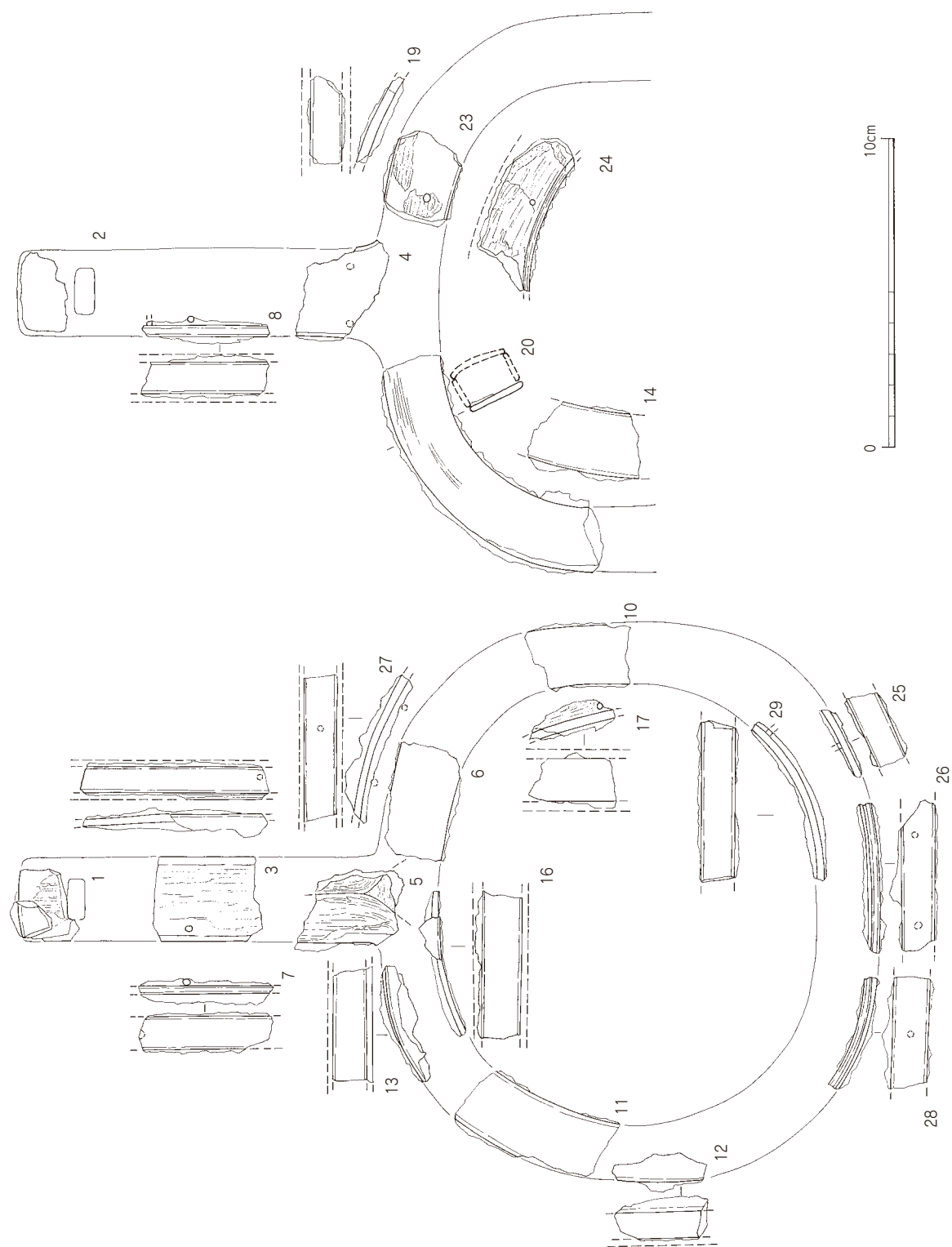
杓子形木心鉄板張壺鐙（図版 38、第 48・49 図）

壺鐙も碎片として出土しており、1 双分に満たない。ただし、柄部と壺部の木目が平行に走ることから、柄部と壺部の木心は一連の杓子形木心鉄板張壺鐙が副葬されていたことは間違いない。

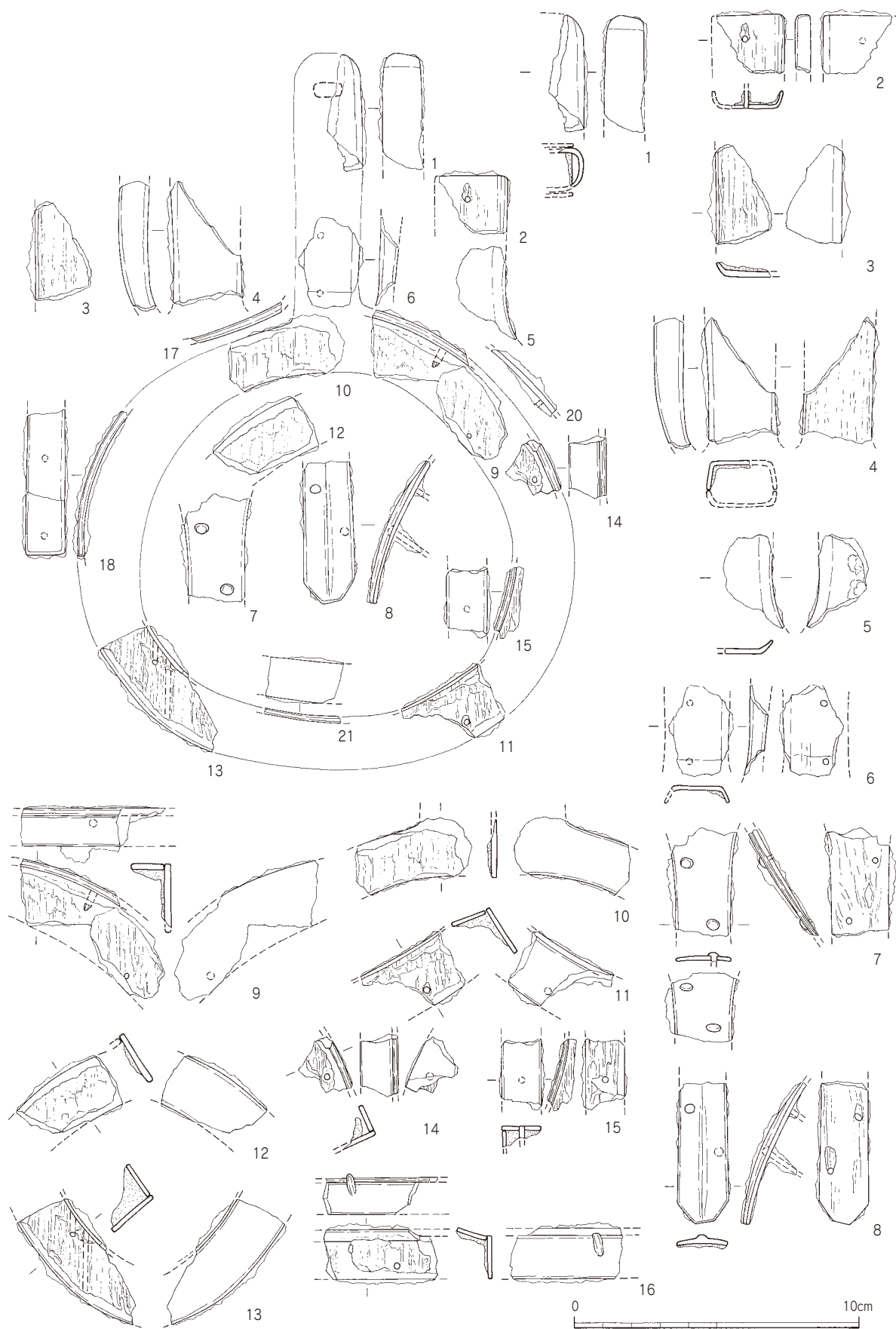
1 は丸みを持った側面の金具である。上部はカーブしながら屈曲しており、鐙鞆受け孔は無いが、柄部上端の可能性が高い。内に木質が残存しているが、金具の屈曲の大きいところには木質があたらない。また、前後の面は鉄板が剥離したような痕跡が残るので、横断面 U 字形の側面の板 2 点に、鐙鞆受け孔を穿った前面、後面の鉄板を張っていたと推測される。

2・3・6 は浅い横断面逆台形の金具である。一方、4 は断面台形に復元される金具で、2・3・6 に比べやや高い。4 は下端部が表面側に反っていて、鳩胸金具へと繋がる可能性がある。5 も 4 と同様である。したがって、4・5 は柄前面、2・3・6 は柄後面の金具の可能性が高い。1 とは断面が異なるが、2 の上部は直線的な端部を形成しており、柄が上部と下部で別作りであったと推測しておきたい。

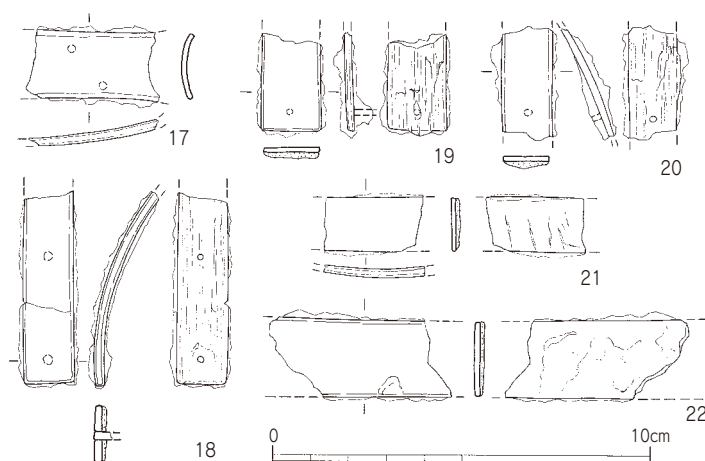
7 は上が幅広く、下になるにつれ細くなる金具で表面に鋌頭が 2 箇所確認できる。8 は下端



第47図 木心鉄板張輪鐙復元図 (1/2)



第48図 壺鐙復元図・実測図① (1/2)



第49図 壺鐙実測図② (1/2)

張っていた可能性が高い。なお、9・10・11・13～15には隠し鉾が確認できる。16は踏込部と壺口後面からなる破片と考えて図示した。2枚の鉄板にまたがるように幅2mm程の隆起があり、鉄線状の別金具を組み合わせたようにも見える。しかし、踏込部の鉾がなく、2枚の鉄板が鈍角に接していることから、鐙以外の製品の破片の可能性も考えられる。

17～20は壺口部側面の鉄板辺。17はやや上方に反っていることから、柄に近い部分の破片の可能性も考えられる。ただ、柄下部は前後2枚の断面台形の金具から構成されると推測されるので、柄とは別金具と考えておきたい。18・19は下端が方形に収束していることから側面鉄板の下端と考えられる。したがって、側面鉄板は壺口を全周せずに、途中で終わっているものと考えられる。

21・22は踏込部の破片とも考えられるものである。しかし、いずれにも滑止の鉾などなく、21の裏面には布のようにも見える木以外の有機物が付着し、22は13・15の踏込部と比べて幅広であるので、別製品の可能性も考えられる。

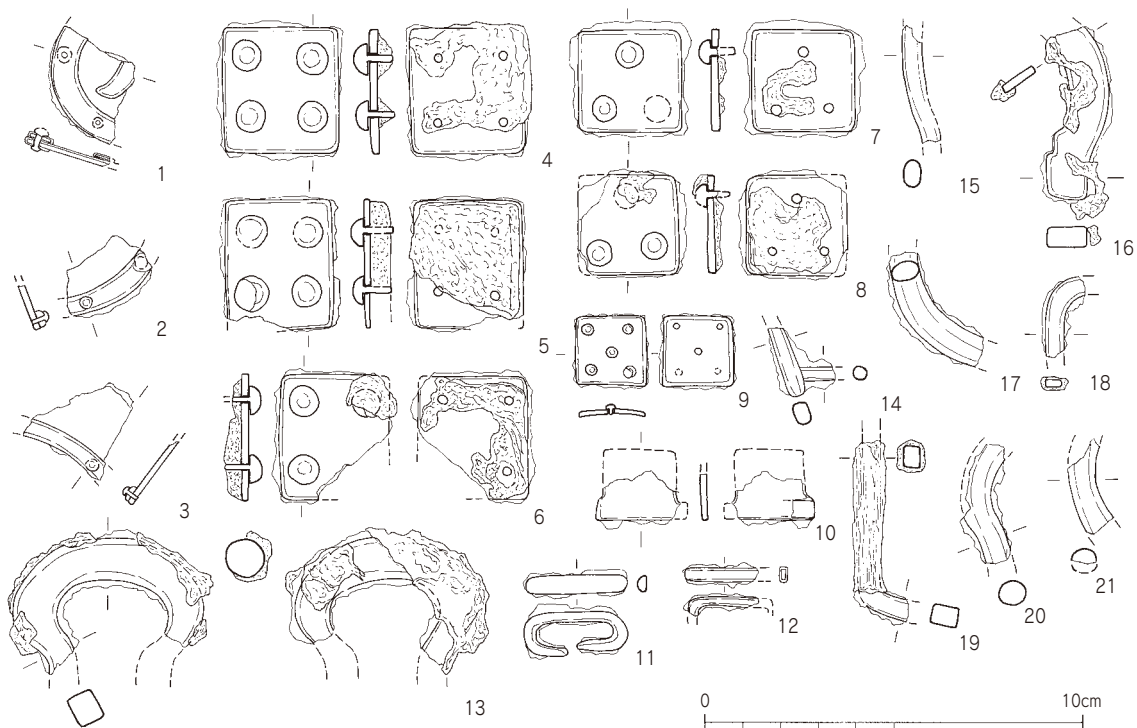
以上のような検討から、破片を復元的に配置して図示したものが第48図左上の復元図である。全高25cm、柄部高さ9cm、壺部高さ16cm、壺部幅17cmほどに復元される。鳩胸金具が上部で終わる点、鳩胸金具以外は鉾頭を見せない点などは隣接する勝浦井ノ浦古墳から出土した杓子形木心鉄板張壺鐙と大きく異なり、本例が先行すると思われる。日本出土の壺鐙のなかでも最古の一群に属するものとして注目されよう。ただし、鉾頭が見えない点、柄の上部と下部を別作りとする点、柄の鉄板の組み合わせ方は日韓出土の他の壺鐙と異なり、その時間的位置づけ、製作地の推定が難しい。鉾頭の見えない点などは木心鉄板張輪鐙に近く、輪鐙も含めて検討する必要がある。

その他馬具 (図版39-1、第50図)

1は鉄地金銅張の杏葉ないしは鏡板片と推測される円弧部の破片である。地板と縁金をそれぞれ金銅張し、鉾で留める。縁金の2個所に鉾の剥離痕跡が残り、鉾脚径1.5mm程、鉾頭径4mm程である。中央部には三葉文先端のような別作りの装飾板も残るが、全形は不詳である。2・3は1とは異なり、金銅装のない鉄製の杏葉または鏡板片である。2は円弧部の破片で、2個

部が逆台形になる金具で2個所に鉾が残る。これらは鳩胸金具と考えられる。

9～15は壺口部後面の鉄板を残す破片である。9・11・14は鐙側面鉄板が残存し、10・12は側面の剥離した痕跡が残るが、いずれも内側の鉄板の痕跡はうかがえない。これに対して、13・15は内側に鉄板が残る。したがって、上部は壺口部内側に鉄板は張らず、下部の踏込部のみに鉄板を



第50図 その他馬具実測図 (1/2)

所に鋲あるいは鋲の痕跡が残る。3は屈曲から、f字形鏡板の下辺とも考えられる。

4～10は方形革金具片で、11・12は革金具に伴う貴金具片である。4～6は大振りな鋲を4個所に打った破片で、いずれも裏面に革帯の痕跡が付着する。7・8は鋲が3個所で、4～6より小型であるが、鋲の大きさ、板の厚みから一連のものと考えられる。4～8はいずれも鉄製である。9は5個所に鋲を打った鉄製の小型辻金具である。10は貴金具と辻金具が一体となった鉄製のもの。11・12は貴金具である。11は長さ2.6cmの鉄製で、横断面は半円形を呈す。大きさから7・8に伴う可能性が高い。12は銀張りである。

13～16・18・20・21は鉸具である。13は鉸具頭部の破片で、頭部は断面円形であるが、基部近くでは断面方形となる。革が付着している。14は鉸具馬蹄形金具の基部と横棒の破片と推測されるものである。いずれも断面は楕円形を呈する。15は断面円形の頭部付近の破片。16は鉸具として図示したが、やや厚めの板状である。基部内側は突出して若干幅広となり、革が随所に付着する。18は断面長方形、20・21は断面円形の鉸具と推定される破片。17は環状雲珠の破片と考えられるが、鉸具の頭部の可能性も残る。19は木質が付着することから鞍金具と考えられるが、他に明確な鞍金具と考えられるものではないので、部位の特定にはやや不安が残る。

(重藤輝行)

6 工具

(1) 刀子 (図版39・40、第51・52図)

出土した刀子はいずれも碎片となり全形を残す資料はない。ここでは刀子の有機質の残存状

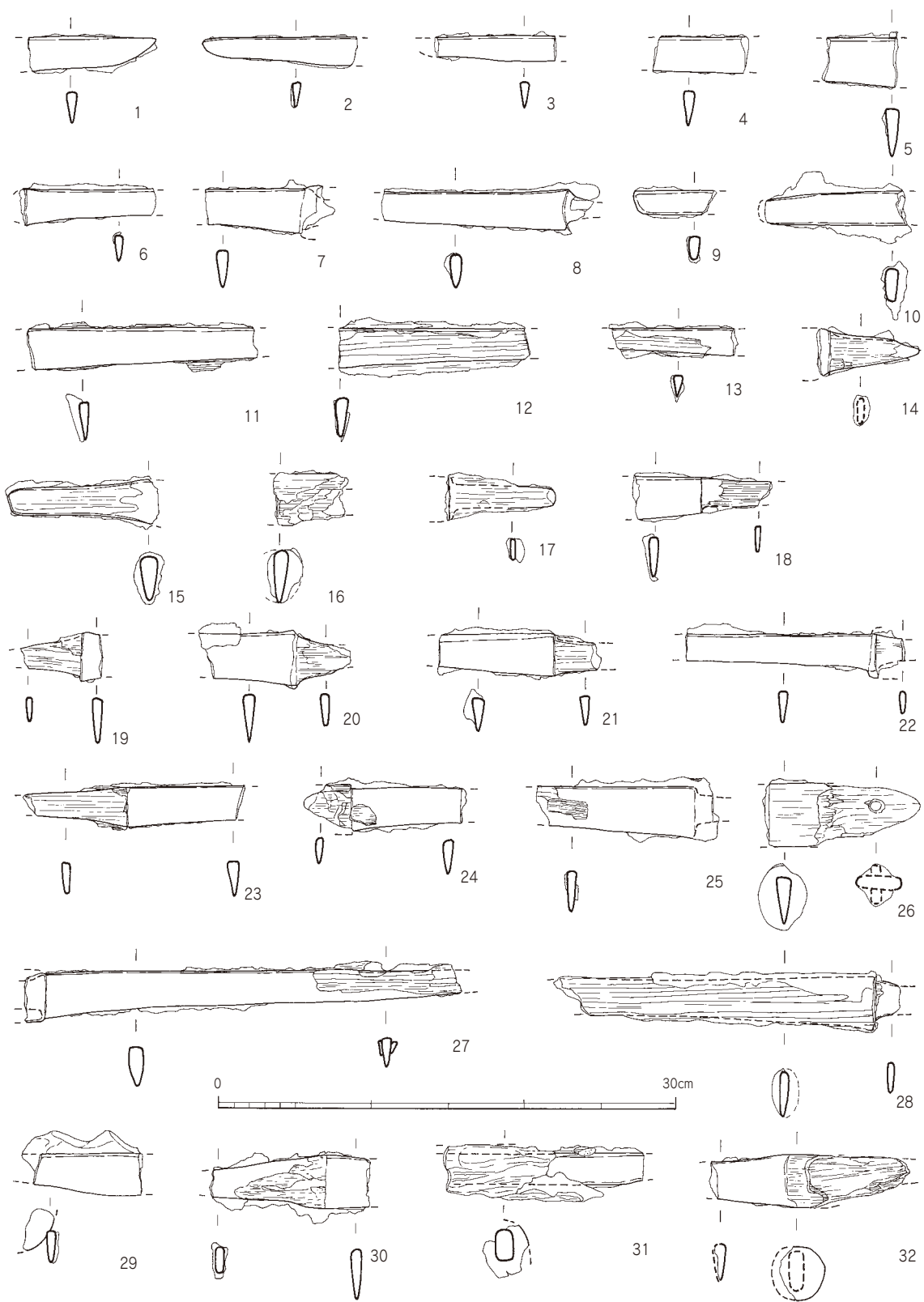
況から、①刀装具が残らない資料(1～10)、②木製刀装具を装着する資料(11～28)、③鹿角製刀子柄(29～32)、④刀身・茎に繊維質が残る資料(33～49)、⑤刀剣装具と類似した資料(50～53)に分けて報告する。また、石室全体に赤色顔料が塗布されているため、資料に二次的に赤色顔料が移動しているものが多い。図化にあたっては、もともと赤色顔料が塗布されている部分のみを抽出して図示した。なお、刀身幅や関幅、茎幅の数値は残存する最大値を計測している。

①刀装具が残らない資料(1～10) 1、2は刀身切先の破片である。1は刀身幅1.1cm、2は刀身幅0.9cmである。3～5は刀身の破片である。3は刀身幅0.8cm、4は刀身幅1.2cm、5は刀身幅1.6cmである。6～8は関が残る破片である。6は両関の可能性が高く、関幅は1.2cm。7は両関で、関幅は1.5cm。8も両関で、残存長6.9cm、関幅1.3cm、茎幅0.7cm。9、10は茎の破片で目釘孔は認められない。9は残存長2.6cm、茎幅0.8cm。10は残存長4.6cm、茎幅1.1cm。いずれも小片のため、抜き身の状態では副葬されたかは分からないが、7や8の錆の状態から柄は装着していたと考えられる。関の部位で確認できる数量は3個体である。

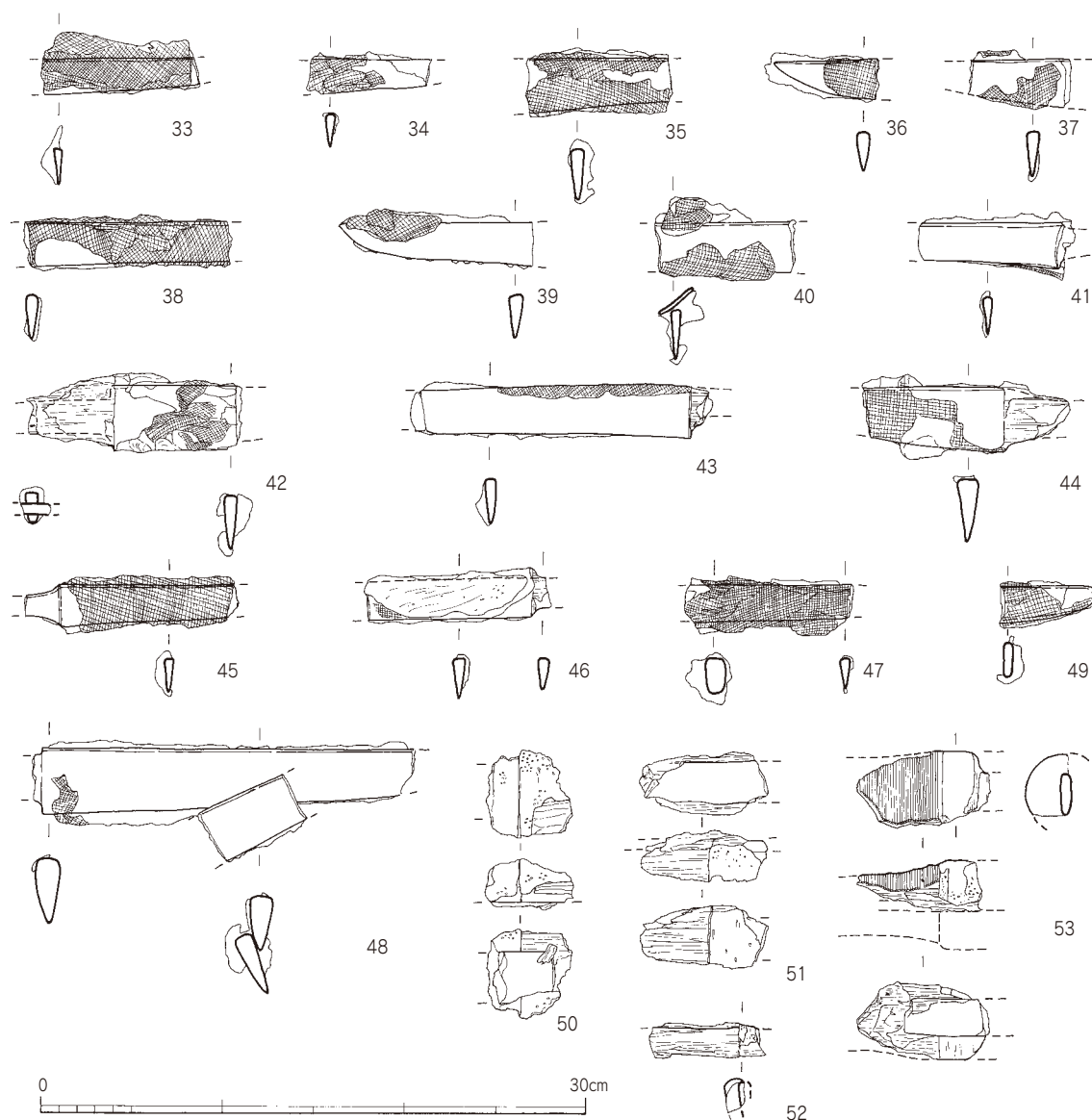
②木製刀装具を装着する資料(11～28) 11～13は刀身の破片で、両面に木製鞘が断片的に残る。11は刀身幅1.3cm、12は刀身幅1.3cm、13は刀身幅0.9cmである。14～29は関が残る破片である。14は両関で関幅1.5cm、茎長2.9cm、茎幅0.9cm。15は刃関のみの可能性が高く、茎長約5.0cm、茎幅1.0cm。16は両関で関幅1.7cm、茎幅0.9cm。17も両関で関幅1.5cm、茎長3.3cm、茎幅0.7cm。18は刃関で、関幅1.2cm、茎幅0.9cm。19は両関で関幅1.7cm、茎幅0.9cm。20も両関で関幅1.7cm、茎幅0.9cm。21も両関で関幅1.4cm、茎幅0.9cm。22は刃関で残存長7.2cm、茎幅0.7cm。23は刃関のみの可能性が高く、残存長7.3cm、関幅1.3cm、茎幅0.8cm。24は両関で関幅1.4cm、茎幅0.9cm。25も両関で関幅1.7cm、茎幅0.9cm。錆の表面に繊維の断片が付着する。26は両関で茎に目釘が残る。茎幅1.2cm、目釘孔0.4cm。27は最も残りのよい資料で、残存長14.3cm。両関で関幅1.4cm、茎幅0.9cm。鞘も柄も木製である。28は両関で、残存長11.4cm、関幅11.7cm、茎幅1.0cm。木製鞘の残りがよく、合せ口で製作されている。関の部位で確認できる数量は15個体である。そのうち、鞘も柄も木製であるのが確認できるのは2個体のみである。

③鹿角製刀子柄(29～32) 29は刀身の破片で、棟の部分に他個体の鹿角製刀子柄が付着する。鹿角製刀子柄の残りはわるい。30は鹿角製刀子柄を装着し、残存長5.3cm。両関で関幅1.3cm、茎幅0.9cmである。31は鹿角製刀子柄を装着した茎の破片で、残存長6.6cm。32は最も残りのよい鹿角製刀子柄である。鹿角製刀子柄の表面には赤色顔料が塗布されているが、文様などは確認できない。両関で茎幅1.3cm。関の部位が確認できるのは、2個体だが、31の残存状況から30や32とは別個体と判断できる。つまり、鹿角製刀装具を装着した刀子は最低でも3個体が存在する。

④刀身・茎に繊維質が残る資料(33～49) 複数個体に繊維質が残り、その残存状態からも偶発的に付着したのではなく、副葬時の刀子の状況を示す可能性が高い。繊維質は直径1mm以下の細い繊維を格子状に編み込んだものである。同一面に複数方向の繊維質が残り、布がある程度弛んだ状態であったと分かる。刀身に残る繊維質の状態からは、一つ一つの刀子を個別に布で巻いたのではなく、複数の刀子の表面を覆うように布がかけられていたと推測される。33



第 51 图 刀子实测图① (1/2)



第52図 刀子実測図② (1/2)

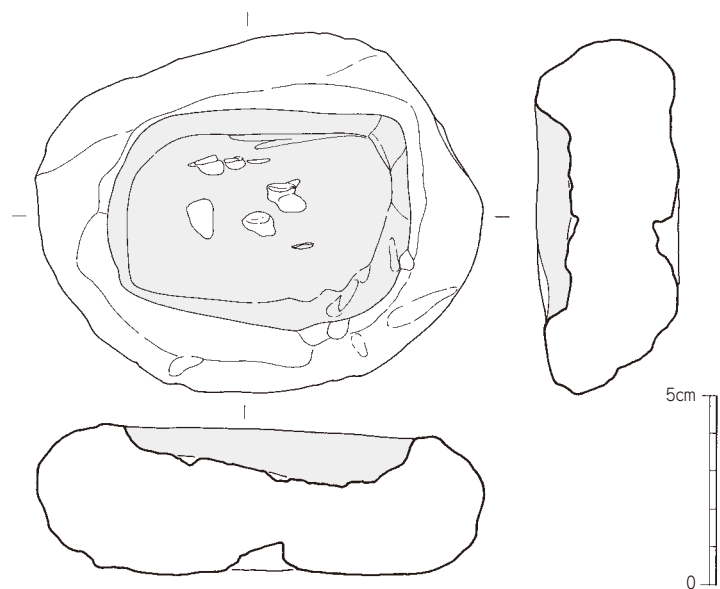
～40は刀身の破片で片面に繊維質が多く付着して残る。33～36、39は刀身切先付近の部位にあたる。また、40は繊維質の裏面に鹿角が付着している。鹿角は別個体の刀装具と思われるが、断片のため厳密にはわからない。33は刀身幅1cm、34は刀身幅1cm、35は刀身幅1.5cm、36は刀身幅1.1cm、37は刀身幅1.3cm、38は刀身幅1.3cm、39は刀身幅1.2cm、40は刀身幅1.4cmである。41～48は関が残る破片である。41は両関で、関幅1.8cm、茎幅1cm。42も両関で柄は木製である。茎には目釘が確認できる。関幅1.8cm、茎幅0.9cmで、目釘孔は0.3cmである。43は刃関で柄は木製である。残存長7.9cm、関幅1.5cm、茎幅0.8cmを測る。44は両関で柄は木製である。関幅1.8cm、茎幅1cmを測る。45も両関で、残存長5.9cm、関幅1.1cm、茎幅0.6cm。46は刃関で柄は木製である。関幅1.1cm、茎幅0.8cmを測る。47は断面の形状から、関付近の部位にあたる。残存長4.6cm、関幅約1cmを測る。48は両関で、刀身に別個体の刀身破片が付着する。残存長10.5cmで刀身切先付近まで残る。関幅1.9cm、茎幅1.2cmを測る。

49 は茎の破片である。刀身の繊維質と異なり、茎を包むように繊維質が残る。茎に柄が装着された痕跡はなく、茎に布を巻いて柄とした可能性や抜き身の状態で副葬した可能性も考えられる。関の部位で確認できる数量は8個体である。大半は木製の柄を装着しているが、49 の事例をみると抜き身の状態のものも含まれている。

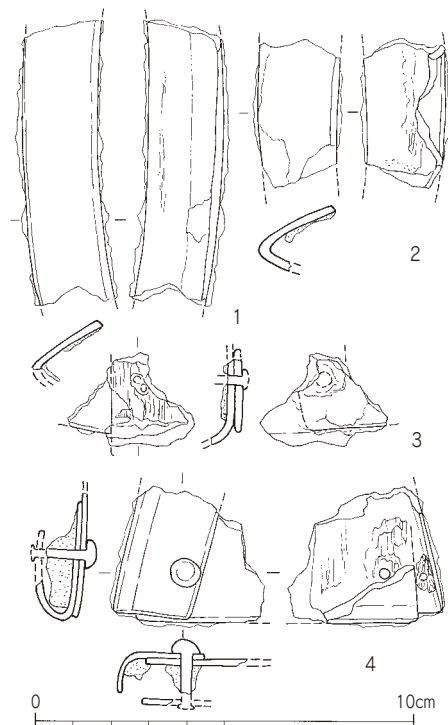
⑤刀剣装具と類似した資料 (50 ~ 53) 刀子と断定できないが、通常の刀剣装具よりも大きさが小さく、構造もやや異なる資料のため、ここで報告する。50 は鹿角

製の鞘口と把縁が残る。鹿角製刀剣装具と同じ構造で、木製鞘に鹿角製鞘口を装着する。いずれの面も欠損のため、オリジナルの面が確認できない。現状で通常の刀剣装具の 1/2 の大きさだが、茎幅も 1.5cm と他の刀子よりも大きく、刀剣装具が磨耗したものの可能性がある。51 は鹿角製の把縁が残るが、断片のためその形状はよく分からない。茎幅は約 1.1cm で他の刀子茎と同じ幅となる。52 も関付近の断片で鹿角製把縁がわずかに残る。53 は鹿角製装具が残り、木製の柄の表面には「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」が確認できる。鹿角製装具の外表面は破損面を除く部位では、本来の形状を保っている。その形状から刀剣の把頭の可能性も考えたが、茎幅が 1.1cm と他の刀剣茎幅の 1/2 ~ 2/3 ほどの大きさしかない。また、同古墳出土の鹿角製刀剣装具がいずれも木製柄の外側に鹿角製装具を装着するのに対し、本資料では茎に鹿角製装具が直接装着されており、その構造が異なっている。以上の理由から、刀剣装具と類似した装具を装着した刀子の可能性も考え、把縁の状態で図示している。刀剣の把頭としても、最小サイズの部類に含まれる資料である。なお、鹿角と茎の隙間には木質が詰め込まれているように見える。

以上、刀子と断定できる資料数は 29 個体となる。全形がわかる資料がないが、残存する関幅は 0.9 ~ 1.7cm に納まる資料が大半で刀身幅が細くなる。そして、残りのよい 27 などから刀身長が 15cm 前後



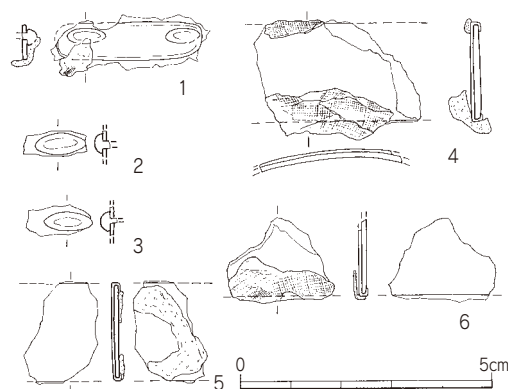
第 53 図 不明石製品実測図 (1/2)



第 54 図 不明鉄製品実測図 (1/2)

となる一群が確実にふくまれている。刀身の断片資料も参照すると、刀身が長身で幅の細い直線的な形状をした刀子が主体となるようである。茎長がおおよそ判別できる資料をみると、5cm前後と短い資料が多い。また、刃関のみの資料も含まれるものの、両関の資料が主体となる。本古墳出土刀子は、両関で刀身長が長大化した新しい様相と茎長が短い古い様相をもち、5世紀中頃～後半にかけて製作されたと考えられる。また、砥ぎ減りによる形状変化などの使用痕跡はとくに認められず、非実用品、あるいは使用頻度の低い資料が副葬されている。

(小嶋篤)



第55図 不明金銅製品実測図 (2/3)

7 その他

不明石製品 (図版 40 - 4、第 53 図)

黄褐色を呈する軽石製で、楕円形の平面形で、長軸 11.8cm、短軸 9.4cm、最大厚 3.8cm。上面に約 6×8cm、深さ 0.9cmの窪みを設けている。窪みの表面は黒色に煤けており、炭素が主体となる物質が入っていたか、意図的に塗布された可能性が考えられる。窪みを成形する際のノミ状の痕跡なども見受けられる。重量は 105.4g。性格等については不明である。

(岡寺良)

不明鉄製品 (図版 41、第 54 図)

1・2は断面V字形に近い幅2cm前後の鉄製品。鞍橋金具とも考えたが、断面がV字に近いので、そのように断定するには躊躇を覚える。内面には木質が付着したような痕跡がうかがえるが、溝の底近くは木質が当たらない。3は2枚の鉄板を鉚で止めたもので、裏面には木質が付着する。4は下部の断面をU字型に折り返した金具と側面の角の丸いL字形断面の金具を鉚で留めたもの。内の空間には木質が遺存している。3と一連の可能性があり、盾に関連する金具とも考えたが、断定には至っていない。

(重藤輝行)

不明金銅製品 (図版 41、第 55 図)

1～3は銀被瓜実形鉚の見られる金銅板片である。いずれも幅7mm程の帯状の金銅板に鉚留されていて、鞍の縁金具あるいは胡籙金具の破片と考えられる。1は両端が本来の形をとどめているようでもある。4～6は帯状の鉄地金銅張金具片である。全体的に布片が付着しており、胡籙金具とも推測されるが、判断が難しい。

(重藤輝行)

V まとめ

1. 勝浦峯ノ畑古墳について

立地 宗像市との境である山地から西方にのびる丘陵尾根線上の標高 15m に立地している。墳丘の東側に全長 70m の勝浦井ノ浦古墳が立地している。この勝浦井ノ浦古墳が立地する丘陵と勝浦峯ノ畑古墳との間、勝浦峯ノ畑古墳からは道路をはさんだ東南方向に段落ちがある。この段落ちを古墳築造にあたり丘尾切断した跡とする指摘がある。

古墳築造当時、古墳の南側 0.6km まで内海が入り込んでいた。また外海である玄界灘は古墳の西側 0.3km と、勝浦峯ノ畑古墳は外海と内海の両方を見下ろす絶好な位置にある。

墳丘 現在の墳丘規模は、全長 94.5m、後円部径 54m、後円部高 6.3m、前方部幅 47m、前方部長 48m、前方部高 6.5m、くびれ幅 35m、後前高差は -0.5m を測る。

墳丘は中世に墳丘を削り石積をつくる工事が行われ、その後も畑として開墾されたりして大きく改変されている。後円部は道路建設工事によっていっそうの削平を受けている。

今回の墳丘規模確認調査では墳丘南側と道をはさんだ東側の後円部端には作物等の関係でトレンチ調査は行えなかったため不十分な範囲確認となってしまった。今後予定されている整備工事前にはそれらの場所にトレンチを設定して、より確かな規模確認が必要である。

後円部端を確認する目的で設定した第 1 トレンチでは墳丘裾部を示す葺石根石を確認し、そこから上がる墳丘斜面を土層で確認できた。

くびれ部の確認では、多くの転石を除去後に大ぶりの石が並んでいる状況を確認後、平板上に図示することにより平面図上くびれ部の位置を確認できた。またちょうどくびれ部で前方部との接合点にあたる位置に石列を確認できたことにより、くびれ部である事を再確認している。

前方部端は第 3 トレンチにより確認できた。墳丘反対側の南側に設定した第 6・7 トレンチでは削平によって確認できなかった。今後、より東側の畑の中でトレンチ調査する必要がある。墳丘長を決めるために必要な前方部前端について、第 11・12 トレンチで葺石根石を検出した。

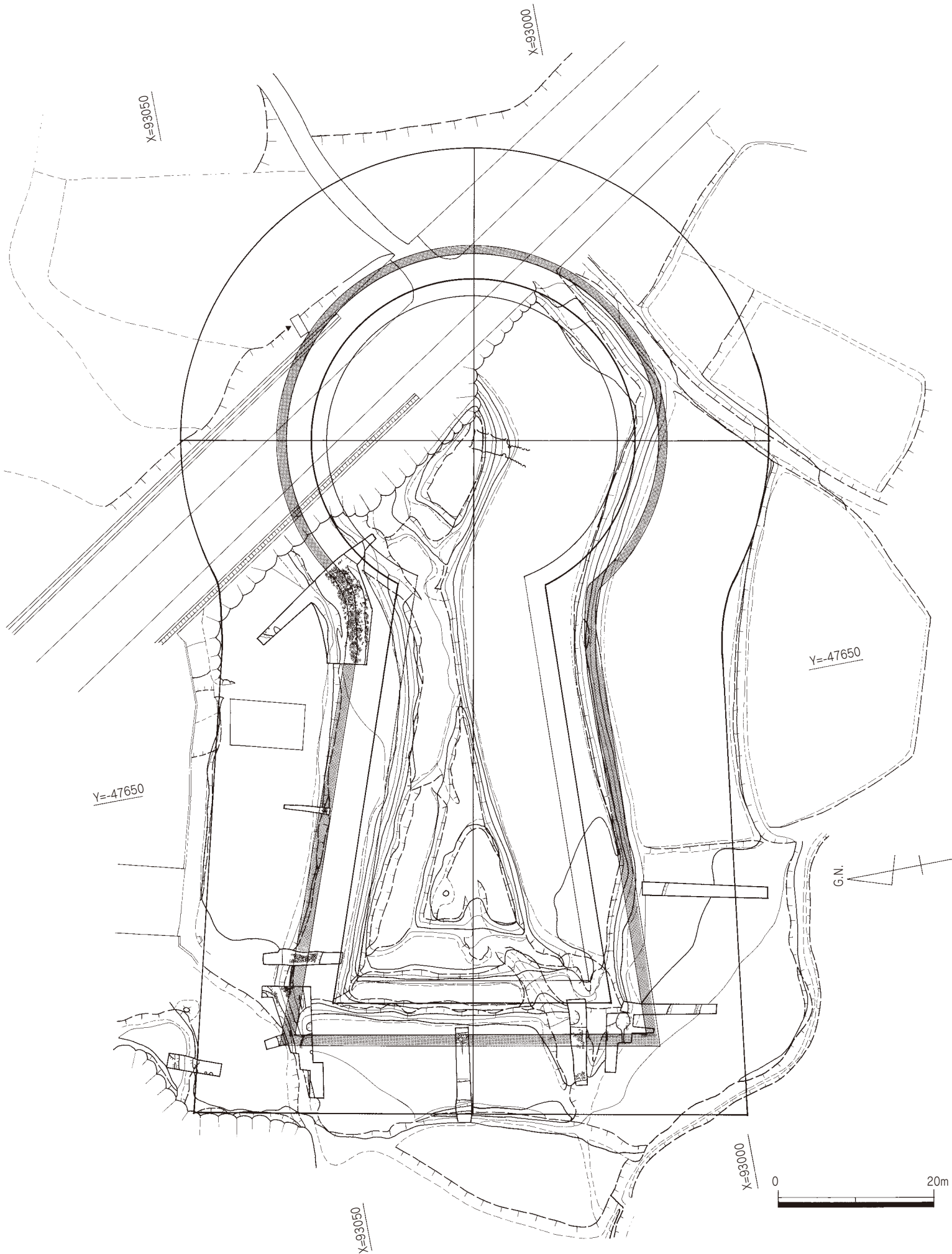
前方部幅を確定させるために必要な前方部隅角は第 5・9 トレンチを設定したが、左右とも削平を受けており確定させられなかった。

今回の調査結果をもとに墳丘復元を行ったのが第 56 図である。今回の調査が墳丘北側で行われたために南側へ反転トレースして復元していることをお断りする。墳丘主軸の求め方は、前方部の主軸を前方部での標高 20m ラインに近い上げが築造当時の段を示すと仮定してその中心線を前方部の主軸とした。後円部については情報が少ないが、周辺で同時期に築造された古墳である新原・奴山 1 号墳の後円部中心を石室奥壁真ん中に求められているのを参考にした。この後円部の中心から前方部主軸を結んだ線を墳丘主軸とした。第 1 次調査時の後円部確認トレンチで確認されている後円部端とは整合しない事は、将来の調査で確認する必要がある。

トレンチ調査の結果から、1 段斜面角度を 30° とし、1 段目テラス部分のレベルと幅は前方部西側で平坦部が残っていると考え、テラスのレベルは 16.4m、幅は 2m と復元した。墳丘北側では 1 段目テラスが削平されて残っていない。墳丘南側では畑下に残っている可能性がある。

復元図では、1 段目テラスと墳丘裾（1 段基底面）・墳裾外側を巡る石敷部分を図示している。

これらの復元の結果、墳丘規模は全長 100m、後円部径 48m、後円部高 6.3m、前方部幅 45m、



第 56 図 墳丘復元図 (1/600)

トーンで表現しているのは
墳裾外側の石敷の範囲

前方部長 57m、前方部高 6.7m、くびれ幅 28.5m。古墳の方位は N-79° -W となる。

墳丘の段築は前方部 3 段、後円部は改変を受けているため、測量図から判断できないが前方部と同じ 3 段の可能性がよい。

周溝 第 11・12 トレンチで幅 6.8～4.7m、深さ 25cm の溝を検出している。この溝が周溝ではないかと考えるが、第 9 トレンチでは削平を受けていて溝そのものは確認できない。溝があったことをうかがわせる上場は検出している。その結果、この溝は前方部角付近で掘り残しているようである。墳丘北側では溝の存在は解らなかった。第 1・8・10 トレンチの北側で確認されている段落ち、溝については、埋土から中世の土師器が出土していることから周溝そのものではないと考えている。海に面した前方部をより立派に見せるために前方部前側だけに周溝を造っていたのではないかと考える。これも墳丘南側での調査により解ると考えている。

基壇 墳丘の周囲に幅 10～15m の平坦面が存在している。平面形は墳丘の形と合致した盾形を呈している。同様の施設は新原・奴山 12 号墳・須多田ミソ塚古墳・在自剣塚古墳にもみられる。周溝の代わりの機能をもつものとする。ここではこの平坦面を基壇という。※頁 10 第 A 図基壇概念図参照 (池ノ上)

埴輪 今回の発掘調査により出土した円筒埴輪は、窖窯焼成・円形透孔・外面タテハケ調整といった特徴から、川西宏幸編年の V 期に位置づけられる。突帯の断面形状は台形をなすもので、突出度は比較的高いものの、IV 期にみられるような丁寧な印象は受けない。「丁寧な印象を受けない」といった観察は主観的なものではあるが、突帯設置時のヨコナデが丁寧ではなく断面形状が一定でない資料があることや、個体毎の断面形状に差が多いことが影響するものといえる。さらには、器壁が厚く、また粗いハケメ調整であることもまたそうした印象を受ける要因ともいえる。石室形態や石室出土品の内容からはより古式に位置づけられる、すなわち古式の埴輪をもつであろうと想定していただけない、意外な印象を受ける。

北部九州において円筒埴輪の粗雑化の影響がみられるのは、5 世紀後半頃であり、須恵器編年でいう TK23 型式ないし TK47 型式頃と考えられる。当該時期の資料をみると、外面調整にヨコハケを有する IV 期の円筒埴輪に、タテハケのみの V 期の円筒埴輪が共伴する状況がみられる。福岡県内であれば福岡市剣塚北古墳や筑後市欠塚古墳がそれに該当する。またタテハケのみの円筒埴輪の出現期には畿内の工人が関与したような状況がみられる事例があり、在地的な粗雑な円筒埴輪を伴う事例がみられる。これには筑紫郡那珂川町貝徳寺古墳や飯塚市小正西古墳が挙げられる。このように、粗雑化する時期の円筒埴輪には粗雑とはいえない円筒埴輪が共伴する訳であるが、本古墳の事例では粗雑な円筒埴輪で占められる点で時期をより新しく位置づけざるを得ない。もちろん今回の発掘調査が限られたトレンチ調査でもあり、ヨコハケを有するような別形態の円筒埴輪が伴う可能性も否定はできない。

また勝浦峯ノ畑古墳周辺に比較できるような比較資料が少ない点も問題を困難にしている。津屋崎古墳群では本古墳の他に、勝浦井ノ浦古墳、新原・奴山 22 号墳、生家大塚古墳、天降天神社古墳で円筒埴輪が出土している。勝浦井ノ浦古墳の資料の詳細が不明であるが、他の古墳出土資料はタテハケ調整のみの資料であり、かつ主体部の構造等といった時期の検証材料となる資料が少ない古墳であり、比較検討が容易ではない。なお、津屋崎古墳群は 16 基もの前方後円墳が所在するにも関わらず、埴輪が確認されている古墳は少ない。また近接する宗像市域にも円筒埴輪を出土する古墳は少なく、久原澤田 3 号墳にみられる程度である。久原澤田 3 号墳は 6 世紀代に位置づけられるが、基底部が高い特徴等は勝浦峯ノ畑古墳に近い特徴であり、詳細な検討が課題である。津屋崎古墳群や宗像

市域の古墳は「胸形君」との関連が強いものとされるが、この地域には埴輪祭祀が流行しないといった点についても地域的な特徴がある点を付記しておきたい。

円筒埴輪から直接に古墳の時期を想定するというよりも、石室形態や石室出土品の構成から築造時期を検討し、埴輪の粗雑化がどの時期にみられるかといった問題提起をするものという意義を考えるべきと思われる。また、本地域の資料が増加することにより、円筒埴輪の地域性もしくは埴輪祭祀の地域性の抽出といった作業も可能になるかと考えられる。(岸本圭)

須恵器 墳丘に設定したトレンチや表採によって須恵器が出土している。前方部で表採された051の高坏脚は新しい感じをうける。第8トレンチで出土した054の大甕は口縁のつくりからTK23型式のものと考える。追葬に伴うものとする。

石室 横穴式石室は4世紀後半頃に朝鮮半島から日本列島の他地域に先駆けて北部九州の玄界灘西部の福岡市から糸島市・唐津市の古墳に採用されている。宗像地域は弥生時代以降、朝鮮半島との交流によって多くの文物の伝播がみられるが、横穴式石室の導入については玄界灘西部地域より遅いようである。主体部が確認されていない古墳が多いため現時点だが、勝浦峯ノ畑古墳が宗像地域で最初に横穴式石室を導入した古墳となる。

勝浦峯ノ畑古墳の石室について整理すると、①閉塞に板石を使用。②玄門部の下部には框石を置き、墓道から石室床面は一段低くなる。③玄門上部には楣石を設置。④右片袖構造であるが、左右の壁から柱状の石を突出させて両袖をつくる。⑤石室に腰石の使用が見られる。特に奥壁の石は鏡石と呼ばれる他の石材をはるかに超える大型の石を据えている。

勝浦峯ノ畑古墳の石室を特徴付ける石柱については、これまで多くの研究者から高句麗の横穴式石室との関係を指摘されている。森下浩行氏は右片袖構造から百済の芳夷洞1号墳の影響を考えている。勝浦峯ノ畑古墳の石室は、高句麗や百済の古墳を祖型としながら、先行する他地域の古墳の石室の影響を受けながら独自に発展してできたものとする。

参考・引用文献

森下 浩行 1986 「日本における横穴式石室の出現とその系譜 - 畿内型と九州型 -」『古代学研究』第111号

森下 浩行 1987 「九州型横穴式石室考 - 畿内型出現前・横穴式石室の様相 -」『古代学研究』第115号

築造時期

①横穴式石室に腰石の使用がみられる。TK 208型式の新原・奴山1号墳より大きな石材を使用しているため、これをさかのぼることはない。

②副葬品の時期は2時期大別される。5世紀中頃のもの初葬時に入れられたと考える。

③埴輪は新しい様相を示すが、宗像の地域性と追葬時に埴輪が立てられた可能性を考える。

④墳丘から出土している須恵器の甕は5世紀後半のものだが、追葬に伴うものとする。

以上から、勝浦峯ノ畑古墳の築造時期は5世紀中頃と考える。

勝浦峯ノ畑古墳は、胸形君の墳墓と考えられる。胸形君は玄界灘で活躍していた海人族を統率していた豪族であり、ヤマト王権による朝鮮半島や中国大陆への対外交渉に航海技術の提供をすることにより参加していたと考えられる。石室は、平面形を百済の漢城期の古墳と同じ右片袖構造をして、真ん中に高句麗古墳と同じような石柱を2本立て、漢城期の金銅製冠や伽耶に類例がある馬具を副葬している。これらは被葬者が朝鮮半島との交渉を通じて、横穴式石室という新しい墓制にふれ、半島の文物を手に入れた結果だと考える。国際色豊かな勝浦峯ノ畑古墳は海上交通を掌握した胸形君の奥津城として、ふさわしい内容をもつ古墳といえる。(池ノ上)



第 57 図 勝浦古墳群配置図 (1/2,500)

2. 勝浦古墳群について

勝浦古墳群は勝浦峯ノ畑古墳、勝浦井ノ浦古墳、勝浦高堀古墳から構成される。勝浦井ノ浦古墳については、『津屋崎古墳群Ⅰ』で触れているので、ここでは勝浦高堀古墳について触れる。

勝浦高堀古墳

所在地：勝浦字高堀 **立地：**北西にむかって延びる丘陵から西側へ派生する台地上

築造時期：5世紀中頃 **調査歴：**1994年 個人住宅建設にともない、発掘調査を実施した。

文献：①池ノ上宏編『津屋崎町内遺跡』

津屋崎町文化財調査報告書第19集

津屋崎町教育委員会 2002年

②比佐陽一郎他「錫で装飾された古墳時代の環頭大刀」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 2005年

1) 古墳の概要

標高11mほどの台地上に、5世紀前半の住居を埋め立て築造される。

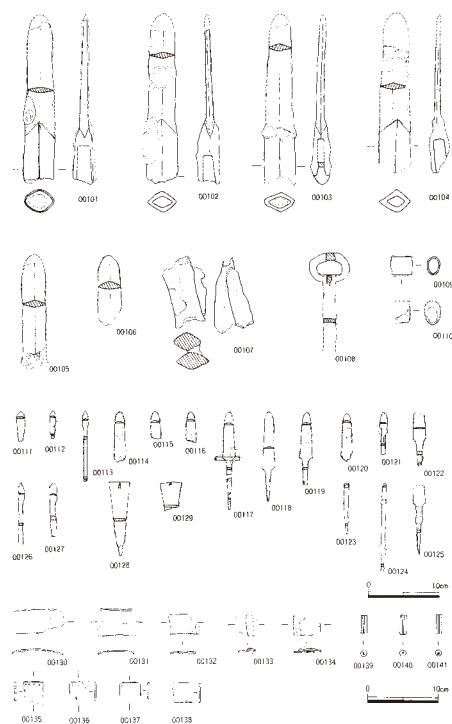
墳丘 高さ1m前後の盛土を検出した。削平により墳形は不明である。

内部主体 構造は不明であるが、幅4m、深さ1mの墓坑を部分的に検出した。

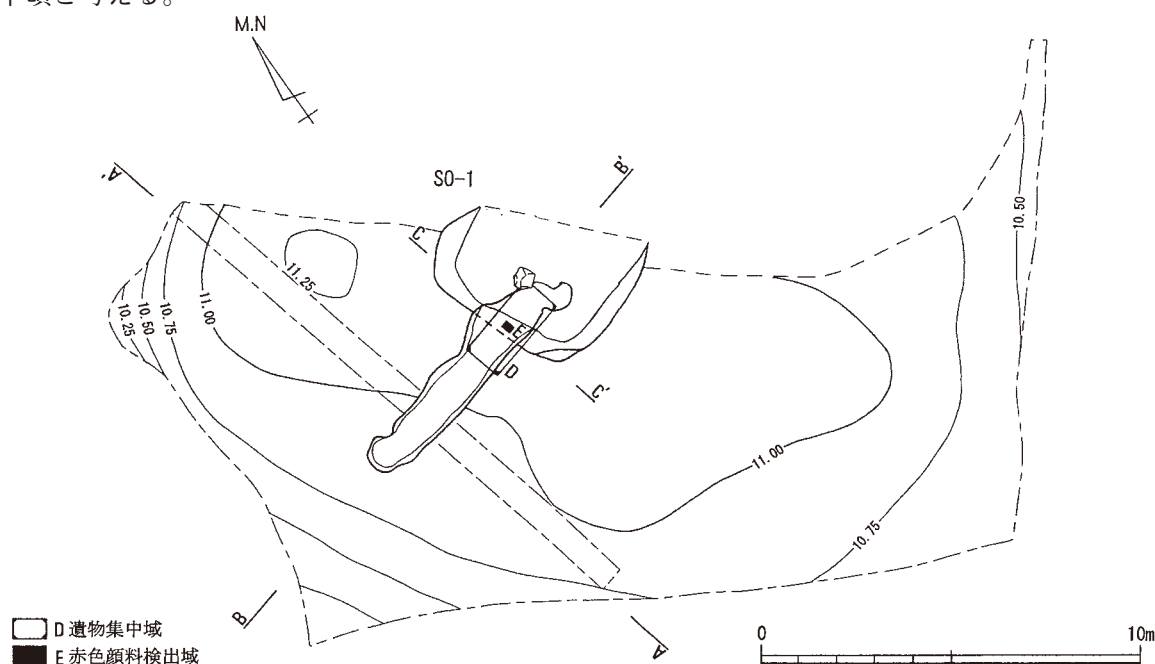
出土遺物 盗掘坑からガラス玉20点、鉄銚4点、素環頭大刀柄頭1点、鉄鏃多数、挂甲小札などが出土した。

2) 古墳の築造時期

墳丘下の住居形態および盗掘坑出土遺物から、5世紀中頃と考える。



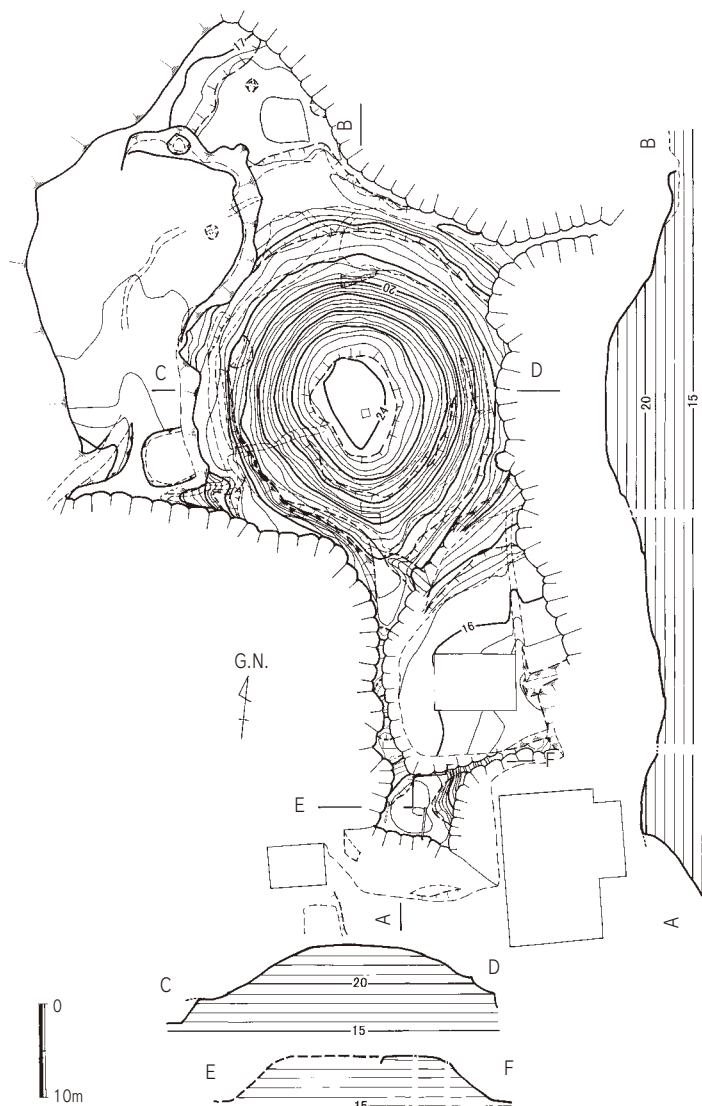
第58図 勝浦高堀古墳出土遺物実測図



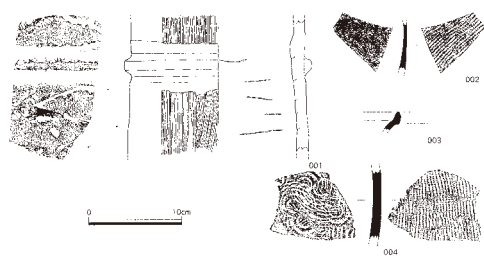
第59図 勝浦高堀古墳遺構実測図 (1/200)

3) 古墳の特質

当古墳南方 100m の勝浦峯ノ畑古墳築造に先立つ時期の古墳である。遺物には鉄鉾、素環頭大刀柄頭、挂甲小札などがある。特に素環頭大刀柄頭は平成 16 年に行った保存処理において、表面に錫を用いた装飾が施されていた事が判明した。(文献②より)



第 60 図 生家大塚古墳墳丘測量図 (1/800)



第 61 図 生家大塚古墳出土遺物実測図 (1/8)

3. 津屋崎古墳群について

5. 生家大塚古墳

所在地：生家字裏

立 地：大石山から西方に向かって派生する細長い丘陵縁辺部

築造時期：前方後円墳集成 8 期

調査歴：① 2003 年 史跡指定に向けた墳丘測量調査を実施した。

② 2005 年 隣接個人住宅建替に伴う範囲確認のトレンチ調査を実施した。

文 献：池ノ上宏編『津屋崎古墳群 I』津屋崎町文化財調査報告書第 20 集津屋崎町教育委員会 2004 年

1) 古墳の概要

墳丘 古墳は標高 15m の丘陵縁辺部にある。主軸を N-173° -E にとり前方部を南に向ける前方後円墳。墳丘規模は現況で全長 73m、後円部径 28.5m、高 8m、後円部頂の径 10m、前方部長 36.5m、高 6.8m、後円部と前方部高低差 3.8m を測る。

外表施設 埴輪あり

内部主体 不明

出土遺物 須恵器甕がある。

2) 古墳の築造時期

採集した円筒埴輪は高橋徹氏の埴輪編年のⅣ期であり、前方後円墳集成の 8 期、5 世紀後半と考える。

3) 古墳の特質

北方の新原・奴山古墳群と南方の須多田古墳群の中間に位置する。当墳ののる同じ丘陵尾根筋で他に顕著な規模をもつ古墳は知られず、単独墳的な立地は、群を構成する新原・奴山古墳群および須多田古墳群と対照的である。

6. 大石岡ノ谷古墳群

所在地：大石字岡ノ谷

立 地：大石山山麓から西へ向かって派生する尾根上

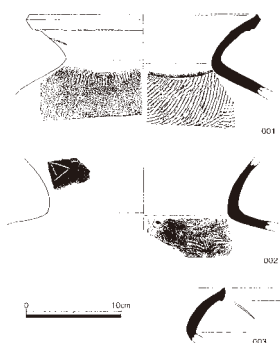
築造時期：前方後円墳集成9期

調査歴：2003 年 史跡指定に向けた墳丘測量調査を実施した。

文 献：池ノ上宏編『津屋崎古墳群Ⅰ』

津屋崎町文化財調査報告書第19集

津屋崎町教育委員会 2004 年



第62図 大石岡ノ谷1号墳出土遺物実測図 (1/8)

1) 古墳群の概要

標高42mから54mの尾根上に、前方後円墳2基と円墳1基が墳裾を接して立地する。

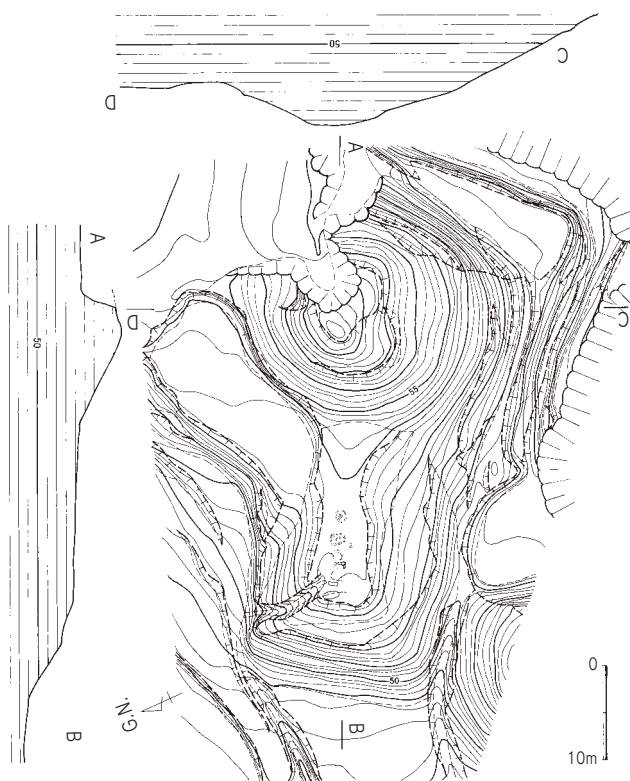
1号墳 墳丘 主軸をN-57°-Wにとり前方部を北西に向ける前方後円墳。規模は現況で全長43m、後円部径31.5m、高7.4m、後円部頂の径6.7m、前方部長29m、幅22m、高5m、くびれ幅17.5m、後円部と前方部高低差5mを測る。

内部主体 横穴式石室

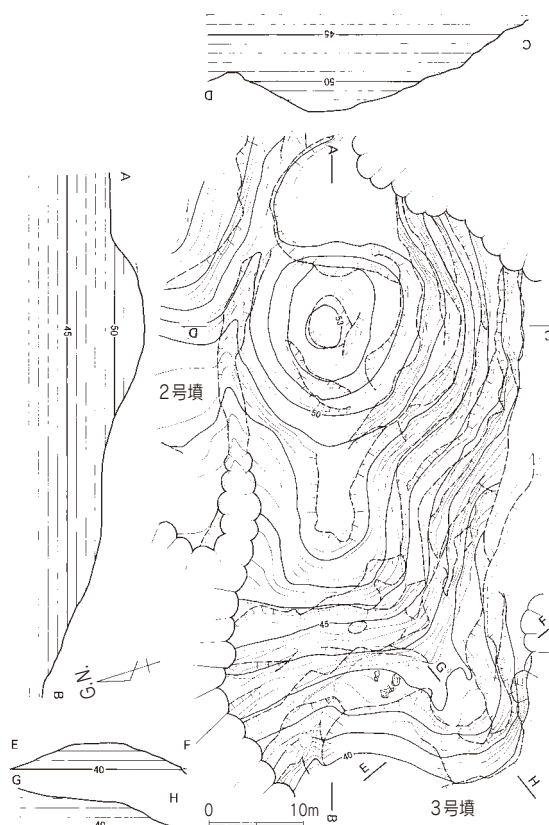
出土遺物 須恵器甕がある。石室から漆塗りの木製の案、鋸、金銅製品、桂甲小札が出土したという。

2号墳 墳丘 主軸をN-73°-Wにとり前方部を北西に向ける前方後円墳。規模は現況で全長43m、後円部径26.5m、高3.6m、後円部頂の径4.5m、前方部長20m、幅15m、高4m、くびれ幅12m、後円部と前方部高低差4.6mを測る。

3号墳 径10m、高さ1.5mを測る円墳か。



第63図 大石岡ノ谷1号墳墳丘測量図 (1/800)



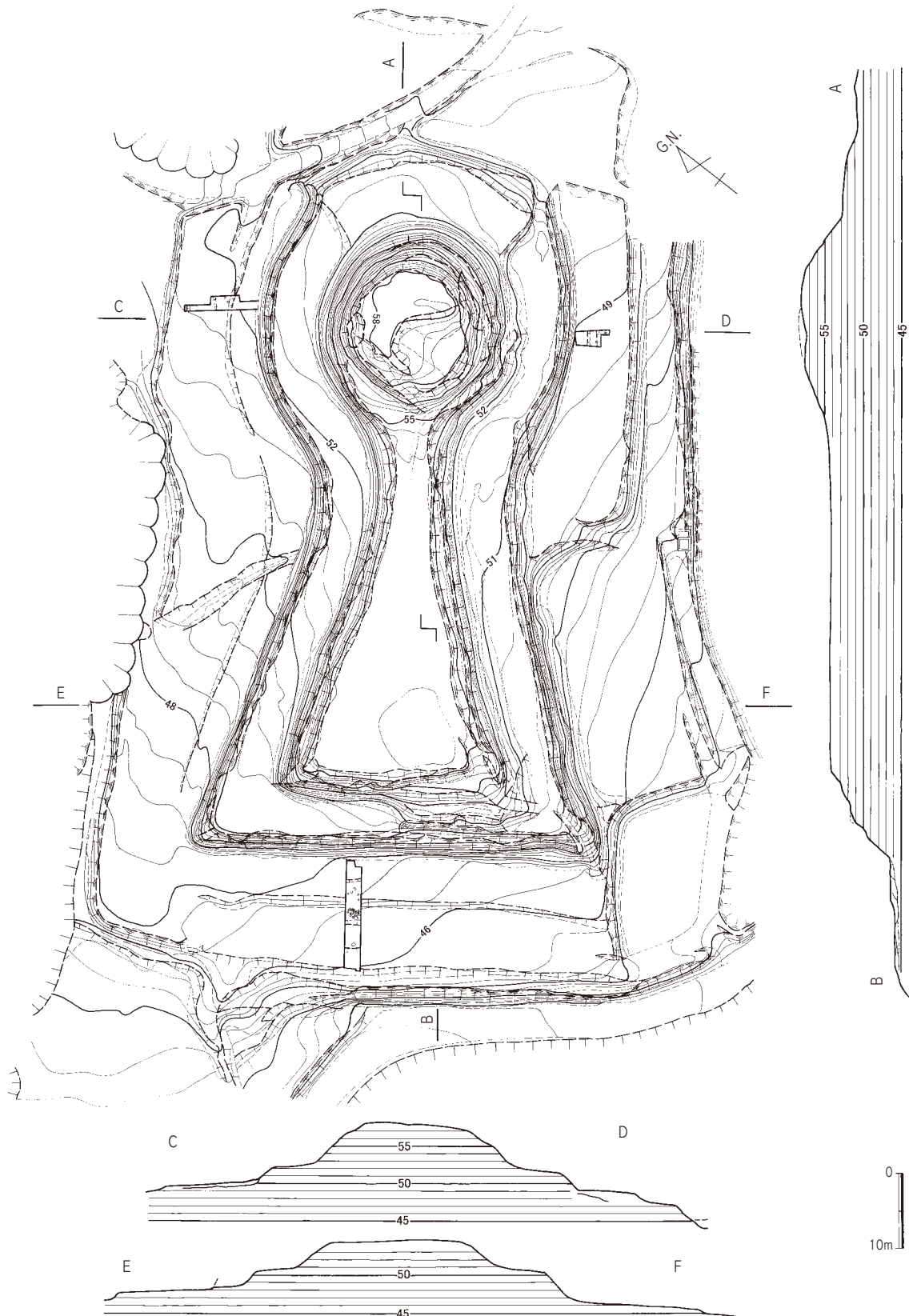
第64図 大石岡ノ谷2・3号墳墳丘測量図 (1/800)

2) 古墳の築造時期

採集した須恵器から前方後円墳集成の9期、6世紀後半と考える。なお、2号墳は1号墳を意識して築造されており、1号墳に後出すると考える。

3) 古墳の特質

1、2号墳は約500m西方にある須多田古墳群形成の後半期と併行し内陸部に築造される。



第 65 図 在自剣塚古墳墳丘測量図 (1/800) - 94 -

12. 在自剣塚古墳

所在地：在自字剣塚

立 地：水落山（標高 247.1m）から西に広がる台地の付け根

築造時期：前方後円墳集成編年 10 期

調査歴：2002 年 史跡指定に向けた範囲確認のトレンチ調査および墳丘測量調査を実施した。

文 献：池ノ上宏編『津屋崎古墳群 I』津屋崎町文化財調査報告書第 20 集

津屋崎町教育委員会 2004 年

1) 古墳の概要

墳丘 古墳は標高 50m の台地の基部にある。主軸を N-128° -W にとり前方部を南西に向ける 2 段築成の前方後円墳。墳丘規模は全長 101.7m、後円部径 49m、高 7.3m、後円部頂の径 13.5m、前方部幅 64m、長 54.5m、高 8.8m、くびれ幅 34.8m、後円部と前方部高低差 3.7m を測る。

外表施設 葺石あり

出土遺物 須恵器大型甕、須恵器高坏型器台、須恵器高坏、須恵器坏がある。

2) 古墳の築造時期

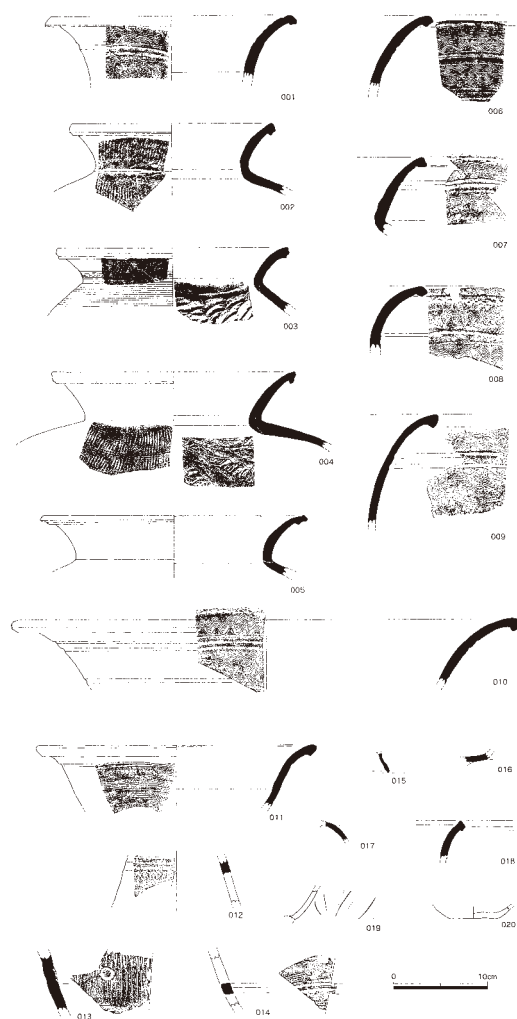
出土した須恵器から TK43 併行期、前方後円墳集成の 10 期、6 世紀第 4 四半期と考える。

3) 古墳の特質

全長 101.7m は宗像地域最大の規模である。また、他の津屋崎古墳群を構成する大型前方後円墳に比べ古墳時代に入り海であったと考えられる範囲から離れ、内陸寄りに立地している。

この立地は、次代の首長墓と考えられる宮地嶽古墳と類似している。宮地嶽古墳は入り海の湾口から東へ 3km の丘陵中腹に立地する。前代まで入り海を指向してきたように見受けられる首長墓築造の選地は、宮地嶽古墳では変化していると考えられる。その萌芽はすでに在自剣塚古墳の築造時に認められる。

(南時夫)



第 66 図 在自剣塚古墳出土遺物実測図 (1/8)

集成 編年	勝浦				奴山・生家		須多田		宮司・手光		
400	5									 宮司井手ノ上古墳 (26)	
	6					 奴山正國古墳 (32)		 宮ノ下古墳 (10)			
	7	 勝浦高堀古墳 (30)									
500	7	 勝浦峯ノ畑古墳(100)				 新原・奴山 1 号墳 (50)					
		 勝浦井ノ浦古墳 (70)				 新原・奴山 22 号墳 (80)		 須多田ニタ塚古墳 (34)			
	8	 神湊上野 1 号墳 (40)				 新原・奴山 24 号墳 (54)		 須多田上ノ口古墳 (43)			
						 生家大塚古墳 (73)					
	600	9					 新原・奴山 12 号墳 (43)				
 桜京古墳 (39)				 新原・奴山 30 号墳 (54)		 須多田天降天神社古墳 (80)					
 勝浦高原 11 号墳 (49)						 須多田ミノ塚古墳 (60)					
10								 須多田下ノ口古墳 (83)		 大石岡ノ谷 1 号墳 (55)	
							 在自剣塚古墳 (102)		 大石岡ノ谷 2 号墳 (43)		
										 宮地嶽古墳 (34)	
										 手光波切不動古墳 (20)	

第 67 図 津屋崎古墳群の首長墓編年

(白抜きは時期決定根拠の弱いもの。古墳名の後の数字は全長ないし直径を示す)

勝浦峯ノ畑古墳を含む津屋崎古墳群は、海上交通を担い、沖ノ島祭祀に関わりをもつ胸形君一族の墳墓群と考えられる。ここでは宗像地域における津屋崎古墳群について考える。

まず、宗像地域最初の首長墓は宗像市を流れる釣川中流域左岸で前方後円墳集成編年の2期(以下、集成編年と記す)に造られた徳重本村2号墳(全長18.7m、以下古墳名の後の数字は全長ないし直径を示す)である。主体部は木蓋土壙墓で副葬品は獣帯鏡片と鉄製工具がある。集成編年3期には田久瓜ヶ坂1号墳(30.7)は4基の主体部から鉄製工具が出土している。

集成編年4期に東郷高塚古墳(64)が造られる。主体部の長大な割竹型木棺は盗掘を受けていたが、鉄刀、鉄剣、鉄矛、勾玉、管玉が出土している。それまでの2古墳とは墳丘規模・副葬品からも飛躍的な発展を遂げている。東郷高塚古墳は弥生時代以来の釣川流域の穀倉地帯に基盤を置いた宗像地域の盟主墳であり、背景にヤマト王権による沖ノ島祭祀がある。その後の盟主墳は明確ではないが、同じ釣川中流域左岸に集成編年4期とされる田久貴船前1号墳(50～60)、集成編年5期とされる田久貴船前2号墳(30)が東郷高塚古墳に続く盟主墳の可能性がある。その後の宗像地域の盟主墳は海岸部の津屋崎古墳群へと移動する。

津屋崎古墳群は玄界灘に面する福津市北部の勝浦から南の手光までに分布する集成編年6期以降に造られた前方後円墳と大型円墳を中心とする胸形君一族の墳墓群の総称で、北から勝浦地区、奴山・生家地区、須多田地区、宮司・手光地区の4地区からなる。

集成編年5期に宮司・手光地区で宮司井手ノ上古墳(26・円墳)がある。副葬品に鉄製武具・武器・工具をもつ在地小地域の首長の墓と考えられる。集成編年6期に奴山・生家地区で奴山正園古墳(旧奴山5号墳・32・円墳)が造られる。主体部は箱式石棺で棺外副葬として三角板革綴短甲や豊富な鉄製武器・工具が出土している。宮司井手ノ上古墳と同様に在地小地域の首長の墓とする考えもあるが、釣川中流域から津屋崎へ盟主墳の移動の中で考える必要がある。

集成編年7期に勝浦地区で前方後円墳の可能性もある勝浦高堀古墳(30・円墳)が造られる。その後、勝浦峯ノ畑古墳(100)、勝浦井ノ浦古墳(70)と盟主墳が継続して勝浦地区で造られる。集成編年8期には奴山・生家地区の新原・奴山22号墳(75～80)、生家大塚古墳(73)と造られる。集成編年9期には須多田地区に須多田天降天神社古墳(80)、須多田ミソ塚古墳(60)、須多田下ノ口古墳(83)と続き、集成編年10期後半に宗像地域最大規模を誇る在自剣塚古墳(102)が造られると胸形君は前方後円墳の築造を止める。その後、天武天皇に嫁して高市皇子を産んだ尼子娘の父、胸形君徳善の墳墓とされる宮地嶽古墳(34・円墳)、手光波切不動古墳(20・円墳)が7世紀中頃に造られた後、胸形君は古墳の築造を止める。

宗像地域の首長墓系譜と沖ノ島祭祀は密接な関係がある。古墳時代前期、釣川中流域で小規模な前方後円墳を築造していた首長が、沖ノ島祭祀の岩上祭祀の始まりとともに、墳丘規模・主体部・副葬品ともにそれまでとは大きく飛躍した発展を遂げる。その後、内陸部から海岸部へと墓域の移動が行われる。沖ノ島祭祀では岩上祭祀から岩陰祭祀へに移る時期にあたる。岩陰祭祀の終わり(7世紀前半)に宮地嶽古墳が造られるのである。(池ノ上)

註) 第67図の津屋崎古墳群の首長墓編年図は『津屋崎古墳群Ⅰ』『Ⅴ 津屋崎古墳群の形成 8. 宗像における首長墓系譜』に今回の報告と宗像についての多数の研究成果を元に修正を加えたものである。

- 1 勝浦高原古墳群
- 2 勝浦峯ノ畑古墳
- 3 勝浦井ノ浦古墳
- 4 新原・奴山古墳群
- 5 生家大塚古墳
- 6 大石岡ノ谷古墳群
- 7 須多田天降天神社古墳
- 8 須多田上ノ口古墳
- 9 須多田ニタ塚古墳
- 10 須多田ミソ塚古墳
- 11 須多田下ノ口古墳
- 12 在自剣塚古墳
- 13 宮地獄古墳
- 14 宮司井手ノ上古墳
- 15 手光湯ノ浦古墳群
- 16 手光波切不動古墳



第 68 図 津屋崎古墳群分布図 (1/40,000)

図 版



第1トレンチ調査風景



埋め戻し風景



1. 勝浦古墳群航空写真 (1982 年 5 月撮影)

数字は勝浦高原古墳群の古墳番号



1. 勝浦峯ノ畑古墳全景空中写真 (2007 年 3 月撮影)



2. 勝浦峯ノ畑古墳を前方部から望む (2009 年 3 月撮影)



1. 全景 南東から (1976 年撮影)



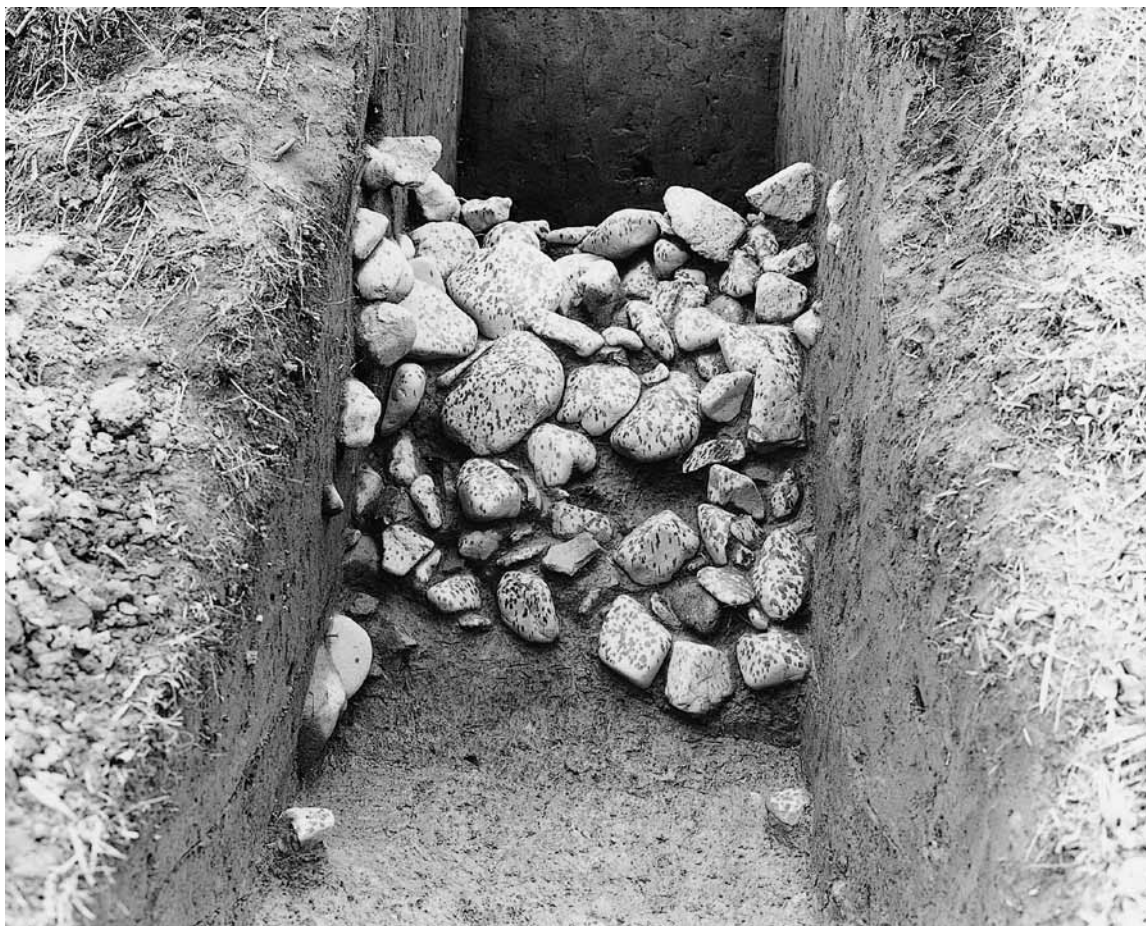
2. 後円部確認トレンチ 南から (1976 年撮影)



1. 後円部確認トレンチ 東から (1976 年撮影)



2. 第1トレンチ (北から)



1. 第1トレンチ石積（北から）



2. 第1トレンチ（北から）



1. 第1・8トレンチ (北から)



2. 第1・8・10トレンチ 空中写真



1. 第1・8・10トレンチ (北から)



2. 第1・8・10トレンチ (西から)



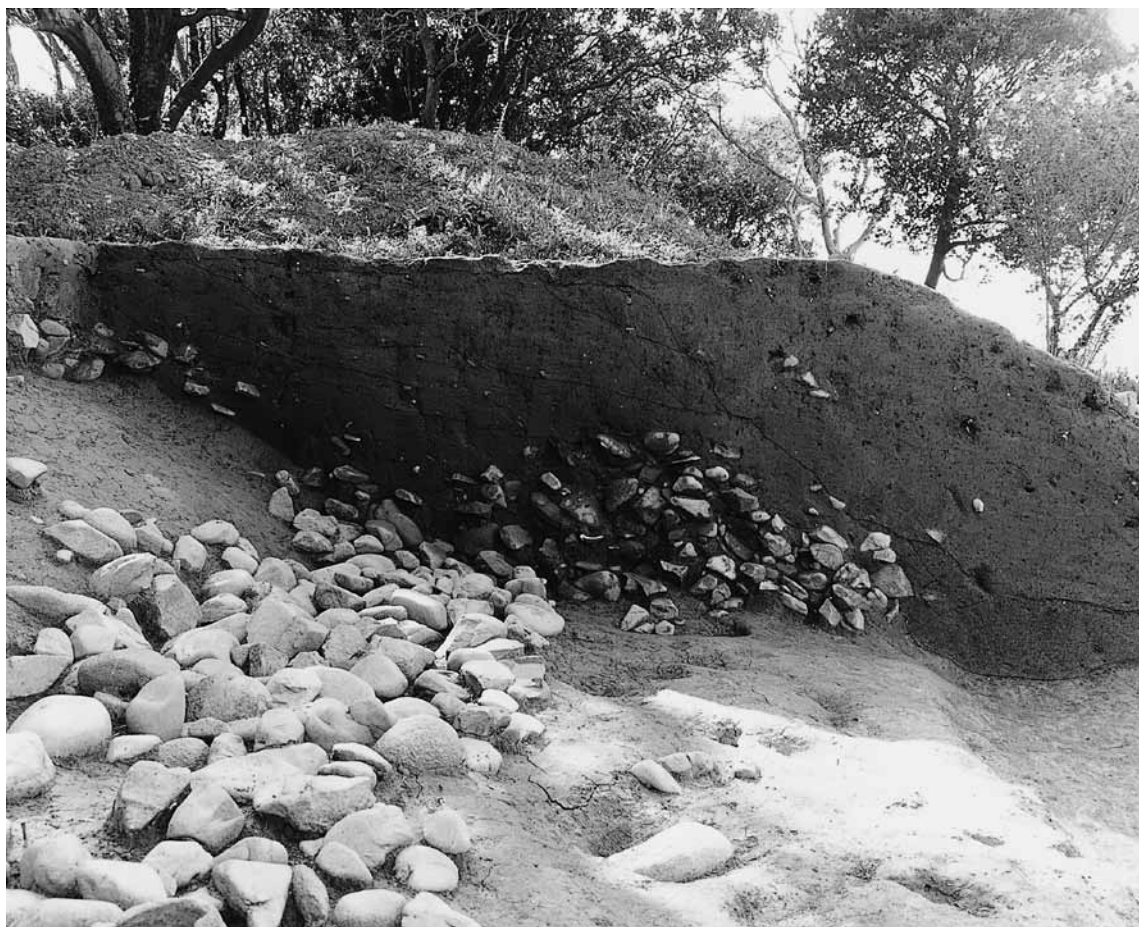
1. 第1・8・10トレンチ (東から)



2. 第1・8・10トレンチ区画石列 (北から)



1. 第1・8・10トレンチ葺石根石列（西から）



2. 第8トレンチ西壁



1. 第2トレンチ (北から)



2. 第3・9トレンチ 空中写真



1. 第3トレンチ 空中写真



2. 第3トレンチ (北から)



1. 第9トレンチ (北から)



2. 第4トレンチ (南東から)



1. 第5・12・11 トレンチ空中写真



2. 第11 トレンチ (西から)



1. 第11 トレンチ 葺石根石検出状況（西から）



2. 第12 トレンチ（西から）



1. 第5トレンチ (西から)



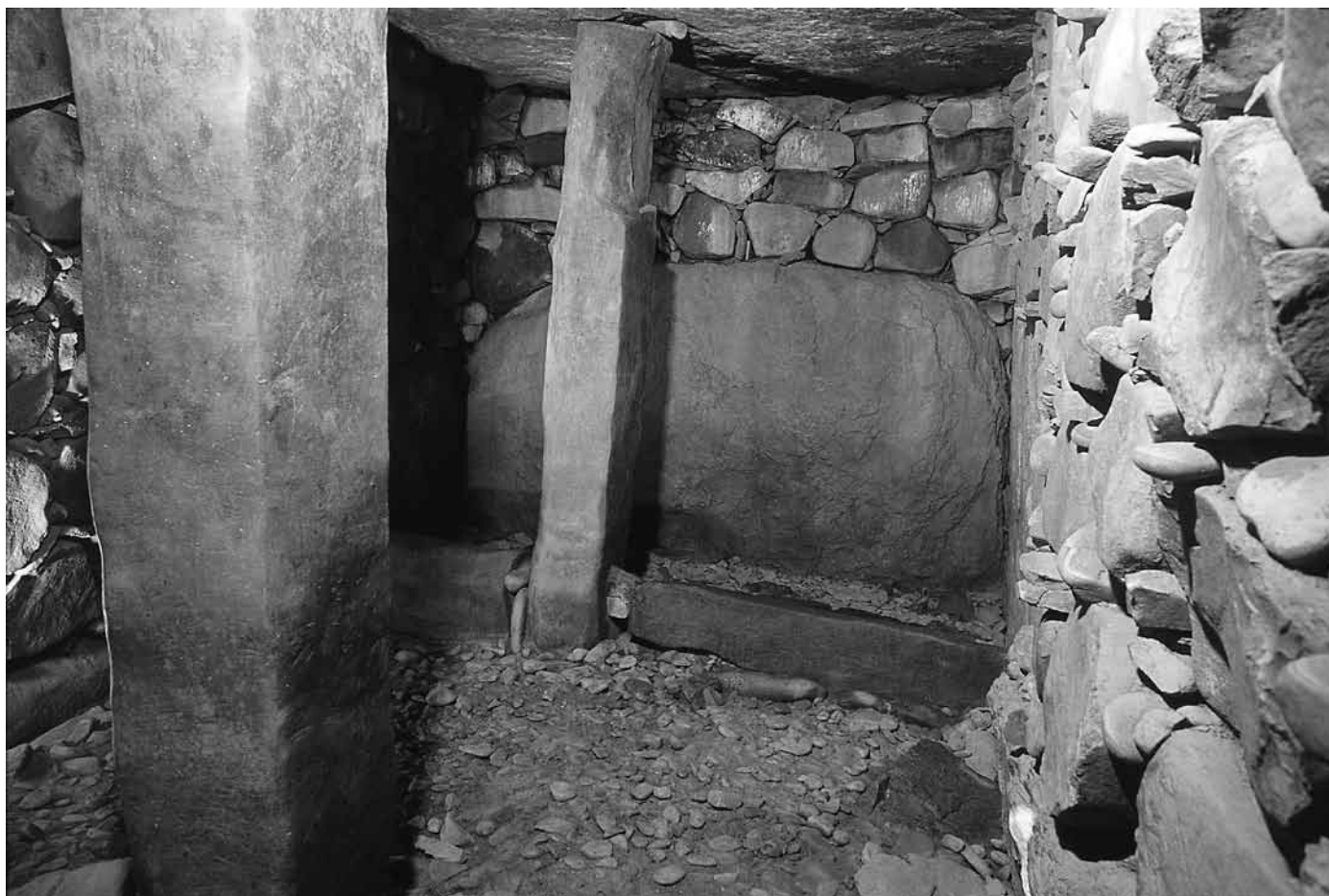
2. 第5トレンチ北壁



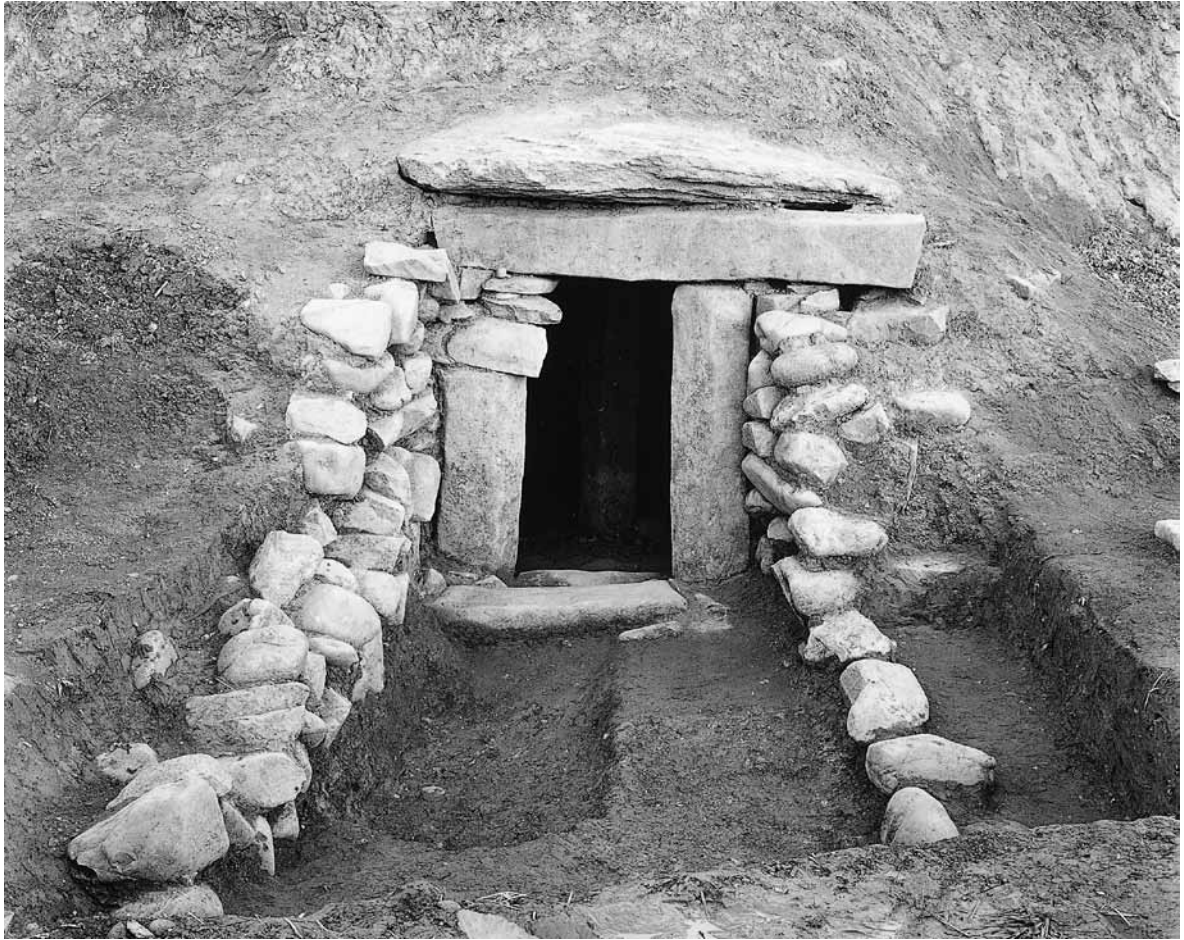
1. 第6トレンチ (南から)



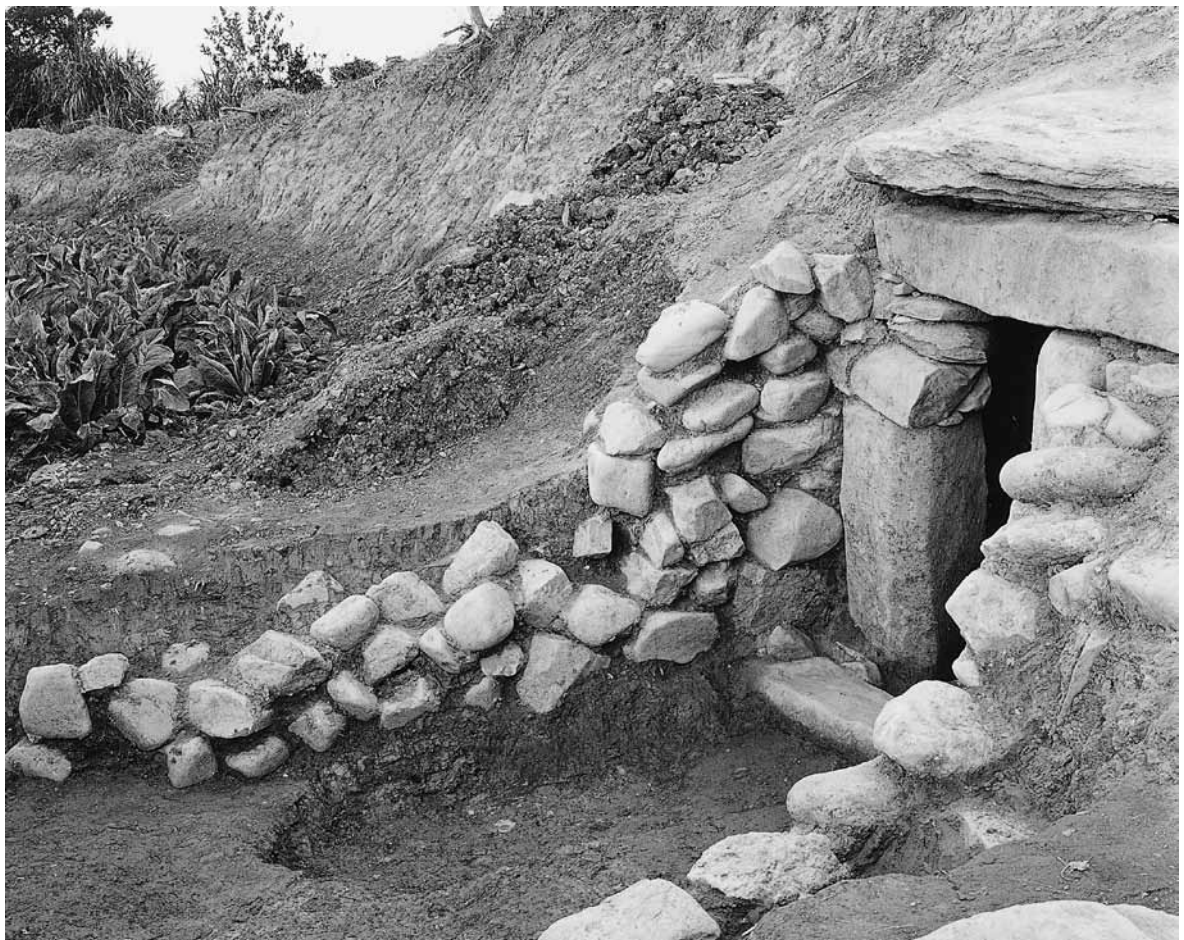
2. 第7トレンチ (南から)



3. 石室奥壁と石柱 (西から)



1. 前庭部と玄門（南西から）



2. 左前庭側壁（南から）



1. 屍床と石柱（南西から）



2. 敷石玄関から奥壁方向（南西から）



1. 左側壁・奥壁側（南から）



2. 左側壁・羨道側（東から）



1. 右側壁・奥壁側（西から）



2. 石柱（南から）



1. 奥壁側の石柱（南から）



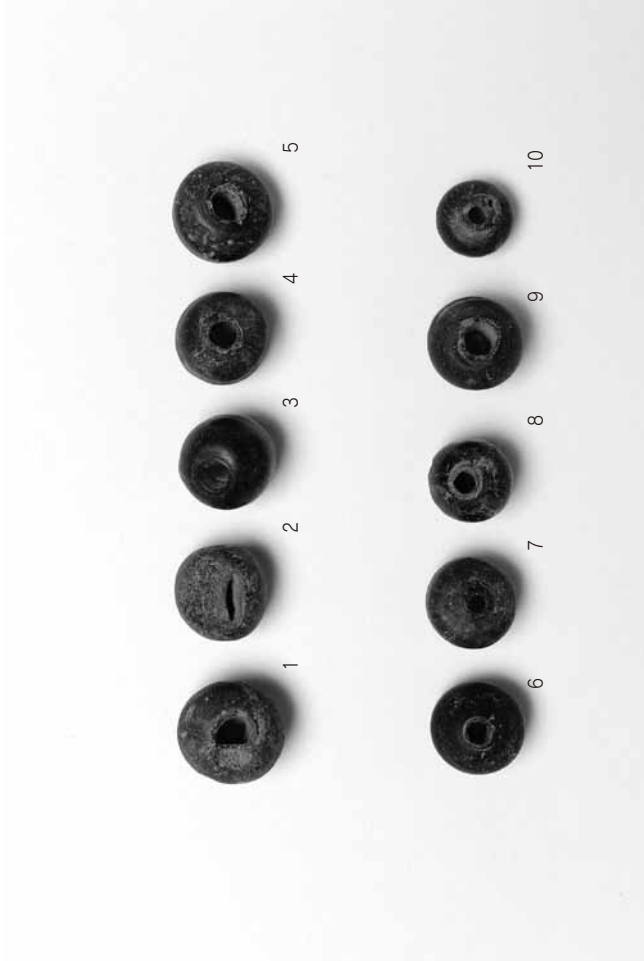
2. 右袖石を奥壁側から



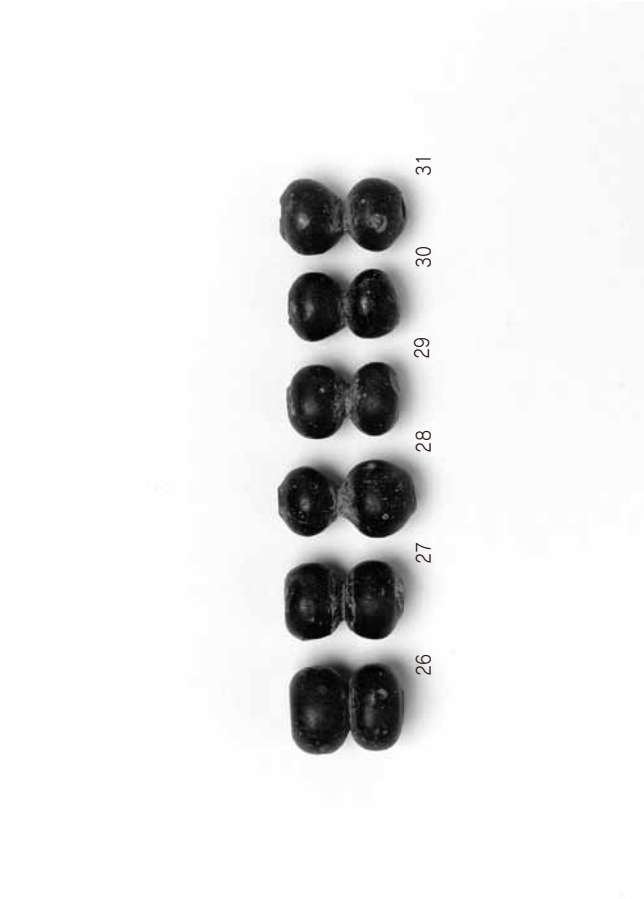
1. 左袖石付近から出土した鉄鋳



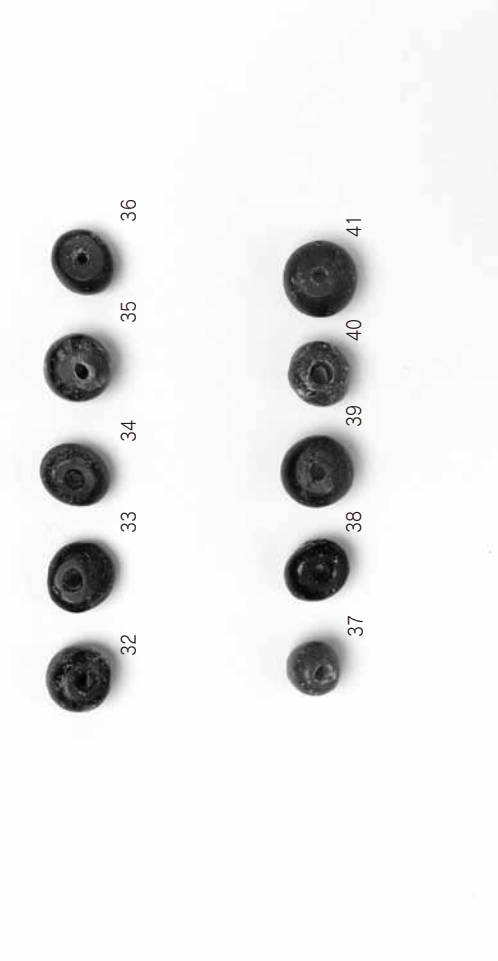
2. 榎石上出土の土器



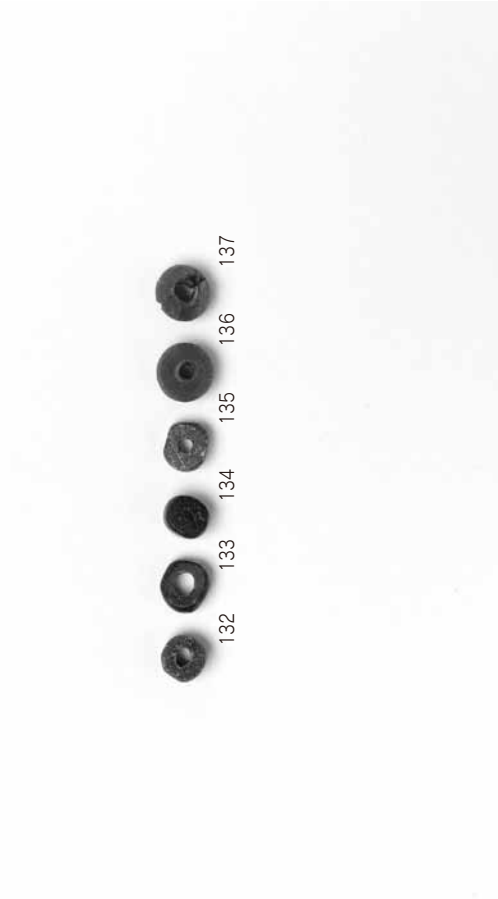
1. ガラス丸玉 (I -a 類)



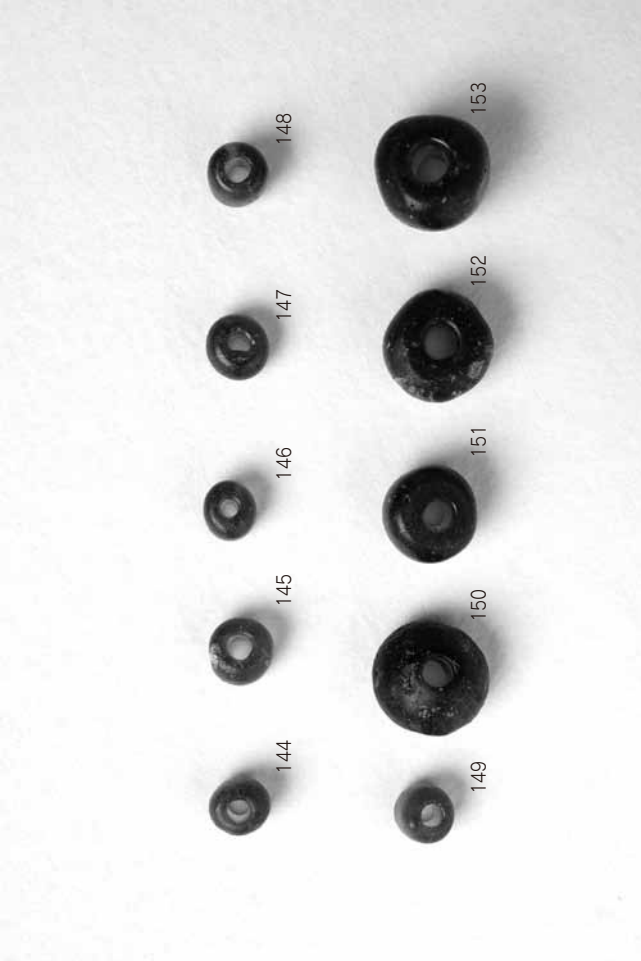
2. ガラス連玉 (I -a 類)



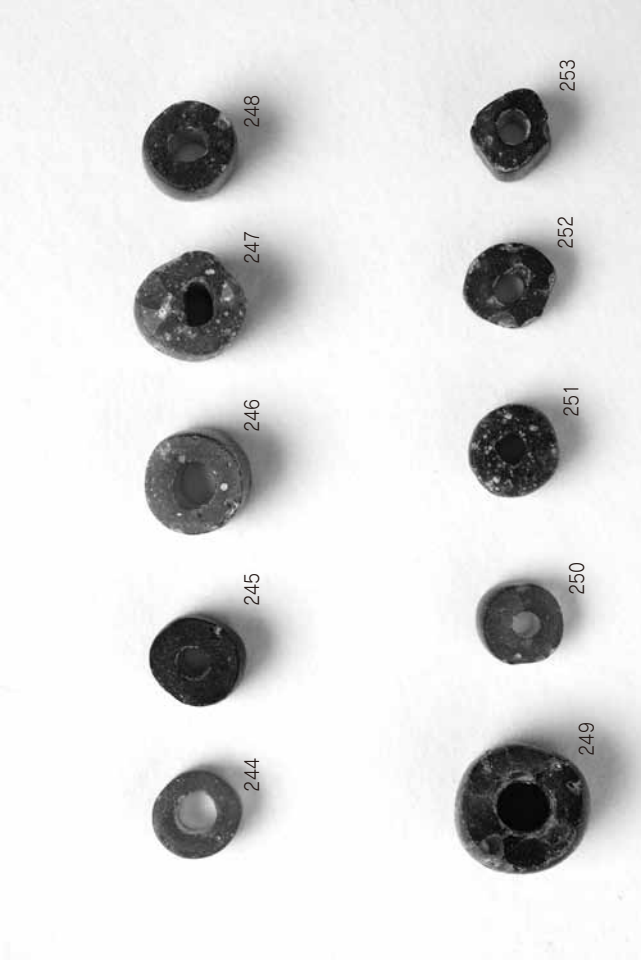
3. ガラス小玉 (II -b 類)



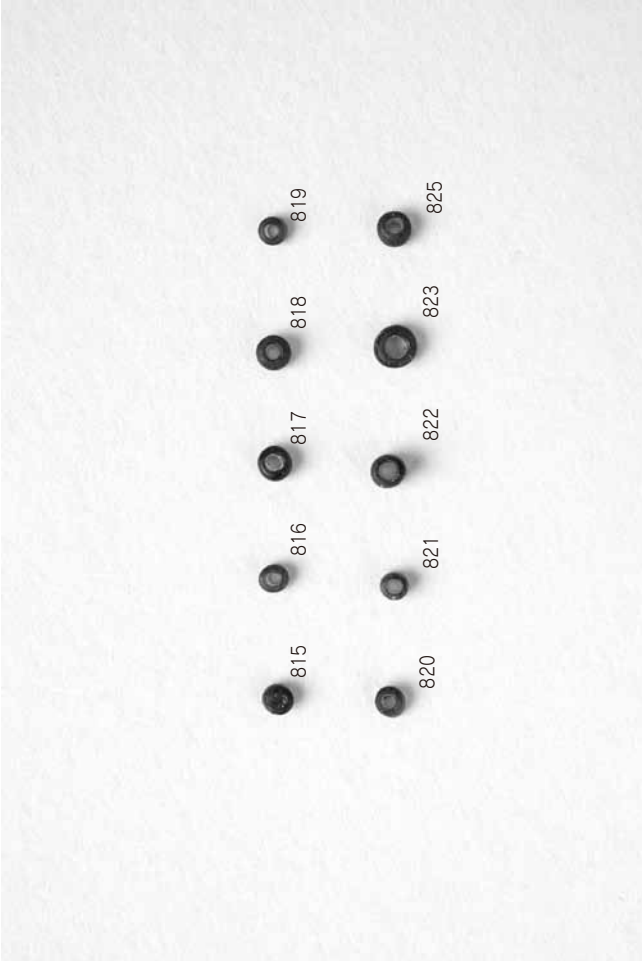
4. ガラス小玉 (II -b・c 類)



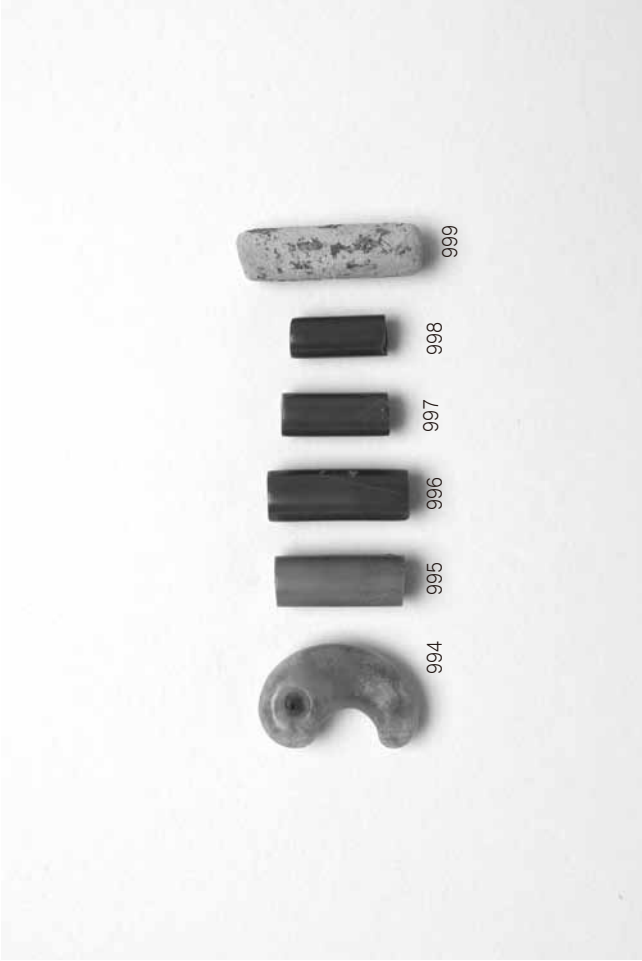
1. ガラス小玉 (Ⅲ -b 類)



2. ガラス小玉 (Ⅲ -c 類)



3. ガラス栗玉 (Ⅳ -b 類)



4. ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉



1. 琥珀製勾玉



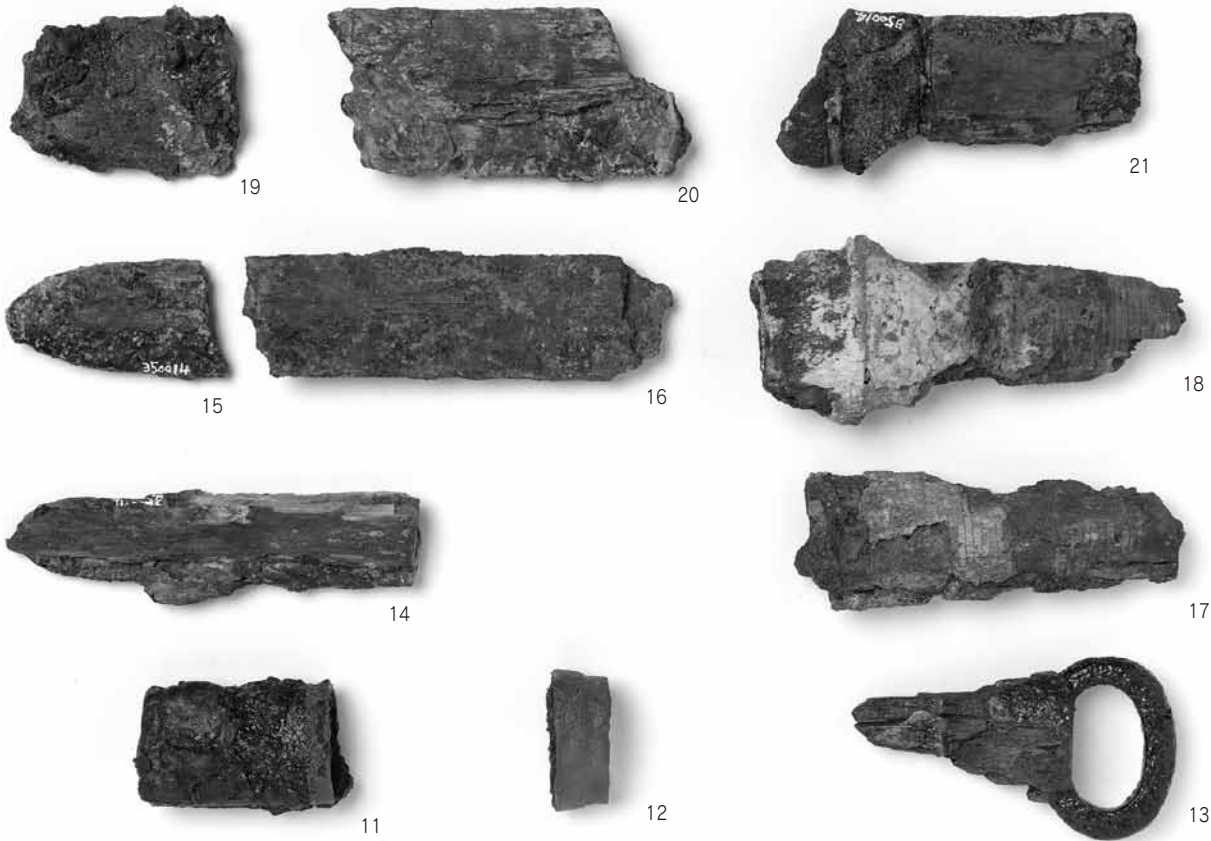
2. 琥珀製棗玉・丸玉①



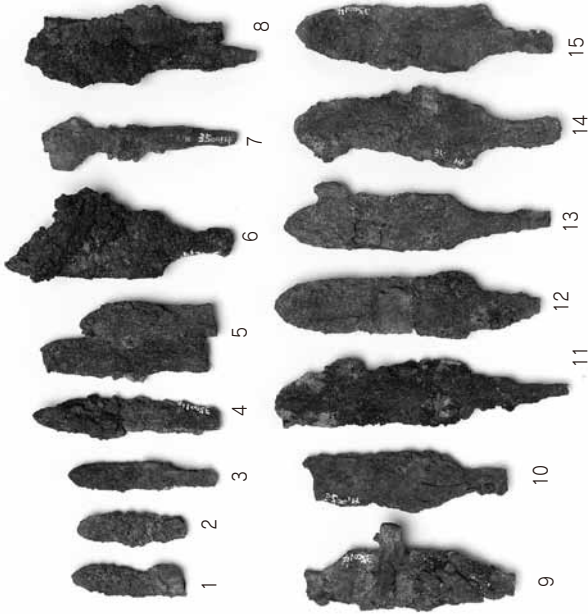
3. 琥珀製棗玉・丸玉②



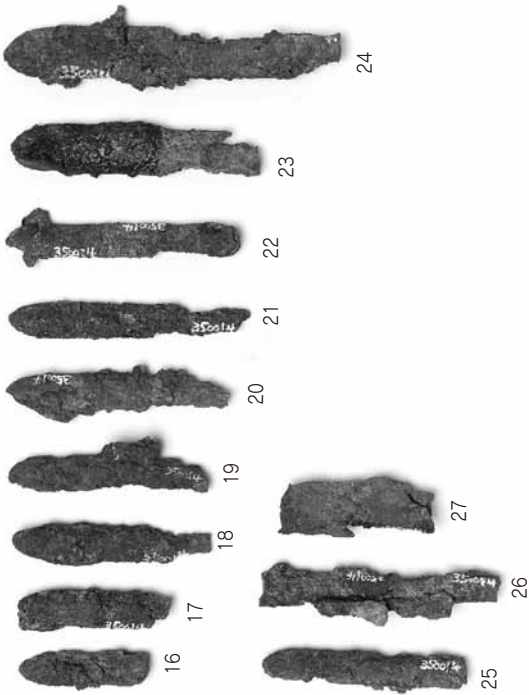
1. 大刀



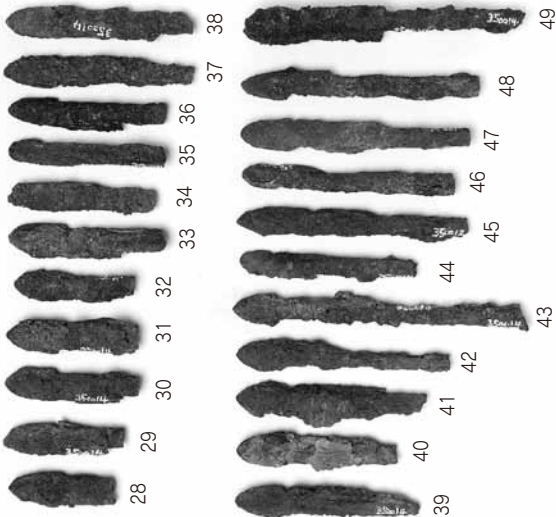
2. 素環頭大刀・鉄剣



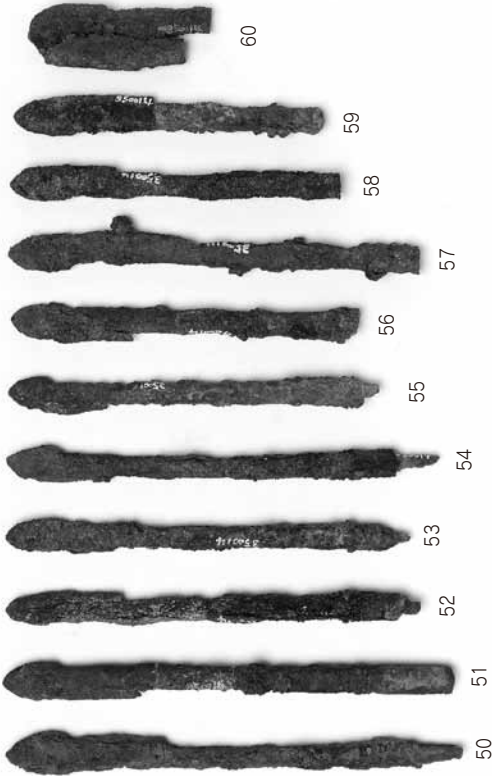
1. 鉄鏃 (柳葉式)



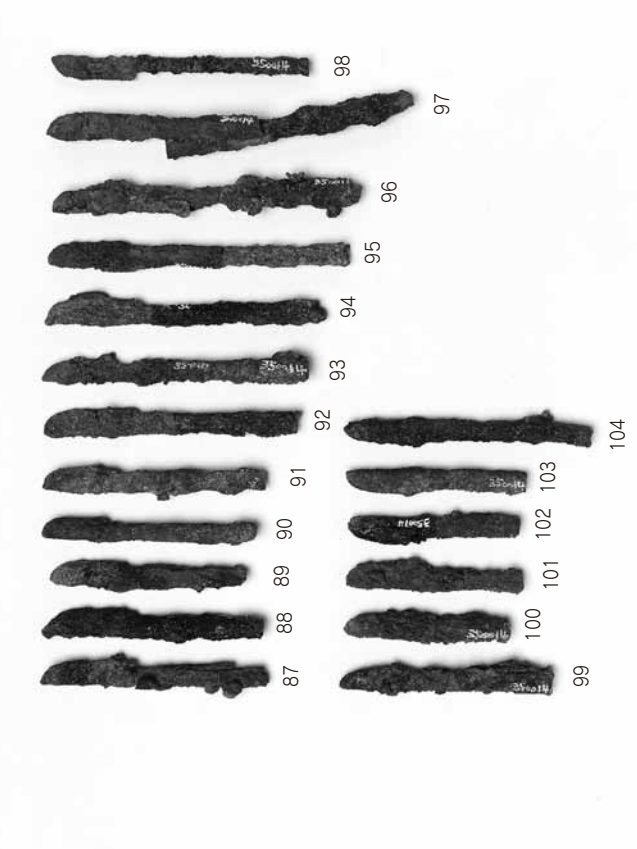
2. 鉄鏃 (腸扶柳葉式)



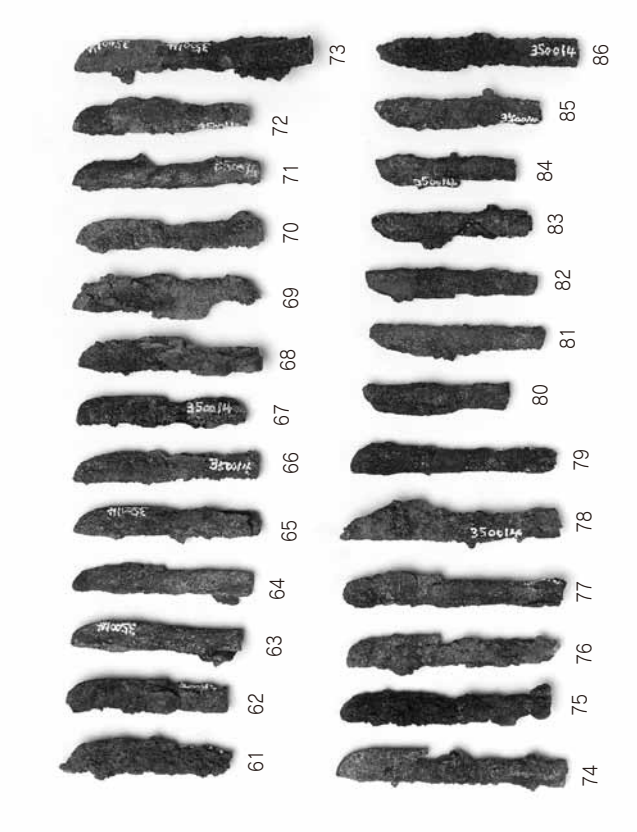
3. 鉄鏃 (独立腸扶式) ①



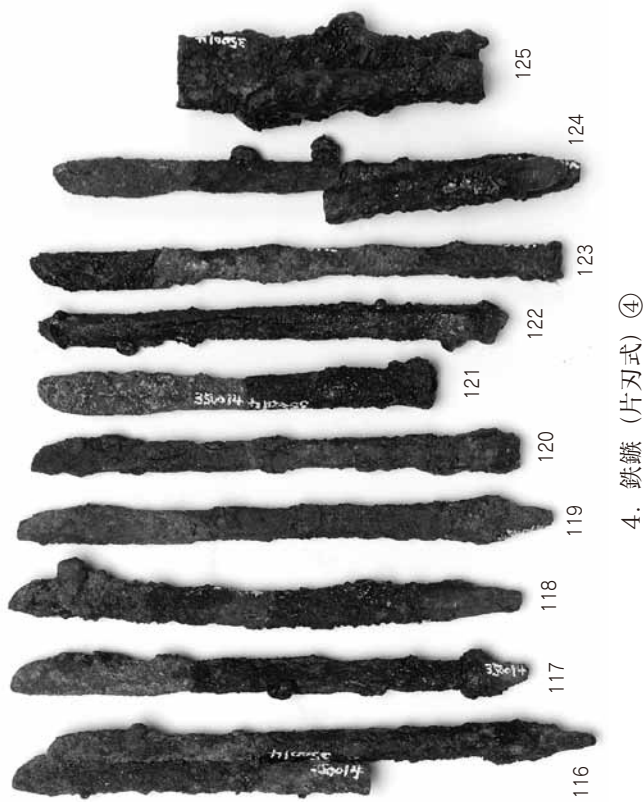
4. 鉄鏃 (独立腸扶式) ②



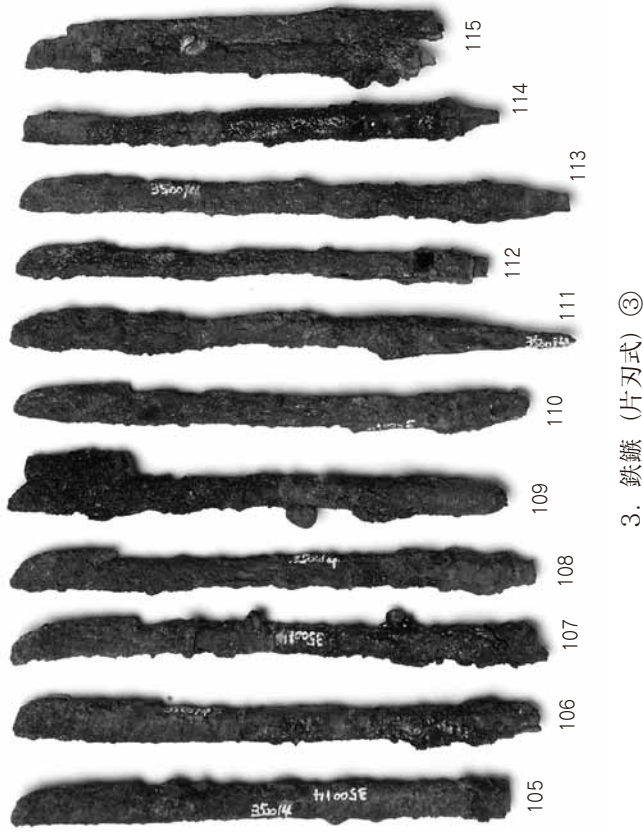
2. 鉄鏃 (片刃式) ②



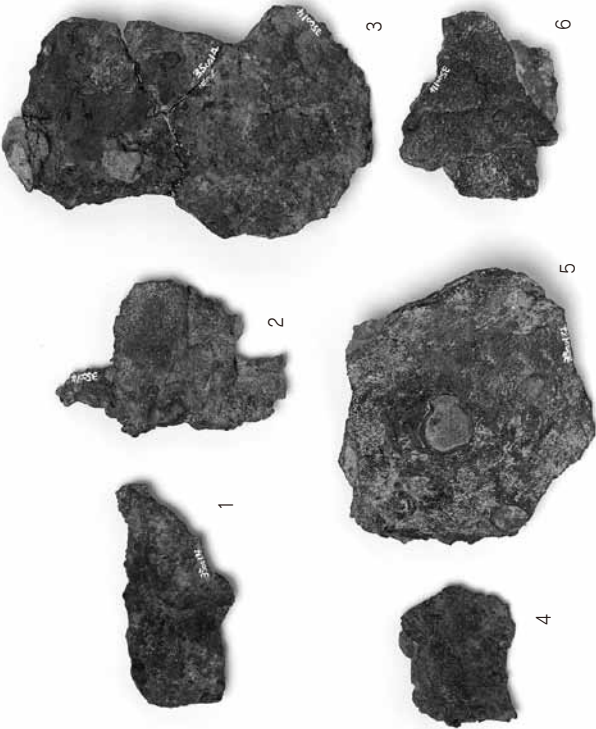
1. 鉄鏃 (片刃式) ①



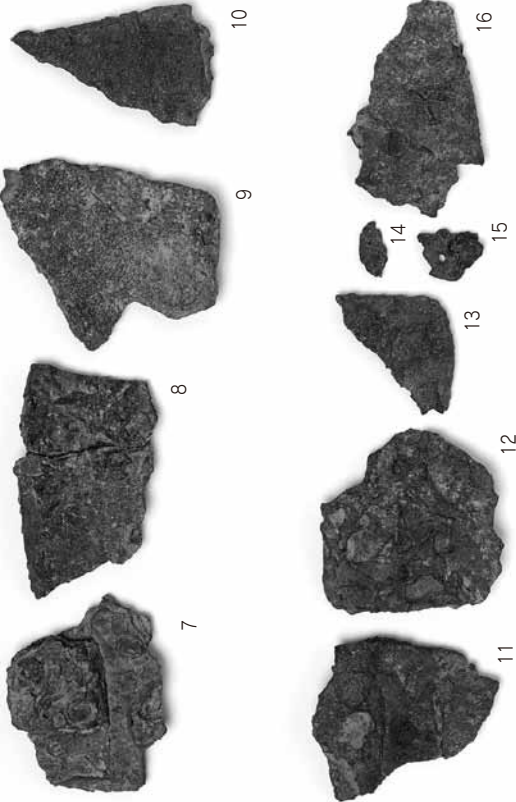
4. 鉄鏃 (片刃式) ④



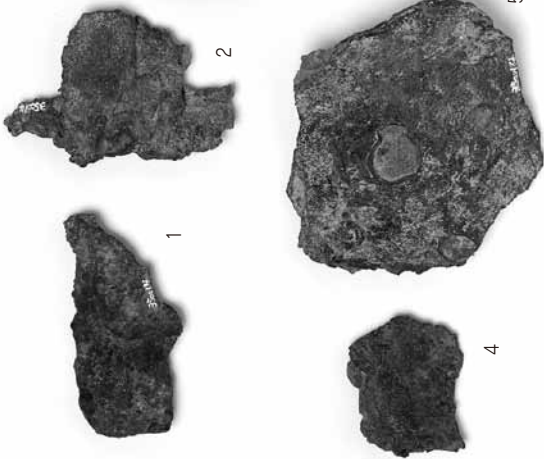
3. 鉄鏃 (片刃式) ③



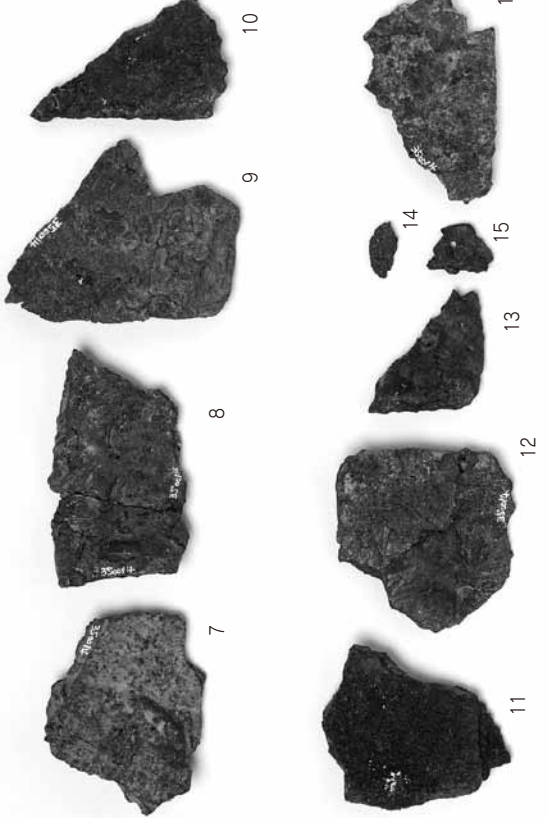
1. 短甲等① (外面)



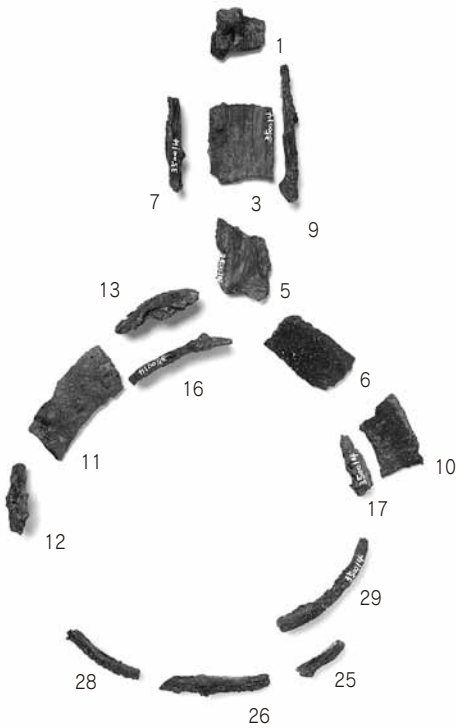
3. 短甲等② (外面)



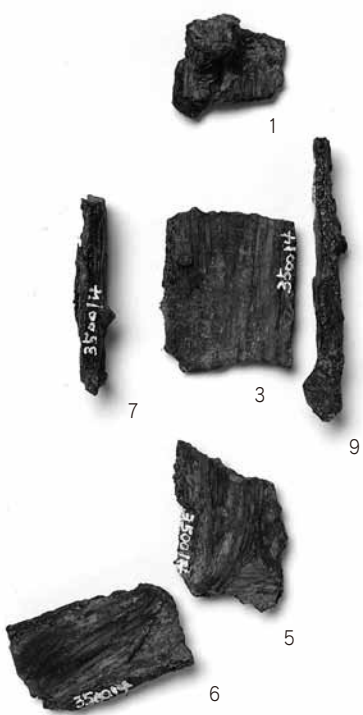
2. 短甲等① (内面)



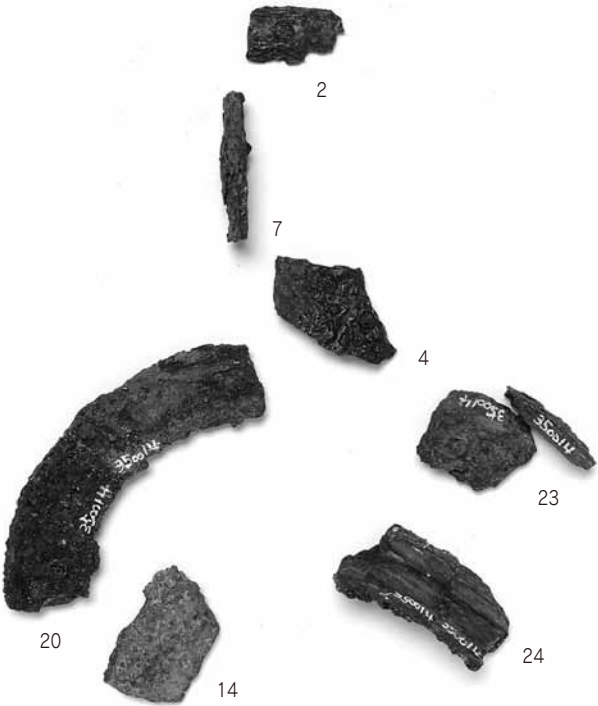
4. 短甲等② (内面)



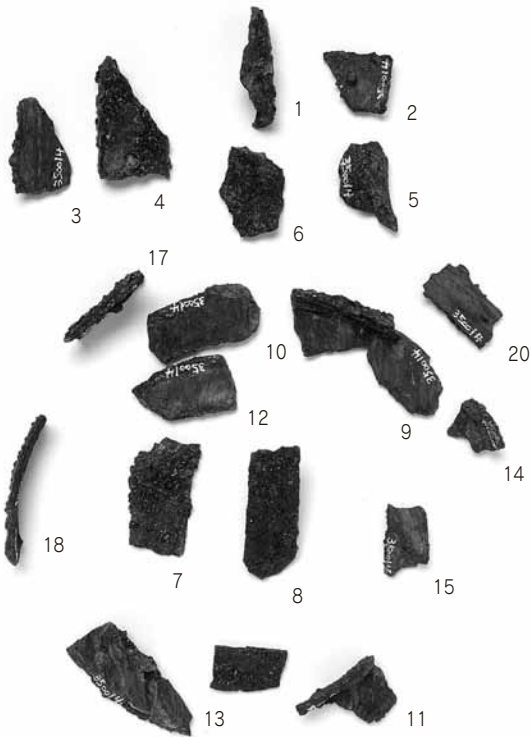
1. 木心鉄板張輪鐙①



2. 木心鉄板張輪鐙① (拡大)



3. 木心鉄板張輪鐙②

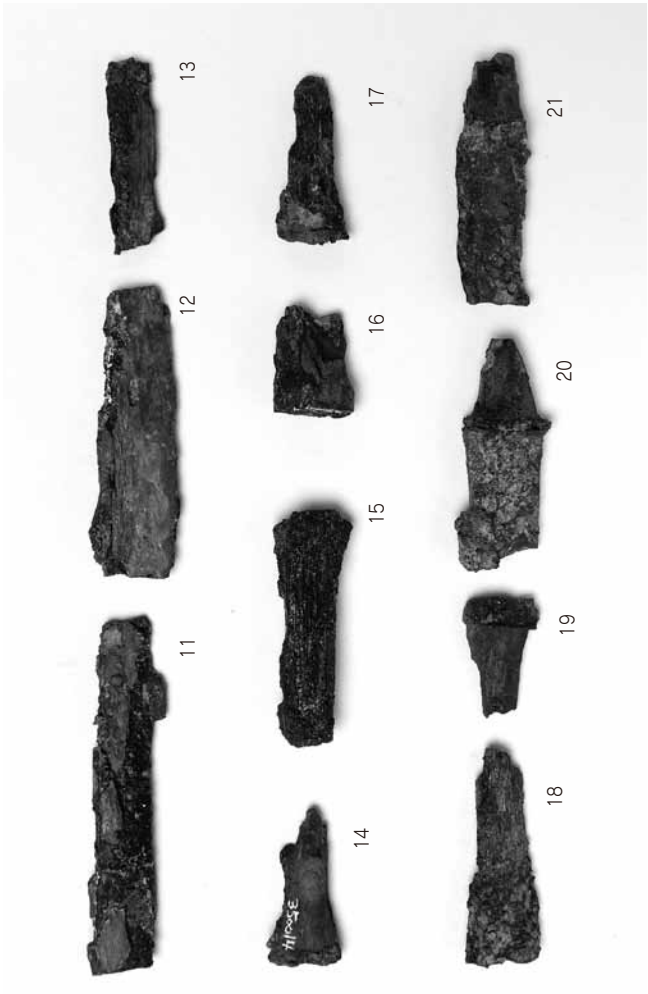


4. 壺鐙

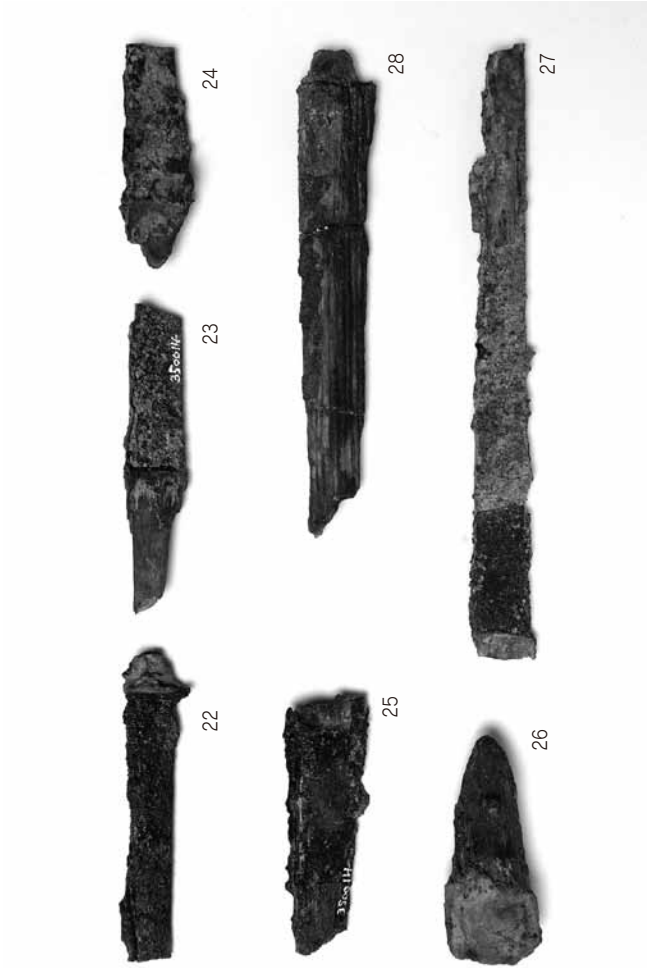


1. 馬具

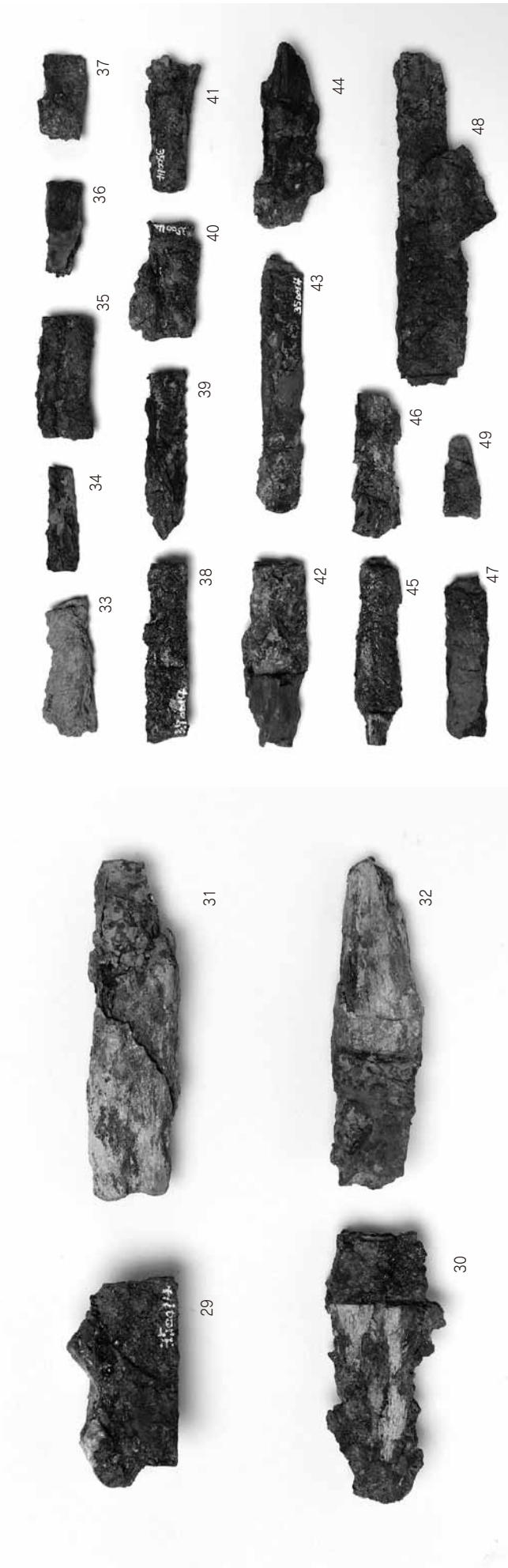
2. 刀子①



3. 刀子②



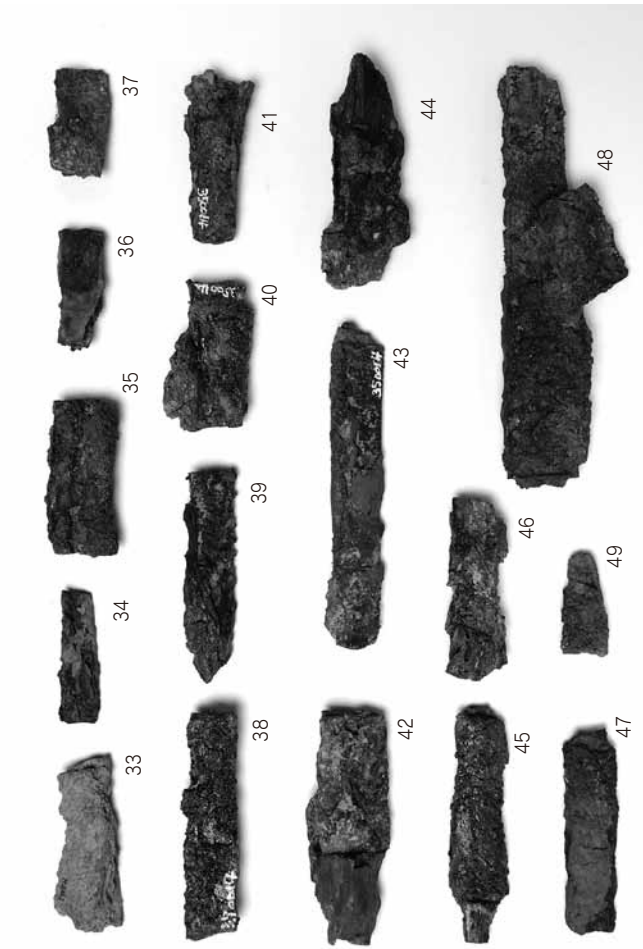
4. 刀子③



1. 刀子④



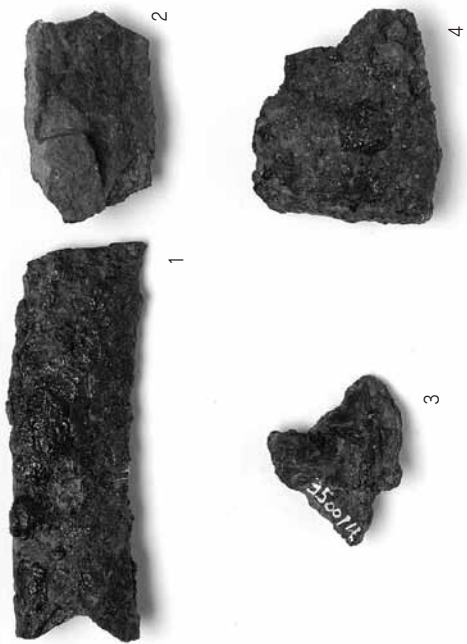
3. 刀子⑥



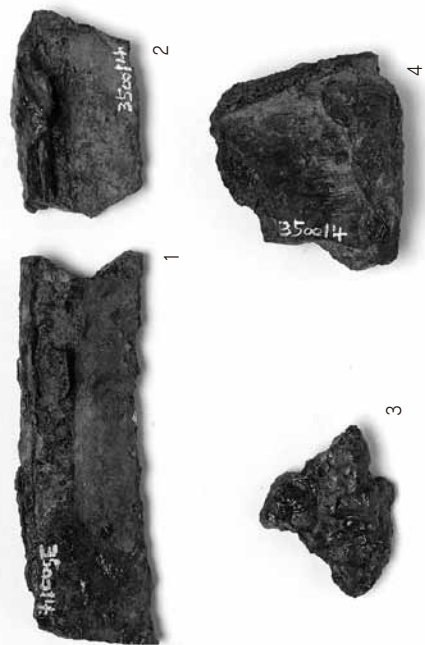
2. 刀子⑤



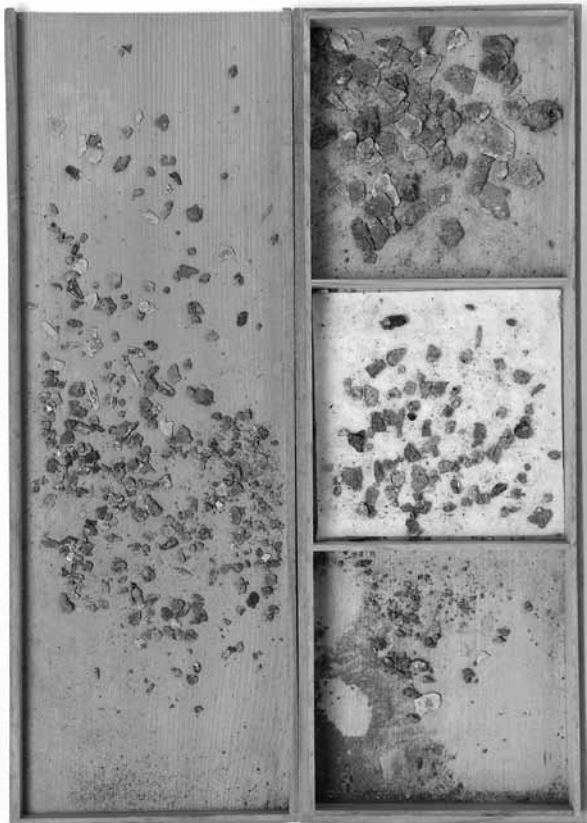
4. 不明石製品



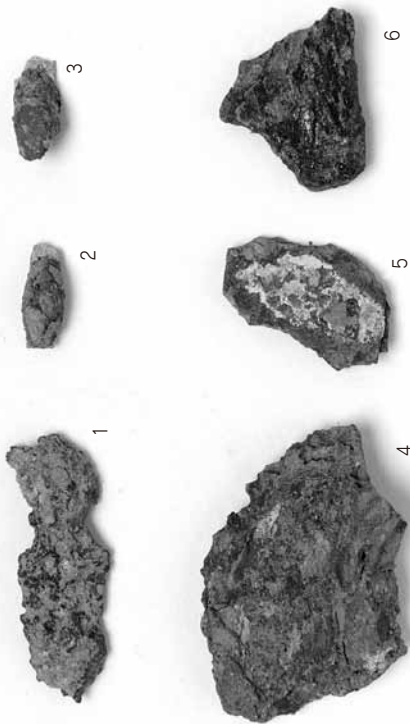
2. 不明鉄製品 (裏)



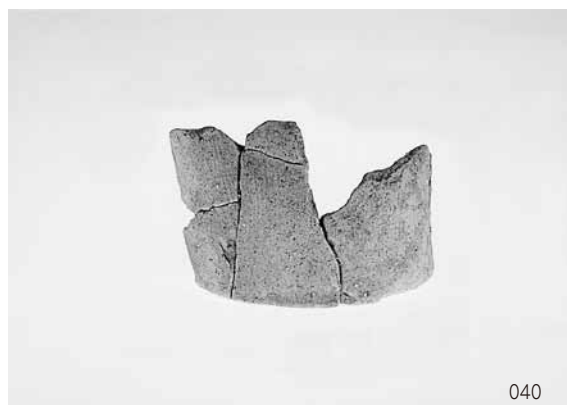
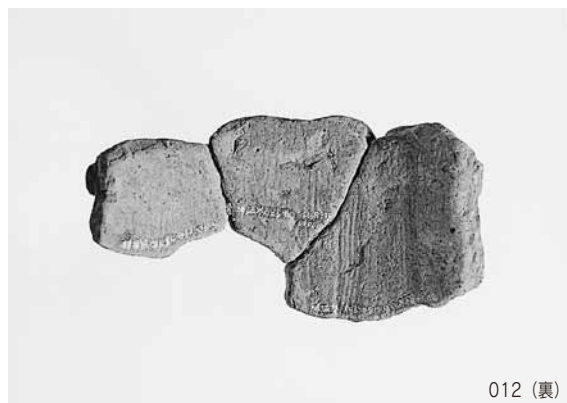
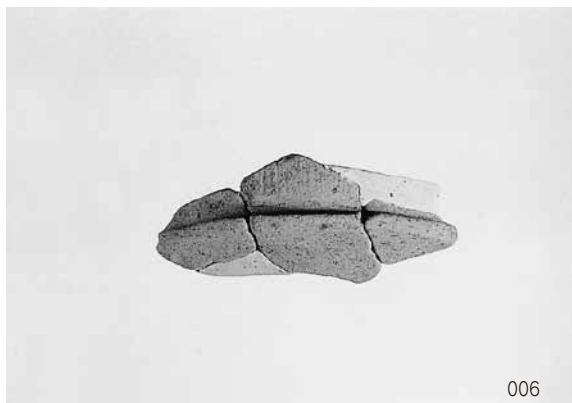
1. 不明鉄製品 (表)

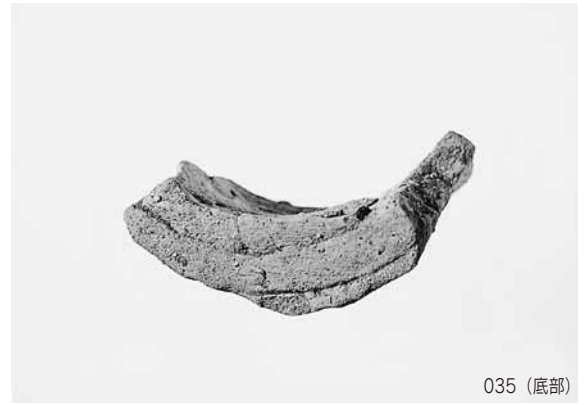


4. 不明金銅製品残欠



3. 不明金銅製品





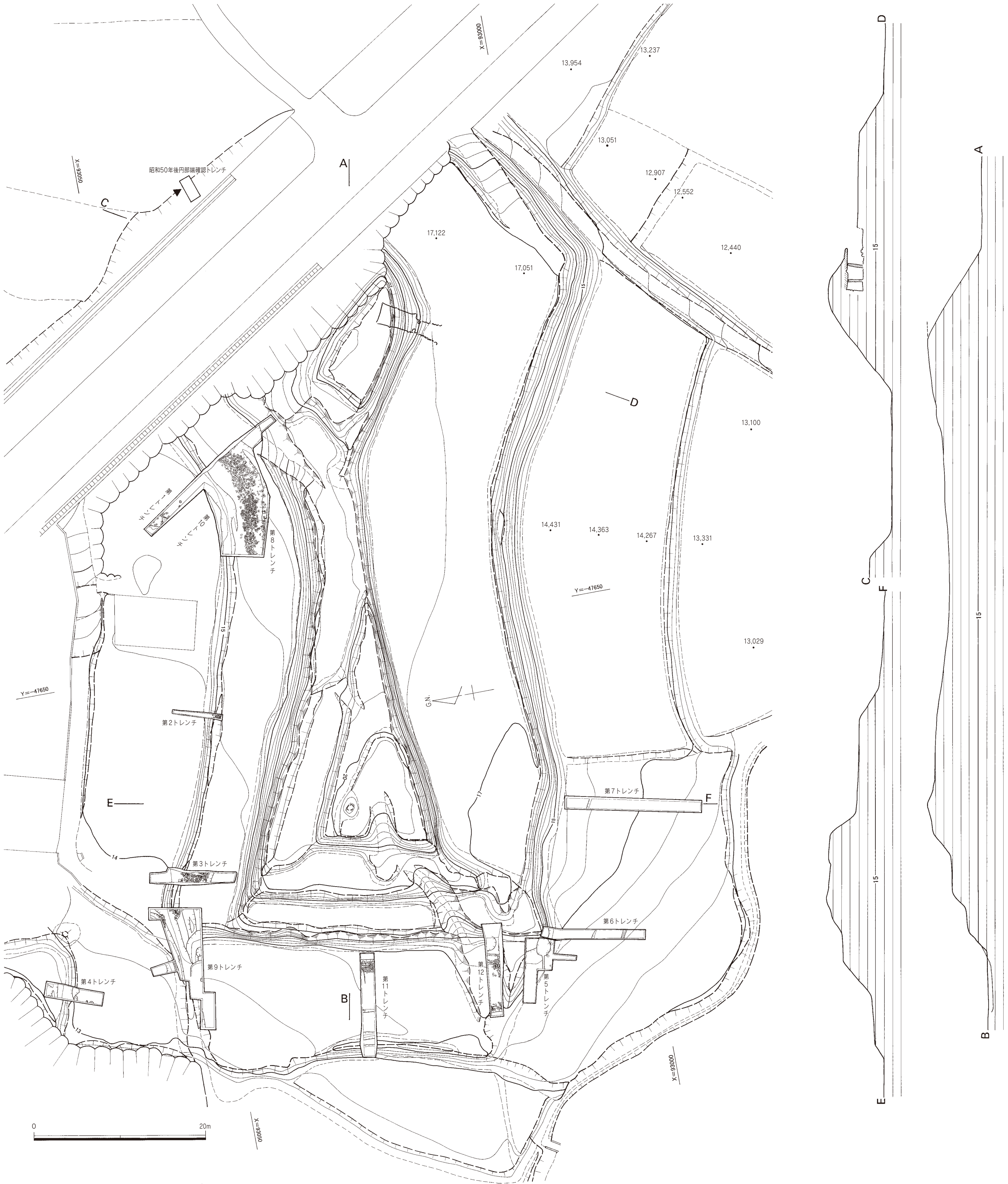
報 告 書 抄 録

ふ り が な	つやざきこふんぐん2
書 名	津屋崎古墳群Ⅱ
副 書 名	勝浦峯ノ畑古墳（かつうらみねのはたこふん）
シ リ ー ズ 名	福津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編 著 者 名	池ノ上 宏 吉田 東明
編 集 機 関	福津市教育委員会
所 在 地	福岡県福津市津屋崎1丁目7番1号
発 行 年 月 日	平成23（2011）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かつうらみねのはたこふん 勝浦峯ノ畑古墳	福津市勝浦800-2	350	014	33° 50'11"	130° 29'2"	19751117 ～ 19760126	6,774	県道建設
						20060125 ～ 20060331		
						20070122 ～ 20070330	85	"
						20071018 ～ 20080328	94	"
						20080924 ～ 20090331	36	"

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝浦峯ノ畑古墳	古墳	古墳時代	古墳	鏡8面、金銅製冠帽、銅釦、玉類、大刀40本以上、鉄剣4、鉄鏃285、短甲、輪鏝、壺鏝、刀子 以上石室副葬品、埴輪、須恵器、土師器	高句麗の影響をうかがわせる石柱をもつ石室

要 約	勝浦峯ノ畑古墳は胸形君が海岸部の津屋崎へ墓域を移した初期の古墳である。規模も100 m と同時期の古墳中でも巨大であり、胸形君の力が増大していることの証と考えられる。副葬品も画文帯神獣鏡をはじめとする8面の鏡、40本以上的大刀、龍文透彫金銅製冠帽、1万点以上のガラス玉等豊富であり沖ノ島祭祀の奉獻品と対比できる豪華なものである。石室構造に高句麗の影響が伺われ、副葬品の金銅製冠帽が百濟製と考えられる等、対外交渉に活躍した胸形君の墳墓としてふさわしい内容である。
-----	--



付図 勝浦峯ノ畑古墳調査トレンチ位置図 (1/300)『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市文化財調査報告書第4集 2011